
夢色彩のカーバンクル

倉元裕紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢色彩のカーバンクル

【NZコード】

N6452Y

【作者名】

倉元裕紀

【あらすじ】

前世の記憶。それは夢を通して伝えられる、過去の自分からの贈り物。世代を超えて伝えられる、忠告、運命、そして思い出。世界中の人々が必ず見るその記憶を、レオンはなぜか見られずにいた。そこで彼は冒険者になることを決意する。自分の魂を象る遺産、その場所を示すと言わされている導きの妖精、カーバンクルに出会った。世代を重ねる人間たちと、不死の存在であるカーバンクルが共存する世界。その中で成長していくレオンの物語。

まだ雪が残っているからなのか、荷馬車越しに伝わってくる振動も控えめだ。まるで今日の日の僕の為に、雪を残しておいてくれたみたいに。春が雪解けを先延ばしにしてくれていたのだろうか。きっと、明日からは本格的な春。

自然と顔が綻ぶ。

もつとも、村を出る時から、ずっと緩みっぱなしだったけれど。澄んだ心地いい空気。

何かの果物を干した物だろうか。甘い匂いが漂ってくる。何より、抑えきれない期待。

レオンは馬車の外に目を向ける。

抜けような青空。雲一つない、まさに快晴。

本当にいい日だ。

神様と、そしてイブ様に感謝しないと。

「おーい。坊主」

荷馬車の御者の声。まだ若い男性だ。たまに村までやつてくる商人の人らしい。今までほとんど面識はなかったが、レオンの旅立ちの事を聞いて、ついでだからいよいと快く馬車に乗せてくれた、優しい人だ。

レオンは馬車の中から顔だけ出して聞いた。

「何ですか？」

御者の男性は、手綱を握つたまま、ちらりとだけこちらを見る。口元が少しあがっていた。

「見えるだろ？」

彼の言葉の意味がすぐには飲み込めなかつた。だけど、彼と同じように前を向いてみると、すぐに分かつた。

山を下りた先。まだ遠いその先には、見渡す限りの平原が広がっている。

そして、その広大な土地にぽつりと、だが確かに町が見えた。

自治都市コーストイ。

「うわあ・・・！」

目を輝かせるレオンを見て、御者は少し苦笑したようだ。

「ちつさい町だよなあ

「小さいんですね？」

きょとんとした顔で聞くと、今度は声を出して笑われた。それがどうしてなのか分からなかつたので、レオンはますます首を捻つた。「小さい小さい。まだ出来て400年くらいだし、それに、交通の要所つてわけでもないから、あんまり大きくならないんだよなあ」「へえ・・・」

「でも、住んでるのはいい奴ばかりだから、坊主みたいな田舎者にはちょうどいいな。せいぜい腕を磨いて、名のある冒険者になつてくれよ。出来たら、サイレントコールドくらー」の

レオンは照れて頭を搔く。

「いや、そこまでは、ちょっと・・・」

「そうか？じゃあ、俺のお得意様になつてくれればいいや

男はそこでまた笑つた。やつぱり理由は分からなかつたが、レオンもつられて笑つた。

ひとしきり笑つたところで、御者がまた一瞬だけこちらを見た。

「どうか、坊主。お前、ジーニアス？」

ジーニアスとは魔法が使える冒険者の総称だ。つまり、彼の質問の意味は、貴方は魔法が使えますかという事である。

「いえ、魔法は全然

「でも、サイレントコールドの故郷だよな？お前の村

「あ、はい。でも、僕は全く才能がないみたいで。一応調べて貰おうと思つているんですけど、たぶん魔法はダメですね。だから、アスリート志望で頑張つてみようかと」

アスリートとはジーニアスの反対。つまり魔法が使えない冒険者の事。冒険者を大別すると、このどちらかになる。アスリートの方は、剣とか弓とか、体力勝負の冒険者が多い。

「それは苦労しそうだな。お前はあんまり身体が大きくないし……つていうか、明らかに弱そうだもんな。俺の方が強いんじゃないか？」

酷い言われようだが、まったく異論はなかつた。レオン自身も、それは自覚している。

実際、レオンは村の中でも、あまり腕っ節が強いとは言えなかつた。身長は普通くらい。身体もあまり逞しいとは言えない。幼い頃は、よく女の子と間違えられたほどで、きっと、母親に似たのだろうとよく言われる。黒い髪と濃い瞳はまさに母親ゆずりである。だが、母親には魔法の才能が少しだけあったのに、それはレオンにはさっぱり遺伝しなかつた。

多少残念ではあるが、レオンはあまり氣にしていない。父親も母親も、レオンの旅立ちを応援してくれた。優しい両親だから、それだけで十分だ。

レオンは苦笑しながら言つた。

「そうですね。一応いろいろ訓練してみたんですけど

「なんかさ。一年くらいたつたら、あそこの雑貨屋か何かで働いてる気がする」

「そんな事は……ないとは言い切れないです」「もしダンジョンで大怪我でもしたら、そうなつていいかもしけない。

その返答に、御者の男は少し口元をあげる。

「謙虚だねえ。まあ、身体が小さいアスリートでも、伝説になつた奴はいるんだ。スニークとかはいい例だよな。お前も大方、その辺りを目指してるんだる？」

その質問はレオンには答えにくいものだつた。

普通はそこで、はいとかいいえとか、はつきり答えられるのだ。

冒險者を志す人達は、みんな確固たる目標というか、指針がある。サイレント「ワールドとかスニークというのは、冒險者として伝説になつた人達に与えられた称号で、今を生きる冒險者達の目標でもある。だが、彼らの名前には、それ以上の意味もある。

仕方なく、レオンは正直に答える事にした。

「いえ、その・・・なんていうか、僕は分からないです」

「へ？」

男が驚いた表情でこちらを見る。予想していた通りの反応だつた。そんなに驚かせて申し訳ないという気持ちが、レオンの心の中で急速に膨らんだ。

若干焦りながらも、慎重に言葉を選んで説明する。

「そのですね・・・実は全く前世の記憶がないんです。イブ様どころか、夢自体も全く見た事がなくて。だから、冒險者になつたら分かるんじゃないかと思つて、決心したんです。もし一人前の冒險者になれたら、アーツを手に入れられたら、前世が分かるんじゃないつかつて」

これで分かつて貰えるだらうかと不安になりながら、レオンは御者の男の顔を見つめる。

その男は目を見開いたまま固まつていた。彼のこんな顔を見るのは初めてだ。村を経つてからまだ一日半ほどの付き合いだが、いつも気さくで余裕のある男。まだ若く見えるが、自分よりは明らかに年上だし、自分が彼の年齢になつた時、彼くらい落ち着きある大人になれているとは思えない。そんな男が、思考停止するほどの事実なのだ。頭では分かつてはいたものの、目の当たりにしてみると、自分でも意外なくらいだつた。

「・・・やっぱり変ですか？」

おずおずと聞くと、男はやつと我に返つたようだつた。

「あ、いや・・・まあ、そうだな。少なくとも、そんな奴は初めて聞いた」

「初めてですか？やっぱり珍しいんですね」

「珍しいっていうか……そんな奴がいるとは思わなかつた」

レオンはそこで、かねてからの懸念を相談してみる事にした。

「これ……ギルドに話しても、受け入れて貰えると思いますか？」

男は難しい顔をしながら前を向いた。

レオンにしてみれば、前世が見えないというのが、冒険者を志す最大の動機でもあり、また、最大の懸念でもあつた。自分には見えないその前世というものを、多くの冒険者は自分の指針にする。前世が剣士ならば剣士の道を、魔術師なら魔術師の道を志すものなのだ。それが最も自分に適した道で、何より、前世の記憶がその楽しさを教えてくれる。

その指針がない自分は、いわば真っ暗闇にいる状態。これがどれくらいのハンデなのか、自分では分からぬのだが、不安は不安だつた。

黙つたまましばらく考えていたが、やがて唐突に口を開いた。
「俺さ。今は見ての通りの商売人だけど、夢の中では料理人なんだよ」

突然の話題に、レオンは反応が出来なかつた。

「料理人つていつても、俺に見えるのは見習いの時の記憶だけなんだけどさ。しかも、そんなに大きくないレストランなんだ。だから、まあ、そんなに腕がいいわけじやなかつたんだろうな。だけど、料理に魅せられているのは、もの凄く伝わつてくるわけ。見習いだから、自分の好きな料理なんか作らせて貰えないんだけどさ。でも、それでも楽しかつたんだ。食材を前にした時の高揚感だけは変わらない。今だつて、料理人じやないけど、料理は好きなんだ。昨日の煮込み料理も旨かつただろ？」

レオンは頷く。確かに素人の料理ではなかつたが、行商だから料理も自然に身についたのだろうと思いこんでいた。

「そんな俺でも、今は料理人じやなくて行商をやつてる。もちろん、食材を見る時には役に立つ事もあるけど、せいぜいそんな程度。だから、まあ、前世なんてその程度だと思えばいいんじゃないか?ギ

ルドの方も、まあ困るかもしれないけど、みんながみんな、前世と同じ道を選ぶつてわけじゃないと思うし・・・コースアイのギルドは小さいところだから、いきなり追い返したりはしないと思うな。もつと大都市だと、大勢いて忙しいから、坊主みたいな初心者は相手にされないかもしちゃないけど

「そうですか・・・」

レオンは少し考え込む。

そこで男が可笑しそうに言った。

「今から戻れっていうのはお断りだからな」

慌ててレオンは首を振る。

「いえ！全然。あの、話して貰つてありがとうございます」

「あんな話でよければいつでも。しかし・・・前世の記憶がないから冒険者になりたいっていうのも、結構な話だよなあ」

「やつぱり変ですね」

「だなあ。でも、もしかしたら、お前、凄い奴なんじやないか？」

突然の言葉に、レオンは戸惑つ。

「え・・・何ですか？」

「だつて、前世がないなんて奴、相当なレアなわけだ。もしかしたら、お前一人かもしれない。実は、凄い秘密があるとか、そういう事かもしれないだろ？」

「いや、秘密つて言われても」

「もしかしたら、歴史に名を残すんじゃないか？サイレントホールドみたいに」

「だから僕、魔法使えませんつて」

「じゃあ、スニークみたいに」

「僕の事、弱そうだつて言つてたじやないですか」

「いや、失敗したなあ。そんな大物だとは思わなかつたから」

「あの、人の話を・・・」

「俺、伝説の男の旅立ちを案内した男になつたわけか。どうせなら、もう少し為になる話をしつくんだつたなあ。いや、今でも遅くない

か。 そうか。 そうだよな。 よし、 じゃあ、 とりあえず、 僕の女性遍歴をざつと・・・

全く為にならない予感しかしなかった。

「いや、 それはちょっと・・・」

「そうか？ 確実に為になると思うけど。 お前だつて、 これから何人の女性を泣かせることになるわけだし」

「勝手に変な予定を立てないで下さい」

「いやいや。 絶対泣かせるぞ。 冒険者だつて、 いろんな所をふらふらするわけだし。 つまり、 それだけ出会いがあるわけだからな。 特にお前は、 腕つ節は弱そうだけど、 見た目は悪くないっていうか・・・絶対、 各所で女の子をひっかけていくタイプだな」

「人聞きが悪いですよ」

そこで急に、 男の目が細くなつた。

「よく考えたら、 そういうタイプの男が一番迷惑なんだよなあ。 うろちょろしてないで一力所に留まつてくれればいいんだけど・・・でも、 お前は伝説になつてしまつわけだから、 そんなわけにもいかないだろうし」

何か言い返そつとしたが、 なにやら雲行きが怪しかつたので、 黙り込む。

男の横目には明らかな敵意が込められていた。

「そうか。 そうだよなあ。 将来伝説になるとはいえ、 今はまだひよつこなわけだ。 ここでさくつと処分しておくればいいんだけど・・・や、 それどころか、 ここで俺が倒せば、 もしかして、 俺が伝説の男つて事に・・・」

「いえ、 ならないです・・・よ、 ね？」

最後の方は声にならなかつた。 男がすつとこちらを向いたからである。

もの凄い目をした男に睨まれる格好になつた。

まだ平原の手前の山奥。

逃げたら逃げたで、 気温や獣といった敵がいる。 食料もほとんど

ない。

どうしよう。

だが、不意に男の表情が緩んだ。

助かつた。

レオンの正直な感想はそれだった。

男がまた前を向きながら言つ。

「まあ、そういう事だから」

急な言葉に、レオンは戸惑つ。

「何がですか？」

「不用意に女に手を出すのはまずいって事。変なところで恨みをか

つたりするからさ。だから、気をつけた方がいい。為になつた？」

「・・・はい」

気をつけるもなにも、そんなつもりはさらさらないわけだから、
はつきり言つて余計なお世話だったが、口にすることは出来なかつ
た。

少なくとも、さつきの眼差しを忘れるまでは。

何事もなかつたかのよつた口調で、御者の男は口を開く。

「しかし、天氣いいなあ。これだと、明日の朝には着けそうだ。
お前もそのつもりで準備しとけよ」

「あ、はい。分かりました」

男は機嫌良さそうに口笛を吹き始める。全く聞いた事のない、テンポの速い曲だった。

レオンはなんとなく、眼下に広がる平原を見つめる。

下つていく山道も、徐々に雪が減りつつある。標高が下がつてき
た証拠かもしれない。ずっと山奥で育つてきたレオンにとって、初
めての下山。不安もあるが、やはり期待の方が大きい。御者の彼が
言うように、多くの人と出会いがあるだろう。最初に会つた彼か
ら得た、記念すべき最初の教訓は、多少残念な内容だったけれど。
でも、面白い。

レオンは微笑む。きっとこれからもそうだ。きっと楽しい事がた

くせんあるはず。

この先の平原。春の草原の中にある小さな町。ゴーストイには。
その姿も徐々に近づいてくる。
風も次第に暖かくなる。

春。

旅立ち。

雪の下から新芽が顔を出す。そんな季節だった。

毛の長いマフラーを引きずつたヒョウが、頭の上を右往左往している。

簡単に表現するなら、そんな感じだった。

レオンは自治都市ユースアイのギルド事務所にいた。正確には、冒險者ギルド・アンリミテッドのユースアイ支部事務局。だけど、この町まで連れてきて御者の人も、ここに来る途中で道を尋ねた人も、皆がここを、単にギルド事務所と呼んでいた。それどころか、目の前に座っている受付のお姉さんでさえ、正式名称では呼ばなかつた。レオンが正式名称を知つたのは、ここに入り口に書いてあるのを読んだからだが、それも掠れてしまつていて、かなり読みにくかつた。

入った途端にいかつい男達に睨まれる。そんなシチュエーションを予想していたのだが、聞いていた通り、人は少なかつた。それでも、ぴりぴりした雰囲気の男が数人ベンチに腰掛けていたので、レオンは少し緊張した。

それでも、何事もなく窓口まで行き、冒險者見習いとして登録したい旨を説明すると、あっけなく手続きが始まつた。田舎者のレオンにとって、こういう手続きは初めてなので、何か失敗しないか心配だつたが、とりあえず、最初は上手くいったようでほつとした。その矢先に、頭に飛び乗つてきたのが、この生物だつた。

「・・・あの、すみません」

おずおずと聞くと、受付の女性がこちらを見上げる。自分より年上のお姉さんで、理知的で落ち着いた雰囲気の人である。彼女はレオンの書類を作つてくれているらしく、椅子に腰掛けたままだつた。

「はい。何か？」

ブラウンの瞳には、こちらをからかつている色は見えない。だが、

レオンの今の状態に気付いていないわけがない。

やや躊躇したものの、聞かないわけにはいかなかつた。

「いの、頭の上をうろちょろしてるのは・・・」

当然の質問だと思ったのだが、受付の人はきょとんとした顔で聞き返してきた。

「カーバンクルですけど・・・」

「いえ、それは僕にも分かります」

それくらいはレオンも知っていた。色違いだが、村に一匹だけいたからである。

「そうじゃなくてですね・・・なんで、僕の頭の上をうろちょろしてるんですか?」

受付のお姉さんは、よつやく理解したといつ顔になる。

「あ、すみません。最近だと、みなさん既にご存じの場合が多いので、説明を省略させて頂いていたんです」

はあそなんですかと、レオンは生返事を返す。つまり、知らなかつた自分が珍しいという事のようだ。

「そのカーバンクルは、そうやって貴方の前世を見ているんです。もちろん全部は見られませんが、一部を読みとる事が出来ます。それを私に伝えて貰つて、今度は私がギルドのレコードを調べます。そうすれば、貴方のおおよその適性が分かるんですよ」

そんな事が出来るのは初耳だった。村にいたカーバンクルは、ただのペット同然で、ほとんど役には立つていなかつたからである。

「カーバンクルって、そんな事が出来るんですか?」

「あ、でも、それはギルドに住み着いている子だけです。他の場所にいる子には出来ないみたいですね。特技とか芸みたいなものじゃないかとか、そういう役目として居着いているんじゃないかとか、諸説あるみたいですが・・・」

「へえ・・・」

そこで、レオンの頭の上にいたカーバンクルが、受付の女性の方に飛び移つた。反動のようなものはほとんど感じない。感じたのは、

ふさふさの毛の感覚だけだつた。

藍色の瞳が一瞬だけこちらを向くと、そのまま受付の女性の頭に上つて、そこでまたくるくると堂々巡りを始めた。

それを全く気にかける様子もなく、受付の女性は微笑んで、右手を部屋の奥に向かた。

「もうしばらくかかりますので、そちらにおかけになつてお待ち下さい」

レオンは軽く頭を下げてから、示されたベンチに腰掛けた。入つた時にそこにいた男達は、もういなかつた。

他に見るものもないで、レオンは、女性の頭の上をくるくる回つているライトイエローの生物をなんとなく眺めていた。女性は気にする素振りもなく、書類作りに精を出しているよつだ。

カーバンクル。別名、導きの妖精。

見た目で一番近いのは、キツネやイタチかもしれない。同じ4足歩行の生物。それを子供サイズに縮小して、体毛を長くふさふさした生物というのが、だいたいの外見である。

だが、その実態の多くは謎に包まれている。

例えば、体重が非常に軽い事。体毛や瞳の色が様々な事。群を作らない事などが挙げられる。

だが、最大の不思議は、この生物には死といつものがないという事実である。

カーバンクルには寿命がない。少なくとも、自然死した個体は知られていらない。さらに、カーバンクルは食事出来るが、しなくとも生きていける。食べても排泄はしない。眠る事もするのだが、それが必要なのは不明。呼吸が必要なのはすらもはつきりしない。水中を普通に歩く個体もいるという噂だつた。もつと言えば、どうやつて数を増やしているのかも、まるで分からぬ。オスとメスがあるのかすらも分かつていないので。

今までにいろいろな学者が調べたが、まるで何も分かつていない。捕らえようにも、いつの間にか逃げてしまう。だから、大昔にもう

諦めてしまったというのが、レオンの村の長老の話だつた。

まさに不思議生物なのだが、大昔の人達の間でも、そもそも生物となのかという話になつたらしい。

そこで、とりあえずのカテゴリーとして、カーバンクルは妖精という事になつてゐる。他に妖精と分類されているものはないから、専用枠である。それだけ特殊な種なのだ。

そういうはつきりしない存在なのだが、人を襲うわけでもないし、作物を荒らす事もない。気ままだが、大人しいし、鳴いたり暴れたりするわけでもない。特別な世話も必要ないし、懐いた人間なら言うことも聞く。そして何より、見た目が愛らしい。

そういうわけで、レオンの村ではペット以外の何者でもなかつた。何か特殊能力があつたわけではないが、見た目で少し癒される。見かけたら撫でてやつて、何か食べ物でも与えてみる。それを食べる姿にまた癒される。はつきり言って、かなり良いご身分である。だけど、まあそれくらいはいいかなと思わせるくらいの愛らしさがあつた。

だけど、ここのかーバンクルは立派に仕事をこなしているようだ。能力の理屈は不明だし、見た目には、人の頭の上をくるくる回つているだけなのだが、このギルドの一翼を担つてゐるらしい。思ったより多才だつた事に、レオンは驚きだつた。

やがて、仕事が済んだのか、ぐるぐるしていいたカーバンクルは不意に足を止めて、そのまま女性の頭の上で丸くなつた。色合いもあつて、金の王冠みたいに見える。

妖精は目を閉じていた。まさか、そこで休憩するつもりだらうか。その数秒後、女性は書類を持つて立ち上がつた。まつたく頭上を気にする様子はないが、カーバンクルの方もバランス感覚がいいのか、張り付いたように動かなかつた。

そのまま、女性はカウンターの奥の扉の向こうに消えた。見るものがなくなつてしまつたので、仕方なく、事務所の中を見回してみる。

木で出来た建物。このベンチも、カウンターも椅子も、全部同じ木材を使っているようだ。照明はあまり多くないが、それでも十分なのだろう。あまり広くはない部屋に、事務員らしき女性が1人。レオンの母親くらいの年齢だろうか。その女性も、さつきの受付の人も、全く同じ服を着ている。ギルドの制服なのだろうか。黒が基調で、なんだか格好いい。そういう服を着ている人は、もちろんレオンの村にはいない。御者的人は小さい町だと言っていたが、レオンにしてみたら、十分都会である。

ここから始まる。

不意に頭を過ぎったその言葉に、レオンは急に気分が高揚してきた。緊張していただろうか、今まで忘れてしまっていたワクワク感が戻ってきたのである。

新しい世界。その始まりの場所。思ったより、劇的な事はなかつたが、田舎者の自分にはこれくらいがちょうどいい。あまり刺激が強すぎても困る。

ここから頑張つて、何とか一人前の冒険者になる。とりあえずはそれが目標だが、そこまでの道のりを想像するだけでも、レオンは楽しみで仕方なかつた。

新しい出会いがあつて、新しい事を知つて、新しい自分を見つける。

そこでレオンは、ふと氣付いた事があった。

自分の前世を見たい。それがこの旅立ちの目的のひとつでもある。だが、さつきの受付の女性は、あのカーバンクルが自分の前世を読みとつてくれると言つていた。そして、詳しく調べるとも言つていた。

もしかして、それではつきりするのだろうか。

もしここで分かつてしまつたらと思つと、レオンの胸中は複雑だつた。目的が達成されるのだから、もちろん悪いわけはない。だからといって、こんなにあつさり分かつてしまふと、自分の悩みはな

んだったのかと思えてしまひ。

どちらがいいんだひ。

聞きたいような、聞きたくないような。

レオンの予定では、自分の前世が分かるのは、見習い冒険者卒業の時だつた。

一人前の冒険者として認められるには、魂の試練場というダンジョンを攻略しなければならない。その最奥で、その冒険者はカーバンクルと出会うと言われている。そのカーバンクルが、自分の魂の場所まで案内してくれると言われているのだ。

その魂の名前がアーツ。

前世の自分が、来世の自分の為に残した遺産。それを手に入れる事が、冒険者の証。

それを手に入れたら、自分の前世の事が分かる。
そんな予定を立てていたのだけれど。

「レオンさん」

不意に名前を呼ばれて我に返ると、いつの間にか、受付の女性が戻ってきていた。頭の上の妖精もそのままである。本当に装飾品みたいだつた。

レオンは慌てて立ち上がり、窓口に向かつ。

ここで分かつても、まあ、それはそれでいいじゃないか。懸念がひとつ解消されたと思えばいい。どちらにしたつて、冒険者を田指すのは一緒なんだから。

だが、どうやらそんな話ではなかつたようだ。受付の女性の表情は、傍目にも分かるくらい困惑顔だつたのである。

「あの・・・申し訳ないんですけど、該当するレコードが見つからなかつたんです」

レコードというのはよく知らないが、要は、自分の前世がよく分からなかつたという意味だひ。

嬉しいような、残念なような、入り交じつたような表情で、レオンは頷いた。

「そうですか・・・あの、やつぱり、珍しい事なんですか？」

女性は控えめに頷く。少し揺れたはずだが、頭上のカーバンクル

に起きる気配はない。

「ええ、まあ・・・それで、出来たら、レオンさん自身が見た前世の記憶を教えていただけませんか？そこからまた探してみますので」

「記憶ですか」

レオンは苦笑した。ないものは教えようがない。

「あの・・・？」

「あ、いえ、実はですね・・・あの、驚かないで下さいね」

「驚くような前世なんですか！？」

何か期待するような響きが含まれていた気がしたが、それは必死に無視した。

「実は、僕、前世の記憶がないんです。今まで全く、夢を見た事がなくて・・・」

レオンはなるべく驚かせないようこよつけりと言ったのだが、無駄だったようだ。

思いつきり気まずい静寂。

受付の女性は完全に固まっているし、奥で事務をしている人も、手が止まっていた。

他に誰もいなかつたのが、救いといえば救いだった。

カーバンクルだけが呑気に眠っている。

どうしようかと困り果てたところで、受付の女性が絞り出すようになに言った。

「・・・あの、『冗談ではないですよね？』

レオンは慌てて手を振る。そう思われるのが一番困る。

「いえいえ！そんな、『冗談なんて・・・』

それを見て、受付の女性は額に手を当てた。何やら難しい顔をしていた。

「・・・もしかして、何か問題があつたりしますか？」

もしかしたら追い返されるかもしれないという懸念が、再び顔を

見せ始める。

しばらく間があつてから、女性はこちらを向いた。

「えつとですね。ギルドに加盟する事は可能です。それ自体には、特に資格といつものは必要ありませんので。ただ、前世が分からぬといつのは、レオンさんにとつて不利になります。適性が分からぬといつ事になりますから、何でも手探りといつ事になります。ですが、あの、もちろん、ご存じだと思いますが・・・」

そこで女性は間を取つた。レオンもなんとなく姿勢を正した。これからが、特に重要な話なのだ。

「冒険者は戦闘に重きを置きます。最初はある程度の安全を確保してあります。ですが、基本的には命がけです。ですから、手探りと口で言つるのは簡単ですが、その手探りにも命の危険がつきまといます。人より苦労するのはもちろんですが、冒険者の場合は、苦労だけで済まない事もあるんです。あと・・・これは申し上げにくいんですけど、レオンさんが仲間を探されるときに、恐らく障害になると思ひます。他の皆さんも命がけです。冷たいようですが、適性を十分に生かせていないレオンさんを受け入れる人は少ないと思うんです」正直、ショックな話だった。

こんなに自分にハンデがあるとは思つていなかつた。自分だけで済むならともかく、仲間が見つからない可能性まであるのだ。

そうなつたら、ずっと一人で戦うのだろうか。

それは無理だろう。何より、辛いだろう。

だけど。

レオンは微笑んだ。

「大丈夫です」

女性の瞳が少し大きくなる。

「心配してくれてありがとうございます。でも、とりあえず、やってみようと思うんです。あまり強くなれないかもしないし、仲間も出来ないかもしねいけれど・・・でも、やってみないと分からぬですから。とにかくやってみます。それでもダメだったら、村

に帰るなり、他の仕事を見つけるなりします。それくらいの決断は出来るつもりです。だから、挑戦だけはさせてくれませんか？」

「しばらく1人のままかもしれません。1人はつらいと思います。無理して冒険者にならなくてもいいんですよ？」

「1人じゃないですよ。ここまで乗せててくれた行商の人人が言ってました。この町は良い人ばかりだつて。だから、なんとかなります。ギルドの受付のお姉さんも、すごく優しい人ですし」女性の真摯な瞳としばらく見つめ合つた。

だが、やがてふつと微笑んでくれた。

「分かりました。では、ギルドとして正式にサポートをさせて頂きます。何か分からぬ事がありましたら、何でも聞いて下さい」

「はい。これからよろしくお願ひします」

レオンが頭を下げるが、女性も少し笑つて頭を下げる。

「よろしくお願ひします」

その揺れには耐えられなかつたのか、黄色のカーバンクルが頭からカウンターに滑り落ちてきた。

だが、目覚める気配はなかつた。

気持ちよさそうに眠つてゐる。

レオンと女性は、それを見て笑つた。

「お疲れみたいですね」

「そうですね。レオンさんの前世がなかなか見えなくて、大変だつたみたいですね」

「・・・すみません。起きたら代わりに謝つておいて下せ」

「それでしたら、今どうぞ。撫でてやると喜びますから」

レオンは少し意表を突かれたが、すぐに撫でてみた。

村のカーバンクルとは色が違つても、手触りはほとんど同じだつた。ふかふかでふわふわ。いつまでも触つていたくなる。

「・・・あの、名前はなんて言つんですか？」

「私ですか？」

その言葉に、レオンは気付いた。

「あ・・・そういうえば、聞いてませんでしたね」

「聞きたかったんですか？」

女性は悪戯っぽく笑う。なんというか、年上の余裕みたいなものを感じた。

少しどきどきしたが、そこで蘇つてきたのは御者の言葉だった。妙なトラブルは遠慮したい。

「あ、いえ、すみません、その・・・聞かなくても、大丈夫ですね」

戸惑つたように言つと、それが可笑しかつたのか、女性は吹き出した。

「すみません。そんなに困るとは思わなかつたので・・・」

「そ、そうですよね。いらっしゃ・・・」

「ケイトと呼んで下さい」

そう名乗つてケイトは微笑んだ。理知的で落ち着いた、ブラウンの髪と瞳の女性。恐らく20歳前後だろう。格好いい制服と、まとまつたヘアスタイルのせいで大人っぽく見えるだけかもしれないけれど、少なくともレオンより年下という事はない。

「あと、この子はシニアです。もちろん、私が名付けたわけじゃないですけどね。だけど、このギルドで一番の年上なのは間違いないです」

「ということは、もしかして、町が出来てからずっといるんですか？」

「はい。少なくとも、もう400歳以上」

「へえ・・・」

どういうわけか、カーバンクルは一力所に居着く事が多いらしい。人から聞いた話だったが、この妖精も、その例に漏れないようだ。その最長老の大御所も、今は愛らしい姿で寝息をたてていた。

マスター・ガレット

コースアイはのどかな町だった。

きっと住みやすくて豊かなのだ。少なくとも、レオンのいた村とは比べものにならないほど過ごしやすい。この時期、村はまだ雪解けしている頃だが、ここは完全に春の装いである。町の周囲は綺麗な緑一色だつたし、空気もまったく冷たくない。山を下つてきたとはいえ、ここもそこそこの標高があるはずだが、それでもこんなに違ひがあるのかとレオンには驚きだつた。

町の中は思つたほどさくはないが、もちろん、村よりも圧倒的に人が多い。そもそも、町の大きさが違うのだ。村何個分だろうかと思えるくらいの広さがある。大通りには石畳が敷いてあって、石造りの建物もある。どちらも、村にはなかつた物だつた。そもそも、道なんて概念がない場所だつたのだ。

そんなわけで、田舎者のレオンだと、道に迷う可能性が十分にある。闇雲に歩いたら、確實に迷子になる自信があつた。ギルド窓口のケイトさんに、大通り沿いにありますと説明されていたので、とりあえず石畳の上から出ないようにはしているが、それでも不安なので、度々道を尋ねた。結局、歩いて10分くらいですと言われた場所にたどり着くまでに、30分はかかつただろう。もつとも、あまりの物珍しさに、思わず商店などを眺めたりしていたので、それで余計に時間をとられたのもあつただろうけれど。

それでもなんとか、目的の場所にたどり着いた。まだ日は高い。もしかしたら、日が暮れるまで迷う羽目になるかもしれないと覚悟していたが、なんとかなつたようだ。

レオンが立つているのは、木製の巨大な両開きのドアの前。

看板には、ガレットの酒場の文字。

見上げると、本当に巨大な建物だつた。レオンにしてみれば、この町の建物はどれも十分に立派な物ばかりだつたけれど、この建物

は立派を通り越して、否応なく威圧感が感じられる。恐らく、木造3階建て。もしかしたら、4階があるのかもしないが、レオンにとっては大差ない違ひだった。幅も奥行きも、もの凄く広い。凄い物だという感想はもちろんあつたが、どちらかというと、倒れてきそうで怖いなという思いが強かつた。いつたいどうやって、こんな巨大な物を支えているのだろうか。

何はともあれ、自分はここでお世話になるんだ。

レオンは深呼吸した。

やつぱり、少し緊張する。

そう思った時だった。

「じゃあ、ちょっと行つてきまーす」

扉越しに、女の子の声が聞こえた。活発そうな、明るい口調だった。

それに答えたのは、対照的に、低くて、野太い声だった。

「しつかりと息の根を止めてこい！」

もの凄く物騒な発言だったが、声に似合い過ぎていた。

「分かってるって。というか、今日も来るわけ？」

「俺の勘がそう言つてる。新米はこの時期になると、懲りもせずに次から次へとやつてくると、相場は決まつてる」

「そつかー。まあ、そうかもね」

「だから、ここできつちり処分しておかねえと面倒な事になる」

「でもさー、ケイトさんからの依頼を待つた方がよくない？」

「あんなもん待つてられるか！とつとと行つて、さくっと仕留めて来い！それがてめえの仕事だらうが！」

「はいはい。じゃあ、まあ、出会い頭にぶすつとやつてくるよー」

そこで扉が開かれようとしていた。

レオンはどうしようか迷つた。

新米つて、自分みたいな冒険者見習いの事だらうか。

その息の根を止める。処分する。さくっと仕留める。

何でだろうか。

ケイトさんからの依頼とか言つていたけど。

その理由は分からぬ。分からぬけれど、もしかして大ピンチだろうか。

逃げようかとも思つたが、扉が開かれるまで一瞬だつたため、そんな暇はなかつた。

扉の正面にレオンは立つていたため、必然的に、出てきた人物と目があつた。

彼女もまた、ブラウンの瞳をしていた。年の頃は、たぶんレオンと同じ10代半ばくらい。利発そうな顔立ちに、栗色の髪を高い位置で縛つたヘアスタイルが相まって、より活発そうな印象が際だつている。

扉越しに聞こえた声は彼女のものだろう。だけど、顔立ちはともかく、あまり荒事が出来るようには見えなかつた。一般的な少女の、どちらかといふと華奢な体つき。しかも、厚手の淡いピンクの服の上に、白いエプロンを着けている。すぐ平和的な格好だ。

それでも、出会い頭にぶすつとされないか、一応警戒してしまつた。

「あ、もしかして、見習い冒険者の人？」

少女がさばさばとした感じで聞く。

ここではいと言つたら、今度こそ刺されるのだろうか。

だが、レオンが返事をする前に、少女がすたすたとこちらに歩み寄つて来て、あつという間に腕を掴んできた。

「え？ あ、いや、その・・・」

慌てるレオンに、少女は笑いかける。屈託のない笑みだつた。

「まあ、いいからいいから。お父さんに挨拶するんでしょ？」

「お父さんつて？」

「いいからいいから。とにかく、入つた入つた」

楽しそうにそう言いながら、少女はレオンを店内に引っ張り込んだ。

店内は想像通り、もの凄く広かつた。

中央の奥にカウンターがあり、その両脇には上り階段がある。そして、それ以外の場所には、丸いテーブルとイスが山ほど置いてあった。こんな大規模な建物の中に入るには、もちろん初めてである。床も壁も木製で、特に光沢があるわけではないのだが、不思議と輝いて見えた。照明がたくさんあるせいだろうか。その照明も、見上げるくらい高い位置にある。

物珍しさに店内をキヨロキヨロ観察しているレオンを、少女はぐいぐいとカウンターまで引つ張つていく。屋内には食欲をそそるい匂いが漂つっていた。

店内のテーブルには空席が多いが、それはまだ昼間だからだろうか。それでも、こんな時間から酒を飲んでいるお客様が10人ほどいた。そして、その全員が強面で、体つきがいい。間違いなく荒事をしている人達だろう。

つまり、冒険者達。

彼らと同じ場所にいる。その事実に嬉しくなつたが、目が合いつと睨み返されたような気がしたので、じろじろ見るのは控えた。

10秒余りの道のりで、カウンターまでたどり着く。その辺りは、つんとした匂いが漂つっていた。お酒の匂いだろうか。

そこにいる人物を見て、レオンは驚く。

なんというか、本当に想像通りの人物だつたのだ。ギルドでは肩すかしだつたが、時間差でついに巡り会つてしまつた。特に会いたかつたわけではないけれど、意味もなく感動した。

カウンターにいた男は、少女と言葉を交わす事なく、いきなりレオンに質問した。

「見習いか？」

「あ、はい・・・あの、ガレットさんですよね？」

男は躊躇みするようにレオンを見てから、少女の方を向いた。

「おい。お前はとつと仕事してこい」

「なんでー？こっちの方が面白そう」

「見せ物じゃねえんだ。いいから、さつさと終わらせてこい」

「しつかたないなあ。まあ、また後で会えるからいいかなー」少女は諦めたようにそう言つと、不意にレオンの肩を叩く。レオンがそちらを向くと、少女は不敵な笑みを浮かべた。

「頑張つてね。うちのお父さん、この町で最強だから」

「最強？」

「じゃあね。また後で」

そう言つてウインクすると、軽やかな足取りで店から出ていった。何を頑張るんだろうとレオンは首を捻つたが、よく分からなかつた。とりあえず、刺されなくて済んだ事が、よかつたといえばよかつた。

「名前は？」

唐突に問われて、レオンはまたカウンターの男に視線を戻す。

「あ、すみませんでした。レオンです」

男は腕を組んだ。それだけで、剥き出しになつた二の腕に相当な大きさの力瘤が出来た。

まさに想像通りである。

カウンター内に立つてゐる田の前のこの男こそ、レオンがおぼろげに想像していた人物そのものだつた。冒険者に志願した自分を出迎えるのは、きっとこういう人物だらうと思つてゐたのである。

浅黒い肌に逞しい体つき。厳めしくて、彫りの深い面構え。頼りになる人物というのはもちろんだが、見習い冒険者を指導する立場の人物としても、申し分ない容姿だつた。具体的には、それだけの威厳と威圧感が間違ひなく備わつてゐる。そして、腕つ節もあるに違ひない。少なくとも、腕相撲では絶対に勝てないし、腕を折られたとしても不思議はなかつた。

まだ名乗つて貰つていないが、彼が恐らく、この酒場の主人のガレットだらう。

「レオン。お前、ギルドに行つたか？」

「はい。それで、ここに挨拶してくるよつて言つてられて……」

「そうか」

男はレオンの言葉を遮つてそう言った。

「こちらをじっと見つめてくる。見つめるといつのは穢やかな表現で、レオンにしてみれば、睨まれている感じだつた。

「1年だ」

突然、男はそう言った。

「はい？」

「1年だけは面倒みてやる。だが、それで駄目なら諦める。これが約束出来るか？」

レオンは自分に問い合わせてみた。

周囲からは静かな話し声が聞こえてくる。誰もこちらを気にしている様子はない。それも当然だと見えるだろつ。自分はまだ見習い以下の、とるに足らない存在。

レオンの答えは一つだつた。

「あの・・・1年もお世話になつていいんですか？」

こんな自分を1年も面倒をみてくれるなんて、こんなに有り難い話はない。

男の太い眉がぴくりと動く。

だが、次の瞬間、にやりと笑つた。男臭い、だけど、そつぱりして印象のいい笑みだ。

「ガレットだ。寝床と飯は俺に任せろ。特に、お前の身体はまだまだ成長の余地がある。もつと食わせてやるから覚悟しろ」

「食わせてつて・・・そこまでして貰つていいんですか？」

そう聞くと、ガレットは笑つた。

「謙虚な奴だな！いいから食え！とにかく食えーちゃんとギルドから金を貰つてるから、そんな事は心配いらねえ。お前が立派な冒険者になつて、そこで儲けて金を返せばいいんだよ」

「あ、なるほど・・・」

レオンは頷いた。そういう仕組みだとは知らなかつた。

「お前、何も知らないんだな。最近は、妙な知識ばかりつけた連中が多いから、それが当然つてふんぞり返つてる奴がいるんだ。そう

いう奴を見極めて、腐った奴を半殺しにするのが俺の仕事だ

「半殺しつて……」

店に入る前の、物騒な会話が頭を過ぎる。

「そういうわけだつたんだが、俺はもう決めた。お前は面倒みてやる！一年間、せいぜい頑張つてみろ！」

そう言って、愉快そうに笑いながら肩を叩いてきた。床が抜けるんじやないかと思うくらいの衝撃で、きっと骨が少し歪んだだろう。だが、半殺しに遭うよりは何倍もいい。

「これからよろしくお願ひします」

頭を下げるレオンを見て、ガレットはまた笑つた。そして、自分がイスに腰掛けると、レオンにも座るように言つた。

レオンも近くのイスに座つた。

「俺も昔は冒険者だつたんだ」

ガレットはそう切り出した。

「お前のような見習いの時期も当然あつた。だから、多少はアドバイス出来る。ただ、専門的な事は難しいが……レオン、お前はジニアスか？」

「いえ、一応アスリートの方を」

前世云々の話は、出来たら避けたいところだつた。

ガレットはレオンの身体を一瞬だけ眺める。

「そうか……しかし、お前だと重い鎧は無理かもしけねえな。武器屋には行つてみたか？」

「いえ、まだ全然」

「そうか。なら、まだ日が高いうちに行つてこい。鎧の仕立てには時間がかかるから、一日でも早い方がいい」

「分かりました」

「時間があつたら、道具屋と、あと伝承者にも会つてこい」

「伝承者？」

「それも知らねえのか……くそ、肝心な時に、あの馬鹿娘はいねえしな」

馬鹿娘というのは、恐らくさっきまでいたエプロン姿の少女だろう。今はどこかに行っているが、それは目の前の父親が追い払つたからである。だが、それを堂々と指摘する度胸はない。

「まあ、あの馬鹿に期待しても仕方ねえな。とりあえず、今日るべき事は分かつたな？」

「はい。場所が分からぬですけど」

「それは教えてやる。だが、その前に・・・」

急にガレットはイスから立ち上がり、そのままカウンター奥のドアを開けて、その中に入つていった。

調理場だろうか。開けた瞬間に、いい匂いが漂つてきたので、なんとなくそう思った。

そういえば、まだ昼食を食べていなかつた。

お腹が減つた。そう思った瞬間だつた。

ガレットがドアの向こうから姿を現す。だが、レオンの目が釘付けになつたのは、彼が持つている物だつた。

羊肉だらうか。その巨大なステーキ。

こんな肉の塊を見るのは、お祭り以外では初めてだつた。ガレットはその肉が盛られた器を、レオンの前に置いた。

「とりあえず、今日はこれくらいで勘弁してやる」

レオンはそれをまじまじと見つめてから、急に居ても立つてもいられなくなつてきた。

「いえ、あの・・・」「いんなに！？」

ガレットは可笑しそうに言つ。

「食えねえつてのか？これくらい食わねえと、体力つかねえぞ」

「いえ、そうじゃなくて・・・」

「何だ？男だつたら、はつきり言つてみろ」

「こ・・・これ、凄く高価なものなんじゃ？」

レオンにしてみれば、当然の疑問だつた。

こんな豪華な食事を食べる事なんて、村では滅多にない事なのだ。それこそ、一年に一度の祭りくらい。量もそうだが、この金銭感覚

のギャップに、戸惑わざるを得ない。

だが、しばらくの沈黙の後、ガレットは大笑いした。

「気にするな！とにかく食え！食つて食つて食いまぐれ！そうしねえと、ここ一番つて時に力が出ねえぞ！」

そう言われても、なかなか踏ん切りがつけられるものではない。

「さつきも言つただろ？ギルドから金が出てるんだ。つまり、お前の先輩達が出した金だ。その先輩達も、見習いの頃はギルドの金で飯を食つたんだ。俺だつてそうだ。お前は俺が出した飯を食つて、それを血と肉にして、次の奴らの為に金を稼げばいいんだよ」

正直、まだ迷っていた。レオンの村はあまり裕福とは言えないからである。

だけど、これが通るべき道なんだ。

レオンは肉を切つて、口に入れた。

歯ごたえがあつて、肉汁が口の中に広がる。

「美味しい・・・美味しいですね！」

控えめに口にしたが、実際には想像以上の味に感動して泣きそうだった。

次々と口の中に放り込む。その勢いは全く衰えない。

ガレットはイスに座つて、そんなレオンを眺めていた。相変わらずの厳めしい顔の中にも、どこか優しいものが含まれていた。

「そうだな・・・夏までに体重を、今の半分増やせ」

その言葉に、レオンは吹き出しそうになつた。

「半分！？半分つて・・・ぶくぶくになりますよ」

「誰が肥えろつて言つたんだ？食つて、鍛えて、筋肉にするんだよ。いいか？夏までだ！そうしねえと、一年で魂の試練場を攻略するなんて絶対出来ねえ。とにかく、必要なのは身体だ！鍛えて鍛えて鍛えまくれ！」

そこで、店のドアが開いた。

聞こえてきたのは、先ほどの少女の声だった。

「あつれー？まだ生きてたの？」

「こきなりの発言に、レオンはむせた。

「お前、仕事は？」

ガレットの声が少し低い。その日の前にいるレオンは、ステーキを頬張りながらも若干不安になつた。

レオンは振り返つてみた。

少女は父親の威圧感をものともせずに、すたすたといながら歩いてくる。

「途中でホレスに会つたから、任せきりやつた。別にいいでしょ？」

「あいつか？ なんで町にいるんだ？」

「知らないけど、別にいいじゃん、どこにいたつて。それよりも・・・」

・彼、ご飯食べてるつて事は、合格なの？」

「何か悪いか？」

「悪くないけど・・・へえー」

少女がこちらの顔をまじまじと見つめてくる。やや切れ目だが、大きな瞳。あまりに遠慮のない視線に、レオンは少したじろいだ。
「おつかしいなあ・・・ちょうどほつこほつこにされてる頃だと思つて、楽しみにしてたのに」

「楽しみつて・・・」

そんな事楽しまないで欲しいと、レオンは心底思つた。

少女はガレットに視線を戻す。

「何がよかつたの？ なんか、私の方が強そうだけど

すばすば言うなあとと思ったが、どちらが強いかはともかく、自分が弱そうに見えるのは確かである。それに、実際に喧嘩する事になつたら、自分は女の子を殴れないだろうから、そういう意味では間違いとは言えない。

「ギルドが許可したんだつたら、そもそも俺がどういつと言える立場じゃねえんだよ。合格も不合格もねえ」

そうなのかと思ったが、案の定、少女はすぐに反論した。

「うつそだー。今まで何人も追い返したくせに。ギルドが断つた人

よりも、お父さんが追い返した人の方が、絶対多い」

「俺が追い返すような奴は、どうにもならねえ奴らばかりなんだよ。そういう奴をギルドで追い返したりしたら、変に逆恨みする馬鹿もいるから、一旦許可してこっちまで連れてこいつて言つてあるだけだ。そこで俺が綺麗をつぱり諦めをせいやる。断りの代理をしているだけなんだよ」

「お父さんだつて、逆恨みされたら困るでしょ？」

「俺に逆恨みする度胸があるなら、こいじやねえか。その時は面倒みてやる」

「私とかお母さんとかを狙つてきただらどうしてくれるの？」
「いい度胸だ。そんな奴はビリしようもねえから、きつちつ止めを刺してやれ」

「なんというか、凄い発想だなとレオンは思ったが、少女も納得がいかなかつたらしい。不満を表情で示した。

「私の身は可愛くないのかー？」

ガレットはどこ吹く風だつた。

「可愛いだあ？ 普通の娘だつたらまだ分かるけどな

「私、普通の娘！」

「誰が普通なんだよ。普通の娘は、親父の殴り合いを見て喜んだりしねえだらうが」

普通の娘じゃなくとも、きつとあまり喜べるものではない。その正論に、少女も一瞬口ごもる。だが、本当に一瞬だけだった。

「むう。でも、血を分けた娘なんだから、普通は少し心配になるものでしょ？」

「心配したなあ。昔は

「普通は今も心配でしょー私、年頃の娘なんだけどー」

ガレットの眉がピクリと動く。本能的に、レオンは身の危険を感じた。

「年頃は年頃でも、お前は棘があり過ぎるんだよーお前に手を出そ
うなんて命知らずな男がいるわけねえだらうがー」

だが、少女は全く恐れる様子もなく堂々と言い返す。

「それはお父さんのせいだつて！俺を倒せる男じゃないと嫁にやらんとか、そんな恥ずかしい事を堂々と言われたら、誰だつてちよつと引くに決まつてるでしょ！」

「それだけじゃねえだらうが！お前が今まで何人の男を返り討ちにしたと思ってやがる！そんな女に誰が近寄るつとすんだよ！」

「下心丸出しの奴だつたら、身を守つて当然でしょ！」

「それらしい守り方があるだらうが！普通の娘は実力行使に出たりしねえんだよ！」

「実力があるんだからいいでしょ！」

「まずそこが普通じゃねえんだよ！」

いい加減、レオンは口を挟む事にした。

「あの！」

凄い形相の2人に睨まれて、レオンは思わず両手を挙げた。両手にはナイフとフォークが握られたまである。

圧倒的な視線に負けそうになりながらも、レオンはなんとか進言した。

「・・・喧嘩はやめませんか？他のお客様さんもいるし」

そう言って周囲に視線を走らせてみるが、どういづわけか、誰も気にした様子はなかつた。

もしかして、いつもの事なのだろうか。

ガレットとその娘は、2人同時に大きく息を吐いて、そして、一瞬で口元に笑みを見せた。

「・・・そうね。今日はまあまあよかつたかも」

「そうだな。悪くない」

レオンには、その言葉の意味が分からなかつた。

「え？・・・あの、どういう意味ですか？」

2人は何食わぬ顔で言つた。

「親子のコミュニケーションなの。たまにやるんだけど、今日は結構いい戦いだつたわ」

「ストレス発散もある。なかなかスッキリするんでな」レオンの身体に、じつと疲れが押し寄せた。

どこからが、その戦いだつたのだろうか。気を揉んだ自分が馬鹿みたいである。

そこで、ガレットが思い出したように言った。

「ベティ。そいつが飯を食い終わつたら、伝承者の所まで案内してやれ」

「デイジーのとこ？」

「そうだな・・・それと、ニコルの所も」

「ニコルもー？大丈夫なの？」

「真面目な奴だから、大丈夫だろ」

「染まっちゃつたら困るでしょ」

「いやとなつたら、俺がどうにかする。とにかく、会わせてみる」

「はーい。まあ、面白そつだからいいけどね」

なんて素直な返事なのだろうか。さつきの口喧嘩は本当に嘘みたいである。そういうえば、店に入る前の会話も結構スムーズなものだつた。

そこでレオンは気付いた。

「あ・・・ベティさんつていうんですか？」

そちらを向いて聞くと、ベティは微笑んだ。栗色のポニーテールと瞳が印象的な、活発そうな少女。腕が立つようだが、それもむしかしたら冗談なのかもしれない。

「そう。ベティ。そこの親父の娘で、ここでも働いてるからよろしくねー」

「あ、はーい。僕はレオンです。よろしく」

「レオンはさあ・・・」

すぐに会話を始めようとするベティをガレットが止めた。

「先に飯を食わせてやれ。冷めちまうぞ」

「あ、そうだねー。さあ、とつとと食えー」

ベティが笑いながらレオンの背中を叩く。

その衝撃で食べ物が変な場所まで入ってしまい、レオンはしばらく咳が止まらなかつた。

自称、ガレット酒場の看板娘のベティは、気さくといつよりは、かなりの話好きな人だつた。

なんとか豪華ランチを攻略したレオンを待つていたのは、彼女との苛烈なトーク。質問責めのフルコースだつた。レオンを武器屋まで案内してくれる道すがら、彼女の口が休む事はない。全く遠慮のない視線と物言いに圧倒されて、レオンは個人情報のほとんど吐露する羽目になつていた。

他にも、村の事、家族の事、友達の事、さらには、気になつた女の子の事まで。

そして、レオンがなるべく詮づまいと思つていた事も、あつとう間に暴露させられた。

「へえー。それって、記憶喪失みたいなものじゃない？」

石畳の道から、脇道に入つた所だつた。

ベティがそう評価したのは、前世を見た事がないといつレオンについてである。

「記憶喪失ですか？」

「そうそう。こう・・・なんていうの？強いショックとか受けたら、人つて記憶を忘れちゃう事があるみたいなんだ。私が懲らしめてやつた奴らが、よく言つのよねー。あの日の事が思い出せないって」
それは思い出せないのか、それとも思い出したくないのか。いずれにしても、聞いて楽しい話ではなさそうだ。

「前世がない人つていうのは、ちょっと聞いた事ないし。だから、忘れてると思うのが普通なんじゃないかなー。案外、お父さんに1発貰つたら、ショックで思い出すかも。やってみたら？」

「え、いや・・・1年経つてもダメだった、その時はお願ひしま

す

ベティは可笑しそうに笑う。屈託のない笑い方だった。

「分かったー。その時は私も加勢してあげる」

「やめて下さい。そもそも、一発だけなのに、匕首やつて加勢するんですか」

「特別製の重いやつを貸してあげる。それで、ドカンと・・・ね?」
「何が、ハンマーみたいな物を振り下ろす仕草。

「ねつて言われても・・・逆に現世の記憶も忘れてしまったの
で、出来たら素手の方でお願いします」

「あ、ここだよー」

レオンの言葉を華麗にスルーして、ベティは足を止めた。
彼女のすぐ脇に建っているのは、普通の民家をさらに縮小したよ
うな、はつきり言って小屋みたいな所だった。レオンも立ち止まつ
て、そこをまじまじと見るが、見れば見るほどこじんまりとした建
物である。看板のような物もどこにもない。小屋自体は石を積んで
造つてあるようだ。

「・・・ここ、何ですか?」

ベティはその言葉も無視して、その小屋のドアを無造作に開けた。

「たのもー」

そう言つて、レオンの腕を掴んで小屋の中に引きずりこんでいく。
引きずられるまま中に入つたレオンだったが、中を見ても、そこ
が何なのか分からなかつた。狭い室内には大きい台と椅子が2つあ
るだけ。商品らしきものもない。レオンたちが入ってきたドアとは
反対側、台を挟んだ向こう側に同じ大きさのドアがあるが、他には
窓すらない。

だが、人間なら一人だけいた。

台にもたれ掛かるようにして、奥の方を向いていた少女が、こち
らを振り返る。

一瞬少年だらうかと思つほどの中性的な顔立ち。服装も、白いシ

ヤツの上にポケットの多い黒のベストという、どちらかといつと男性的なファッショングである。それでも彼女を女性だと思ったのは、整った小さな顔と線の細い身体、そして、ベティと同じボーネルからだった。ただし、髪色はやや赤みがかったライトブラウンで、瞳の色も明るい。凜々しい顔立ちとギャップがあつて、どこか不思議な印象がした。

少女は一瞬だけこちらを見たが、すぐベティに視線を戻した。

「何？ あれならまだ出来てないよ」

容姿は少年っぽいが、声は確かに女性のものだ。

「そうじゃなくて、彼、今日見習いで来たんだ。だから、鎧の注文」

「何？」

少女がこちらを見る。レオンはとりあえず、挨拶した。

「どうも初めまして。レオンと言います」

「こちらをまじまじと見る少女。なんとなく気まずかつたが、とりあえず黙っている事にする。

「・・・なんか弱そうだけど、大丈夫なの？」

やつぱりそう見えるんだなあと、レオンはちょっと落ち込んだ。

「さあ？ 一応お父さんがオッケー出したから、たぶん大丈夫なんじゃない？」

「ガレットさんが？ へえ・・・

信じられないといった表情だった。そんなに弱そうに見えるのだろうか。

「まあ、そんなわけだから、鎧作つてあげて。出来るだけ軽くて丈夫なやつ」

「そんなの当たり前。みんなそつまつよ。せつと詳しい注文はないの？」

「そうだねー。とりあえず、あんまり重い鎧は無理なんじゃないかって・・・後は、初心者だから、安くて適当なやつでいいんじゃないかなー。どうせすぐ壊すだろ？」「

酷い言われようだつたが、もしかしたら、最初はすぐ壊れるのも

のなのかもしれない。

だがやつぱり、その注文ではダメだったようだ。少し呆れたような顔をして、少女は奥のドアに手をかけた。

「父さんに聞いてくるから、ちょっと待つてて」

そう言い残し、少女は扉の向こうに消えた。

小屋の中は静かになる。

レオンはベティに聞いた。

「あの・・・父さんっていうのは？」

ベティは不思議そうな顔で聞き返す。

「父さんって、父親の事だけど？」

「それくらい知っています。さっきの人のお父さんは何をしてる人なんですか？」

「武器屋っていうか、鍛冶職人なんだ。向こうに工房があるの。これは、一応店なんだけど、商品は陳列しないんだって。注文貰つてから作りたいんだってさー。その人に合つた物しか作りたくないからつて」

「へえ・・・」

「すごいんだよー。ジョフさんは、王様から賞を貰つた事もあるんだから」

「本当ですか!?」

ベティはあつさりと言つたが、それはもの凄い事なんじゃないだろうか。王様直々に賞を授与される事なんて、滅多にない事のはずである。

「だから、たまに遠くからお密さんが来る事もあるんだ。よかつたね。そんな人に武器とか鎧の面倒をみて貰えて」

「あ、はい。僕にはもつたいないような気もしますけど」

「そんな事ないと思うなー。あの一家は、みんなマニアなんだよ」「マニア?」

「そうそう。あの家は・・・」

そこで、奥のドアが開いた。顔を出したのは、先ほどの少女であ

る。

「ここちに来て」

何の前置きもなしにそう言わされたので、レオンはすぐこ反應出来なかつたが、ベティの方は慣れた様子で少女の方に歩き出す。それを見て、少女の方が止めた。

「ベティ。その格好に入るの？」

言われた本人は立ち止まって、自分の服装を確認する。淡いピンクの厚手のワンピースに、白いエプロン。春らしい装いだと言える。

「まあ、いいんじゃない？余所行きつてほどじやないし」

「汚れたら大変だよ。着られなくなつてから後悔しても遅いんだからね」

「怖いこと言うなあ」

ベティが迷つていろいろを、レオンは始めて見た。服の事は気になるのだろう。やっぱり女の子なんだなと、失礼な感想を抱いてしまつた。

「分かった。私、留守番してるね。ジェフさんにようじく」

「はいはい。誰か来たら、適当に接客しといて」

「適当でいいのー？」

「適当がいいの。変な注文だけはとらないで」

「変な注文つて、どんな注文？」

そこで少女は口ごもつた。若干だが頬が朱い事に、レオンは気付いた。

「・・・とにかく、よろしく。レオンさんは、ここちにどうぞ」

そう言つて、少女は扉の向こうへ消えてしまった。

いつたい何があつたのだろうかと思って、レオンはベティの顔を見たが、彼女はいつもの微笑みを返すだけだった。少し悪魔的な笑みだつたかもしぬないが。

とりあえず、それは見なかつた事にして、レオンも奥の扉を開ける。

そこは屋外だった。すぐ前に下り階段があつて、その終点の先に

金属製の扉がある。その扉の前に少女が立っていた。

レオンはそこまで歩いていく。

どうやらそこは、地面をくり抜いて作った地下室のようだ。石の壁面に鉄の扉。レオンの村にはない、立派な物だ。

扉の前まで来ると、熱気のような物を感じた。それと同時に、金属を叩くような音もはつきりと聞こえてくる。

「服が汚れるかもしないけど、それくらいは大目に見て」少女はにこりともしなかつたが、冷たいというよりも、むしろ格好いいと思った。不思議な感覚だ。

「あ、はい。それは平気です」

「あと、なるべく静かにして」

「静かにして？」

「父さんは仕事中なので」

「あ、なるほど」

レオンは頷いた。鍛冶仕事の邪魔をしないでくれという意味だろう。

それを見て、少女は扉を開けた。重そうな扉に見えたが、少女はそれを軽々と開ける。

中はまさに鍛冶場そのものだった。それも、レオンの村の物とは比べものにならないほど広さである。一番奥に炉があつて、鍛冶台が3カ所。他の場所には、注文された物なのか、金属製品が所狭しと並べられている。鎧や剣といった物はもちろん、鎌や鍬といった農具もある。

その鍛冶台の一カ所では、男性がまさに鍛冶作業中といった様子だった。剣か何かだろうか、細長い金属を炉に入れて軟らかくしてから、鍛冶台に移して叩く。しばらくして、それをまた炉に戻すといった作業をしている。

レオンはその流れのような作業にしばらく見入っていたが、少女がいつの間にか室内に入っているのを見て、慌てて自分も中に入った。

服が汚れると忠告されていたが、恐らくそれは避けようがないだろつと思われた。田に見えるくらいの煤が宙を舞っているのが見える。

レオンが室内に入ったのを確認してから、少女は作業中の父親に声をかけた。

「父さん」

すると、男は手を止めてこちらを見る。

レオンが想像していたよりも、ずっと小柄な男性だった。少なくとも、ガレットさんに比べたら子供のようなものだろう。だが、身体は引き締まっているし、腕も十分逞しい。鍛冶職人としての風格は十分にあった。

男はしばらくレオンをじっと見つめる。見えているのかいないのか、分からないくらいの細い目である。ついでに言つと、髪が全くない。ベティと少女が同じ年くらいだろうから、この男性とガレットさんも、そう年代は変わらないはずだが、まだ毛がふさふさのガレットさんに比べると、この男性はだいぶ老けて見えた。

しばらくレオンの身体を観察した男性は、ふと視線を少女に移し、そして再び作業に戻ってしまった。

何だつたんだろうと思つていて、少女が突然こう言つた。

「もう終わり」

「・・・はい？」

「出ましょう」

少女はスタスタと歩いて、扉から出て行つてしまつた。

仕方なく、レオンもそれについて行く。

そのまま階段を上るつとする少女を追いかけながら、レオンは聞いた。

「あの・・・今のは何だつたんですか？」

少女は振り返りもせずに答える。

「父さんはあれで大抵の事が分かるの。武器は5日くらい。鎧は2週間くらいで出来ると思つ。だから心配しないで」

「心配つていうか・・・例えば何が分かるんですか?」

「見ただけで、何が分かるというのか。」

「身体とか靴のサイズとか、手の大きさとか、あと、使いこなせる武器とかも」

「・・・どうしてそんな事が分かるんですか?」

「プロだから」

「そんなにプロって凄いのか。」

「でも、使いこなせる武器なんて、自分でよく分かりませんけど」
レオンは村にいた時に、剣や弓に一通り慣れるくらいの訓練はしたが、専門家がいたわけではないので、まだ初心者くらいの腕しかない。

「体つきでだいたい分かるんじゃない?私も詳しくは知らないけどもしかしたら、適當のかもしれない。」

レオンはちょっとと心配になつたが、よく考えたら、武器や鎧を立ててくれるだけでも十分恵まれた話である。ここであれこれ注文するのも、おこがましいだろう。

そう納得した頃に、少女が階段を上りきつて扉を開ける。

そこでレオンは初めて気づいた。

小屋の中から男性の声がする。もしかして、お密さんだらうか。レオンも階段を上りきつて室内を覗いてみると、やはり男性がいた。

彼はすぐにこちらに気づいたようだ。

「あれ?見ない顔だね。お密さん?」

彼が聞いているのは、ベティではない少女の方である。だが、答えたのはベティだった。

「そう。今日来た冒険者見習いなんだ。だから、そのつむラッセルのところにも行くと思つよ」

「ああ、そうなんだ」

そこで、ラッセルと呼ばれた青年は納得したように微笑んだ。背が高いが、濃い瞳と髪をしていて、真面目で誠実そうな青年である。

彼は黄土色のエプロンをしていて、両手でやつと持てるくらいの大きさの木箱を抱えていた。

「それ、注文してたやつ?」

聞いたのは明るい髪の少女である。

青年は嬉しそうな表情で答える。

「そりなんだよ。やつと届いたから、すぐに持ってきたんだ。ずっと待たせてたから、申し訳がなくて・・・とにかく、中身を確認してくれる?」

そう言つて、ラッセルは木箱を少女の前の床に置いた。少女はすぐには蓋を開けて中身を調べ始める。中に入っていたのは鉱石の様だった。だが、鉄とか銅というわけではなさそうだし、明らかに精鍊前である。そのままでは使えないはずだから、自分達で精鍊するのだろうか。

ラッセルはそんな少女をしばらく見てから、レオンの方を向いた。「僕はラッセル。冒険者向けの道具屋をしてるんだ。ダンジョンに挑戦する頃になつたら、いろいろ道具が必要になると思うから、その時にはよろしく

すこく話しやすそうな人だつた。

「僕はレオンです。その時はよろしくお願ひします」

「ラッセルは店長なんだよー。それも、結構やり手な

ベティの言葉に、レオンは驚いた。レオンとそう変わらない歳に見える。少なくとも、20歳は越えていないはずだ。

ラッセルは照れたように頭の後ろに手をやる。

「やり手つてほどでもないけど・・・前の店長、だつたお爺さんが引退したから、成り行きで僕が店長なだけで、そんなに腕があるわけじゃないんだ。僕が作った店じやないからね」

「でもさー、仕入れ代行みたいな事まで始めてるし。それって、なかなか才能がないと出来ないと思うなー」

「それだつて、お爺さんのコネがあつたからだしね。道具屋というよりは、便利屋みたいなものだと思って貰えればいいよ。レオン君

も何か特定の素材が欲しくなつたら、僕に言つてくれれば都合出来るかもしないから、その時はよろしく。もつとも、そこまでギルドは面倒みてくれないから、取り寄せた素材はタダではないけどね」そこで、鉱石を調べていた少女が木箱の蓋を閉めた。

「うん。これならたぶんいける」

ラッセルがすぐにそちらを向いた。

「よかつた。じゃあ、下まで運んでおくれよ」

「それくらい、私がやるから・・・」

「いいよ。こんな重い物持つて階段で転んだら、怪我じゃ済まないかもしない。そんな事をお得意様にさせられないよ」

ラッセルはそう言つて、木箱を持ち上げた。そのまま奥のドアに向かい、それを足で開けて、ドアの向こうに消えていった。それを後ろから少女が追つていく。

「どういうわけか、それを見届けたベティがクスクスと笑い出した。

「・・・どうかしたんですか？」

レオンが聞くと、ベティは意味ありげに微笑む。

「ラッセルも、なかなか頑張るよねー」

「え？ まあ、仕事頑張つてますけど」

「そうじゃなくてさー・・・レオンは、リディアの事どう思つ？」「リディアという名前に心当たりがなかつた。

「誰ですか？」

「あ、まだ言つてなかつた？ さつきまでいたのが、ジョフさんの娘のリディア。ここは受付と、あと、細かい装飾品とか作ってるんだ

ー

明るい髪と瞳をした、中性的な顔立ちの少女。彼女の名前がリディアという事らしい。物言いがつづけんどんな感じだが、それが格好いいと思わせる不思議な印象の少女だった。細かい装飾品とは、アクセサリーとかの事だろうか。

「へえ・・・そのリディアさんどうかしたんですか？」

「だから、レオンはリディアの事、どう思つた？」

「どうつて言われても・・・なんとなく格好いい人ですね」
レオンがそう言つと、ベティが何度か頷いた。

「そうそう。まあ、そういう事なんだ」

「・・・どういう事ですか?」

「だいたい分かるでしょー?」

「全然分かりませんけど」

その言葉に、ベティが苦笑する。珍しい表情だった。

「レオンはさあ・・・」

「はい?」

「人生の楽しみを、半分くらい損してると思うな」
レオンはその言葉に首を捻るばかりだった。

通されたのは、立派な調度品でいっぱいの部屋だった。

ベティの案内で次にやつてきたのは、とある民家だった。民家と言つても、お屋敷と言つてもいいほど立派な建物である。綺麗に整えられた庭の周りを、高い柵が囲つていて。入り口にも、家紋らしきものが彫られた門が設えてある。広さはそれほどでもないという事だが、それを補つて余りあるほどどの風格がその家にはあった。

その応接間らしき一室。初めて座るソファという物の感触に多少戸惑いながらも、レオンにはもつと気になる事があった。

自分の隣に座つているベティが、口元とお腹を押されて身悶えているからである。しかし、彼女は別に、体調が悪いわけではない。ただ、笑いを堪えているだけなのだ。

その原因は、レオンの正面に座つている老人にあった。

立派な白髭を蓄えたお爺さんである。ただ、顔にはしわが深く刻まれているし、目蓋もほとんど上がつていないように見える。さきほど見てきた鍛冶師のジェフさんよりも明らかに年上の、正真正銘の老人である。この部屋に入つてくる時も杖をついてたし、非常にゆっくりとした足取りだった。座つている今も、かなり腰の曲がつた前傾姿勢だ。

だが、ベティの笑いのツボにはまつたのは、そのお爺さんの頭である。

きつと既に髪がないのだろう。そんな曖昧な表現になつてしまつのは、その頭を占拠していいる生物、いや、妖精がいるからだった。

歳経た木の幹のような焦げ茶色の毛。その中から、木の葉のような深緑の瞳がふたつ、ぱっちりと開かれてこちらを見ている。老人の頭の上で腹這いになつていて、眠つてているわけではないようだ。

なんとなくだが、レオンにも、ベティが言わんとする事は分かった。つまり、お爺さんの頭上のカーバンクルが、ちょうどお爺さんの髪の毛みたいに見えるという状況。偶然なのか、故意なのかは分からぬが、この奇跡的なフィット感。それでいて、その奇跡を全く意に介した様子のない、老人と妖精の堂々たる役者振り。レオンはそれほどではないが、確かにユニークな絵だとは言える。

それでも、本人を目の前にして、中々そこまで笑えるものではない。幸い、お爺さんは気にする様子はないが、もしかしたら見えていないだけかもしれない。その事が、さらにベティの笑いを誘つているのかもしれないが。

まだ笑いを堪えているうちはいいが、そのうち大声で笑い出すのではないかと、レオンはひやひやしていた。

そこで、部屋に少女が入つてくる。お盆の上に、ティーカップが4つ。紅茶のようだつた。

「面白いでしょう？」

レオンの前にカップを置きながら、少女が言つた。一点の曇りもない笑顔だった。

「え？ あ、いや・・・」

何の事ですかとも、そうですねとも答えにく質問だつた。かといつて、そんな事ないですよと答えるのも、隣で身悶えている少女のせいで説得力がない。

レオンが答えあぐねていると、少女が老人の隣に腰掛ける。すぐ洗練された座り方だつた。育ちがいいとはこの事かと思い知る。レオンは自然と背筋を伸ばした。

「お楽にして下さい。いいんですよ。ベティくらい横になつて貰つても」

実際、ベティはソファの背にもたれ掛かるようにして横を向いている。寝転がつていても過言ではない。だが、さすがにそこまではリラックス出来なかつた。というか、リラックスとはまた別の問題だ。単に笑い顔を隠しているだけである。

「いえ、それはちょっと・・・」

「冒険者さんともなると、普段から気を抜かないものなのですか？」

「まだ見習いなので分かりませんけど・・・とりあえず、僕は大丈夫です」

「そうですか・・・でも」遠慮はなさらないで下さいね」

少女は微笑む。その微笑みも、ベティの屈託のない笑みとは少し違う。どこか抑制された、品格を感じさせる表情だ。

とりあえず、笑いから抜け出せないベティは放つておく事にして、レオンは話を切り出す事にした。

「あの、僕はレオンと言います。今日、見習い冒険者になつたばかりです。よろしくお願ひします」

「私はデイジーです。こちらが祖父のフレデリック。よろしくお願ひいたします」

デイジーが少しだけ頭を下げる。もの凄く優雅な動きだった。田舎者のレオンは、じうじつ所作に全く免疫がない。否応なくそわそわしたし、そして、ドキドキした。

これが本物のお嬢様なんだ。

所作もさる事ながら、彼女は見た目でも、落ち着きと洗練さを兼ね備えていた。ほぼ黒髪と言えるほど濃いダークブラウンの髪は、艶やかに真っ直ぐ腰まで伸びていて、前髪も綺麗に切り揃えられている。派手さはないものの、小さく整つた顔立ちをしていて、華奢な肢体を象牙色のワンピースが包んでいた。一輪の花という表現がぴったりの、慎ましい可憐な少女だった。

レオンももちろん綺麗な人だと思ったが、それよりも、自分が場違いみたいで気が引けた。彼女自体は綺麗な花でも、それを育てあげた環境を連想してしまつ。彼女の洗練された所作が、彼女の後ろ盾を否応なく思い出させるのだ。

彼女に見入つてしまいそうになつていたレオンは、なんとかそれを振り払つた。今日の目的はとりあえず顔を見せておくというものの

だつたが、もちろんお見合いでない。冒険者見習いとしての訪問である。そして、レオンには聞いておきたい事があった。

「あの、デイジーさん。こんな事聞くのもおかしな話かもしれないんですけど……」

レオンはその質問をデイジーにする事にした。本当はお爺さんの方がいいのかもしれないが、彼女の方が話しやすそうだったからである。

「何でしょうか」

デイジーの黒い瞳が瞬く。何か引き込まれてしまいそうで、レオンは直視出来なかつた。

「伝承者っていうのは何なんでしょうか？僕、そういう事全然知らないので……」

「あ、いえ。知らない方も、たまにいらっしゃいますよ」

そう言つてデイジーは微笑む。レオンは少し気が楽になつた。
「簡単に言つと、伝承者というのは、伝説の冒険者の記憶を伝える人達の事です。偉大な事を成し得た方々が培つた知識や経験を、今を生きる冒険者達に授ける事。それが伝承者の仕事です」「記憶という事は……つまり、伝説になつた人達が前世だつたといつ事ですか？」

「そうです」

あまりにあつさりとした答えに、レオンはいまいち驚けなかつた。

「……それって、凄い事ですよね？」

「凄いと言いますか、珍しい事だとは思ひますけれど」

「いえ、だつて……という事は、デイジーさんも、前世は伝説だつたという事ですか？」

その言葉に、デイジーは笑つて首を振つた。

「私ではありません。祖父です」

レオンはそちらを見た。

なんというか、どう見ても普通のお爺さんだつた。だけど、伝説の冒険者が前世という事は、もしかして、若い頃は名のある冒険者

だつたのだろうか。

表情から読みとれたのか、デイジーが説明する。

「祖父が冒険者だつた事は一度もありません。武器の訓練所等で冒険者に関わつてはいましたけれど、どちらかといつと、ずっと裏方の仕事をして いたそうです」

「そ うなんですか？ ちよつと、もつた い ない ような・・・」

冒険者になつていれば、それこそ偉大な功績が残せて いたのでは ない だろ うか。 そ う思つての発言だつたのだが、フレデリックさん は全く微動だ に し ない。

そんなレオンを見て、デイジーはまた小さく首を振つた。

「祖父は、これが自分のなすべき仕事だと思つて いたそ うです。そ して、今思 い返してみても、自分の選択は正しかつたと思つて いる そ うです。自分が冒険者になつて いても、きつと大成出来なかつた。それでは自分の役目を果たせなかつたと・・・ これは、祖父の口癖 で す」

「役目ですか？」

「つまり、自分の経験を伝えたい、後輩を指導したいとい う思 いが 強かつたとい う事ではないで しょ うか。 レオンさんは、ソードマス ターの話を聞いた事はありま せんか？」

ソードマスターも伝説となつた冒険者の1人だ。レオンもその称号はもちろん知つて いたが、具体的な事はほとんど知ら ない。詳しこそ う話を知つて いるのは、レオンの故郷の村が出身であると言わ て いる、サイレントコールドこと、イブとい う名前の女性についてのみである。

「いえ、全然・・・ 称号を聞いた事はもちろんありますけど」

「ソードマスターは、その称号の通り、比類無き剣技を誇つたとさ れる冒険者です。しかも、それが大剣でも細剣でも、例え初めて握つた剣であつても、自由自在に扱う事が出来たとか」

「へえ・・・」

凄い事だとは分かつたが、あまり実感がわからなかつた。まだ剣の

技術でそれほど苦労した経験がないからだろうか。

「そんな彼ですが、非常に子供好きだった事でも知られています。彼が冒険者になったのも、身よりのない子供達に孤児院を作る為だつたそうです。そこで自分が剣を教えて、冒険者として独り立ちさせます。そんな計画だったのですが、資金が集まつて、孤児院を建てる話がまとまつた矢先、彼は姿を消してしまつたのです」

「え・・・どうしてですか？」

「そこで彼は最後の戦いに向かつたのだろうと、そして彼は帰つてこられなかつたのだろうと言われています。事実、その時期には天災が多発していたのですが、彼がいなくなつた翌年から、ぱつたりとやんでいるのです。つまり、天災に匹敵するような強大なモンスターと戦つて、相打ちになつたのではないかと・・・そして、自分がいなくなつてもいいように、孤児院の話だけはまとめておいたのでないかと、そう言われています」

応接間に沈黙が満ちた。

まるで知らないその伝説の人物について、レオンは想像でしか触れる事が出来ない。彼は最後の戦いに向かう時、どんな心境だつたのか。もう戻つて来られないと分かつていたのだろうか。そんな強い敵を倒せた事ももちろんだが、自分がいなくなつた後の事まで考えていた。今の自分には遠すぎて見えないような強さだ。

デイジーは微笑んだ。この静かな空氣にも全く水を差さない、淑やかな笑みだ。

「祖父の記憶のほとんどは、子供達との思い出なんだそうです。ですから、戦うのは自分の役目じゃない。自分の役目は教える事だつて・・・」

「・・・そうですね。すみませんでした。もつたいないなんて言つて」

「十分立派な役目なのだ。その価値を昔の自分が教えてくれたのだから、なあさら無視は出来ない。

レオンはフレデリックさんに頭を下げる。お爺さんは愉快そうに

少しだけ笑つた。弱々しい笑い方だが、十分優しさを感じられる。

頭上のカーバンクルは、その深緑の双眸で、じつとこちらを見つめていた。

「それに、ソードマスターの記憶を受け継いでいる人は祖父だけではありません。ですから、どなたか他の記憶をお持ちの方が、立派な冒険者になつておられるのではないでしょつか」

それは確かにそうなのだ。偉大な人物の記憶ほど、多くの人に分化して伝えられる。何を隠そう、レオンの母親も、サイレントゴールドの記憶を持っていると言つていた。

そこでレオンは気付いた。

もしかして、自分の母親も伝承者だったのだろうか。仕事としては、ただの主婦というか、農家だったわけだが、その資格があつたという事なのだろうか。

「すみません。伝承者っていうのは、伝説の冒険者の記憶を持つている人つて事ですか？」

デイジーは少し首を傾げる。

「どうでしょうか・・・そういう方ばかりとは限らないと思ひますけれど」

「えっと・・・もう少し詳しく説明していただけませんか？」

「もしかして、どなたか記憶をお持ちの方に心当たりがあるのですか？」

思つたより勘がいい。レオンはその洞察力に驚く。

それだけで、ばれてしまつたようだ。デイジーは口元に手を当てて、少し笑つた。特にやましい事があつたわけではないが、レオンは気まずくなる。

「一応ですが、ギルドから伝承者として認められるには条件があるんです」

「あ、ギルドに認めて貰わないといけないんですね」

「そうですよ。だって、お仕事ですから」

全くの正論だった。自分で名乗るだけでお金が貰えるわけがない。

「すみません。僕、田舎者なので・・・」

「デイジーはクスッと笑う。上品その為か、嫌らしさが全くない。

「ギルドの条件は3つです。1つ目は、16歳以上である事。2つ目は、ギルドで面接試験を受けて、それに合格する事。つまり、そこで冒険者の助力になり得る人がどうか、見極めるのだと思います。そして、3つ目は・・・」

そこで祖父の頭に目をやる。

「カーバンクルと共にある事です」

レオンは驚いた。カーバンクルが何かの役に立つのだろうか。

そこでふと、ギルドでの会話を思い出す。

「もしかして、何かの記憶を伝えてくれるとか、そういう事ですか？」

ギルドにおけるカーバンクルは、志願者の前世を読みとつて、それを受付の女性に伝える役目を果たしていた。だつたら、逆の使い方も出来るのだろうか。

デイジーは頷いて肯定する。

「必要だと判断すれば、この子はソードマスターの記憶を直接レオンさんに見せてくれます。それがレオンさんの悩みを解消するきっかけになつたり、場合によつては、突然剣の腕が上達する事もあります。伝説となつた人の記憶を伝える。それが伝承者の仕事です」

「へえ・・・」

ようやくレオンにも伝承者の役割が分かつた。要は、先人に話を聞きにいくという感じだろうか。その道で伝説となつた人にアドバイスを貰いにいく。それがただの言葉ではなくて、直接見る事が出来るものならば、確かな価値があるのでないだろうか。

「それに、すぐ隣に武器の訓練所もあります。今はギルドのものですから、レオンさんも使っていただけます。遠慮なく使って下さい」

「あ、はい・・・お世話になります」

そういえば、フレデリックさんは、若い頃に武器の訓練所に関わつていたという事だった。このお屋敷の隣にある建物がきっとそ

なのだろ？

レオンは閃いた。

「もしかして・・・例の孤児院っていうのが、それですか？」

何の根拠もない思いつきである。口にした途端に、自分でも、どうしてそんな事を思い付いたのか不思議になつた。

デイジーは驚いた表情を見せたが、すぐに微笑んで、首を横に振つた。

「違います。ソードマスターが生きていたのは、この町が出来るより、ずっと前ですか？」

「そうですか・・・そうですよね」

「でも、同じかもしませんね」

「え？」

祖父を見ながら、デイジーは優しく微笑んだ。

「ソードマスターの記憶があつたから、祖父が携わったのです。彼が建てた孤児院も、祖父が大きくした訓練場も、同じ思いで出来たものです。だから、同じかもしません」

少し前とは違う静寂。

暖かくて、ずっと居たくなるような、心地よさが満ちる。

レオンも、大昔の伝説の男性に思いを馳せる。

皆が持つている前世というものの重みが、ほんの少し分かつたような気がした。どういうわけか、自分にはそれがいいわけだが、特に困った事はなかつた。だけど、今、ほんの少しだけ、羨ましいと思つた。

この町の歴史よりも長い時間を経ても、伝わってきた物。

「・・・そろそろ帰ります。大事なお話をありがとうございました」
レオンが腰を上げようとする。いい加減帰らないと、日が暮れてしまう。まだ行くところが他にもあるのだ。

それをデイジーが止めた。

「もうちょっと、待つてあげたらいかがですか？」

「はい？待つって・・・」

レオンは自分の隣を見た。

そして、呆れた。

妙に静かだとは思っていたのだ。

ベティはいつの間にか、ソファの上で寝息を立てていた。

「いやー。『めん』『めん』

「いえ、まあ・・・起きて貰えてなによりです」

あまり悪びれた様子のないベティに、レオンはその言葉を返すのがやっとだった。

ソファの上で眠りこけていたベティを起こすのに、レオンは予想外の苦労をさせられた。最初は普通に声をかけてみたのだが、全く反応がない。仕方ないので、肩を揺すってみたのだが、それでもダメだった。そこで、最終手段として、頬を叩いてみる事にした。叩くと言つても、そんなに強く叩いたわけではない。顔に少し違和感がある程度でも、気になつて起きるだろうという理論見だつた。

だが、ベティの反応は過剰防衛以外の何者でもなかつた。

「私も油断してたなー。まさか、会つた初日に、しかも他人の家で、レオンに襲われるとは思わなかつた」

さらつととんでもない事を言つので、レオンは周囲を気にしたが、幸い誰もいなかつた。裏路地と言つてもいいようなところだから、人通りは少ない。

日も少し陰り始めている。

「襲つてません。人聞きが悪い事を言わないので下さい」

どちらかというと、襲われたのはレオンの方だつたが、もう指摘する気力もない。

そんなレオンの主張を聞いているのかいないのか、ベティは両の拳を撃ち合わせながら、何度も頷いて言つた。

「でも、バツチリ迎撃したし。うんうん。さすがにお父さん仕込みなだけはあるなー。スカートじやなかつたら、もう一発蹴りが増えて、6連コンボだつたのに」

「・・・是非毎日スカートにして下さい」

「レオンはスカートが好きなのー?」

「何でそんな話になるんですか。被害縮小の為です」

「でも、もし本気で襲われてたら、私、スカートでも蹴りは出すよ? というか、それでもし中を見られたら、見た物を忘れるまで徹底的にやるから、うーん・・・どっちがいいんだろうね?」

どっちにしろ、蹴りが出る事は避けられないらしい。

レオンは溜息を吐く。

「・・・というか、僕が襲つてないと分かつていながら、5回も攻撃してきたんですか?」

その指摘に、ベティは真顔で頷いた。

「見習い冒険者なんですよー? あれくらい普通に避けられないと」
出だしの裏拳を貰つた時点で、見習い冒険者としては残念な感じだが、その後の、眉間に狙いにきた右手の突きと、それを必死に避けたあとに、胸ぐらを掴んできたのはすぐに弾いた。だけど、その後の牽制のビンタにお膳立てされた、左のアッパーは避けられなかつた。この後に、ズボンだつたら蹴りがお見舞いされていたようだが、もし出でいれば、恐らく綺麗に入つていただろう。

つまり、レオンから見て、2勝3敗。蹴りがあつたなら、2勝4敗。

しかも女の子相手に。

情けないと言われても、全く反論出来なかつた。

落ち込んだ様子のレオンを一応心配してくれたのか、あつけらかんとした様子で、ベティが肩を叩いてくる。

「まあまあ。冒険者もいろいろあるし、多少弱くともなんとかなるつて。これから強くなればいいんだから」

「・・・そうですね」

「そうだ。レオンはスニークの事知つてる?」

スニークも伝説の冒険者の称号である。この町に来る荷馬車の中でも、名前が出た人だ。

「えつと、称号くらいは」

「あの人も最初は弱かつたんだって。というか、女の子だつたつて噂だし」

「確かに、本当の名前を誰も知らなかつたつて人ですよね？」

「そうそう。名前どころか、性別とか年齢も分からなかつたつて。変装の達人だつたつていうしね。ずっと正体を隠してたから、どんな事をしてたのかとか、いつ死んだのかとかも分からんんだつて」

「・・・そんな人が伝説に残るような事をしたつて、どうして分かつたんですか？」

「あ、ここだよー」

ベティがまたもやレオンの質問を無視して立ち止まつた。本日2回目だ。このマイペースぶりに、既に慣れ始めている自分に驚きだつた。

今度も立派な民家だが、フレデリックさんの家ほどではない。木造平屋だが、そこそこ広さがある。コーストイでは、これが平均的な民家のようだ。今日だけでも結構町の中をうろうろしたが、だいたいこれくらいの民家が多い。それか、もう少し狭い代わりに二階建てか。ガレットさんの酒場や、フレデリックさんのお屋敷は別格である。この家も、広い庭があつて、ガレージのような物が建つているから、もしかしたら裕福な方なのかもしれない。

ベティは躊躇う様子もなく、勝手に敷地内に入つていく。仕方ないでの、レオンもその後に続いた。

ところが、彼女が向かつたのは家の方ではなく、ガレージの方だつた。

その扉の前に来たところで、レオンは尋ねた。

「こんな所に、伝承者がいるんですか？」

もう1人伝承者に会いに行くのは知つていた。だけど、それ以外の事は何も聞いていなかつたのだ。

「うん。大抵こつちにいるんだー。ここが二コルの部屋みたいなも

のかな

「へえ・・・」

広さはともかく、あまり住み心地がよさそつな建物ではなかつた。特に、冬は凍えそうだ。隙間風が吹きそうなくらいだから、この時期でも、きっと朝晩は寒いだろう。同じ伝承者であるフレーテリックさんと比べると、生活にかなりの差があるよつに思えた。

ガレージからは、何か、カチャカチャといつ小さい物音がする。

「レオン」

「はい?」

「ちょっと、ノックしてみて」

ガレージのドアをノックしろといつ意味らしい。入り口には、窓のついたドアがあるのだが、その窓には張り紙でもしてあるのか、室内を窺う事は出来ない。

「・・・僕ですか?」

今まで、止める間もなく、何でも自分でやつてきたベティだけに、急にそんな簡単な事を頼むのは違和感があつた。

ベティは微笑みながら言つた。

「いいからいいから。とにかくやつてみて」

「別にいいですけど、何で急に・・・」

「今度からはレオン一人で来るわけでしょ? だつたら、慣れておいた方がいいと思うなー」

「慣れないといけないよつな事があるつて事ですか・・・」

多少うんざりしながらも、レオンはドアの前まで進み出る。ドアをノックしたくらいで、何か起ころとは思えない。だけど、妙な緊張感が、レオンの身体を包んだ。

呼吸を整える。

そして、軽くドアを叩いた。

その直後だつた。

子供の悲鳴。何かの金属製品が崩落したよつな物音。どちらもガ

レージ内からだつた。

自分のノックなど、軽く音が出る程度である。思いもよらぬ過剰反応に、レオン自身が一番戸惑つた。

すぐにドアが開く。

その向こうにいたのは、まさしく子供だった。性別ははつきりしないが、身体つきから言つても、レオンより年上という事はありえない。レオンは16歳ながら小柄な方である。そのレオンよりもさらに小柄だから、恐らく1-2歳くらいだろうか。その小柄な身体を、グレイのシャツとモスグリーンの膝丈のズボンで包んでいる。子供らしいファッショングレードだった。

だが、一番の注目点は、その子供が、両手を耳元に当ててしゃくりあげている事だった。

どう見ても泣いている。

「泣かしたー」

背後から、これ以上ないくらい無責任な声が飛んでくる。振り返ると、ベティの悪魔的な微笑みが目に飛び込んできた。

「え？ いや、その・・・」

泣かせるつもりはなかつたし、泣かせるよつた事をした覚えもない。だけど、もしかしたら、本当に自分のせいなのだろうか。

レオンはもう一度子供の方を見た。

よく分からぬけれど、とにかく可哀想だった。見ていて、氣の毒な氣分になる。

とりあえず、謝ろう。

「えっと・・・その、『ごめんね』

なるべく優しく言つたが、効果はない。子供はやや俯いたまま、すすり泣くだけである。

まさに途方に暮れた。

泣いている原因も分からないし、どうやつたら泣き止むかも分からぬ。

レオンはまた振り向いた。ベティに助けを求めたのだ。

困り果てたレオンの表情を見て満足したのか、ベティが意味あり

げに頷く。そして、子供の方を向いて、やや大きな声で言った。

「ニコルー。仕事だよー」

その言葉に、レオンは意表を突かれた。確かにニコルというのは、ここに住む伝承者の名前のはずだ。だけど、フレデリックさんの孫のティージーが言うには、伝承者になるには16歳以上でないといけないはずである。だから、きっとこの子はニコルという人物とは別人だと思っていたのだが。

レオンは子供の方に視線を戻す。

びっくりした。

ニコルと呼ばれた子供が、レオンの目の前で目を輝かせていましたからだ。

「近！？」

いつの間に寄ってきたのか。というか、さっきまで泣いていたのはなんだつたのか。

ニコルの目元は、全く赤くなつていない。髪は濃い色だが、瞳は明るいブラウンだった。子供らしい、大きな瞳だ。

「本当に！？仕事つて事は冒険者見習いだよね？うわあ！凄い！ねえ、どこから来たの？ジーニアス？それともアスリート？なんかあんまり強くなさそうだけど、うん、でも、これくらいの方がいいなあ。ちょっと弱いくらいの方が工夫しがいがあるし。僕、ニコルつて言うんだ。僕のところに来たつて事は、伝承者の仕事だよね？うわあ・・・。やつた！嬉しい！もう何でも聞いてね！特に、鍵開けとか、そういう細かい作業なら、もうなんでも！あと、ちょっとした仕掛けだね。そういうの、ガジェットつて言うんだけど知つてる？ここにもいっぱいあるんだ。君も絶対気に入ると思うよー。どうぞう？見ていかない？見ていいかい？」

いつの間にか、右手を両手で包み込まれていた。

レオンはゆっくりとベティの方を振り返る。

「・・・だいたい分かりました」

およよその事は、ニコル本人の口から暴露されていた。

ベティは少し笑いを堪えながら言つた。

「良かつたねー、二コル。これからはレオンが実験に付き合つてくれるから」

「そりだよね・・・うわあ！ダンジョンで試せるなんて、楽しみ！」

「いや、試すつて、僕はまだ・・・」

レオンの言葉を二コルが遮る。

「あ、そうか。もしかして、まだ成り立て？」

「え？ あ、うん」

「そつか・・・うんうん。でも大丈夫。楽しみは後にとつておかな
いとね！」

それはいつたい何が大丈夫なのだろう。とりあえず、レオンの安
全を保証しているわけではなさそうだ。

「じゃあとりあえず、僕の作った物を見ていつてよ。なんなら、実
際に・・・」

「あー、ゴメン。二コル」

そこで割り込んだのは、意外にもベティだった。

「レオンは他にも行くところあるから、また今度でいいかなー？出来
たら今日中に回つておきたいんだよね」

そんな話は聞いていなかつたレオンだったが、何も言わない事に
した。ベティの表情が、いつもととほど変わらないながらも、目元
が真剣に見えたからだった。

二コルは残念そうな表情を顔いっぱいに浮かべたが、すぐに頷い
た。

「仕方ないね。じゃあ、えつと・・・レオンだつたつけ？また今度
おいですよ。いろいろ用意しておくれから」

「あ、うん・・・また今度、よろしくお願ひします

レオンが軽く頭を下げるが、二コルは笑顔に戻つて、ガレージの中に戻つていった。

ドアが閉められ、辺りは静かになる。

それを見届けてから、レオンは息を吐いた。何もしていなが、

何か終わったという達成感があった。

振り返つてみると、ベティは既に帰り道を歩き出していた。

慌ててレオンもそれを追いかける。敷地から出た辺りで彼女に追いついた。

「他に行く場所なんてあるんですか？」

開口一番にそれを聞くと、ベティは口だけで微笑んだ。珍しい表情だった。

「ないよー」

「じゃあ、どうして嘘を言つたんです？」

「レオンはまだ心の準備が出来てないから」

「僕ですか？」

ベティは前を向いた。その横顔は、いつも彼女よりも大人びて見える。そのギャップにレオンは驚き、そして、一度大きい鼓動が聞こえた。

「ニコルは悪い子じゃないんだけど……うーん、いや、違うな。ニコルは悪い子なんだよ」

あまりにもあつたりと言い切つたので、レオンは一瞬思考停止した。

「……えっと、ニコルさんって、さつきの子の事ですか？普通の子供に見えましたけど」

「そりなんだだけねー。なんていうのかな、ニコルは悪戯っ子なんだ」

「悪戯っ子ですか？ それって、そんなに珍しい事じゃないような…」

・

「ある程度の悪ふざけは、子供なら誰だってするだろ。」

「あの子はちょっと違うんだ。なんていうのかな…ニコルは自分がした事が悪い事だつて分からぬ子なんだよね。私はニコルじゃないから、本当はどう思つてるのかは分からぬけど」「僕はもつと分かりませんけど…それが僕とどう関係するんですか？」

ベティはこちちらを向いた。優しい微笑み。これもまた珍しい表情だ。

「私はね・・・うん、私達は、つまり、今日レオンが会った人みんなだけど、二コルの事が嫌いなわけじゃないんだ」

レオンは黙つて頷く。

「だからね、レオンにも嫌いになつて欲しくないなーって、思っただけなんだ。ちゃんと準備してからじゃないと、初対面の人に一瞬で嫌われるような、そんな子だから」

その理屈は分からぬでもない。

でも、理由としては弱い。

「・・・それだけじゃないと思ひますけど、違ひますか？」

ベティはまた前を向いた。横顔だけでは、表情は読みとれないが、少し寂しそうに見える。

「私は二コルが嫌いなわけじゃないけど、でも、やっぱりちょっと怖いな」

言葉の最後が少し小さかつた。口にするのが嫌だったのかもしない。あるいは、口にするのを躊躇うくらい怖いのだろうか。

それ以上に、ベティの口から怖いという言葉が出てきた事が、驚き以外の何者でもなかつた。怖じ気付く事のない、怖いもの知らずの女の子だと思つていたのだ。

その彼女が恐れているのが、何の変哲もない子供。

「昔はね、二コルと一緒に遊んだりもしたんだよ。だけどね、だんだん遊ばなくなつたんだ。本当に、二コルの事は嫌いじゃないんだよ。だけど、なんとなく一緒にいなくなつた。これは、私だけじゃなくて、みんなそうなんだ。そして、最近、やつと理由が分かつたんだ。二コルといふとね、影響されるんだよ」

「影響ですか？」

「私も悪い事が分からなくなつてた。二コルみたいに、社会のルールが見えなくなるんだ。それが怖くなつて、二コルから離れていつたんだよ」

「えっと、つまり……僕も影響されるかもしれないといつ事ですか？」

ベティは頷かなかつた。

「レオンはニコルにとつて初めての仕事なんだ。あの子が伝承者になつたのは、つい最近の事だから。初めてだから、何が起きるか分からんんだよ。レオンがどうなるかも分からぬし、ニコルがどうなるのかも分からぬ。だけど、ニコルにしてみたら、今が大きな節目なんじゃないかなつて思うんだ。だから、なるべく上手くいつて欲しいつて、そう思つてるだけなんだよ」

そこでベティはようやくこちらを向いた。いつもの屈託のない笑みだつた。

「もちろん、一応レオンも心配してんんだけどね。でも、多少レオンの根性が曲がつた程度の事なら、お父さんがどうにかしてくれるから平気だよ。命の保証は出来ないけどねー」

どこか、言葉に迫力がない。

今説明を聞いただけでは、レオンには、この町の人達とニコルの関係が分からなかつた。嫌われているわけではないが、皆から距離を置かれている。口で言つるのは簡単だが、上手く想像できそつもない。

だけど、なんとなく、レオンはベティの様子を見ただけで、どういう感じの話なのは分かつた。もちろん、楽しい話ではない。だが、辛い話かというと、少し違う気がした。

寂しい話というのが、一番しつくり来る。

「……分かりました」

「何が？」

「要は、ニコルさんと町の人達が馴染む事が出来ればいいんですね？」

その言葉に、ベティは少し困惑つたようだ。

「いや……別に、そこまではしなくていいと思うけど。レオンはとりあえず、冒険者になればいいんじゃない？そうすれば、ニコル

の仕事も成功つて事になるわけだし」

「いえいえ。町の人達に恩返し出来るかもしれないですし

「でもなー。1年しかないんだよ?」

「1年でだめなら、もう1年頑張ります」

「そこまではお父さんも面倒見てくれないと思つたが」

「その時は、どこかのお店で働きます」

「・・・なんていうか、本当にそうなつてそうで嫌だなー」

ベティは呆れ顔をしてから、それでも、すぐにいつもの微笑みに戻つた。

「まあいい。せいぜい頑張れー」

声が低い。どうやら、ガレットさんとの物真似らしい。

レオンは笑つた。

「さすが親子ですねえ」

「そう? じついうの、二ノルは上手なんだよー。なんといっても、スニークの伝承者だから」

変装の達人のノウハウを生かしているのだろうか。

「へえ・・・といつか、スニークの伝承者だつたんですか」

「そうだよー。昔から、家の鍵とか普通に針金みたいなので開けてたし。たぶん町中の家の鍵は開けたことがあるんじゃないかなー」

当たり前みたいに言つたが、もちろん一般的な趣味とは言えない。

「いや・・・それ、泥棒ですか?」

「練習してたんだつてさ。だから、二ノルの家は鍵穴がないんだよー。なんか、ネジみたいなのを差してドアを固定するんだ。それだつたら、二ノルも開けられないから」

自分の子供基準の防犯対策をしているらしい。

「・・・それ、ドアの内側で使うんですよね? ジャア、出かける時どうするんですか?」

「それは気にしないんじゃない? だって、二ノルは閉まつてる鍵にしか興味ないから」

もはや、防犯対策ではなかつた。

「・・・出かける時に閉められない鍵つて、意味ないですよね？」

「そもそも、泥棒なんて滅多にいないし。それに、ニコルに開けられるつて事は、普通の泥棒なら開けられるつて事だから」

正論みたいな口調で言つたが、きっと何か間違つているだらう。だけど、これ以上聞くと深みにはまりそうなので、レオンは話題を変える事にした。

「・・・えつと、ニコルさんつて、16歳ですか？」

伝承者なら最低16歳。だが、全然そつは見えなかつた。何かの特例だらうかと思つての質問である。

だが、ベティはあつさり認めた。

「そうそう」

「本当ですか？なんていつか・・・失礼ですけど、幼く見えますよね」

「見えるねー。全然胸もないし」

全然寝癖がないと言つているのと同じくらいの軽い発言だつた。レオンはそこにも深入りしない事にする。

「・・・といふか、あの、もっと失礼なんですけど、ニコルさんは女性ですか？」

子供っぽいもあるだらうが、鍛冶屋で会つたリティニアビニードはなくらい、見た目では性別が分からなかつた。

「私はそう思うけど」

「・・・私は？」

「本人は秘密だつて言つてるからねー。といふか、男女どちらの服でも似合つし、変装も上手だし」

「・・・じ両親に聞いてみたりはしないんですか？」

「何か、口止めされてるんだつて」

どうしてそこまでして隠すのだらうか。

「一緒にお風呂に入つたりとか、ないんですか？」

「だつてー・・・もし男だつたら恥ずかしいし」

それは確かにその通りだ。

「レオンが入つてみればー？女だつたら儲け物でしょー？」

「儲け物つて・・・」

「でも、胸がないからダメかー」

ベティは平然と言つたが、さすがにレオンは恥ずかしくなつた。

「そういう事を言つのはさすがに・・・」

「あれー。レオンはない方がいいの？」

「違います。変な話をしないで下さい」

当然というべきか、やっぱりベティは止まらなかつた。

「やっぱり大きい方がいいでしょ？私よりもティージーの方が実はあるんだよー」

一瞬ティージーの胸元を思い出そうとした自分に気付いて、慌ててそれを打ち消した。田の前のベティに至つては、首から下を見られそうにない。

レオンはしじらもじらになる。

「いや、そういう事じゃなくて・・・」

「じゃあ、形の問題？それとも触つた時の・・・」

「わー！わー！」

耳を押さえながら必死で叫ぶと、ようやくベティも止まってくれた。悪魔的な表情だつた。弄ばれていたのは、間違いなさそうだ。

「レオンはさあ・・・」

次は何を言い出すのかと思つて、レオンは心の準備をする。

だが、ベティの言葉は、今度こそ正論だつた。

「いくら強くなつても、たぶん女の子には勝てないよねー」

思いつきり上半身から力が抜けた。

反論の余地は欠片もない。

「・・・せめてモンスターには勝てるように頑張ります」

不思議なもので、今ならばどんなモンスターにでも立ち向かえる気がしたレオンだった。

「よし！休憩！」

その一言で、レオンの身体は看板が倒れるみたいに後ろに傾く。地面の衝撃。

固いけど痛くはない。土の匂いが鼻を掠める。剣と盾を離して大の字になった。

空は青い。

小さな雲。

子供達の歓声。レオンは深呼吸した。体内の熱い空気を吐き出すると、代わりに外の冷たい空気が入ってくる。

心地良い疲労感。

だが、それとは逆のもやもやしたものが、小さいながらも心の中にはあつた。

やっぱり上手くいかない。なんとなく、分かつてはいたのだけれど。

小さく息を吐ぐ。先ほどの深呼吸とは違い、心の中のわだかまりを追い出そうとしたが、今度は上手くいかなかつた。

レオンがいるのは、この町で一番大きい訓練所である。伝承者をしているフレデリックさんが大きくしたという施設だ。場所はそのフレデリックさんのお屋敷のすぐ隣。今はギルド所有の建物という事だが、どうやらフレデリックさんが、今でも管理人の立場なようだ。

訓練所といつても、レオンのような冒険者見習いは全くいない。むしろ、子供達が剣を習いに来る場所になっているらしい。子供達が20人くらい走り回っても十分過ぎるほどどの屋外スペースに、着

替えや休憩の為の小屋が併設されている。小屋といつても、家具さえ揃えれば、1家族が十分暮らせる規模の物だ。その中に、刃を漬した訓練用の武器や、簡易防具が大量に保管されている。

自分の武器と防具が出来上がるまで、レオンはここで戦闘訓練をする事にした。どんな武器が用意されているか分からぬといふのがなんとも言えないところだが、とりあえず、鍛えておくに越した事はない。

「レオン」

まるで刃のようすに硬質な男性の声に、レオンは身体を起こす。その彼が、ちょうどこちらに向かって水筒を差し出したところだつた。お世話になつてゐる酒場のガレットさんが用意してくれた水筒である。小屋の前に置いていたはずだが、わざわざ持つてきてくれたようだ。

「アレンさん。どうもありがとうございます」

水筒を受け取りながら、御礼を言ひつ。そのまま彼は、レオンの正面に座り込んだ。

少し長めの黒い髪。黒い瞳に、鋭い顔の輪郭。だが、彼の一番の特徴は、間違いなくその長身だつた。かなり大柄なガレットさんよりもさらに上。彼より背が高い人間を、レオンは見た事がない。体つきは筋骨隆々といふほどではないが、それでも鍛え上げられてゐるのが分かる。正確としては、無口といふほどではないが、どちらかといふと寡黙な人物。頼りになるお兄さんという印象が強い。

それがアレン。彼はこの町の警備の他に、この訓練所の教師をしている。レオンがここを初めて訪ねた時に出迎えてくれたのが彼だつた。そもそも教師は数人しかいないようだが、そんな縁もあって、レオンの訓練に付き合つてくれているのだ。

「やっぱり上手くいきませんね。村を出る前に、少しは訓練したんですけど」

レオンから話を切り出す。アレンから話しかけてくる事はあまりないから、こちらから話さないと、すつと沈黙が続くのだ。

アレンは表情を変えずに答える。

「そうでもない。レオンは筋がいい方だと思つ」
その評価が、レオンには意外だつた。

「・・・でも、僕、未だにアレンさんから一本も取れませんけど」
誇張も何もなく、まさしくその通りだつた。

この訓練所を訪ねて、今日は3日目である。初日には、アレンはレオンの腕がどの程度なのかを見ててくれた。レオンが自己評価するなら、やつと剣の振り方を覚えたくらいの腕である。だが、それだけ出来れば十分だという事で、すぐに剣と盾と防具をつけて、アレンさん自ら訓練してくれる事になつた。

実践形式というか、決闘形式である。剣の腕もさることながら、体格に結構な差がある。もう何十回と打ち合つたが、未だにレオンの剣が届いた事は一度もなかつた。

「そんな簡単に一本取られても困る。それに、一本取つて欲しいわけじゃない」

「え？ そうなんですか？」

アレンは頷く。

「剣を通して、レオンの事を見させて貰つていただけだ」
「僕の・・・」

「剣は俺の専門分野だ。剣を通してなら、相手の事がほとんど分かる。だから、それに付き合つて貰つていただけだ」

「つまり・・・まだ訓練じゃなかつたんですか？」

「強いて言つなら、剣を握る前に筋力トレーニングをさせたいた。あつちが訓練だ」

確かに、妙に念の入つたトレーニングだとは思つていた。ちょっと騙されていたような感じもするが、自分は初心者なわけだから、それが普通なのかもしれない。

「だけど、あれだけ必死になつて一本取るひつとしていた自分は何だつたのか。」

空しくなつたような、ほつとしたような、複雑な気分で溜息を吐

くと、アレンが唐突に質問してくる。

「レオン。もしかして、狩猟経験が相当あるんじゃないかな？」

その指摘にレオンは戸惑いながらも頷く。

「あ、はい。父さんが狩人なので、よくついて行つてたんです。えつと、6歳からだから・・・そういうば10年間になりますね。もちろん、最初は見てるだけでしたから、実際に狩りをしてたのは、7、8年くらいだと思いますけど」

レオンのいた村では、狩りはとても重要なものだった。食肉を確保する上でももちろんだが、どちらかというと、山の動物達にこちらの縄張りを認識させるための仕事だった。

自然との共生。それがレオンの村の出身である、サイレントゴールドことイブ様が大切にしていた教えである。

その答えに、アレンは大きく頷く。

「やはりか。お前の剣はそういう剣だった」

そういう剣と言われても、レオンにはさっぱりだった。

「えつと・・・どういう剣ですか？」

「まず、レオンは実践慣れしていた。普通は、いきなり人間相手に武器を振るうのは躊躇するものだ。相手が傷つくるのを想像してしまふから、それを振り払うのには、相当な精神力がいる」

「いや、僕だつて、結構躊躇してましたけど」

「確かにそうだが、普通はその程度じゃない。最初に人に相対する時は、誰もがどこかで負けたいと思っているくらいだ。相手よりも、自分の剣を恐れる。自分の剣がどれくらい危険な物なのかが分からぬからだ。どんなに腕がある人間でも、最初は震えて力が出せない。だが、レオンは最初から俺を倒す気でいた。相対した俺なら分かる。レオンの剣は震えていなかつた。それはある程度、他の生命を傷つけた事があるからだ」

そう言われると、確かにそうかもしれない。最初は確かに緊張したが、どちらかというと、上手く戦えるか心配していた為だった気がする。

士の上に座つたまま、アレンはこちらをじっと見つめている。

「そして、もうひとつ。レオンは戦士としての戦い方が、全く板に付いていない」

はつきり言わるとやはり残念だが、頷かざるを得ないとこりだつた。

「それはそうですよ。まだほとんど訓練してませんから」

「いや、そうじゃない。レオンの戦い方は柔軟過ぎる」

「え？ 柔軟ですか？」

そう言われても、自覚はなかつた。

「俺が教えている子供達は、ここに初めて来る時は皆真っ白な状態だ。他の戦い方を全く知らない。だから、ある程度教えていると、皆同じ様な戦い方になる。変な言い方だが、教師である俺の戦い方に染まつていくと言つてもいい」

「それはまあ・・・そろがもしれませんね」

「だが、レオンの戦い方は、戦士の模範からまるで外れている。剣や盾の使い方は教わつたようだが、はつきり言つて全く様になつていない。俺には剣と盾が浮いて見えるくらいだ。それは、既にレオンの身体に他の戦い方が染み込んでしまつてゐるからだ。その戦い方に、今日やつと確信が持てた。レオンはまさに狩人の戦い方をしている。大自然の、決して平坦ではない地形で生き抜くための、柔軟で軽快な身のこなし。そんなレオンに重い剣や盾を持たせても、上手くいくわけがない」

真つ直ぐな眼差しで、そう断言されてしまった。

たつぱり数秒間間を空けて、レオンは尋ねる。

「えつと・・・それはつまり、僕には戦士が向いてないって事ですか？」

「そうだ」

「・・・あの、僕、一応アスリート志望なんんですけど」

剣や盾が使えない、それを扱う事が専門であるアスリートにはれない。

「レオン」

「はい？」

「ついてこい」

アレンが立ち上がりながらそう言つので、レオンも立ち上がる。彼が向かったのは、併設されている小屋の方だつた。レオンもその後をついていく。ふと横を向くと、少し離れた場所で、男の子4人が小さなサイズの剣を一生懸命に振つてゐる。なんとなく微笑ましい。デイジーからソードマスターの話を聞いていたからかもしない。

アレンは小屋の前でレオンを待たせると、自分で中に入つていつた。

待つこと数分。なんとなく空を見上げる。今日もいい天氣だ。しばらくして、アレンが小屋から出でてくる。

出てきた彼は、盾を持っていた。だが、さつきレオンが持つていた物よりもかなり小さい。ガレット酒場で使われているお盆みたいだと思つた。

「これをつける」

その盾を差し出しながら、アレンは言つた。

「え・・・これ、つける物なんですか？」

レオンの中で、盾と言えば、手に持つ物である。

その発言を聞いたアレンは、黙つてレオンの左腕を掴んで、盾の裏側中央から伸びているベルトの様な物を巻き付ける。

取り付けられてみると、たつままで持つていた盾ほどではないが、それでも少し重い。

「バツクラーだ」

アレンはそれだけ言つた。この盾の名前らしい。

「へえ・・・」

腕を動かしてみるが、思ったよりもしっかりと取り付けられているようだ。だが、盾としては、面積が寂しいので心許ない。

「レオン、ひとつ宿題を出しておく」

「え・・・何ですか？」

「両利きになれ」

もの凄く端的な命題だった。

「・・・えっと、両利きっていうのは、つまり、両手が利くようになれって事ですか？」

「そうだ」

「それって・・・そんな簡単に変わるものですか？」

右利きの生活を既に16年も送ってきたのに、今更直せるものなのだろうか。

「簡単には直らない。だが、その盾を生かす為には必要な事だ。それは両手を空けながら、盾を利用する為の物だ。その方が、両手が使える分、より柔軟に戦える。だが逆に、分かるとは思うが、防御が手薄になる。防御を代償として、機動力と柔軟性を手に入れる。難しい戦い方になるが、レオンの狩人としての経験を生かすためには、これが最善だと思う」

「なるほど・・・」

理論としては分からぬでもない。

「でも、両手が使えるとはいっても、具体的にどうしたら・・・」

アレンは頷いた。当然の疑問だったようだ。

「将来的には、一刀流出来るのが望ましい。つまり、左手でも武器を扱えるようになるのが理想だ。だが、とりあえず左手を空けておいても、武器や盾を捨てなくとも道具が使えるし、あるいは、盾を捨てなくとも弓の補助が出来るようになる。ただ剣を振るうだけでなく、場合によつては、弓や道具を使う。そういう幅広い戦術を意識するといい」

「なんていうか・・・頭を使わないとけませんね」

「そうだ。だが、それが出来ないとレオンは生き残れない。レオンはガレットさんの娘のベティと面識はあるか？」

突然その名前が出てきた事に驚いたが、すぐに苦笑して頷いた。

「はい、もちろん。面識があり過ぎて困つてますけど」

面識だけならいいが、過剰なボディランゲージが伴っているので気が抜けない。気を抜いたら大怪我をさせられそうな、ある意味で元気過ぎる女の子である。

アレンはくすりともせずに、真顔で頷く。

「彼女も狩人だ」

「え？ そうなんですか？」

初めて聞く話だった。よく考えたら、自分の事は大方白状させられたが、彼女の事は何も知らない。

「まだ数年ほどだから、レオンよりは経験が浅い。だが、彼女には同僚というか、師匠がいる。元々は彼一人で狩人をしていたんだが、事情があつてベティが手伝うようになつた。彼の名前はホレス。聞いた事はないか？」

「あ・・・名前は一度だけ」

この町に来た初日、ベティが口にしているのを聞いた気がする。

「一度彼に会つてみるといい。彼は冒険者ではないが、かなりの腕利きだ。戦い方の参考になるかもしれない」

「あ、なるほど・・・分かりました」

「彼は田によつて居場所が違うが、ベティに言えば案内してくれるだろう」

「・・・そうですか。頑張つてみます」

「どうかしたか？」

「いえ、別に・・・」

何か災難が起こる気がするとは言えなかつた。

そこで、2人に近づいてくる人物がいた。

レオンはすぐに気付く。

「リディアさん」

鍛冶師のジェフさんの娘、リディアである。赤みがかつた茶髪を前と同じ高い位置で束ねている。どこか中性的な顔立ちの中に、明るい瞳が不思議な印象を放つてているのは相変わらずだが、珍しく今日はスカート姿だった。珍しいとレオンが評価出来るのは、ベティ

から、リディアはスカートをほとんど穿かないと聞いていたからである。そのためか、以前は格好いい印象が強かつたが、今日は一段と女性らしく見えた。

彼女は、布に包まれた大きな箱のよつた物を小脇に抱えている。

「アレンさん、レオン、こんにちは」

リディアは軽く頭を下げる。レオンだけ呼び捨てなのは、年齢を意識しての事だろう。彼女は17歳。レオンよりも年上なのだ。これも、聞いてもいのんにベティが教えてくれた情報である。

「こんにちは。こんな所までお仕事ですか？」

「そう。ベティがここだつて、言つてたから」

「もしかして、僕に用事ですか？」

「アレンさんもいるなら、ちよづじよかつた。とにかく、はい、これ」

持つていた箱を、両手でレオンに差し出す。

「・・・はいつて、何ですか？これ」

リディアは即答した。

「武器」

「・・・僕の武器、箱ですか？」

「中身に決まつてゐるでしょ。開けてみて」

「え？ あ、はい・・・」

剣とか槍にしては箱の大きさが小さかつたので、中身が想像出来なかつた。そもそも、武器をわざわざ箱に入れてこなくてもいい気がする。

布を取つてみると、中身は木箱だつた。

その蓋を慎重に開ける。

中に入つていたのは、革の帶。

そして、黒い柄と鉄の刃。

レオンは取り出してみた。

「・・・ナイフですか？」

言葉通りの、それは短剣だつた。正式にはダガーと呼ばれる物だ。

長さは30センチもない。箱の中身は、それが3本と、それを腰に下げる為のベルトのようだ。食事用のナイフよりは大きいものの、武器としては小型の物で、しかも軽い。扱いやすいのは間違いないが、威力は心許ない気がする。

だが、手に馴染むのは確かだった。子供の頃から狩りの度に握っていた物とよく似ているのである。思わず懐かしさを覚えたほどだつた。鍛冶師のジエフさんが、自分を一目見て勝手に作った物だが、とりあえず、慣れている武器という点では間違いない。さすがの職人の目である。

「これは、投擲用か？」

アレンが呟くように言った。

リディアが軽く頷いて答える。

「はい。だから、アレンさんに投げ方を教えて貰つた方がいいと思つて」

「いや、投擲は専門じゃない。ホレスが知つていればいいが……」「ホレスさんは接射が上手いですから」

「そうだな。知らない可能性が高い。そうなると……」

2人はそこで黙つた。

レオンは、そんな2人をキョロキョロと眺める。

「えっと……もしかして、教えてくれる人がいないって事ですか？」

アレンとリディアは顔を見合させた。

「いや、いるにはいる。もの凄い名手が」

「そう。だけど、ちょっと事情があつて……」

そこで突然、声が割り込んできた。

「事情つて何の事ですか？」

レオンも驚いたが、それ以上に驚いたのは、アレンとリディアの方だった。いつもクールな2人だけに、驚いた顔は珍しい。

声の主の方に3人は注目する。

日傘の影の中にいたのは、長い髪が目を引く、落ち着いた容姿の

少女。3人のリアクションに戸惑つてゐるよつだが、それもどこか抑制されていて、育ちの良さを感じさせる。

「この訓練所の隣にあるフレデリックさんのお屋敷。そこに住んでいる彼の孫娘。

「あ・・・デイジーさんですか。急に声がしたので驚きました」

レオンが笑いながら言つと、デイジーも微笑みを返す。

「それは失礼をいたしました。何か深刻な話かもしないと心配になつたものですから。この訓練所で、何か足りない物がありますか？」

「いえ、全然。ちょっと、この・・・」

そこでリディアに口を塞がれた。

だが、レオンが両手で持つてゐるのだから、当然気になつただろう。デイジーは自然と箱の中身を見て、そして嬉しそうな声を上げた。

「まあ・・・素晴らしい一品ですね。これはジエフさんの作品ですか？」

聞かれたりディアは、諦めたように息を吐いてから、レオンを解放する。

「そう。お父さんの。バランスは私が調整したけど」

「ジエフさんもリディアもさすがですね。とても綺麗に出来ています」

綺麗かと言わると、確かに綺麗かもしれない。だが、刀身はともかく、柄はただ真っ黒なだけの味氣ないデザインだから、女の子の趣味としては微妙なところではある。

だが、デイジーの発言はここで終わらなかつた。

「レオンさん。ちょっと、使ってみてもよろしいですか？」

さすがに耳を疑つた。

「・・・使うんですか？」

その言葉に答える事なく、デイジーは勝手に箱からスローアイニングダガーを一本抜き取る。それを見て数秒間うつとりしてから、彼女

は重さを確かめるように、短剣を握った右手首をスナップさせる。妙に手慣れてると思った、次の瞬間だつた。

デイジーの右手が一閃した。

放たれた短剣は直線を描くように真っ直ぐ飛び、20メートルほど先にあつた木の幹の真ん中に突き刺さる。完全に玄人の投擲だった。

誰も声が出ない。

デイジーは満足げに微笑むと、リディアの方に向き直る。「綺麗ですね。本当に美しいバランスです。あれだけ重心がしつかりしていれば、かなり長い間使えるでしょうね」

専門家みたいな感想だった。

今度は、レオンの方を向いた。

「レオンさん。また今度、よかつたら触らせて下さいね。他にも、剣の事なら、何でも聞きにいらして下さい。それでは、私、ここで失礼いたします」

デイジーは優雅に一礼すると、機嫌良さそうに、門の方へと歩いていった。

しばらく、誰も喋らなかつた。

最初に口を開いたのは、アレンである。

「・・・そういうえば、そろそろ差し入れを持つてくる時間だつた。失念していた」

フレデリックさんが高齢の為か、代わりにデイジーがここまで差し入れを持つてやつてくる事が多い。レオンも何度も顔をあわせている。

だが、今更後悔しても遅すぎた。

一応気になつたので、レオンは聞いてみる事にした。

「デイジーさんはどうして・・・あんな事が出来るんですか？」

投擲と言えばいいのだが、なんとなく口にするのが憚られた。お嬢様の趣味としては、間違いなく一般的ではないはずだし、趣味程度の腕ではないのがレオンにも分かつた。

アレンはすぐ隣に建つお屋敷の方を向きながら言った。

「彼女の祖父がソードマスターの伝承者なのは知っているだろ？」「あ、はい」

「彼女は幼い頃から、お祖父さんに可愛がられていた」

「……えつと、それで？」

「それだけだ」

「……そうですか」

女の子にはそれらしい可愛がり方がある気がする。

「なんていうか・・・この町の女の子は、皆さん遅しいですね」

デイジーもそうだし、狩人をしているベティもそうだ。だが、反論する人が1人いた。

「みんなじゃないけど」

リディアのどこか冷めた声に、レオンは慌てる。

「そ、そうですよね！リディアさんは違いますよ・・・ね？」

言い切る自信がなかつたレオンだった。

「一緒だと思う？」

「いえ！そんな・・・」

じつと見つめてくるリディアの視線に、レオンは耐えきれなくなつた。

「そ、そういうえば、今日は、リディアさん、スカートですね。素敵だと思います」

「デイジーは大抵スカートだけど」

「で、でも、リディアさんは、珍しいじゃないですか！その、いつもは格好いい感じですけど、今日は一段と可愛らしつていうか・・・」

「

自分で言つて恥ずかしいくらいだった。

言われた本人はもつと恥ずかしかつたのだろう。視線を逸らしながら、頬を赤らめているのが分かる。

レオンの左腕を一瞥してから、ぶっきらぼうな口調で言つ。

「……鎧と盾はもうちょっとかかるから」

その言葉を残し、リディアは足早に去つていった。

残つたのは男2人と短剣3本。

よく分からぬけれど、とりあえず、解放されてよかつたという
思いでいっぱいだった。

そこで、いつの間にか木に刺さつた短剣を回収してきてくれたア
レンがぽつりと言つ。

「レオンは友人に恵まれてゐるな
どこか、認めにくい言葉だつた。

「・・・そうですね。とりあえず、武器も手に入つたし、使い方を
教えてくれる人も見つかったし」

「だけど、後で何かとんでもないしつペがえしが来そつた気がする
のは何故だらう。」

レオンの背後では、無邪氣な子供達の歓声が響いていた。

細長い金属棒が穴の中を這いずり回る。

金属が擦れ合う音。

針金から手に伝わってくる振動。

その両者を感じ取りながら、構造を想像する。

傍らに置いてある本に載つていて図と比較しながら。

これだろうか。

100年ちょっと前に作られた型。

別のツールを取り出す。

針金を曲げて、形を微調整する。

上を押さえて、下の本体の方へ差し込む。

力チツという、確かな手応え。

「・・・やつた」

レオンの口から、達成感と共にその言葉が零れ出たその時だった。

「ちよつ・・・うわつ！」

その声の後に小さな炸裂音がしたかと思つと、レオンの背後で、積んであつた酒瓶が崩れ落ちたかのよう、盛大な音が鳴り響いた。思わず両手で耳を塞いだレオンだが、数秒後、恐る恐る振り返る。元々散らかっていたガレージ内だったが、今はさらに多くの、よりどりみどりな物が床に散らばっている。

その中心にいるのは、黒っぽいショートヘアの、子供にしか見えない人物の後ろ姿。レオンと同じ16歳という事だが、どう覗覗目に見ても、12歳くらいにしか見えない。ついでに性別不詳という謎の人物。今は床に座り込んでいるから、腰に巻いた上着がスカートみたいに見える。だから、なんとなく女の子っぽく見えるが、立ち上がりてこちらを向いたら、ハーフパンツを履いているのがはつ

きりするので、その時点では性別に自信が持てなくなる。見る方向によつて印象が変わる、万華鏡みたいな人物である。

そんな人物だが、今はここからでも分かるくらい肩が震えていた。怒つているのか、泣いているのか分からぬけれど、いざれにしても不機嫌なのは間違いない。

「その・・・ごめん、ニコル」

レオンが控えめに謝ると、ニコルは大きく溜息をついて、床に寝ころんだ。

逆さまの顔も、目が大きくて子供っぽい。明るい瞳が自然と目を引くが、それほど怒つている様子ではなかつたので、レオンはほつとした。

「まあ、いつかあ・・・元々見込み薄だつたんだよね」

息を吐き出すようにそう言つた。ニコルは声が少し高い。だけど、男の子だとしても、声変わりしていない場合もあるから、それほど不自然ではない。

邪魔をしてしまつた手前、レオンは一応聞いてみる事にする。何か作つてゐる時のニコルは、ちょっとした物音にも敏感なのだ。自分の呴きが邪魔をしたのは明らかである。

「何を作つてたの？」

「うーん・・・一言で言つなら、魔法妨害装置かなあ。ちょっとアイデアがあつて、もしかしたら、魔力に干渉して、魔法を妨害出来るんじゃないかと思つてたんだけど」

「え・・・それって、もしかして凄い事なんじゃ？」

魔法の才能はからつきしなレオンだが、そんな発明品は聞いた事がない。もしかしたら、偉大な発明ではないのか。

「でも、そもそも、魔法を妨害したかつたら、術者の前に、闪光弾とか火薬とかシンバルとか、とにかく大きな音とか光を出す物を投げればいいだけだし」

「なかなかシンバルは持つて行かないと思うけど・・・それだって、確実に妨害出来るわけじゃないよね？」

「確実なのは、まあ、攻撃する事だよね。出来たら息の根を止める事」

「でも、それだって、相手に護衛がいたらダメなわけだし」

「まあね。というか、音とか光が効かないモンスターもいるだろうから、結局、確実なのは人間相手の時だけかなあ」

「・・・今気付いたけど、ニコルが想定してるのは、人間同士の戦いなの?」

「人間はいいんだよ。さつき言ったように、閃光弾とか投げればいいんだから。だけど、モンスター相手には何が効くか分からないうら、もし魔力妨害が出来るなら、一番確実でしょ?」

「ああ・・・なるほど」

「それでアイデアを思い付いたから、ちょっと作ってみてたんだ。だけど、やっぱりちょっと難しいな。そもそも、僕には魔力が見えないから、確かめようにも確かめられないし」

レオンは不意に思い付いた提案をしてみる。なるべく悟られないように、自然な感じを心がけた。

「だったら、誰か町の人には頼んでみたら? 魔法が使える人がいるはずだし」

その提案にも、ニコルは浮かない顔のままだった。

「あんまり頼みたくないなあ。もしかしたら、魔法が爆発するかもしないし」

「でも、もし成功したら、凄い事だよね?」

「そうでもないよ。魔力を利用した装置なら、同じ様な物が結構あるから」

「そうなの? そつか・・・」

それ以上の言葉を思い付かなくて、レオンは口を閉ざした。勧誘失敗。

そこで、鈴が転がるような音がする。

音の方を見てみると、長い黒毛のカーバンクルが床に散らばった金属の球のような物を転がして遊んでいる。遊んでいるというより

も、その物体の丈夫さを確かめているような、慎重な手つきだった。その妖精が不意にこちらを向く。闇そのものの様な漆黒の中に、アメジストの様な瞳が輝く。

「クロ。 おいで」

ニコルが身体を起こしながら呼ぶと、クロはそちらに悠然と歩いて行つて、膝に飛び乗つた。

頭を撫でているニコルも、撫でられているクロも、同じように頭を細める。

その微笑ましい光景にレオンも口元が綻ぶが、心はすつきりしない。

ここに訪問するのは6度目だが、このガレージに、ニコルとクロ以外がいた事は一度もない。それとなく聞いてみると、ニコルはあつさりと、他には誰も来てい事を認めた。寝食をする時はさすがに家に帰るらしいが、それ以外はずつとこのガレージで、1人と1匹。たまに、酒場のベティや道具屋のラッセルが訪ねて来る事もあるらしいが、その頻度もかなり少ないらしい。その理由は簡単で、ニコル自身が、研究の邪魔だからと言つて追い返すかららしい。

ニコルは自分で周りから距離を取つている。

これはベティの評価である。最初に訪問した時の嘘泣きは、人を追い返す時の常套手段であるらしい。他にもいろいろな手があるらしいが、結局は、わざと相手に嫌われようとしている。その結果が今の環境らしい。ベティは昔のよしみがあるから、ラッセルはたまに資材を運びに行くから、そして、レオンは仕事相手だから話して貰えるらしいが、他の人ではこうはいかないという事だった。

自分でこしらえた孤独。その中にいるニコルは、傍目には寂しそうには見えない。

もしかしたら、本当に寂しくないのかもしれないとベティは言っていた。そういう一般的な感性の持ち主ではないらしい。だけど、付き合つて日が浅いレオンには、そう簡単に受け入れられる話ではなかった。

きつと寂しいに違いない。だから、何かのきっかけで外に出て欲しい。

そう思つて、それとなくいろいろ誘つてみてはいるのだが、今のところ、上手くいく気配は全くない。元々レオンは口が上手くない。もつと口が上手いはずのベティだつて試したはずなのだ。それでも上手いかなかつたわけだから、難敵なのは間違いない。

そんなこんなで、訓練が終わつた後に毎日のように訪ねてはいる。その結果、二コルには変化はないが、レオンの鍵開けの技術はメキメキと上達してはいた。もちろん、悪いわけはないが、素直に喜べないところである。

「それで、その鍵開けられたんだよね？」

いつの間にか田の前にいた二コルに、レオンは仰け反るほど驚いた。

「近づ……」

その驚きよう、二コルは頬を搔きながら苦笑する。頭の上にはクロが乗つていて、薄紫の双眸がなければ、完全に髪の毛と一体化していた。

「レオンも、僕の気配くらいは感じられるようになつて欲しいなあ。その調子だと、不意打ちとかで大怪我しそうで心配なんだけど」確かに、今不意打ちされいたら、大怪我どころではなかつたかもしけれない。

「そうだよね……ごめん」

「まあ、僕で慣れてもらつたらいいよ。それで、その鍵は分かつた？」

「あ、うん」

二コルは腕を組んで、関心したように何度も頷く。だけど、見た目は子供なので、威厳は全くなかつた。

「レオンは勉強熱心だよね。あと、手先もそこそこ器用だし」

「そ、そつかな？」

「冒険者よりも、怪盗とかになつてみたら？」

あまりにさりげない口調だつたため、一瞬頷きそうになつた。

「・・・いや、そもそも、そんな職業あるのかな」

「スニークは元々泥棒だったんだよ。悪い奴からしか盗まなかつたとかじやなくて、大金持ちから手当たり次第に盗んでた大泥棒」

レオンは知らなかつた。そして、聞いた瞬間に、出来れば知りたくなかつたと思つた。伝説の冒険者の功績が、少し霞んだような気がした。

「・・・だけど、結局偉大な事をしたから、伝説になつたんですね？」

「さあ・・・僕はその頃の記憶は知らないから」

ニコルは少し首を捻つてそう言つた。らしくない、不自然な動作だつた。何か前世の記憶で気になる事があるのだろうか。

「それよりも、その鍵が済んだつて事は・・・そつか。基本はそんなところだね。あとは応用すれば、大抵の鍵はなんとなるよ。普通の鍵は、だけね」

「普通じゃない鍵つて？」

「ダミーの鍵とか、特別な加工がしてある高級な鍵とか、魔法の鍵。あとは、錆び付いて開かなくなつた鍵とか」

「なるほど」

凄く具体的だつた。経験が相当あるのだろう。

「とにかく、あとは経験あるのみ。というわけで、これから毎日、夜な夜な・・・」

レオンはそこで言葉を遮つた。

「・・・泥棒の真似事は遠慮します」

ベティ情報によれば、ニコルは練習と称して、町中の家の鍵を開けて回つた事があるらしい。

そんなレオンの反応が可笑しかつたのか、ニコルは軽く笑いながら言つた。

「冗談だよ。僕が集めた鍵があるから、それを持って帰つて練習したらいいと思う。あとは、まあ、ダンジョンで余裕があつたら、必要な鍵でも開けてみたらいいよ。もちろん、罠がなかつたらだけ

「ど

そこでレオンはかねてからの疑問を尋ねてみる事にした。

「あの、前から気になつてたんだけど

「何?」

「こういう鍵開けの技術つて、ダンジョンで必要なの?」

冒険者といえば、戦闘のイメージしかなかつたレオンである。二コルの回答は無関心そのものだった。

「さあ」

「さあつて・・・」

「だつて、僕、ダンジョンに行つた事がないし」

「それはそうだけど」

「とりあえず、ラッセルの店で解錠用のツールが売つてゐるから、鍵があることはあるんだよね。だけど、例えばドアとか檻とかだつたら、壊して通る事も出来るし、魔法で開ける事だつて出来るから、まあ、他のメンバー次第なんじやないかな」

「他のメンバー・・・」

今のレオンにとって、それは最大の懸念だつた。

「もしかして、まだ仲間がいないの?」

ズバリ尋ねられて、レオンは答えに窮した。だが、それで十分答えになつていた。

二コルは特に表情を変えずに、あつさりと言つた。

「だつたら、覚えておいた方がいいよね

「え?」

「だつて、レオンは魔法が使えないし、壊して通るほどの力もないし。火薬とか使って吹き飛ばす手もあるけど、水氣が多いと使えないし、数に限りがあるわけだから、出来るなら取つておきたいしね」とても論理的だつた。きつと正論である。

だけど、1人でいる事をあまりにあつさりと想定しているから、それが気になつた。

クールとかドライとか、そういう風にもとれる。もしかしたら、

これがニコルの強さだと言う人だつているかもしない。身体は小さいけれど、頭も技術もある。強い敵がいたら隠れる事が出来る。不意をつく事だつて出来る。

まるで、一人でいるために培つてきたような能力。

レオンはやつぱり、少し寂しいと思った。ニコルが寂しそうじゃないから、そして、ベティが寂しそうだつたから、その両者を知つてゐるレオンは、その対比が余計に寂しい。

でも、これは結局、レオンの印象でしかない。

ニコルの心の中は分からぬのだ。ここ数日通い詰めた程度では、分かる方がおかしい。

だが、もし分かつたら、何か変えられるかもしだれない。

相手を理解する方法がないだろうか。

そこで、レオンは思い出す。つい先日の、訓練所でのアレンさんの言葉。

良い手かもしれない。

「ニコル」

突然レオンが表情を明るくしたので、ニコルは訝しだのかもしない。少し顔を傾けて聞いた。

「何？」

「僕に何かガジェットを作つてくれない？」

ガジェットというのは、ニコルが作つてゐる怪しげな装置の事だ。それが一般名詞として広く定着してゐる物なのか、それともニコルが勝手にそう呼んでゐるのかは知らないが、今はそんな事はどうでもいい。

レオンの言葉を聞いたニコルは、文字通り目を輝かせていた。

「本当！？いいの！？」

言い出したのはレオンの方だが、その喜びよつて、思わずたじろいだ。

「う、うん・・・」

「うわあ！嬉しい！本当は、いつ言い出そうかつて思つてたくらい

なんだ！だけど、やつぱりここからは頼みにくいでしょ？頼みにいいんだ。頼みにいいんだよ、これが」

何故か繰り返されたので、レオンは気圧されて頷く。

「そ、そっか」

「そ、うなんだよ！だけど、もう、レオンから頼んできたからには、断るのは筋違いつてものだよね！もう、任せて！使いやすくて、威力がばっちりな奴を用意してみせるから！どうせ、レオン以外は全て敵なわけだしね！木つ端微塵にしてみせるよ！」

自分は木つ端微塵にならないだろうか。それが果てしなく心配だつた。

「出来たら、もう少し大人しいのでも・・・」

「そう？あ、そうか。レオンの戦闘スタイルがあるよね。分かつて分かつて。レオンはどうせ、重い鎧は無理でしょ？武器はどうするの？あ、投げナイフだけ？」

「そ、そうだね。あと、軽めの剣も作ってくれてるみたいで」
これはアレンさんと、それからデイジーの提案だった。スローアングダガーだけだと臨機応変さに欠けるというのである。武器訓練の専門家であるアレンさんの意見はもちろん、何故か剣に関して尋常ではない知識があるデイジーのお墨付きまである。それを鍛冶屋のリティアに相談してみたら、あっさり承諾してくれたのだ。

二コルはレオンの左腕を見る。そこには、バックラーが取り付けてあるまだ。重さに慣れると、普段からつけて歩いている。最初は恥ずかしかつたが、すぐに慣れてしまった。

「要是、軽い剣と飛び道具だね。なるほどなるほど。うん。任せて！特に、左手が使えるわけだから、どうにでもなる。うわあ！・・・。楽しみ！絶対凄い奴を用意しておくから、任せてよ。本当に、威力だけは保証するから！」

少し前のレオンの言葉は、綺麗さっぱり忘れていた。

だけど、本当に嬉しそうな二コルの表情を見ていると、何か言う

気が失せてしまった。

ただ、ニコルが作った物を通してなら、作った本人の事が分かるのではないかと思つただだつた。アレンさんが、剣を通して自分の事を知ろうとしてくれたように、話す以外の事で、知ろうとする方法があるような気がした。その為のアプローチのつもりだったのだ。まさかこんなに喜ぶとは思わなかつたけれど。

でも、もちろん、悪い気はしない。

ニコルの表情につられるように、レオンの表情も笑顔になる。

ただ、漆黒のカーバンクルだけが、ニコルの頭上で眠そうに大欠伸をしていた。

酒場の喧噪。

20以上あるテーブル席は、相当な場数を踏んでいると思われる熟練の冒険者達でほとんど埋まっている。彼らには昼夜の境といったものは曖昧なようだ。まだ昼間と言えるこの時間でも、既に何本もの酒瓶を転がしているテーブルが多い。それぞれが、次の行き先、戦術の見直し、あるいは単に世間話等、思い思いの事を話している。硬い岩を削っているような荒くれ者達の声が屋内を支配していた。だが、そんな喧噪も、今のレオンの耳には入らない。

いつものカウンター席。

レオンの全神経は、田の前の小さな金物に注がれていた。細長い針金越しに伝わってくる内部の構造。外面の滑らかな金属盤からは想像も出来ないが、中身は精巧かつ緻密そのものだ。かれこれ數十分程こつししているが、あまりに複雑過ぎて、頭の中で上手く構造を想像出来ない。恐らく、そう意図された構造なのだろう。何かに書き留めながらならもつと効率があがるかもしれないが、まだ練習の段階だから、出来るだけ楽をしたくはない。

そうして完全に没頭していたレオンの後頭部を、突然硬質な円盤が襲つた。軽く音が鳴る程度だったが、頭の中で少しずつ積み上げていた内部の想像図がどこかに雲隠れしてしまつた。

「あー・・・」

一度忘れたものは、思い出そうにも容易には思い出せない。情けない声を出すレオンに、明るい少女の声が飛ぶ。

「レオンー。あんまり熱中すると、今に飢え死にするよー」

聞き慣れた声に体を捻つて振り返つてみると、案の定、そこには見慣れた栗色のポニー・テールと瞳の少女が笑つていた。

ここ、ガレット酒場の看板娘のベティである。多少元気過ぎる女の子だと思っていたが、この酒場でお世話になつていいからなのか、怖いことに、レオンは既に幾分慣れ始めている。

彼女はレオンの前に左手に載せていたお盆を置く。レオンの昼食である。今日は鳥のようだ。皿いっぱいの肉の片隅に、熱を通した野菜が数種類だけ、申し訳程度に顔を覗かせている。

「あ、ごめん・・・ありがとう」

ベティはまだ右手にお盆を載せている。さすがに手慣れた様子で、そうしていると、れっきとしたウェイトレスなんだと思い知る。レオンはふと店内を見回した。テーブルの一角では、店長のガレットが、顔馴染みらしき大男と悪態をつき合っている。顔が笑っているから、そういう「ミミコニケー・ショーン」なのだろう。彼の両手にも料理を載せたお盆があるから、ちゃんとした仕事中である。

「なんだか忙しそうですね」

「まあねー。雨が降つてると多いんだよ。やつぱり、どうせ行くなら晴れの日がいいんじゃないかな」

雨だと移動が困難になるし、火に関連した道具が使いにくくなる。日が選べるのなら、雨の日は避けたいものなのだ。

意識を屋外の方へ向けてみる。喧噪の陰につつすらと、雨が地面を叩いているのが分かる。

レオンはイスから立ち上がった。

「僕も手伝います。忙しそうだし」

ベティは少しだけ瞳を大きくしたが、すぐに可笑しそうに笑つた。

「あんまり手伝つてばかりいると、本当にうちの店員になるよー」

冒険者を目指している身としては笑えない冗談だったが、お世話になつてている身分もあるから、何もしないわけにはいかない。それに、レオンには別の目的もある。

「大丈夫です。それに、やつぱり聞いておきたいので」

その言葉に、ベティは少しだけ笑みを引つめた。

「聞いても無駄だと思うよ。みんなベランだと思うし」

「ダメもとですから。どちらにしても、手伝いますよ」

そういうわけで、レオンは酒場の仕事を手伝つた。

手伝うと言つても、出来た料理を運んだだけである。これまで、特に忙しそうな時は手伝つ事があつた。元々、接客するのは店長とその娘の2人だけ。たまにベティがいない事もあるくらいの、要は、あまり忙しくない酒場なのだ。

それでも、今日のような雨の日は、普段より忙しい傾向があるようだ。もつとも、店員はそれを気にする様子はない。注文が遅れるのはあるが、たまに注文を忘れている事もあるくらいの、良く言えばおおらかな、悪く言えば仕事がぞんざいな店なのだ。どこで忙しくするかを自分達で選んでいるとも言える。

だから、別にレオンが手伝わなくとも、ガレットとベティが困る事はない。だが、お客様の方から無言の圧力がかかっているような気がして、どうにも落ち着かない。じつとしているよりも、働いている方が、ずっと気が楽なのだ。

それに、レオンにとって、他の冒険者と接触する事には大きな意味がある。特に、今日は雨の為かお客様が多い。いつもよりわずかながら期待が大きかった。

その期待も、見事に砕け散つたわけだが。数十分後には、落胆した表情でカウンターに突つ伏しているレオンの姿があつた。

「だから、無駄だつて言つたのにー」

隣に座るベティがこちらを見もせずに言つ。彼女の手には、レオンが挑戦中だつた錠前と解錠ツールがあつた。鍵穴に針金を突つ込んで力チャ力チャと動かしているが、恐らく適当にいじつているだけだろう。

「いいんです。僕が諦めきれないだけなので・・・」

力なくそう言つと、そこでカウンター奥の扉からガレットさんが出てくる。昼食後の片づけが一段落したのだろう。相変わらずの山男の様な肉体の上に厳めしい顔が乗つているが、その表情もどこか

困っているように見える。

カウンター内のイスに腰掛けるなり、彼はレオンに言葉をかける。

「無駄だと言つてるだろ？」「

数秒前に聞いた台詞だった。

「・・・ガレットさん、ベティさんと同じ事言つてます」

気まずそうな父親に対し、娘の方はくすくすと笑つてい。

咳払いしてから、ガレットは諭すように言つた。

「だがな。無駄なのは確かなんだよ。今この店にいる連中は、とうの昔に見習い冒険者を卒業して、魂の試練場どころか、この町の外にある、20階層は下らねえって噂のダンジョンに挑戦しようつて奴らばかりだ。そんな奴らにお前みたいなひよつこか混じつたところで、最初のモンスターの餌になるのがオチだ。間違つても何かの役に立つわけがねえし、いたら邪魔なだけなんだよ。一時的にでもパーティを組んでやるなんて奴がいたら、そいつはよっぽどの大馬鹿か、妙な下心があるかのどちらかだ。この酒場内にそんな奴がいたら、今頃俺が直々に、そいつが正氣かどうか確かめてるだろ？ よ」

「それは分かつてはいるんですけど・・・」

ベティがそこで割り込んだ。声色を変えて、尊大な口調で言つ。

「分かつてるなら、つべこべ言わずに、とにかく実力をつける事だな。そうすりやあ、仲間なんざ自然とついてくる。とにかく食え！ そして鍛えろ！ 身体が弱い奴は冒険者とは言えねえぞ！」

最近の彼女のマイブームなのか、父親の物真似である。気のせいか、前よりも完成度が高い。

そこで本人が低い声で娘をたしなめる。

「ベティ。今、真面目な話をしてんだよ」

だが、素直に引き下がるベティではなかつた。錠前をいじりながらではあるが。

「真面目に言わせて貰うなら、お父さんにも責任あると思うな。レオンの前に来た見習いを残らず追い返したのはお父さんでしょー

？」

ガレットは片眉を上げた。

「何でそれが関係あるんだ？」

「もし追い返してなかつたら、レオンの仲間だつたかもしれないじゃない？」

「そりや そうだが、あれはもう去年の秋だらうが。もう半年になる。仮にまともな奴だつたとしても、レオンとはもう実力差が出来ちまつてるだらうよ」

そこでレオンは顔を上げた。

「という事は・・・もしかして、今年来たのは、僕が初めてなんですか？」

自分の前に来た見習いが去年の秋ということは、冬になつて、年を越してから来た人間はいないという事になる。

ガレットはどこか遠い目をして言つた。

「そうだな・・・よく考えりや、早いとは思つたんだよな」「え？ 何がですか？」

答えたのは、隣のベティだつた。

「レオンが来たのつて、山奥の方からでしょ？」

「え・・・あ、はい。そうですけど？」

「だからまあ分かるんだよね。冬が終わつたつていうのが。だけど、低地から来る人達は、いつ冬が終わつたかなんて知らないから、もうちょっと暖かくならないと来ないんだよね。まだこの辺りは雪が積もつてると思つてる人もいるんだつてやー。特に、遠い所から来ようつて人は尚更分からぬから、この時期に来る人はあんまりいないんだよ」

移動するにしろ訓練するにしろ、選べるのなら雪がない方がいい。この店にいる人達が、雨が降つていらない方がいいと考えると同じである。ずっと山奥で過ごしてきたレオンにとって、低地との季節のギャップに驚くばかりだが、その考え方 자체はもちろん理解出来るものだつた。レオンだって、山を降りる為に春になるのを待つてい

たくらいなのだ。若干フライング気味ではあったけれど、それは、たまたま行商の人々が村に来ていて、親切にも乗せてくれたからである。

「ということは、見習い冒険者が来るのは、これからが本番って事ですか？」

それならば、これから仲間が見つかる可能性だつてある。

酒場の父娘は、2人ともこちらを見ないままに、同時に答えた。

「俺の目に適う奴だつたらな」

「お父さんに追い返されなかつたらね」

全く同じ意見。

父娘は一瞬だけ視線を交わしたが、すぐに目を逸らした。仲がいいのか悪いのか、よく分からぬ。

それは置いておく事にして、レオンはこれからこの町にやつてくる見習い冒険者の事を考えてみる。自分と同じようにまずギルドに行き、そしてこの酒場まで来て面接される。だが、レオンにしてみれば、それは何の障害でもない。なにせ、自分だって大丈夫だつたのである。これ以上低いハードルはないとすら思える。

「それなら、焦る事はないですね」

その言葉が、まさにレオンの結論だった。

いつの間にか笑顔になつている見習い冒険者を見て、酒場の父娘は顔を見合わせた。どこでそんな結論になつたのかは分からぬが、問題はなさそうだし、別にいいか。そんなお互の考えを確かめ合つたのだろう。今度もやはり、視線を交わしていたのは一瞬だけである。

「まあ、そうだな。せいぜい頑張れー」

またベティによる口真似である。そう言いながら、いじつっていた錠前とツールをレオンの前に置いた。もちろん、解錠出来ていない。

ガレットは、そんな娘に冷ややかな視線を送つていい。

「頑張ります」

レオンはそれを手に取る。これを解錠するのが、今日の目標だつ

た。

「でもセー、レオンは一体何を田舎してゐるわけ?今やつてゐる事といえば、食べて身体を鍛えて、泥棒の訓練をしてるだけでしょ?」

「言ひ方は良くないが、内容は概ね間違つてない。」

「ええ、まあ・・・泥棒に師事してゐるわけじやないですか?」

「もつと武器の訓練とかしなくていいの?」

「してますけど・・・あんまり深く聞かないで下さー。」

「聞かれると、お嬢様であるデイジーの隠された一面に触れなければならぬ。もちろんベティは既に知つてゐるだろ?が、なんとなく、口にしにくい事柄なのだ。」

「武器はスローイングダガーとショートソード。盾がバックラー。まあ、ある意味でオーソドックスではあるな。初心者向きの装備じやねえが」

ガレットがレオンの身体を見ながら言つた。彼が口にした装備を、レオンは今も身につけてゐるのである。重さに慣れるためだが、防犯の意味合いも強い。部屋に置いておいて、なくなつていたら困る。「威力なさそうな装備だよねー。ハンマーとかにした方がいいんじゃない?」

「・・・ベティさんはハンマー好きですよね」

「武器ならなんでも好きだよー」

「・・・ですよね」

あまり聞きたくない話である。

「どうか、その鍵にしたつて、そんないちまちまするより、扉を壊した方が早いんぢやない?」

ベティがレオンの手の中にある物を見ながら言つた。確かに、二口ルも同じような事を言つていた。

「そうですが、鉄製の扉とかだつたら、壊せないかもしれないですし」

「そつちだつて、鍵穴がなかつたら手も足も出ないわけでしょ?」

「ですね・・・両方出来るのが一番いいんでしょうけど」

「そりいえば、レオンは罠の解除とかは留つてないの？」

「レオンの手が止まつた。

「・・・罠つて解除出来るんですか？」

真顔で聞くと、ベティはこちらの顔を見たまま停止した。それを見て、そりやら常識だつたらしいという事を思い知る。この町に来てからというもの、自分が世間知らずであるという事を思い知られる事が多々あつた。

だが、さすがと言つべきか、ガレットさんは、口元に余裕の笑みを浮かべていた。

「罠の解除は素人には荷が重い。身に付くまで結構時間がかかるんだよ。だから、とりあえずつて事で、先に鍵の解錠から教えてるんだろうよ。鍵はコツさえ掴めれば簡単だし、レオンみたいに、力も魔法もない人間には必要な技術だ。それに、罠の方は解除しなくてもなんとかなる場合も多いからな」

「なんとかなるんですか？」

レオンはすぐに聞いた。これからダンジョンに挑戦する身なのだ。知つておける事ならば何でも知つておきたい。

ガレットは笑みを浮かべたまま答える。

「とりあえず、最低でも、罠に気づけねえと話にならねえけどな。だが、気づいたならまづ、その場所を通らねえつてのがひとつ。だが、どうしても通らざるを得ないつて場合もある。その場合一番簡単なのは、わざとひつかかるつて事だ」

首を捻る。

「・・・ひつかつたらまづくないですか？」

「お前自身がひつかかるんじゃねえ。例えば床を踏んで発動するような罠だつたら、そこに重い物を投げてみるとか、扉に触れたら危なそりだつたら、遠くから弓矢で射るとか、要は、罠が発動しても安全な場所にいるつて事だな。具体的には、なるべく遠くから発動させるんだ。罠が解除出来ない人間は、大抵そういう手を使つてる」

「へえ・・・」

いちいち感心しているレオンに、ガレットは不思議そうな顔で聞いた。

「どうか、お前、元狩人なんだろ？ 犀とか使った事あるんじゃねえのか？」

「え？ ……いや、あんまり」

実際、レオンの父親はほとんど犀という物を使わなかつた。だから、レオンもそれが普通の狩人だと思っていたのだ。

レオンはそこで重要な事を思い出した。

「あ・・・」

思わず発してしまつた声に、ベティが食いついてくる。

「どうしたの？」

「はい、まあ・・・」

正直、忘れていた自分がなんとも情けない。自分で自分に呆れたが、それはともかく、今思い出せたのだから、忘れないうちに言つておかなければいけない。

「ベティさん。ちょっと頼みがあるんですけど」

彼女は真顔で言った。

「寝室に犀を仕掛けて欲しいとかー？」

もし頼んだら、命に関わる犀を用意されそうな気がする。

レオンはなんとか平静さを保ちながら、真面目に答えた。

「違います。あの、アレンさんから聞いたんですけど、ベティさんも狩人なんですよね？」

ベティは一度瞳を瞬かせてから、軽く頷いた。

「そうそう。それがどうしたのー？」

「アレンさんが言うには、ベティさんの師匠のホレスさんって人が、凄い腕の狩人だとか」

「うん。何？もしかして、決闘してみたいとか？」

「この少女の頭の中は、やはり偏つているようだつた。

「そうじゃないです。僕の戦い方の参考になるんじやないかって言われたので、出来たら会つて話をしてみたいんですけど、僕でも会

つて貰えるでしょつか？」

「レオンの戦い方？うーん……」

いつも即断即決のベティにしては珍しく、何かを思案している様子だった。

「あの・・・無理にとは言いませんけど」

ベティはそこで腕を組んで、少し首を傾ける。

「余つのは簡単なんだけねー。ただ、レオンの参考にはならないかもよ？」

「え？ そなんですか？」

「とりあえず、ホレスは剣を使えないと思うし」

予想外の情報である。どんな武器でも使ここなせるような猛者を想像していたのだが。

「使えないんですか？」

「使えないと思つなー。ホレスつていえば、とりあえず『』なんだよね。あと、笛」

2番目が既に武器ではない。いくつもの武器を使いこなすのが理想とされた自分とはかけ離れたスタイルに思える。

レオンが首を捻つていると、ベティが笑顔に戻つて屈託なく聞いてくる。

「どうするー？ とりあえず、『』の腕だけは確かだけど

「『』の腕・・・」

戦闘スタイルはともかく、『』もいはずれは練習しなければならない。それならば、アドバイスのひとつも欲しいところだが、まだ『』は素人同然の自分が突然行つたら、迷惑ではないだろうか。

そこでガレットさんの一押しがあった。

「どうした？ とにかく行つてみろー！ ひよつこが遠慮するもんじゃねえぞ！」

レオンは頷いて、ベティに向き直る。

「迷惑じゃなかつたらですけど、今度ホレスさんに会わせて貰えないですか？」

彼女はあっさり頷いた。

「いいよー。今から行く？」

「なんというか、本当に躊躇しない女の子なのだ。

「今からはちよっと・・・」

反射的にそう言つたレオンに、ベティが少し笑つた。

「雨降つてるしねー。じゃあ、明日？」

「そ、そうですね。明日晴れてたら」

「りょーかい。というわけで、お父さん明日休んでいい？」
その言葉に、レオンは自ずと氣付かされた。

「あ、すみません・・・お店が忙しい時に」

だが、ガレットは笑つて答える。

「さつかも言つたろ？ひよつこが気にするんじゃねえ！分かつたか！？」

「は、はい！」

その返事に一笑を返して、今度は娘の方に視線を移す。若干眼が据わっていた。

「ベティ。いい機会だ。この間のけりをつけてーーー。」

「はーい」

返事はこれ以上ないくらい軽い。

何事もなく話がまとまつたようだが、当然と言つべきか、レオンは気になつた。

「・・・」の間のけりつて「何ですか？」

父娘はまた視線を通わす。また何らかの意志疎通があつたようだ。

「まあ、来たら分かるよー」

ベティは自然にそう言つたものの、ガレットは、こちらから目を逸らして何も言わなかつた。何か後ろ暗い事があるのだろうか。それにしたつて、滅多にない振る舞いである。

あからさまに様子がおかしい。

「・・・何か隠してませんか？」

「そうだ。レオンつてさあ・・・」

ベティの言葉は続かない。無理矢理話題を変えようとしつこるのが明らかである。

「・・・絶対隠してますよね？」

「隠す程の事じやないよー」

「だったら話して下せー」

「でも・・・」

そこでちらりと、父親の方を見た。また例の意志交換である。

ベティの表情に陰が差す。

「・・・聞いたら、レオンはどうなるかな」

声のトーンが暗い。いつも明るいだけに、より顕著に感じられた。よく分からぬ。分からぬけれど、レオンは閃いた。罷かもしれない。罷というか、深入りしたら危ない。避けよう。

そういう判断が、瞬時に採択された。

「そ、そういうえば、ホレスさんってどんな人なんですか？会う前に、少し聞いておいた方がいいですよね！」

必死の話題転換である。自分でも分かるくらい、不自然に明るい。だが、とりあえず罷は避けられたようだつた。ベティが元の笑顔に戻る。

「ホレスはまあ、変わり者だよね。でも、私は好きだなー」
なんとも軽い好きだつた。少なくとも、レオンが慌てないで済むくらいの軽さである。

「そうなんですか。良い人つて事ですよね」

「そうだねー。あと、さつきも言つたけど、『「と笛が上手」
』はもちろんんですけど、笛も教わつてみたいですね」
「そつかー」

ベティにしては短い台詞だつた。

彼女は、しきりに首を捻つてゐる。

「・・・どうかしました？」

「うーん・・・なんか、まともないよね」

「何がですか？」

「笛が上手で、鍵開けも上手い。なんだそれーって言われそう」「悲しい事に、自分でもそう思った。

「・・・とりあえず、弓の方を優先で」なるほど。戦闘系がないとしまらないものだな。その日最後に得たのは、そんなどうでもいい教訓だった。

ファースト・エンカウント

自治都市ユースアイは、レオンの故郷の村程ではないものの、十分に丘陵地と言える場所にある。

レオンには低地でも、一般的な感覚からすれば高地。夏には避暑地として観光に来る人もいるらしい。周囲はなだらかな平原が広がっているし、未踏破ダンジョンとも距離があるから、モンスターがうろついている事もほとんどない。北から西にかけては大山脈の一角が占めていて、そこで育まれた大自然の実りと、天然の防衛網の恩恵を得ている。少し東に外れた場所には、大きな湖があつて、景観はもとより、水資源の宝庫でもあるらしい。ただ、春や秋には、湖に流れ込む川が氾濫する事が多々あるらしく、それを避ける為に、少し離れた今の位置に町が形成されたという事だつた。

まだこの町に来て2週間程だが、住みやすい町だと思った最初の印象は揺らぐどころか、疑いのない確信となつていて。自然環境に恵まれた町なのは間違いないし、そこで生活する人々も、その豊かさを象徴するように、気質が穏やかな人が多い。レオンの村の人々も気性が荒いわけではないのだが、やはり育つた環境そのままで、厳格で逞しい人が多かつた。そんな中でも、レオンの家族は例外で、よくほんやりしていると言わたるものだが、この町ではそれほど浮いているわけではない。もちろん、田舎者で世間知らずなのは否めないけれど。

そんな穏やかな町だから、防衛の為の施設がほとんどない。せいぜい獸がやつてくる程度の事しかないのだろう。町の周囲には簡単な木製の塀があるだけ。門には警備の人間が一応立つていて、申し訳程度に槍を立てかけているだけである。訓練所のアレンさんが警備と教師を掛け持ちしているのも、きっと警備だけだと暇過ぎるからだろ？。言わば、警備員というかボランティアの自警団なのだ。

そのボランティアの警備員に、隣を歩くベティは慣れた様子で声をかける。普段は雑貨屋で働いていそうな、荒事とは無縁そうなお兄さんである。もしかしたら、一番重要な仕事は、ここを出入りした人間を覚えておく事なのかもしれない。腕つ節はともかく、記憶力ならば期待出来そうだった。

レオンとベティは、並んでコースアイから出て行くところだった。方角は西。畑や放牧地の横を抜けながら、短い草の生えた道を歩く。昨日は雨が降つたが、歩きにくいほどはぬかるんでいない。近くには木々がほとんどない為、これ以上ないくらい見晴らしがよかつた。

右手には険しい山々。まだほんの少し雪が残つているようだ。左手には平原が続く。それが途切れた先には山々が見えるが、あまり高いようには見えない。もしかしたら、レオン達が立っているこの場所の方が高いのかもしれない。

2人の目的地は、この町の郊外にあるといつウイスキーの蒸留所だった。元々は、ベティの母親の両親の物だったらしいが、今管理しているのはベティの父親のガレットである。

「そういえば、どうしてわざわざ町の外に作ったんですか？」
急に思いついたので、レオンは聞いてみる事にした。

ベティがこちらを向く。いつものブラウンの瞳とボニー・テール姿だが、今日はエプロンではなく、シャツの上に長袖の上着、そして薄汚れたズボンを履いている。完全に作業用のファッショնだった。そして、背中に矢が詰まつた矢筒を引っかけている。弓がないから危険はないはずだが、彼女が持つていると、なんとなく不安になる。かく言つレオンも、同じ物を背負わされていた。結構重いが、苦になる程ではない。

「水がどうとか、湿度がどうとか、要はそういう事らしいよ。」
「わりの銘酒なんだって」

「なるほど・・・」

レオンは頷く。場所にまでこだわって、味を追求したという事だ

るつ。

「一応、ちょっとしたブランドリージュ。少しだけだけど、遠くからも取り寄せの注文があるくらいだから」

彼女はいつもの口調だったが、恐らく、そんなにありふれた事ではないはずだ。

「・・・あの、それって凄い事だと思つんですけど」

その言葉にも、ベティは少し首を傾げるだけだった。

「そう?でも、私は小さい頃から飲んでるから」

小さい頃からというのも極端な話だが、何を隠そう、レオンも小さい頃からアルコールを飲んでいた。お湯で何倍にも薄めた物だが、極寒の冬を越す為の生活の知恵である。

「そうですか・・・さすが酒場の娘という感じですね」

「そうだねー。お陰で今だと何杯飲んでも平気だよ」

「・・・あの、子供の頃からっていうのは、もしかして、薄めないで飲んでたんですか?」

ベティは当然といった様子で頷く。

「当たり前でしょー?もしかして、レオンはお酒だめなの?」

「アルコールに強い弱いはともかくとして、コースアイには飲酒の年齢制限はないんですか?」

ちなみに、レオンの村にはなかつた。だけど、普通はあるものだと聞いていたのだ。

「あるよー」

「あるよーって・・・いくつからですか?」

「16歳以上」

「・・・ベティさんの小さい頃つていうのは、もちろん16歳未満ですね?」

「そうそう」

「それって・・・どう考へても法律違反じゃないですか?」

そこでベティは微笑む。微笑みというには、邪過ぎる表情だったが。

「ばれたらしょうがないよねー」

「いや、しょうがないって・・・」

たじろぐレオンだったが、ベティはすぐに表情を緩めた。

「まあ、本当の事を言うと、法律違反じゃないんだよ」

「え？ そうなんですか？」

ベティは得意げに頷く。だけど、すぐに少しだけ目を細めた。

「私が子供の頃にはね、私のお母さんのお父さん、つまりお祖父さんがまだ生きてたんだ。そのお祖父さんがウイスキーづくりを始めた人なんだけど、よく仕事場まで遊びに行つてたんだ。それで、まあ、お祖父さんは優しい人だつたんだけど・・・なんていうのかな、押しに弱い人だつたんだよね。孫が可愛かつたんだと思うけど」

レオンには、おぼろげながらも話の展開がよめた。

「まさか・・・ウイスキーを飲ませて欲しこりで言つたんですか？」

頼む方も頼む方だが、飲ませる方も飲ませる方である。

「そうなんだー。あの時のウイスキーは美味しかったな・・・きっと、孫娘への愛情がたっぷり詰まっていたからだよね」

美談みたいな言い方だつたが、もちろんそんなわけがない。

「あの、ベティさん」

「何？」

「結局、16歳未満でお酒を飲んでるわけですから、法律違反です
よね・・・？」

ベティは右手の人差し指を立てて軽く振る。

「それが違うんだよ。私がお酒を飲んだのは、蒸留所の中でしょう？」

「・・・それがどうかしたんですか？」

「あそこはユースアイの法律の適応外なんだよ」

それだけ言われても、レオンにはさっぱりである。

「・・・えつと、すみません。もう少し詳しくお願ひします
うーん、私もあんまり詳しくないんだけど

「そこをなんとか」

「じゃあ、だいたいでいくねー」

彼女は右手の人差し指をぐるぐる回し始める。何の意味があるのかはよく分からない。

「自治都市つてだいたいの事は自分で決められるんだけど、一部だけ、国に認可して貰わないと作れない物があるんだって。たぶん、鉱山とか河川の開発とか、要は資源系だと思つけど」

「へえ・・・」

話が大き過ぎるので実感がわかないが、そういうものなのかもしない。

「だけど、どういうわけか、お酒に関する施設も国の認可がいるんだよ。なんか、大昔にお酒が原因で争いみたいのがあつたらしくて、今の国になつてからも、お酒に関する事は徹底しようつて事になつたんだって。歴史に学んだつて事だと思うけど・・・あ、歴史の話ならディイジーが詳しいから、興味があつたら聞いてみたら?」

「えつと・・・あ、はい。機会があつたら?」

正直、興味云々の前に、お酒で争いが起きたという史実を想像するのすら難しい。どんな状況になつたら、お酒程度の事で、そんな深刻な事態になるのだろうか。

ベティは、回していた指を下ろして、話を続ける。

「そういうわけで、お酒関連の施設は全部国の管理下にあるつて事になつてるんだよね。だから、自治都市の管理内でも、蒸留所内は国の法律優先なんだ。それで、この辺りは、国の区分では寒冷地つて事になつてるんだよ。そして、もっと寒い山奥の方では、冬場に身体を温める為に子供にもアルコールを与える習慣があるから、寒冷地には特例が適応されてるんだって。レオンの村でも、普通に子供の時からアルコール飲んでたでしょ?」

「あ、はい」

「国の区分だと、コースアイもレオンの村と同じつて事になつてるんだよねー。まあ、低地の人から見たら一緒なのかも知れないけど、コースアイは結構新しい町だし、低地から来た人も多いからそんな習慣はないんだ。だから、コースアイの法律では普通に16歳まで

飲酒禁止。それなのに、蒸留所内は国の寒冷地特例で飲んでもよい。

うん、不思議だねー」

「なるほど・・・」

要は、蒸留所内は法律上コーストイではないといふ事らしい。なんとなく屁理屈のような氣もするが、レオンも同じ寒冷地特例の恩恵を受けていたわけだから、人の事をとやかく言う筋合いはない。

ただ、一応一言だけ言っておこうと思つた。

「それは分かりましたけど、ベティさん」

「何ー?」

「子供がウイスキーをストレートで飲むのはまずいと思しますよ・・・

・下手すると倒れるだけでは済みませんから」

ウイスキーはアルコール度数が40を越えるものも珍しくないのだ。大人でも危険な状態になる事もあるくらいだから、身体の小さい子供は尚更である。

ベティは楽しそうに言つた。

「飲んだって言つても、ちょっとだけだし。でも、あれで味を覚えたのは確かだよね」

「・・・お祖父さんはとんでもない事を覚えさせましたね」

「何? もしかしてレオンはお酒ダメな人?」

「いえ、飲めない事はないんですけど」

「そつかー。じゃあ、レオンが初めてダンジョンクリア出来たら、祝杯だねー」

嫌な予感しかしない提案だった。

「祝杯つて、あの、僕は別に・・・」

「我ながらいい事思いついたなー。どうせなら、みんな呼ぼうか。うんうん。みんなお酒強いからね。きっと凄い事になるよー」

「なるよーつて・・・」

凄い事つてどんな事だろうか。とりあえず気になつたのは、血を見る事になるのかという事。そして、ならないまでも、怪我をしないで済むだろうかという事だった。ベティとガレットがいるだけで、

半ば予想が出来る事だつたが。

本当に凄い事になるかもしない。凄惨という意味で。

「・・・とりあえず、魂の試練場のクリアまでとつておいて貰えませんか？」

レオンは控えめに、そう口にした。

その言葉を言い終えた、その時だつた。

何の前触れもなく、その音は聞こえた。

最初は、どこか遠くで雪崩が起きたのだろうかと思つた。腹に直接響くような低い音。山の唸り声の様だつた。

レオンとベティは立ち止まる。

2人がいるのは、コースアイからかなり離れた場所である。町はだいぶ後方に見える。周囲にはもう畑等はなく、ただ丈の低い草地が広がるだけである。元々、こちら側には農地が少ないのかもしない。

見晴らしだけは抜群にいい。

「・・・獣の声だつた？」

ベティがこちらを見て聞く。いつも彼女の笑顔はなりを潜めていて、どことなく不安げな表情だつた。

それを見て、レオンは自分の表情を認識した。

見た人が不安になるくらい、怖い顔をしていたんだ。

「いや・・・」

笑おうとは思えなかつた。狩人生活の長かつたレオンにははつきりと分かつたからである。

あれは獣の声じやない。あんな声で鳴く獣は、あの山にはいない。そうなると、他に考えられる可能性は、そつ多くはない。そこでまた、地響きの様な音が聞こえる。

レオンは驚いた。

とんでもなく近い。

そして、音はすぐに終わらなかつた。どんどん近づいてくる。

黙つたまま、ベティの腕を左手で掴んだ。

「え？ 何？ ちょっと・・・」

少女の狼狽えた声に構わず、レオンは体勢を低くする。ベティに背を向けて、右手を短剣の柄に持つていった。

近づいてくる地響き。そして振動がはつきりと伝わってくる。まさかとは思った。だけど、もう疑いようがない。何か地中にいる。

しかも、かなり大きいやつが。

あと数秒もすれば、ここに到達するだろう。

武器はある。だけど、鎧がない。戦えるだろうか。だが、レオンの決断は早かつた。

「逃げて」

自分だろうかと疑うくらい無機質な声だった。同時に、背負つていた矢筒を地面に放り出す。

「え？」

背後の彼女が戸惑っているのが分かる。だけど、もう待つていられなかつた。

レオンは左手でベティの身体を突き飛ばした。彼女の身体が自分から離れる。

「逃げて！ ベティ！」

その声のわずか後。

自分の二の腕くらいはあるうかといつ程の太さの針が、突如地面から飛び出してくる。

レオンの顔めがけて。

咄嗟に右後方に倒れ込む。避けたつもりだったが、もしかしたら腰が抜けたのかもしれない。だが、すぐに左手をついて反動で立ち上がれた。体勢を整えながら、周囲を観察する。

そこで見てしまった。

針だと思ったのはほんの一部で、実際には黒い木の幹の様な物の先に、同じ黒い針が付いていただけである。針自体はそれほど太く

ないが、それでも槍の穂先くらいはあった。その針を操る黒い幹は怪しく蠢いている。

それだけでも十分氣色悪いが、それに拍車をかけるものがあった。目玉。

そうとしか例えようのないものが、地面から顔を出しているのだ。生えていると言つた方がいいかもしない。

その周囲は地面がめくれてしまつていて、幸か不幸か、目玉の動きがよく分かる。キヨロキヨロと辺りを観察しているようだ。大きさは人間の物どころではなく、明らかにどの生物のものより大きい。生物ではないのだ。

いつか戦う事になるはずだった。その時に緊張しないように、あるいは恐れないように、心の準備をしていたはずだった。その成果なのは分からぬが、とりあえず、緊張も恐怖もそれほどではない。だからといって、もちろん嬉しいわけがない。

まさか、こんな所で会うなんて。

目玉の周囲の地面が崩れしていく。

地震のような地響き。

やがて、地中からせり上がるよつとして、それは全貌を表した。

サソリといつ虫によく似ていた。同じ様な地を這う体勢に、大きな鉄状の前脚。長い尻尾の先には鋭そうな針。ただ違うのは、その大きさが、高さで2メートル、全長は尻尾を入れれば軽く5メートルを超すくらいはあるという事。鉄以外の脚が4本しかない事。

そして、通常なら顔にあたる部分に、大きな目玉がひとつだけしかない事。

見たらもう疑いようがない。こんな生物はいない。

間違いなく、モンスターだつた。

レオンは右手にスローイングダガーを握る。左手にも握つておぐが、投げるのは無理だ。投擲には相当な技術が必要で、レオンはまだ右手でしか投げられない。左手に持つっていても、持ち替えの時間

を短縮する程度の意味しかない。

武器はダガーが3本とショートソード。これ以外には何も準備していない。

その一本目のダガーをレオンはいきなり投擲した。

狙いは目玉。一番弱そうな部位だったからである。

だが、サソリ型のモンスターは、あっさりと左の鍔でそれが弾いた。機敏かつ的確な動き。

巨体に似合わないその動きに驚きつつも、早くも困り果てた。自分の装備があまりにも少な過ぎるのだ。もとと武器や道具があれば工夫しあうがあるが、それもない。近づこうにも、鎧がないから強気には出られない。かといって、弓もないから遠距離だと決定打がない。投擲程度の速度だと見切られてしまうのだ。

隙をつくしかない。

2本目のダガーを腰から抜こうと思つた時だった。目玉の周りで紫の光が軌跡を描く。

信じられなかつた。

幼い頃に、母親に一度だけ見せて貰つた事があつた。あの時は青白い光だつたが、今のも間違いない。

魔法だ。

そう気付いた時には遅かつた。

球形だつたモンスターの目玉の輪郭が突如歪む。直後、レオンの身体はバランスを崩しそうになる。

音は普通に聞こえる。だけど、視界がおかしい。水の上に垂らした油が広がつていくように、中心から歪んでいく。

魔法の効果だという事には、すぐに気付いた。

もちろん気分は良くない。だけど、目を瞑つたらもつと酷い事になる。

その予感が、レオンの氣力を保つていた。

モンスターが近づいてくるのを音で判断する。虫が動き回るような小さな音ではないが、ぬかるんだ地面のせいで、音の大半が吸収

されてしまつてゐるようだ。

何を恐れるべきなのか、向ひの武器で注意すべき物は何なのか、必死に考えた。

尻尾の針だ。

歪んだ視界に黒い面積が増えたとき、咄嗟に身体を右に捌く。視界が曖昧だから、上手く動けたのかよく分からぬ。

左側で風を切るような音が響く。

上手く避けられたのか。

だが、その一撃で終わりではなかつた。

腹部に衝撃。

後方に飛ばされる。地面から足が離れて、宙を浮く程のパワーだつた。

地面に倒れ込む。

腹部の痛みに耐えながら、必死に息をした。それと同時に、頼りにならない視界は諦めて、耳の方に神経を注ぐ。

地を引きずる音が近づいてくる。

速い。

勘弁して欲しいと思つた。あるいは、諦めて楽になりたいと思つたのかもしれない。何の前触れもなく、アレンの言葉を思い出す。最初は誰でも負けたいと思つてゐる。きっと用法は間違つてゐるけれど、今の自分と少なからず共通点はあるような気がした。だけど、レオンは諦めない。

それが父からの教えだつたから。

自分がどめを刺す動物達。彼らは最後まで目を逸らしたりはない。最後までじつとこちらを見ているのだ。

それが生きるという事だ。

父の声が聞こえた気がした。

「レオン！」

ベティの叫ぶような声。

危機感が体中を駆け巡る。

左手を地面に叩きつけ、その反動だけでその場から離れた。わずかに遅れて、地面を抉るような音。

右手をついて体勢を起こしながら、内心助かつたと思った。思わずベティにお礼を言いそうになる。

だけど、いつまで避けていられるだろうか。

この目眩ましの魔法がどれくらい続くものなのか、レオンには判断出来ない。魔法を使つた事はあるか、効果を体験したのも今が初めてなのだ。予測なんて出来るわけがない。

モンスターの足音は容赦なく近づいてくる。

諦める気はない。だけど、手が何も思い付かない。

焦りが顔を出す。

だが、突然、モンスターの足音が乱れたような気がした。レオンは訝しだ。普通にこちらに迫つてくる感じではない。脚を地面に擦り付けているような、ともすればのたうち回つているよう、そんな感じだ。

その時、突然レオンの視界が戻つた。何の予兆もなかつた為、魔法が切れたのだと気付くのに時間がかかった。

そして、目の前の光景に驚く。

そこにいたのはサソリ型のモンスター。そこまでは当然だが、視界が戻つてみると、それは本当にのたうち回つていた。十分気持ち悪い光景だが、それよりもレオンは、モンスターにも痛覚があるんだなどぼんやりと思つた。

痛みの原因。それは、モンスターの目玉を見れば明らかだつた。その中心を、矢が数本も深々と貫いている。

よく見ると、それは今日自分とベティが背負つていた矢にそつくりだつた。自分のはとっくに放り出してしまつたから、もしかしてベティの矢だらうか。

だけど、彼女は弓を持つていなかつたはずだ。そう考えながら、レオンはベティを突き飛ばした方へと視線を向ける。

なんだか随分久し振りに見た気がするベティは、今も尻餅をつい

たままの体勢だった。大怪我をしている様子はないので、とりあえず安堵する。彼女の矢筒は背負われたままだ。

彼女は自分とは反対側を見ている。

レオンもそちらを見た。

最初は誰もいないと思った。だが、よく見ると平原の遙か彼方に、

馬に乗った人物がいる。

その人物が馬を駆りながら、『』を構えたように見えた、その一瞬後。

感じたのは、視界で捉えきれない程の速度で飛来した何か。

「え？」

思わず声に出るほど驚いた。

モンスターの田玉に刺さった矢がいつの間にか増えている。それを確認している間にも、次々と吸い込まれるように突き刺さつていく。中には、貫通し過ぎて、やじりが見えてしまっているものもあつた。

レオンはもう一度馬の位置を確認した。軽く200メートル以上は離れている。あんな距離では、狙いに正確に命中させる事はもうろん、これだけ深々と刺さる勢いが残っている事もあり得ない。ましてや馬を駆りながらとなると、想像も出来ない領域の腕前だ。だが、状況から考えるとそれしかない。何故なら、他には誰もいないのでから。

田玉を蜂の巣にされたモンスターはほとんど動かなくなつた。やがて、身体中から紫の煙を出したかと思うと、空気に溶け込むように薄くなつて、あつという間にその姿を消した。

助かったとは思わなかつた。

この信じがたい弓の腕を見せられて、ただ呆然と、何もいなくなつたモンスターの跡を眺めていた。

昨日の雨の影響なのか、それともいつもこつなのか、湿っぽい空気が漂う場所だった。

平原にぽつりと建つていて、廃屋と呼んでも差し支えない小屋。むしろ、建物というよりも、休憩所と呼んだ方がいいかもしない。誇張でもなんでもなく、四隅の柱に屋根が乗っているだけの建物である。昔はちゃんとした壁があつたのかも知れない想像が出来るくらいには壁らしき物が残つていて、それもほぼ半壊状態。文句なしのオンボロ小屋である。

ただ、そもそも屋根さえあれば十分だったのだろう。その小屋の中心あたりに、岩を加工して作ったらしい、地下扉がある。レオン達がいるのはその中だった。

扉と同じ岩で出来た階段を下つていくと、まず事務室らしき部屋にたどり着く。テーブルやイスはもちろん、棚や水道もある。壁も床も石材だから、暖かみも何もないが、不思議と寒くはない。うつそくの明かりが、厳かで幻想的な雰囲気を演出していて、ちょっとした非日常を味わえる不思議な場所だった。どこかで匂つた事のあるつんとした香りが、うつすらと漂つている。

レオンは、この部屋にひとつしかないイスに座らされて、ベティに傷の手当てを受けているところだった。彼女は狩人だからなのか、なかなか手慣れた様子だった。

「擦り傷とかはともかく、お腹は平気なの？」

右手首に包帯を巻きながら、ベティが聞く。彼女は片膝をついた姿勢だった。その方が巻きやすいのだろうが、自分だけイスに座っているこの状況は、なんだか申し訳ない。

一応、空いている左手で腹部に触れてみる。

「ちょっと変な感じですけど・・・痛くないので、たぶん平気だと

思います」

モンスターの巨大鋏によつて、身体が吹き飛ぶくらい殴打された腹部だつたが、骨はおろか、内出血している様子もない。違和感があるにはあるが、きっと打撲程度だろう。

その返答に、ベティは少しムツとしたようだつた。薄暗い上に陰になつてゐるので、表情がよく分からない。

「そういうのは危ないと思つなー。町に戻つたら、一応医者に見て貰つた方がいいよ」

「え? いや・・・そんなに大した事ないですよ。寝て起きたら元通りだと思います」

「痛くないつて、無理してない? あんなに吹き飛んでたのに」

「いえ、全然」

「本当? ちょっと触つてみてもいい?」

「え、あ、はい・・・あの、拳を握るのはやめて下さい」

そう言つと、ベティは笑つた。どうやら突つ込み待ちだつたらしい。あつさりと拳を引っ込める。

「そう言つべティさんこそ、大丈夫ですか?」

最初に思いつきり突き飛ばしてしまつたのが、レオンは一番気になつていた。だが、それがなかつたとしても、突然モンスターに襲われたわけだから、動搖していてもおかしくない。

「私は平気。レオンのお陰で無傷だつたからね」

ベティは明るく答えたものの、少し元気がないような気がした。この場所の雰囲気のせいかもしれないし、自分が心配しているせいかもしれない。だけど、もちろんそれで納得出来るわけがない。

「・・・すみません。僕につき合つてもらつたから、酷い目に遭わせてしまつて」

後悔の念でいっぱいのレオンだつたが、ベティは優しい表情でそれに応える。

「それって逆だよね」

「え?」

「レオンがいたから助かったよー。ありがとう」

思いも寄らない言葉だった。

自分がここまで道案内を頼まなければ、彼女が怖い目に遭う事もなかつたのに。

「いや、そんな・・・」

ベティはそこで立ち上がり、両手を腰に当てた。顔は優しいままだ。

「分かつてないなー。ここまで案内してあげるつて、私が請け負つたんだから、レオンが気にする事ないでしょ？それどころか、あんな大きいモンスターを相手に私を守ってくれたんだから、ありがとうっていうのが普通じゃない？」

「守つたつていうか・・・あんまり守れてませんでしたけど」

事実、自分だけだつたら完敗だつただろう。

ベティはそこでやりと笑う。

「そうだねー。レオン、あんまり強くなかったね」

「・・・ですよね」

武器や鎧がなかつたとは言える。だけど、それは言い訳というものだろ？。準備万端だつたとしても、あの目眩ましの魔法を使われたら、負けていた可能性が高い。

がつくり肩を落とすレオンに、ベティは顔を近づける。

「でも、格好良かつたよ」

思わずドキッとするような大人びた声が、耳元で囁かれる。

当然というべきか、レオンはこれ以上ないくらい慌てふためいた。元々バランスの悪かつたイスごと、後ろに倒れ込む。

そんな過剰反応に栗色の瞳を大きくしたベティだつたが、すぐに笑顔に戻る。

「ダメだなー。こつちは全然免疫出来ないねー」

「・・・お願ひですから、僕で遊ばないで下さい」

身体とイスを起こしながらレオンが言った。とにかく心臓に悪過ぎる。目眩ましの魔法なら視界だけで済むが、こちらは思考が止ま

るからもつと質が悪い。

ベティは悪びれる様子もなく微笑んだままだつた。

「いいでしょー? だつて、格好良かつたのは本当だし」

「格好良くないですよ。というか、格好良かつたとしても普通に言って下さい」

「さつきのは普通だと思つなー。なんなら、普通じゃない方を聞いてみる?」

「・・・すみません。さつきのが普通でした」

レオンはすぐに折れた。これ以上の衝撃は心臓が保たない。

それで満足したのか、ベティは一息吐いて、この部屋唯一の木製の扉の方を見る。その扉の向こうにある物が、この地下空間で最も重要な物なのだ。

即ち、ウイスキーの蒸留所。

「それじゃあ、治療も済んだし、ホレスに挨拶しようかー

「あ、そうですね。さつきのお礼もしないといけないし」

レオンは立ち上がりながら同意する。

その言葉を聞くと、ベティは何も躊躇せずにその扉の方に向かう。彼女は子供の頃からここに出入りしているのだ。十分に勝手知つたる場所だと言えるだろ? が。

彼女の後ろに、レオンも続く。

木の扉の向こうに入ると、そこにはまさに酒蔵といった様相だつた。先ほどまでいた事務室らしき場所もそこそこの広さがあつた。生活しやすいかはともかくとして、広さだけなら十分一人暮らし出来る程である。だが、こちらの酒蔵の方を見ると、それも氷山の一角だつた事が分かる。

とにかく目に入るのは、棚によつて綺麗に整列された酒樽の山だつた。人1人が入れるくらいの大きさの樽が、横倒しの状態で所狭しと並べられているのだ。他にも、蒸留用の道具なのか、巨大な木製の器具や箱が積み上げられているが、それすらもほんの一部。とにかく酒樽だけで、二コルのガレージはおろか、もしかしたら、ガ

レット酒場くらいのスペースは占拠されているかもしない。もちろん、高さは一階分程度しかないのだが、広さは相当な規模のものだ。

その酒樽を収納している棚。それによつて通路が仕切られているようなものだが、扉のすぐ正面の通路の奥に、1人の男が壁にもたれて座り込んでいる。どちらかというと、しなだれかかっているという感じかもしれない。足を投げ出して、どこか氣の抜けた感じでぼんやりと近くの酒樽を眺めているように見える。

正直、レオンには違和感があり過ぎた。さつきの神業の射手はどこに行つたのか。もしかして双子の別人だろうか。

一応周囲を見渡してみる。もちろん、視界のほとんどは酒樽によつて遮られているのだが、他の人の気配はなさそうだった。

そんなレオンをさし置いて、ベティはさつとその男性の方へ歩いていく。しばらくしてからそれに気付いて、レオンもその後に続いた。

たゞり着くまでの十数秒間。男は微動だにしなかつた。

「ホレス。さつきはありがとう」
ベティが抑えめの声で言つ。

その声に、ようやくその男はこちらを向いた。

なんというか、恐らく中肉中背の人なのだ。むしろ、少し上背があるから、体格的には恵まれているはずである。だけど、どことなく彼が貧相に見えてしまっては、ボサボサの髪と、年季が入り過ぎている服装、そして、まるで魂が抜けてしまったかのような、無造作な座り方のせいに違ひなかつた。

そんな彼の唯一の明るさ。それは間違ひなく彼の瞳だった。

髪に半分隠れているが、確かに彼の瞳は、右目だけエメラルドのような碧色。左目はベティと同じブラウンの瞳。

瞳の色が左右で違う人がまれにいるとは聞いていたが、実際に見るのはこれが初めてだつた。

「気にするな」

ぶつきらぼうな声だった。不機嫌なのか、それともこれで普通なのか、レオンには判別しかねるところである。

ベティはそんな口調にも構わず、親しげに会話を続ける。

「気にするなって言われても、気にすると思わない?ねえ、お礼は何がいい?」

「礼なんかされたら困る」

「別に困らないでしょー?キスくらいでいい?」

一番動搖したのはレオンだつただろ?。言われたホレスの方は無表情そのものだった。

「安売りするものじゃない」

「安売りじやないでしょー?だつて、命の恩人なんだし」

「命の恩人なら、そつちの彼の方だ。お礼なら彼にしたらどうだ?」

「とんでもない提案だつた。」

密かに、いつでも逃げ出せるように準備していたレオンだつたが、ベティはこちらを振り向きもしなかつた。それどころか、どこか不満そうな口調になる。

「ホレスは、私がレオンにキスしてもいいわけ?」

「ベティの自由だ」

「何それー?私のファインセでしょー?」

さすがに、レオンはその言葉を無視出来なかつた。

「あのー・・・」

ベティとホレスがレオンの方を向く。

「・・・今、ファインセって言いました?」

「うん」

あつさりと頷くベティ。

レオンの頭の中では、なぜかファインセといつ言葉の定義を確認する作業が始まっていた。もしかしたら、婚約者という以外の意味もあつたかもしれない。それどころか、もしかして、婚約者という意味だと思っていたのは自分の勘違いだつたかもしれない、そんな意味不明な疑問が頭の中を駆け巡つていた。

もちろん、そんな勘違いはない。

それをどうにか受け入れた瞬間、レオンの身体は驚きの声をあげるべく、止まっていた空気を思いつきり吸い込んだ。

そこに、男の声がタイミング計つたかのようになに水を差す。

「ここで大声は出すな」

急な要請だったが、なんとか、声ではなく息を吐き出すことどめる事が出来た。

そんなレオンの様子を見て、ベティは可笑しそうに笑う。

「もしかして、レオンは私にファインセがいてショックだったの？」

言われてみて、腕を組んではたと考へてみたが、しばらくして首を捻る。

「・・・いえ、あんまり？」

ベティは腰に手を当てる。だが、顔は笑っていた。

「それはそれで、ちょっと傷つくなー」

「あ、いえ。もちろん、驚きはしましたけど」

フォローのつもりだったが、あまり意味をなしていなかった。

そこでまた、ホレスの声が割り込む。

「フィアンセといつても、もう無効だ」

「無効・・・？」

そう言われても、レオンにはよく分からぬ。

その様子をみて、ベティが説明する。

「さっき、私のお祖父さんの話をしたでしょ？」

「あ、はい」

あの後モンスターに襲われたわけだが、もちろん忘れてはいない。ここで子供だったベティにウイスキーの味を覚えさせたという、ある意味で罪な人である。

「ホレスはね、そのお祖父さんのお気に入りだつたんだよね。ちょっとした縁で知り合つて、ここの中伝いをしてくれてたんだ。えつと・・・もう何年くらい前からだつて？」

「15年」

素つ気ない答えにも、ベティは慣れた様子だった。

「その頃はまだ私も小さかったから、ずっとお祖父さん1人だったんだよ。だから、きっと少し寂しかったんじゃないかな。息子がいれば後を継がせたかったんだろうけど、女の子ばかりだったし。だから、ホレスが手伝ってくれるようになつて、きっと息子っていうか、まあ、後継者にしたいと思つてたんだよね。ホレスは見込みがあるつて、よく言つてたし」

「俺はそれほどでもない」

「そんな事はいいの」

ホレスの呴きにベティがすぐさま言い放つ。手慣れた会話で、本物の兄妹みたいだった。

「それで、ずっとお祖父さんとホレスが2人でここを切り回したんだけど、3年ちょっと前くらいに、お祖父さんが体調を崩しちゃつて、まあ、なんていいうか・・・もう仕事には戻れないって事になつちゃつたんだ。もういい歳だつたからね」

ベティの表情は明るいが、どこか笑顔になりきれていない。まだ3年程しか経つていないのだから、無理もない。その人とベティには思い出がたくさんあるようだから、尚更である。

「あの、ベティさん。別にいいですよ。僕、そんな話になるとは思わなかつたので・・・」

レオンの言葉に、ベティは少し照れたような笑みを浮かべた。

「いいのいいの。えつと・・・あ、そうそう。それで、いよいよ最後つて時に、何かお祖父さんを喜ばせたいと思つたんだよね。それなら、ホレスがここ後の後継ぎになるつて事が決まれば、安心出来るだろくなつて思つて、もう思いついたその日に、ホレスのところまで行つて、すぐに病室まで連れて行つて、私達婚約しましたーってなんというか、子供みたいな話だが、レオンは素直にベティらしいなと思った。呆れるよりも前に、思わず笑つてしまつた。

ベティもそれにつられたようで、いつもの笑顔に戻つた。

「あの時は、私はまだ結婚出来ない歳だつたからね。もう1年遅かつたら、勢いで結婚してたかもしれないな。ホレスも別によかつたでしょ？」

「そうだな」

当たり前みたいなに聞いたり、当たり前みたいな答えが返ってきた。

「いや、あの・・・結婚ですよ？」

レオンが怖ず怖ずと確認すると、ベティはきょとんとした顔をする。

「ただけど？」

「えっと・・・結婚つてあれですよね。夫婦になるつていう

また言葉の定義をついつい確認してしまう。

「当たり前でしょー？他にケツコソつていつたら、すぐに拭き取つたらそうでもないけど、後になつたらこびりついて取れなくなる、お父さんの喧嘩の後にいつの間にか増えてるあれの事くらいじゃない？」

ベティにしてみたら、確かに血痕はそういう物かもしれない。

「そうじやなくて・・・普通は、結婚つて好きな人同士がするものですね？」

その質問に、ベティは真顔で答えた。

「私、ホレスの事好きだけど」

何の偽りも感じられない、堂々とした宣言だつた。

ベティはホレスの方を向いて聞く。

「ホレスも私の事好きでしょ？」

「そうだな」

またもや、当たり前みたいな会話だつた。

レオンはたつぱり間を空けてから、慎重に言葉を選んで聞いた。

「・・・あの、僕が気付いてないだけで、ベティさんとホレスさんは恋人同士なんですか？」

「ううん」

「違う」

同時に、同様の答えが返ってきた。

レオンはなんとか、納得のいく答えを導きだそうとする。その数秒後にはあえなく破綻したのだが。

「・・・すみません。僕にはついていけないみたいですね」正直に敗北宣言する。

2人がどういう関係なのか、さっぱり分からない。あつけらかんとした口調で、ベティは言った。

「それよりも、レオンはここに来た目的を忘れてない？」

そうだった。すっかり忘れていたのは事実だが、今ならすぐに切り替えられる。とりあえず、現在の摩訶不思議な難題を忘れ去りたいという思いが強過ぎる。

レオン本人が聞く前に、ベティが勝手にホレスに尋ねた。

「ホレスー。レオンが『』と笛を教えて欲しいんだって」

全く見当違いではないが、かといって正解とは言えない。正確には、狩人としての戦闘について、アドバイスして欲しいというのが正しい。

だが、レオンが訂正するより前に、ホレスの答えがあつた。

「いいだろう」

こちらを見るわけでもなく、隣の酒樽を見つめながらの返事。わずか数秒で、話がまとまつた。

「よかつたねー」

ベティの言葉はとりあえず置いておく事にして、レオンはホレスに確認した。

「いや、あの・・・いいんですか？」

「ああ」

「いひこりのもなんですけど・・・お忙しいんじゃないですか？」

「暇な日もある」

「そもそもせませんけど・・・別に僕の為に使わなくても」

そこでホレスはこちらを向いた。向いたのは碧の右目だけだったが、それだけで彼の全てがこちらを向いたような、それほどの存在

感があった。

「レオンだつたな」

やや氣圧をれながらも、レオンは頷く。

「は、はい」

「ベティの命の恩人だ」

意外な一言である。ベティに言われた時も戸惑つたが、ホレスの口からその言葉が出るのは尚更違和感があつた。

「いえ、僕は何も・・・助けたのはホレスさんですよ。どちらかといふと、ホレスさんが僕の命の恩人です。本当にありがとうございました」

その言葉にも、ホレスの碧の瞳は微動だにしない。

「俺はどどめをさしただけだ。俺がいなくともベティは逃げられた。だから、助かったのはレオンのお陰だ。本当に感謝している」

全然感謝している口調でも体勢でもない。だけど、さうと不器用な人なのだろうとレオンは思う事にした。
「逃げられたかは分かりませんけど、ベティさんがここまで来たのは僕が頼んだからなんです。だから、あれくらいは当然というか・・・。本当は、見習いとはいえ冒険者なんですから、倒せないといけないんですけど」

「ダガーを使つていたな」

突然の話題変更に、戸惑いつつも頷く。

「え？あ、はい・・・まだ習いたてですけど」

「アレンに言われたのか？」

「そうですけど・・・」

「なるほどな」

「・・・はい？」

そこでホレスはベティの方を向いた。

「ベティ。これからはレオンと一緒に来い」

何の脈絡もない言葉だが、やはり慣れているのか、ベティはすぐ

に答える。

「それはいいけど、毎回一緒に無理だと思うよ。レオンはこれからダンジョンにも挑戦し出すから、結構忙しくなると思う」

「・・・分かった。遅いようだつたら俺が迎えに行く」

「ホレスが？それって、私を心配してくれてるの？」

「当たり前だ」

ベティは照れたように苦笑する。ホレスの前ではよく見せる表情なのがもしけない。

「そんなに心配しなくてもいいよー。あんなモンスターはやうやく出ないと思うし。だいたい、今まで出た事なかつたしね」

「一応だ。絶対に一人では来るな」

「はいはい。心配性だねー」

諦めたようなベティの口調。お互いの事をよく知っているのだろう。会話を聞く度に、その印象が強くなつていく。

そこでふと、2人の関係が分かつた気がした。

「レオン」

ホレスの声に、レオンの思考は中断された。

「あ、はい」

「狩人としての』』という事なら教えられる。ベティの護衛を頼むようで悪いが、俺のところまで来て貰えれば出来るだけの事は教えよう。元々、野外でしか教えられない。わざわざ出向かせるようだが、理解してくれ」

その言葉で、レオンの推測はほとんど確信に変わった。

「いえ、教えて貰えるだけでも十分です。それで、あの、ホレスさん」

「どうした？」

「ホレスさんにとって、ベティさんってどんな存在ですか？」

回答はやはり早かつた。

「幼馴染み。それか、妹か。いずれにしても大切な人間だ」やつぱりそうだった。恋人というよりも、そちらが近い。ある意味夫婦にも近い存在なのかもしれない。家族同然の付き合いという

事なのだろう。

そこで、ベティの声が響く。

「恥ずかしい事聞くよねー。そんな事確認してどうするの？」

そちらを見ると、どこかにやけた顔をしていた。からかう気満々である。

どう答えたら被害が最小限で済むだろうか。そう思案していた時、ホレスが不意に、懐から笛を取り出す。オカリナに似ているが、穴が少ないよう見える。片側しか見えないが、2カ所しか確認できない。薄苔色の不思議な楽器だった。

「あ、吹いてくれるの？」

ベティのどこかわくわくとした声。

「ああ」

「こんな時間に珍しいね」

「今日は特別だ」

その言葉に、ベティは微笑んでレオンの腕を掴んだ。

「何ですか？」

「いいからいいから。座つて座つて」

腕を引っ張られて、強引に床に座らされる。石材だから冷たいかと思ったが、意外にも少し熱を持っていた。

2人並んで、ホレスの方を向く。演奏者の方はといつと、笛に口を当てて、じつと目を瞑つたまま動かない。精神統一しているのだろうが。

「ホレスはね、よくウイスキーに笛の音を聞かせてるんだよ」

「・・・どうしてですか？」

「味が良くなるんだってさー。だから、ここも大声厳禁なんだよ」

「へえ・・・」

聞いた事のない話だったが、職人が言うのだから、きっとそういうのだろう。

そこで突然、笛をくわえていたホレスが口を開く。目は瞑つたままである。

「これはウイスキーの為じゃない」

ベティは笑顔でそれに返事をする。

「じゃあ、何の記念?」

「記念じゃない」

「あれ? レオンとの出会い記念じゃないの?」

「それもいいが、観客はもう1人いる」

少女の瞳が一瞬大きくなる。

「・・・へえ。珍しいね」

「これくらいしか出来ない」

「本当に心配性だなー」

今日何度もかの、ベティの照れた声。

それを受け止めるようにして、笛の音がその片鱗を見せ始める。決して高くはない、身体に直接響いてくるような素朴な音。それをどこか寂しげな旋律で彩るのだが、不思議と暗い印象は全くない。悠久の自然に、或いは母の腕の中に抱かれるような、心休まるメロディ。身体中を癒しの音色が包み込んでいく。

その笛の音に酔いしれながら、レオンは演奏する青年と隣に座る少女を見た。

さつきの会話を思い出す。

通じ合つた2人の会話だから推測で補うしかないが、やはり兄妹だと考へると分かり易い。兄は、明るく振る舞つている妹の事が心配なのだろう。あんな体験をすれば、本当は辛かつたはずなのだ。その心の負担を和らげる為の演奏なのではないだろうか。そんな優しさそのものの音色に聞こえる。

家族。

笛の音にのせて、レオンも自分の村に思いを馳せる。まだ村を出て半月程しか経っていない。ホームシックになるには早過ぎるが、この2人を見てこの音色を聞くと、否応なく故郷が恋しくなつてくれる。

だけど、それにはまだ早過ぎる。

ついさっきの戦いを思い出す。文句なく、自分の完敗だった。次に戦う事になつた時、自分は勝てるだろうか。もし傍に誰かいたら、その人を守れるだろうか。

逆の懸念もある。あの時ベティがいなかつたら、自分は針の攻撃を避けられなかつただろう。彼女の声があつたから、咄嗟に避けられたのだ。それだつて、確信があつたわけではなく、ほとんど勘みたいなものだつた。

あんなのがダンジョンにはうようよしているのだろうか。そんな場所で、自分はたつた1人でも生き残れるのだろうか。やめるなら今のうち。

そんな考えが頭を過ぎつた時だつた。
最初はそういうメロディーなんだと思つた。

だけど、違つた。

笛の音が次第に遅くなつていく。音色だけではない。他の音も、感覚も、時間でさえ、勢いを失つていいくのだ。ゆっくりと、だが確かに停滞していく世界。

それを認識していたレオンだが、どういうわけか身体が動かなかつた。意識だけが遠くから見ているような感覚。

そしてついに、時が止まる。

だが、それも一瞬だけだつた。

氣付いた時には、時は元に戻つてゐる。

笛の音は元の旋律のまま。

ホレスは目を閉じてゐる。ベティはこちらを見ていない。何も気付いてないようだつた。

だけど、レオンは確かに感じた。

今何か起きた。

そして、確かに見た。

時が止まつた一瞬。その時自分の視界を支配したのは、この蒸留所の風景ではなかつた。

そして、その場所でじつとこちらを見ている存在。

行儀良く座つて、じつといちばん見ていたのは、白毛に紅眼の力
ーバンクル。

今のは何だつたのだろう。

笛の音はまだ続いている。

その癒しの旋律も、今のレオンの耳にはじこか遠くの音色のよう
に聞こえた。

酒場の主人と商人

ガレット酒場の朝は早い。

それは、ここが宿屋の食堂も兼ねているからとか、また、冒険者は日の出前の時間に出立する事がが多いからという理由もある。だが、もしそんな理屈を本気で信じていてる人がいるとしたら、それはきっとこの酒場の事をよく知らない人だろう。ここはそんな客目線の発想をするような店ではないのだ。

この酒場の朝が早い理由。それは、単純に酒場の主人のガレットが早起きだからである。

彼の場合、日の出前に起きるのは当たり前。睡眠時間が3時間を越すことはほとんどない。仕事の為とかではなくて、そういう生活习惯が身についてしまっているのである。

元冒険者であるガレットにとって、睡眠は短い程良い。特に、魔法を使うジーニアスは精神的負担が多い為か、睡眠時間が長い傾向がある。夜の見張りは基本的に、彼のようなアスリートの仕事なのだ。無駄に長い睡眠は他のメンバーの負担になるし、何より、寝ている間は無防備だから、寝ていても落ち着かない。その頃の癖が抜けないままのガレットは、長い睡眠が出来ない身体なのである。

それだけなら、彼が早起きであるというだけの話で済むのだが、ガレットには欠けているものがあった。

一言で言つなら、それは配慮、あるいは遠慮である。

早朝だから静かにしようなどという発想が彼にはない。冒険者にしてみたら当たり前の事なのだが、酒場兼宿屋の主人となつた今でも、困った事に変わらない。何かしていないと落ち着かないという事なのだろう。客はおろか、家族だつてまだ寝ている時間でも、平気で廊下をうろつろする。うろつろするだけならまだ良いが、掃除や片づけを始めたりする。特に、何か探し物があると、妻や娘を起

こして聞く事もある。本人達はもう慣れてしまつたわけだが、その話し声を聞かされる客達の方はそうではない。

端的に言えば、朝から落ち着かない。

そういう場所だから、ここに宿をとる一般の客はほとんどいない。初めてここに泊まつた一般人は、次からは大抵他の宿をとるし、そもそも、コースアイの人々は親切だから、一般人が宿を探している場合、ガレットの宿場を紹介する事はない。

代わりに、冒険者が宿を探している場合には、迷わずここを紹介する。何故なら、冒険者の生活習慣が身につくからである。さらに、明日の出立が早い場合でも、寝坊する事はまずない。仮に自分達で起きられなくとも、主人自ら起こしにくるからである。多少身体にダメージが残る起こし方だが、他の宿屋ではこうはいかない。夜遅くに帰ってきた場合でも、ガレットはすぐに飛び起きて出迎えてくれるし、そもそもほとんどの時間起きているわけだから、閉め出しされる心配もない。好意的に見れば、冒険者向けの宿屋だと言えるだろう。

そんなガレットの店だが、1階のフロアのほとんど全てが酒場兼食堂となつてゐる。そこで冒険者達が、酒を飲んで語り合つたり、羽を休めたりするわけだが、そういう場合、多くの客達はテーブル席を使用する。といふのも、冒険者の多くはバー・ティを組んでいるからで、イスが3つしか用意されていないカウンター席は、4人以上が理想とされる冒険者バー・ティには少な過ぎるのである。

カウンター自体の広さはもつと多くのイスを置くのにも十分なものだが、ガレットはそれ以上のイスを置こうとはしない。その理由を一言で説明するのは難しいが、簡単に言えば、冒険者達と必要以上に馴れ合いたくないからである。馴れ合つてもお互いの為にならない。志半ばで冒険者を引退した自分にとつても、これからより高みを目指す冒険者達にとつても。

その為、現在カウンター席を利用する人間といえば、まだ仲間がない見習いのレオン、たまに遊びにくる自分やベティの友人達。

それから、今座っている行商人の男くらいである。

ガレットはカウンターの中から、座っているその男を見下ろす。男は2つのグラスに注がれたウイスキーを交互に飲み比べているところだった。

旅人にしては頼りない体つきで、道中で強盗に襲われたらどうするのだろうかといつも思うのだが、町中にいる時には恵まれた外見だと言えるだろう。相手に警戒心を抱かせないのはもちろん、実は整った顔立ちもある。客に取り入るには有利な武器となっているに違いない。服装も当然くすんだり汚れたりしているわけだが、こういった職種の人間には珍しく、意外に気を使っているという事だつた。これは、本人に聞いたわけではなく、妻や娘の意見である。少し無精髪をのばしているが、それもファッショングのうちという事なのだろう。人当たりがいいのは間違いない。

彼は自分の事をガイと名乗っているが、本名ではなく、覚えやすいからそう名乗っているという事だった。そして、実を言つと、彼こそがこの町までレオンを乗せてきた男である。ついさっきこの男に確認もしたし、レオンが住んでいたような山奥まで行くような行商といえば、彼くらいのものである。まだ若い男だが、その若さに見合つたフロンティア精神と、しつかりとした商売眼を併せ持つてゐる、なかなか大した男である。

ガイは両方のグラスとも一口しか飲まなかつた。それもそのはずで、これが彼の仕事の一部だからである。

しばらくして、彼は顔を綻ばせながら言つた。やや苦笑氣味と言つていい。

「・・・同じ場所で作つてゐるのに、どうしてこんなに違つんだらうなあ」

彼が味見していたのは、ガレット酒場自家製のウイスキーである。彼の妻の父親が始めたという、こだわりの銘酒だ。

「そんなに違わねえだろ」

ガレットが吐き捨てるようになつたが、ガイは全く意に介さず続

ける。見かけによらず、この男は度胸もある。

「いやいや。分かる人には分かるんですって。ホレスの方は小川のせせらぎみたいな纖細さがあるけど、オッサンの方は土石流……」

眉がぴくりと動いたのが自分でも分かつた。

「てめえ、本人を目の前にして土石流ってな……覚悟してるんだろうな？」

怒気を込めた眼で睨むと、ガイはあつ毛り両手を挙げた。だが、顔は笑っている。

「そういう荒々しい方が好みって人もいるんですよ。この口の中でも荒れ狂う感じはなかなか出せないって」

「てめえなあ……それで褒めてるつもりか？」

ガイは口元を上げる。

「もちろん。悪い品だつたら、買い手なんてつかないし」

「その買う奴も買つ奴で、何を好き好んで、そんな土石流を飲みたがるんだ？」

「都会人は刺激が欲しいんでしょ？」

「じゃあ、ホレスの方はどんな奴が買うんだ？」

「それはまあ……違いが分かる人でしょ？」

自分のは出来が悪いと遠回しに言われたような気がしたので、もう一度睨んでみたが、今度は効果がなかつた。どうもやりにくい相手である。

ガイは周囲を見渡してから、ガレットに聞く。

「今日はベティちゃんは？ホレスのところですか？」

世界広しといえど、ベティの事を今もちゃんと付けで呼ぶ男はガイだけである。

ガレットはグラスを片づけながら低い声で答える。

「レオンの鎧が出来たとかで見に行つちまつたんだよ。付き添いつていうか、仕事をサボる口実みたいなもんだ」

「へえ……レオンはどんな感じですか？」

「どうつてなあ……これからようやくダンジョンに挑戦つてとこ

ろだから、何とも言えねえだろうな。まあ、なるようにしかならねえよ」

「いや、そうじゃなくて・・・例えば、息子としてどうですか？」

思わぬ質問に、ガレットは鼻で笑った。新しいグラスを手に取りながらガイの方を見ると、彼も楽しそうな表情だ。

「まあ、息子としてなら、どこに行つてもやつていけるだろうよ。うちもたまに手伝つて貰つてるが、よく働くし、人当たりもいいしな」

「やっぱりそうですよねえ・・・俺も、ここに連れてくる時、そう思つたんですよ」

「そういうえば、そんな話をあの馬鹿娘から聞いたな。弱そくだ弱そうだつて、皆に言われたらしいんだが、連れてきて貰つた行商の男にもそう言われたつてな」

娘のベティは、そういう情報を聞き出す事にかけては天才的と言つてもいい。

悪びれる様子もなく、ガイは可笑しそうに笑つた。

「本当に弱そですからねえ。最初はジーニアスかと思つたんですけど、魔法は使えないって言つし・・・だから、一応少し心配してたんですよ。というか、最初に会つた時、止めとけって言あうと思つたくらいで。だけど、レオンの両親と知り合いだつたから、断るのも悪いし」

氷を入れたグラスにウイスキーを注ぎながら、ガレットは軽く答える。

「あいつの『両親がお得意さんだつたが、それが母親か姉が美人だつたか、どうせそんな理由だらうが』

ガイは微笑む。肯定の笑みだ。

「美人つていう事なら、それはもう・・・レオンの母親ですからね、愛想が良くて優しい人ですよ。そうだ。それで、聞きました？」

ガレットはウイスキーの入つたグラスをガイの前に置く。

「何をだ？」

いつの間にか、ガイは真剣な表情だつた。

「実は、つい最近、新ダンジョンが見つかつたんですよ。それが滅多にないような規模のものらしいんですけど、その入り口がコースアイからも結構近いそうで」

思い当たる節があり過ぎる話だつた。

「おい。そのダンジョンの入り口、まさか、ここから西の方か？」

「あれ・・・知つてました？西っていうか、正確には北西の山奥の方なんですよ。どちらかというと、こっちよりも、山を越えた向こうの方では、結構な強さのモンスターが出るようになつたみたいで、今ちょっとした厳戒態勢だとか」

ガレットは右手を額に当てて、大きな溜息を吐いた。

「てめえは・・・こいつ時はちつとも役に立たねえんだよなあ」

役立たず呼ばわりされたガイだつたが、困惑しているのは明らかである。

「いや・・・なんか知りませんけど、俺、間が悪かったですか？」

あさつての方を向きながら、ガレットは言い放つた。

「こっちにも出たんだよ」

「モンスターが？」

「当たり前だろうが。もつと早くに聞いてたら・・・いや、もういい。てめえに期待しても仕方ねえ。それよりか、ギルドの情報網はどうなつてんだ」

「いやいや。何かあつたんですか？あれ、西って言えば・・・もしかして、モンスターに襲われたの、ベティちゃん？」

西にはさつき味見させたウイスキーの蒸留所があり、そこにベティが度々通っている事くらいはこの男も知つてている。相変わらず彼の勘は鋭いが、今更働いても意味がない。

さすがに驚いた表情のガイはさておき、ガレットは心中穏やかではなかつた。そんな情報があるのなら、ギルドから注意勧告があつてもいいはずだが、それが全くなかつた。一言でも情報があれば、

いくらでも対処方があつたはずだ。

だが、ガイはその辺りの心情も読み取れたらしい。しづらの勘は捨てたものではない。

「いや、ケイトさんは悪くないですよ。この情報をここまで持つてきたのは、たぶん俺が一番手ですからね。入り口が判明したのは、本当に先日なんです。それまでは、山のどの辺りかなんて全然分かつてなかつたわけですから。あの山脈、結構広いですからね」「そんな情報が、何でギルドよりも先にてめえにまわつてくるんだ？」

「大した事じやないですよ。何の偶然かは知りませんけど、山奥でたまたま乗せた冒険者達が、その入り口を見つけた人達だつたつただけです。まさにその帰りだつたらしいんですけど、移動手段の方をモンスターにやられて途方に暮れてたらしいんですよ」

「・・・てめえはそんなモンスターが溢れる山奥をうろちょろしてたのか？」

「いやあ、そんな事知りませんでしたからね。堂々と通つてたら、意外に会わなものなんですねえ」

他人事みたいに言つたが、一歩間違えたら命がなかつたのは確實である。ただ、ここで笑い飛ばせるというのが、彼がただ者ではないという何よりの証明かもしれない。

ガイはグラスに口をつけてから、話を戻す。

「そういうわけなんで、そろそろギルドにも報告が来て、手練れの冒険者が押し寄せて来ると思いますよ。まあ、山の向こうの方方が大々的に募集してると思いますから、こつちはそれほどでもないと思ひますけど」

「そのダンジョンの規模がどれくらいかは分かるか？」

「いや・・・その人達も入り口を見てただけらしいんで。そういう依頼内容だつたらしいですね」

ギルドからの依頼だつたという事だらう。普通、ダンジョンの入り口は冒険者が勝手に見つけるから、そんな依頼が出る事はほとん

どない。逆に言えば、それだけギルドの憂慮する案件だという事だらう。

「

難しい顔をしている酒場の主人に、ガイは少し間を取つてから聞いた。

「・・・その、ベティちゃんが襲われたモンスター、倒したのはホレスですか？」

ガレットは慄然として答える。

「ああ」

「強さはどんなものだつたかは聞きました？」

「矢を13本使つた」

「あいつらしい表現ですねえ。でも、13本つていつたら・・・」
そこでガイの言葉は途切れたが、言わんとする事は分かる。ホレスの矢は正確無比であり、普通の獣なら1本あれば急所を射抜く。急所がはつきりしないモンスターでも、普通は5本もあれば十分事足りる。その倍以上使つたという事だから、それだけ強力なモンスターだつたという事だ。

「・・・どうも嫌な感じだな」

ガレットの呟きに、ガイが軽く聞く。

「元冒険者の勘ですか？」

「行商の勘は何て言つてるんだ？」

「ここには安全」

「・・・根拠は？」

「勘だからなあ・・・と言いたいところですけど、実はひとつだけいい材料があるんですよ」

方眉を動かしたガレットに、ガイは微笑んで言った。

「レオンは、実はただ者じやないんですよ」

「何？」

確かに、前世を見た事がないという意味ではただ者ではないし、強力なモンスター相手に恐れもなく立ち回つたというのは、聞いた時は思わず感心した程だ。だが、ガイの口振りではそれだけではな

それである。

たつふり間を取つてから、ガイは自信満々の口調で言つた。

「あいつは伝説になる男なんです」

同じくらいたつふり間を空けてから、ガレットは半眼になつて聞いた。

「・・・根拠は？」

「俺の勘」

「帰れ」

グラスを下げようとするガレットを、慌ててガイは止めた。

「いやいや！ 今のは冗談」

「今は？ どうせ他に理由なんかねえだらうが」「あるある！」

「分かった。とりあえず聞いてやる」

「そう言いながら、グラスから手を離さないのは何で？」

「いいから言つてみやがれ」

ガイはそこで困った顔になつた。

それを見たガレットは、口元に笑みを浮かべる。全然明るくない笑みを。

「・・・ガイ。こちらも家族の命が賭かつてるんでな。お前の戯れ言につき合つてる暇はねえんだ。これ以上つまらねえ冗談を言いやがつたら、一度と馬鹿な事が言えねえ身体に矯正してやるから楽しみにしてろ」

「いや、[冗談ではないけど]・・・ただ、あの、最後まで怒らないで聞いていただけませんか」

「そうだな。最後くらい望みは聞いてやひつ」

「最後つて・・・」

「何だ？ もう言い残す事はないか？」

ガイは瞬時に両手を挙げて、後ろに飛び退いた。ウイスキーよりも命を優先したようだ。なかなか賢いと、ガレットは少し感心した。それを見届けてから、黙つてグラスを片づけると、不意にガイが

近寄ってきた。まだ話があるようだ。

「・・・何だ？」

思いつきり不機嫌な声で言つたが、ガイは少し微笑むだけで、それを受け流す。

「レオンの村。サイレントワールドの故郷なのは知っていますよね？」

「それがどうした？」

「これは本当は秘密なんですが・・・レオンが知らなかつたら話しておいて貰えますか？」

ガレットは眉を動かす。どうやら真面目な話らしい。

ガイは小声で話を続ける。

「実は、レオンの村には、サイレントワールドが作ったアーティファクトがあるって話なんですよ」

アーティファクトとは、魔法によつて作られたアイテムの中でも最上位の物の総称だ。一般人はもちろん、冒険者でも一生お目にかかれない事が多い。普通の魔法のアイテムなら、ある程度のジーニアスならば作る事が出来るが、アーティファクトとなると、伝説級の能力がなければ製作不可能と言われている。まさに幻の品であり、それに秘められた力も、他のアイテムの比ではない。

「そのアーティファクトにはいろいろな力があるらしいんですが、常に作用してるのは、村を守る機能なんです。あの辺りに雪女が出来るつて話を聞いた事あると思うんですけど、それがまさにその防衛機能らしいんですよ。アーティファクトの力によつて生み出された幻影なんですが、モンスターとか、あと、盗賊とかの前に現れて、そいつらを魔法で氷漬けにしているらしいです。若い頃のサイレンコールドにそつくりの姿で、その魔法の力も、並の冒険者じゃ勝てないって話です」

「その村で育つたんだから、レオンもそれくらい知つてるだろ？」

当然のガレットの疑問だつたが、ガイは頷かなかつた。

「子供にはそういうお伽話として教えてるらしいんですよ。レオンは16歳だから成人といえば成人なんんですけど、いつ教えるかは親

の勝手らしいんです。というか、レオンの「ご両親が、なんていうか・・・ちょっとほんやりしてるんで、たぶんまだだらうなあと思って」

酷い言われようだが、ガレットにも否定出来ないところだつた。

またベティ経由の情報だが、レオン一家は村でもほんやりした家族で有名だつたらしい。

ガイはそこで身体を離す。微笑みながら軽く左手を挙げた。

「じゃあ、そういう事なんですよ。ボトルの方は、明日取りに来ますんで」

それだけ言つと、出口の方へと歩いていく。

ガレットは腕を組んでそれを見送つていた。

相変わらず、食えない男である。

結局、ガイが何故こんな話をしたかというと、レオンの村がその北西の山脈のどこかに位置するからだろ。ガレットは行つた事がないから分からぬが、ガイは何度か訪ねた事があるらしいから、場所を知つてゐるのだ。

つまり、これから新ダンジョンの話が広まれば、当然レオンの耳にも入る。そうなると、レオンは自分の故郷の事が心配になるだろ。それでも、村にある程度の防衛機能があるといつ事を知つていれば、ある程度は安心出来る。

もちろん、彼は行商人だから、ただの親切心だけだとは思えない。自分やレオンに対して誠意を見せたと捉える事も出来る。彼はそれくらいの計算が出来る男であり、そうでなければ、あの若さでたつた1人、行商を続ける事は出来ない。

そう捉えられる事もまた、お互い承知の上である。商売人とはそういうものなのだ。

「あれー、ガイさん来てたの？」

ガイが出口にたどり着こうとした時、扉が向こうから開いた。そこに立つていたのは、新品の皮鎧を着たレオンと、ベティ、そして鍛冶屋で働くリディアの3人だつた。ばつたり出くわす格好になつたわけだが、当然というべきか、最初に口を開いたのはベティだつ

た。

「お久しぶり。ベティちゃんもリディアさんも綺麗になつたね」歯が浮くような台詞だが、ガイは平氣な顔で言える男なのだ。

「何で私だけちゃん付けなのー？」

「レオンも鎧が出来たんだつて？」

「私の質問は！？」

ガイはあつさりとそれも無視する。扱いに慣れているといふか、完全に遊んでいる。付き合いが長いわけでも深いわけでもないのにここまで事が出来るのは、きっと相性の問題だろう。

レオンは慣れない状況に戸惑っているようだつた。いつもベティに振り回されているわけだから、無理もない。

「えつと・・・」

ガイはそんなレオンの肩に手を置く。あまり体つきはよくないが、それでも身長はガイが一番高い。

「鎧はよく似合つてゐる。だがな、レオン。二股は程々にしておけよ。鎧と一緒にで、2人同時なんてのは無理があるんだ。ベティちゃんはともかく、リディアさんみたいな美人を見て、思わず手を出してしまつた氣持ちは、分からぬではないけどな」

完全な濡れ衣だつたが、ガイがわざと言つてゐるのは明らかだつた。声がやや大きいのは、多くの人間に聞かせる為だつた。酒場中の視線が、出入り口の扉に集中する。

「私はともかくつて何ー！？」

怒つた様子のベティはともかく、レオンとリディアは完全に固まつてゐた。好奇の視線を一身に浴びてゐるのが分かつてゐるのだ。レオンは顔が青くて、リディアは顔が赤いという違いはあるが。

「じゃあな。みなさんお元氣で」

普段通りの口調でにこやかにそつまつと、ガイは颯爽と店を後にした。

酒場には、変な空気が残つていたが。

ガレットは溜息を吐く。

これは一体何のサービスなのだろうか。さつきのアーティファクトの話のように、何か利点があるのだろうか。

考えても答えはない。あるはずもない。

ただの遊びに違いなかった。

そして、結局、この事態を処理するのは、自分の仕事のようだった。

「ベティー・レオン！あの馬鹿の戯れ言はいいから、とつとつ報告しやがれ！リディアの仕事が止まつちまうだろうが！」

ガレットの店内を揺るがす声が、凝り固まりそうだった空気を一喝で吹き飛ばした。

その日、レオンの朝は早かつた。

どれくらい早起きたかというと、泊まっている宿場の主人のガレットよりも早かつた。彼は、毎夜明け前には廊下を徘徊している事で有名だが、今日起きた時には、宿場内は静寂そのものだつた。しばらくしてから用を足そうとして部屋を出たら、その物音でガレットを起こしてしまつたらしく、気まずい思いをした程である。そもそも、ベッドに入った時間が早かつたとは言える。だけどそれ以上に、よく寝付けなかつたのは自分でもよく分かつていて。

高揚と緊張。

それらと上手く折り合いをつける為の心の準備をしながら、薄明を迎える、身支度をして、早い朝食を済ませたレオンは、まだ早朝と言える時間に酒場を後にした。

風がやや冷たい。

だが、それが気にならない程、レオンの頭はこれから向かう場所の事でいっぱいである。

ガレットにも訓練所のアレンにも、ただの通過点だと言われた。それでも、最初の一歩には違ひない。

まだ人気の少ない大通りを歩きながら、装備を確かめる。

腰に下げているのは、スローアイニングダガーが3本とショートソード。それから左腕にはバックラー。もう重さには十分慣れている。投擲もだいぶ上達ってきて、動きながらでも狙つた位置に飛ぶようになってきた。ただし、それは右手で投げた場合だけで、左手で投擲するのはまだ難しい。

一昨日初めて着たのが、鍛冶師のジェフとその娘のリディア特製の皮鎧。ただの皮だけではなくて、特殊加工した金属で網目を作つ

て、それを下地にしてあるという事だつた。軽くて丈夫だが、もちろん、金属製の鎧程の信頼性はない。それでも、命綱としては十分な物である。元冒険者のガレットにも見て貰つたが、初心者には勿体ないと言わせた程、手の込んだ代物だつた。

背中には弓と矢筒。狩人であるホレスのお下がりだが、かなり小型の弓で、矢は10本程しかない。というのも、レオンはまだあまり弓が使いこなせない。よほどのが大きくないと、動きながらは当てられない。急所を狙うなんて事はもつての他。あくまで補助としての武器だ。

そして、昨日最後まで揉めたのが、二の腕に巻き付けてある紐のような物だつた。細くて光沢のある紐の両端に、小さな円錐状の器具が取り付けてある。紐の長さは最長で4メートル程はあるが、端の器具に仕掛けがあつて、普段は短く収納されるようになつていて、それを左の二の腕に2本、右腕に1本巻き付けてある。皮鎧の上からだから、それほど痛くはない。

実はこれはニコルが作った物だ。彼が呼ぶガジェットという物である。

昨日、ニコルは様々なガジェットを見せてくれた。自分の為に用意してくれた物だつたが、予想通りといふかなんというか、その大半が、凶悪な威力を誇る代物だつた。もちろんガレージ内では実践できないから、説明を聞いただけである。粉塵が舞つてみたり、二種類の液体が混合したり、とにかくいろいろ過程はあるものの、最終的には何らかの形で爆発させるのがニコルの流儀らしい。

だが、嬉々として説明していたニコルはともかく、実際に使うかもしれないレオンは、はつきり言つて気が進まなかつた。取り扱いを誤つた場合はもちろん、万が一モンスターの攻撃が命中して起動したりすれば、木つ端微塵になるのは自分の方だからである。

それをなるべく丁重に訴えてみたところ、次にニコルが紹介したのがこの器具だつた。いろいろ用途を教えてくれたのだが、とにかく爆発しない。その一言で、レオンはほぼ即決した。

以上が、レオンの装備の全て。

全てといつても、他にも食糧等の細々とした道具が必要だから、重量にある程度の余裕が必要だ。そう聞いていたからこの装備でいいと思っていたが、実際には初めての事だから加減が分からぬやつてみなければ分からぬ。

例えそれが危険なチャレンジでも。

いつの間にか、レオンは目的地に着いていた。町の南西部。ぽつかりと空いた大穴の中を、石レンガで出来た下り階段が続いている。

その脇には石碑があり、大きくこう書かれている。

ダンジョン。ビギナーズ・アイ。

自治都市ユースアイは、その町の中にダンジョンを有している事で有名でもあるらしい。普通はもちろん、ダンジョンの入り口は町の外にある。そこからモンスターが出てくる事もあるし、観光名所になるわけでもない。だが、この町は、敢えてこのダンジョンを囲むように作られたという事だつた。

それには当然理由がある。最も大きい理由は、今から400年以上前、この町を作ろうとしていた頃に起きたとある事件だつた。

ある町の中心に、突然ダンジョンの入り口が出現して、そこからモンスターが溢れ出てきたのだ。

それは、レオンでも知っている程有名な話だつた。その町の人々は必死に応戦したが、一週間もしないうちに、その町には人がいなくなつた。ダンジョンの規模が大きかつた為、モンスターの強さも相当なものだつたのだ。ダンジョンの規模とその中に潜むモンスターの強さは比例するし、外に出てくる頻度も多くなる。

その話を聞いて、ここに移住しようとしていた人達も不安になつた。そもそも、ここが自治都市なのは、国が普通の都市として認めていないからである。今でこそ大きくなつたが、当時にしてみれば、交通の要所でもないし、高地で冬が厳しいし、季節の変わり目には水害もある。自然の恵みもあるが、裏を返せばそれは厳しさでもあ

る。ただでさえ辺境と言える土地なのに、そんな住みにくい都市を、国力を費やしてまで守らうとは思わなかつたのだ。そこで、自治都市という事にして、軍備や行政を丸投げしているのである。

そんなわけだから、万が一ダンジョンが出現しても国は守つてくれない。自分達を守るのは自分達以外にはいない。だが、人も資産にも恵まれないわけだから、備えようにも備えられない。

力が無かつた当時の人達は、そこで頭を使った。

だつたら、最初からダンジョンがある場所を選べばいいと。本末転倒な話に聞こえるかもしないが、もちろん根拠があつた。踏破済みのダンジョンからはモンスターが外に出て来ない事。そして、ダンジョンの入り口には一定以上の間隔があるという事。どちらも経験則でしかなかつたが、移民がほとんどだつた為、それぞれの故郷の話を聞いているうちに、そういう傾向がある事に思い至つたのだ。

当時、この付近にはダンジョンが2カ所存在した。ここ、ビギナーズ・アイと、町東部の池のほとりにあるというファースト・アイ。どちらも難易度が低めであり、かつ踏破済みのダンジョンだつた。ビギナーズ・アイは、その名の通り、まさに初心者向けのダンジョンであり、万が一モンスターが出てきたとしても被害が大きくならない。

それから150年程すると、町北部の山脈の入り口辺りにダンジョンが出現した。ほどなくして、そこが魂の試練場と呼ばれる特別なダンジョンだという事が分かつた。魂の試練場からはモンスターが出てきた事はない。コースアイの人々は安堵したに違いない。

それから今に至るまで、大きくなつたコースアイの町中に突然ダンジョンの入り口が顔を出すといった事態は起きていない。ビギナーズ・アイからもモンスターが出てきた事はない。

ただ、だからといって、コースアイの先祖が慧眼だつたかというと、それは断言出来ないところだつた。何故なら、400年以上前のあの事件以来、町中にダンジョンが出現したという事例はないの

である。今では、あの町での時、邪悪な何者かが暗躍したのではないかという説が有力という事だった。

もつとも、ユースアイの人達だって、自分達の推測をまるごと信じたというわけではないだろう。ただ、これからこの土地を開発しようという時に、不安は出来るだけ解消しておきたかったはずだ。

その為のお守りというか、気休めのようなものだったに違いない。

最後の想像も含めて、これはデイジーから聞いた話である。彼女は読書が趣味という事で、そういうた歴史に詳しい。ただ、歴史は歴史でも、血生臭い方面に偏っている傾向はあった。そもそも、この話を聞いた時もダガーの投擲の訓練中だったのだ。たおやかに微笑みながら短剣を投げる彼女の姿は、それだけでも十分アンバランスだった。

その光景を思い出して複雑な心境になっていたレオンだったが、ふと我に返る。

目の前には、ビギナーズ・アイと記された石碑。

昔はともかく、今は自分の為にあると言つても過言ではない。

ダンジョン初挑戦。

それにうつてつけのダンジョンなのだ。

レオンは大きく深呼吸する。

ここから始まるという期待。そして、ここで終わるかもしれないという不安。

どちらも、完全には消えなかつた。

さらに小さく息を吐いて、呼吸を落ち着ける。

そして、足を踏み出したレオンだったが、その方向はダンジョン内へ続く石段ではなく、隣に立つ家屋の方だった。

怖じ気付いたわけではない。そもそも、そういう予定なのである。隣に立つのは、この町では一般的な木造2階建て。横にダンジョンがあるわけだが、特別な防備を備えているようには見えない。むしろ、ダンジョンの方に向けて、大きな両開きのドアが備え付けられている程である。

もちろんモンスターを迎える為の物ではない。
レオンはその扉のすぐ脇にある勝手口の方をノックする。

「入れ！」

聞き覚えのない女性の声。だが、もちろん予想はついている。

レオンがドアを開くと、そこは広間だつた。この家の一階部分の3分の1程の広さはある。そのスペースをカーテンで仕切つて、広々とした何もない空間を確保している。本当は何もないわけではなくて、入つた右手には大きめのベッドが置かれているし、木製の小さなイスが2つと棚もある。ただ、それでも広々とした感じがするほど、普通の広間にしては家具が少なすぎる部屋だつた。

そして、室内には先客が3人いた。そのうち2人とは顔馴染みで、1人は、ユースアイのギルドで働くケイト。もう1人は、冒険者向けの道具屋をしているラッセル。

最後の1人は、今日初めて会う人物である。やや明るい髪を頭の上の方で留めている、鋭い顔つきの女性。白いブラウスにカーキ色のズボンという格好だが、何となく立ち方が様になつていて、鋭角的な雰囲気といい、ファッショントイ、どこカリディアに似ている感じがした。彼女があと10年くらいしたら、きっとこういう女性になつているだろう。要するに、それくらい大人の女性である。レオンはベティからいくつか予備知識を得ていた。彼女の名前はイザベラ。ここで医師をしている女性で、現在32歳。子供が3人いる。ただし、絶対に年齢は聞くなという事だつた。

「朝早くから、僕の為にわざわざすみません」

3人の近くまで行くなり、レオンはそう言って頭を下げた。

微笑んで答えたのはケイトだつた。ブラウンの髪と瞳はいつも通りだが、今日は相棒のカーバンクルであるシニアはいない。きっと、ギルドで留守番をしているのだろう。そのせいなのか、いつもはしている頭の装飾品を忘れているような、そんな物足りなさがある。「いえ、これが仕事ですから。見習いの方が最初にダンジョンに入る前には、必ず説明しておくようにと。それがギルドの方針です」

そう言つなり、ケイトは隣のイザベラの方を向く。彼女の話を聞けという事だらう。ラッセルは最初から少し離れた位置でこちらをまとめて眺めている感じだつた。

しばらくしてからレオンが注目すると、イザベラは「あらを踏みするような視線を送つてから、何もリアクションせずに口を開いた。

「レオンだつけ？」

優しいと厳しいの中間のような口調。さばけた感じが出ていて、大人は大人でも、母親らしい口調だと思つた。もつとも、レオンの母親はもつとおつとりした話し方だつたけれど。

「はい」

「とりあえず、言つておくことが3つある」

ダンジョンに入る時の注意事項だらう。レオンが気を引き締めて頷くと、イザベラが右手の指を一本立てた。

「まず、私の事は先生と呼びなさい」

「・・・はい？」

いきなり小さな要求をされたので戸惑つたが、その返事が気に入らなかつたらしい。もともと鋭かつたイザベラの視線がさらに強くなる。

「返事は？」

彼女の低い声に、レオンは咄嗟に頷いていた。

「あ、はい」

「じゃあ、2つ目」

元の声を表情に戻つたイザベラは、右手の指をもう一本立てた。

「私の歳を詮索しない事」

「・・・はい」

既に知つてしまつているわけだが、それを言つのはやぶ蛇だらう。幸い氣づかれた様子はなく、イザベラは3本目の指を立てる。

「じゃあ、最後」

正直、レオンはあんまり期待してなかつた。たぶん、また小さい

要求だらう。一応、この人との関係を良好に保つ上では役に立ちそうだが、それ以外には使えない情報に違いない。

だが、最後だけはそうではなかつた。

「私でも、死んだ奴は治療出来ない」

イザベラの表情は変わらないまま。だけど、隣にいるケイトの表情が、少しだけ曇つたのが分かつた。

女医の言葉は淡々と続く。

「もし怪我をしたら、例えそれが軽傷でも、あと少しでダンジョンクリアでも、今日の儲けがほとんどなくとも、要するにどんな状況でも、とにかく撤退する事を選択肢に入れなさい。軽傷を負つたという事は、次は重傷を負うという事だと考えなさい。重傷を負えば、死はすぐそこだ。死との距離を確認する方法は、自分の身体に聞く以外ない。傷を見たらその背後の死を見る事。経験が浅いうちは、とにかくこれが鉄則だ」

言われた事を噛みしめるようにしながら、レオンはゆつくりと頷く。

それを確認すると、イザベラはケイトに視線を送る。もう言つべき事は言つたという事なのだろう。てきぱきとしていて効率的だ。医者という仕事をしていたら、自然とそうなるのかもしれない。

ケイトの方はどこか表情が固い。それを見ているレオンの方が、少し心配になつた。

「では、レオンさん。私の方からは、ダンジョンの構造について、簡単にですが説明させていただきます。今から説明する事は、この先どのダンジョンに入った場合でも、すべてに共通している事です。今日入つて出ていただければ忘れる事はないと思いますが、万が一確認したい場合には、いつでもギルドに尋ねて下さい」

「分かりました」

そこでケイトは少し微笑んだ。レオンの声に緊張が含まれていなきのを確認して、少しは安心して貰えたのかもしれない。

「まず、ダンジョンの定義についてです。多くの方は、地下空間に

あつて、中にモンスターがいる場所をぼんやりとダンジョンだと考
えていますが、ギルドには正式な定義があります。レオンさんは、
ダンジョンも転生しているといつ話を聞いた事はありませんか？

「え？」

思わず声が出る。そんな話は聞いた事もないし、考えた事もない。
「ダンジョンは入る度に構造が変化します。昨日と今日では、同じ
人が入ったとしても、中にいるモンスターはもちろん、部屋や通路
の配置、鍵や罠の有無も違います。昨日ダンジョン内で落とした物
が、次の日入って見つかる事はありません。逆に、同時に入っ
た冒険者の場合、つまり仲間の場合ですが、仮に中ではぐれてしま
つた場合でも、ダンジョンから出なければ合流出来る事が確認され
ています。ですが、一旦外に出てしまつと、中で再会するのは難し
いと言えます」

そこでケイトは言葉を止めた。「あらをじつと見ている。どうや
ら、理解出来ているか確認したいようだ。レオンが頷いてみせると、
彼女も小さく頷く。

「ですので、ダンジョンは普通の地下空間ではありません。学者の
方々は、そこが時の牢獄ではないかとか、冒険者達の幻覚ではない
かとか、それから先程の、転生しているのではないかという説、と
にかくいろいろ議論されていますが、結論はまだ出ていません。で
すが、ギルドとしてはその結論を待つわけにはいきませんから、と
りあえずとしての定義を設けています。それは、入り口に導きの泉
があるという事です」

導きの泉。レオンも名前は聞いた事がある。

「ビギナーズ・アイにも、入つてすぐにその泉があります。広い部
屋の中央に、白い石で設えられた泉があります。その中心部分に、同
じ石で出来たカーバンクルの像があります。高さはだいたい1メー
トル程の像で、直方体の台座の上に、立派な翼の生えたカーバンク
ルが座っています。それは見ていただければ分かるのですが、問題
はそのカーバンクルの見てる先です」

「見ている先？」

ケイトは軽く頷く。

「その導きの泉がある部屋に入ると、ちょうど台座の上のカーバンクルに見つめられる格好になります。というのも、像のカーバンクルは必ず入り口の階段の方を見ているからなんです。そして、実はこれが目印になっています」

「目印ですか？」

「はい。導きの泉はダンジョンの中に何カ所もあります。そして、そこにある像のカーバンクルは、すべて上り階段がある方を見ています。それで、不思議な話なんですけど・・・その上り階段は、そのすべてがダンジョンの入り口につながっているんです」

頭の中がこんがらがつた。

「えっと・・・どういう意味ですか？」

レオンが首を捻りながら聞くと、ケイトは少し苦笑したようだつた。

「仕組みは誰にも分かりません。ですから、事実だけをお伝えします。ダンジョンの入り口は一カ所だけです。ですが、導きの泉は、つまり、出口は何カ所もあるんです。中には何十階層もあるダンジョンもありますが、例えば、地下20階の導きの泉にある出口を使つたとしても、ほんの数十秒歩くだけで、最初に入つた入り口から出てきます。例え2階でも、200階でも、道のりは同じだと言われています」

摩訶不思議な話だつた。どんな仕組みなのか想像もつかない。

「ですから、導きの泉の場所さえ覚えておけば、入った場所を覚えておかなくても、ダンジョンから出る事が出来ます。ダンジョンは出る事さえしなければ構造が変わりませんから、余裕がある時に地図を書いておくといいと思います。或いは、目印でも構いません。退路の確保という意味で、是非利用して下さい」

よく分からぬものを信じ切つて利用していいのだろうか。レオンはそう思つたが、命に関わる事だから、それくらいは妥協した方

がいいのかもしれない。帰り道は短い方がいいに決まっている。長ければ長い程、モンスターに会う確率が上がるのだから。

レオンの頷きを見てから、ケイトは話を再開する。

「導きの泉についてですが、その部屋にはモンスターが出ないとも聞きます。もちろん、絶対出ないとは言えないと思いますが、遭遇しにくい場所とは言えると思います。それに、湧いている水も綺麗で、飲んでも平気だという事です。ですから、休憩をとる場合、可能なら、導きの泉で休むのがいいと思います。ダンジョンには時間の感覚がありませんから、無理をしないように、なるべく余裕をみて休息して下さい」

「・・・親切設計ですね」

思わずぼやくと、ケイトは苦笑いする。

ギルドからの説明はまだ続いた。

「最後に、いわゆるボスモンスターについて説明します。ボスモンスターは、必ずダンジョンの最深部にいるわけではありません。ですが、9割以上は最深部にいると考えていいと思います。そして、他のモンスターより強力な場合がほとんどですが、これも絶対とは言えません。ですから、当然、ボスモンスターにもギルドの定義があります。それをお見せしようと思いまして、今日用意してきました」

「え？見せられるものなんですか？」

「はい」

ケイトはすっと右手を身体の後ろに隠していたが、それをすっと自分の胸の前に持つてくる。

彼女の親指と人差し指の間にあったのは、トウモロコシの粒くらいの大きさの、真っ赤なガーネットのような石だった。

レオンは顔を近づけてそれを見た。ただの宝石のようだが、よく見ると、中でゆっくりと水流のようなものが起きている。石ではなくて、枠の中に液体を閉じこめているのだろうか。

「これは魔石です」

全く心当たりのない単語だ。

それを表情から読みとつたのか、ケイトは補足する。

「ルーンとも言いますが、魔石を加工したものがルーンですので、これは正式には魔石です。ただ、世間一般にはルーンという言葉が定着しています。レオンさんも、ルーンという言葉なら聞き覚えがあるのではないですか？」

「いえ・・・全然」

田舎者丸出しだが、本当に聞き覚えがないのだから仕方ない。その返答には表情を変えず、ケイトは補足を続ける。

「魔石はその名の通り、魔力を秘めた石です。これを職人の方が加工するする事で、ルーンとなります。ルーンは魔力に特定の働きかけをする物で、魔法の武器やアイテムに使われるのが主な用途ですが、それらには使えないような弱い魔力のものも多いです。そういふ物は、一般的な装飾品としても使われています。見ての通り、見た目が綺麗ですし、魔力が弱いとはいっても、ちょっとした魔除けくらいにはなりますので、富裕層の方々の間では人気がある物なんですね」

「という事は・・・もしかして、これも高価な物ですか？」

レオンの質問に、ケイトは軽く頷く。

「これは最小クラスの物ですけど、それでも、ルーンになつたらそこそここの値がつくものです。というかですね、実はこれ、ビギナーズ・アイのボスモンスターがドロップする物なんです」

ドロップという言葉にも聞き覚えがない。落とすという事だらうか。だが、この前遭遇したモンスターは、ルーンどころか何も痕跡を残さなかつた。煙のように消えてしまつたのだ。そういう事態はギルドへの報告義務があるという事だったので、当然ケイトにも伝えてある。

彼女は魔石片手に話を続けた。

「通常のモンスターはまれに何か残していく場合もありますが、それはそのモンスター固有の素材である場合が全てです。例えば、獣

に酷似していれば、牙や爪。植物に似ていれば、茎や種等です。ですが、ボスモンスターのみ、倒すと必ず魔石を落としていきます。つまり、魔石を持つて帰れば、そのダンジョンをクリアしたと認められます。魔石の形状や大きさは、ダンジョンによってほぼ決まりますから、魔石さえ見せていただければどのダンジョンをクリアしたのかが分かります。さらに、魔石の流通は基本的にギルドが引き受けています。ですから、換金という意味でも、魔石を得たらギルドに来て下さい。それがレオンさんの資金になりますし、またダンジョンクリアというステータスにもなります

「それ・・・もし拾い忘れて出てきたら、どうなりますか?」

ケイトはにっこり微笑んだ。

「やり直しになります。ですから、絶対に忘れないで下さい」

努力が全て水の泡。資金もそうだが、ダンジョンクリアも認められない。結構重要な事だが、うつかり忘れてしまいそうな気がして、レオンは正直不安だつた。

ケイトはラッセルに目配せする。彼女の話はここで終わりのようだ。

いつの間にか、ラッセルは背負い袋を抱えている。袋の容量の割には、中に入っている物は少な目なようだ。外からは、何が入っているのかよく分からぬが、端から松明が突き出しているのだけは分かった。

彼はこちらに歩いてくると、それをレオンに差し出す。片手で持ち上げられるくらいだから、結構軽い物のようだ。

「とりあえず、食糧は最小限だよ。2日分。あとはまあ、いろいろ入つて来るから、後で確認しておいて。在庫は確保してあるから、店まで来てくれたらいつでも補充出来る。だけど、たぶん足りない物とか、これがあつたら便利つて物もあると思うから、気づいたら僕に言つてね。なるべく早く用意するから」

レオンは袋を受け取った。

ラッセルはそれっきり何も言わなかつた。この程度の説明なら、

事前に話してくれれば済む事だが、実は今日彼がここにいるのは、彼がそう申し出たからだつた。どうしても直前に直接渡したいと言つたのだ。その事実だけで、彼の気持ちが伝わつてくる気がした。3人の顔を見てから、やっぱりレオンは言わないではいられなかつた。

「あの、本当にありがとうございます」

イザベラが淡々とした口調で言つ。

「仕事だ。というか、もしかして1人か？」

「はい」

「それなら焦らない事だ。隠しても仕方がないから言つておくけど、ビギナーズ・アイは、4人パーティならば初心者でも、入つたその日にクリア出来る。だが、それが3人になると2日かかるようになる。2人だと1週間。1人だと2週間以上かけるつもりでいなさい。入つて出てを繰り返して、徐々に慣れるようにしなさい。そうしないと、下手すると一生出て来られなくなる。その代わり、1人でクリア出来たら、4人でクリアした奴の数十倍は価値がある経験が出来る」

優しさと厳しさ、両方とも伝わつてくる。

「・・・はい。これからお世話になります」

そこで、イザベラは笑つたようだつた。

「レオンは本当に変わつた子だな。本当に冒険者か？噂になつていたよ」

その噂の発信源に、心当たりがないわけではなかつた。

「・・・ベティが何か言つてましたか？」

だが、彼女はあつさり否定した。

「いや、うちの子達だ。一番上の子がアレンのところで剣を習つてる」

「あ、そなんですか・・・」

まさに奇遇である。

「下手な真似をするな。レオンが帰つてこなくなつたら、理由を子

供達に説明する羽目になる。そんな事は御免だ」

「・・・はい」

まだ付き合いが短いとはいえ、コースアイの人達とも他人ではないのだ。

ケイトとラッセルの顔を見ると、2人とも微笑んでいた。多少ケイトの表情が不自然だつたけれど、それは経験の差だろうか。彼女が案内した見習い冒険者のうち、どれくらいの人が帰つてこなかつたのだろうか。それを聞いてみたくなつたが、すぐに思い直す。今の自分が聞いてもどうにも出来ない事だし、何の為にもならない。3人とも、もう何も言わなかつた。

聞くべき事は聞いたのだ。

これはただの通過点。だから、見送りなんていらない。見送りなんてされたら、もうお別れみたいだ。ベティではないが、それくらいならクリア出来た時にお祝いして欲しい。

レオンは笑顔になつて、その場で挨拶した。出来るだけ頬もしく見えるように。

「それじゃあ、行つてきます」

踏み出す。

それが、半月程かかつてようやく実現した、レオンの冒険者としてのスタートとなつた。

入り口から覗いてみると、階段の先の部屋から灯りが差しているのが見える。扉などはないようだ。距離があり過ぎて、ここからは部屋の様子は分からぬ。

この階段に罠があつたりしないだろうか。

いきなり罠というのも容赦のない話だが、絶対ないとは言えない気がする。そもそも、どの程度用心すればいいものなのか、加減が分からぬ。ダンジョンとは、何の為にあるのかも、誰が造ったのかも分からぬものなのだ。ただ経験則として、罠が仕掛けられている事が多いというだけの事である。侵入者を撃退する意志は見えるのだが、何故撃退したいのかは分からぬ。これが仮に、元々誰かのお屋敷だつたとか、誰かが住んでた洞窟だつたとか、そういう来歴でもあれば、罠がありそうな場所に見当がつくのだが。

それでも、冒険者達はここを進むのだ。

彼らは怖じ気付いたりしない。どんなダンジョンでも、どんなモンスターでも、きっと冒険者が倒してくれる。そういう希望を一身に背負う存在なのだから。

自分もそういう人間になつてみたい。それは結局レオンにとつて、自分を知りたいという事に他ならない。前世が分からぬ自分は、どんな人間なのか自分でもよく分からぬ。空虚というか、足元がよく見えない。他の人にはある来歴が自分にはない。だが、もし冒険者になれたら、人の希望を背負えるだけの人間になれたという事なのだろうか。

それもよく分からぬ。

ただ、それでも挑戦してみたいと思ったのだ。自分を見られるチャンスがあるなら、見てみたいと思った。自分を確かめてみたいと

思つた。

そして、もし見られるとしたら、それはダンジョンの中だと思ったのである。

魂の試練場。

導きの妖精。

レオンは小さく頷いた。

進もう。

ダンジョンに足を踏み入れる。石材の固さを確かめるような、そんな慎重過ぎる足取りだったが、これでいい。自分1人なのだから、自分らしい方法でいい。

一步一歩慎重に進む。

下り階段は思ったよりも明るい。上からの太陽の光と、下からの室内の灯り。階段には何の光源もないのだが、その両者の光だけでも十分な程明るかった。もしかしたら、この通路に使われている石材が、光をよく反射しているのかもしれない。

結局、最初の部屋にたどり着くまでに10分以上はかかった。安全を買つたと思えば、安いものかもしれない。

聞いていた通り、最初の部屋には導きの泉がある。もちろん見るのは初めてだが、間違えようがない。中心に白亜の石で出来た泉と台座。その台座の上には、実寸大よりも少し大きいくらいのカーバンクルの像。普通の妖精とほとんど同じだが、やはり言われた通り、翼のようなものが背中から2枚生えている。その翼を中途半端に開いた状態で、まるで躾られたかのように行儀良く座っている。翼のせいなのか、どこか優美に見える。

当然だが、その瞳も白い。全身真っ白の石像が、こちらをじっと見つめている。

どこかで見た事がある。なんとなくそう感じたレオンだったが、すぐに思い出した。

そして、驚いた。

初めてモンスターと戦ったあの日。その後、ホレスの演奏を聞い

ていた時、一瞬だけ見えたあの光景。白毛に紅眼のカーバンクルがこちらをじっと見ていた。その光景と今の光景がそつくりなのだ。違いといえば、妖精の瞳の色と、翼の有無くらいのもの。

妖精もそうだが、背景には一点の違いもない。

まさにこの場所。少なくとも、こことそつくりの場所が、あの時見た光景の場所。

それを確かめずにはいられなかつたレオンは、部屋の入り口で、じつと像の方を見つめたままになつてしまつた。今にもその石像がひび割れて、中から紅眼のカーバンクルか出でくるのではないか。そんな気さえした。

しばらくして、ようやく我に返る。

こんな事をしてゐる場合ぢやない。部屋の様子を確認すらしていかつたのだ。モンスターがいたら怪我どころでは済まなかつたかもしない。

自分は一体何をしていたのか。

気を取り直して、部屋を観察する。

ケイトが言つてゐたように、相當な広さがある部屋だ。一コルのガレージより広い。中央に泉があるものの、10人くらいは問題なく寝られるだろう。壁も床も天井も、どうやら石レンガのようだ。白に少し黄色が混じつたような、見た事もない石材である。各壁の中央辺りには、松明に似た物が取り付けられていて、煌々と部屋を照らしている。

ふと、先日のモンスターの事を思い出した。そして、すぐに腰を屈めて、床に触れてみる。

結構しつかりしているようだし、仮にここから何か出できても、音がするのですぐ分かるだろう。

壁にも軽く触れてみた。床と同じような感触。天井は高すぎて手が届かない。

水の流れる音が泉の方から響いている。

この部屋は上から見たらほぼ正方形の構造になつてゐるが、入り

口から見て、左と右の壁のそれぞれ中央辺りに木製のドアがある。正面の壁には何もない。

進むなら、左か右か。そういう事らしい。

とりあえず、レオンは中央の泉に向かつた。水が流れる音がしているのに、泉の中の水が増えたり減つたりする様子がない。どんな構造になっているのか見ておこうと思ったのだ。

縁に立つて覗き込むが、ただ白いだけ。穴はおろか、突起や凹みのようなものもない。

水の流れる音がするだけ。

中央の像や泉の縁に触れたり、軽く叩いて音を聞いてみたりしたが、何も分からぬ。

手がかりはない。

レオンは左の扉に向かつた。なるべく足音を立てないようにする。そつとドアに耳を当てる。何も聞こえない。

今度は右のドアの前まで行き、また耳を当ててみた。もちろん、音は立てないようにする。

音が聞こえた。

糸車が廻るような、カラカラという音。まさか本当に糸車があるとは思えないが、音はそつくりだった。

迷わず、レオンはまた反対の扉に向かつた。

こういう時、どちらのドアを選ぶべきなのか。そういう類の話を全く聞かなかつたわけではないのだが、その答えは十人十色と言つてもよかつた。そして、そのいずれの答えも、思わず頷けるようなものだつたのだ。だから逆に、あまり参考にはならなかつた。余計混乱したと言つてもいい。

だから、今の選択はレオンの勘である。

音がしない方が安全という根拠はない。だけど、何か異変があつた時、聴覚を頼りに出来る。

異変を察知出来たからといって、対処出来るのは限らないのだが。左の扉の前でもう一度耳を当てて音がしない事を確かめてから、

少しだけ開けてみた。

その隙間から向こう側を覗き見る。

扉の先には通路が続いているようだった。ドアは1人が通れる程度の大きさのものだが、通路の幅は3人並んで歩ける程広い。向こう側にも灯りがあるらしく、通路の様子もよく分かる。一応、背負い袋の中には松明もあるが、使わないで済むならそれに越した事はない。

通路は20メートル程先のところで右に折れているようだ。左側の壁にはその曲がり角の辺りに、右側は通路の中程の位置にドアが1つずつ。

何かが動く気配はない。

まるで深夜に部屋を抜け出る時みたいに、忍び足で通路に出て、静かにドアを閉めた。

静寂。

何も物音はしないが、もちろん安全が保障されているわけではない。

間違つた選択をすれば、それはすぐに自分の身に跳ね返つてくるのだ。

思わず、唾を飲み込む。

ダンジョン攻略の為には、ボスモンスターを倒す事が条件。そして、ボスは大抵最深部にいると言われている。ここビギナーズ・アイは2階層ダンジョンで、ここは地下1階。つまり、下り階段を見つけたら、ボスがいる階層にたどり着く事になる。だが、階段がどこにあるのかはほぼランダム。決まった法則はないとの事だった。とりあえず、しらみつぶしに確認していくしかない。

レオンはまず、すぐ近くの右のドアを調べる事にした。少しずつ、空白を埋めていくように進んでいきたい。不用意に進んで挟み撃ちにでもされたら、仲間がいない自分には対処出来ない。

罠がないか注意しながら、そつと扉を引く。向こうには灯りがないようだ。かなり暗い。

それでも、こちらからの光が差し込んで、近くだけはうすりと確認出来る。

何かと目が合つた。

暗闇に浮かぶ青い觸體。

その眼窩がじつとこちらを見ている。

動く様子はない。

他人の部屋に間違えて入つた時みたいに、たつぱり間を空けてから、レオンはゆっくりとドアを閉めた。

考える。

今のは何だろう。

モンスターだらうか。それにしても、こちらを襲つてくる気配はなかつた。どちらにしても、不気味なのは間違いなかつたのだが。それでも、悪い状況の方を想定しておくべきだらうと考える。つまり、モンスターだと思つておくべきだ。さつきは襲つてこなかつたが、次もそうとは限らない。

戦つて倒しておるべきだらうか。だが、さつきのが一体だけとは限らないのだ。暗くてよく見えなかつたから、もつと大量にいる場合もある。そうなつたら、自分一人の手には負えないだらう。

しばらくその場で頭を悩ませていたレオンだつたが、そこで、ニコルのガジェットの存在を思い出した。

右腕に巻き付けていた方を、ぐるぐると解いていく。現在の長さは1メートル程。

両端の円錐状の器具を持つて、その扉と導きの泉の中間辺りまで行く。そこでレオンは、床から1メートル程の高さの壁面に、円錐の平面部分を押し当てた。ニコルに教えられたように、傘の部分にある突起部分を操作する。しばらくしてから手を離すと、円錐状の器具は接着されたように壁から離れなくなつた。

もう一方の端は反対側の壁面に取り付ける。通路の幅は3メートル以上あるが、端の器具内に予備部分が収容されているのだ。簡単な操作で、紐といつか糸の長さを調整出来るようになつている。

程なくして、通路の高さ1メートルの辺りに1本の見えにくい糸が張られた格好になる。これ以上ないくらい、原始的で簡易なトラップ。

ニコルの発明にしては穏やか過ぎるが、端の器具が手の込んだ代物で、何度でも取り外し出来るし、取り付いている間は滅多な事ではない。空気の圧力を利用しているとの事だが、レオンにはよく分からない。本人の目標としては、モンスターが引っかかるて糸が切れた時に、その器具が爆発するようにしたかったそうだが、それだと小型化出来なかつたらしい。そこで、もつと切れにくい丈夫な糸を使う事にして、簡易トラップという事にして落ち着いたようだ。結構高級な糸らしく、人が乗つても切れない程丈夫な物らしい。ちなみに、この糸は昔鍛冶場からくすねてきた物らしい。後でリディアに伝えておくべきだろうかと、少し悩んでいるところである。いずれにしても、こうして罠を張つておく事にした。自分が引つかからないようにならね。そうすれば、落ち着いて迎撃出来るはずだ。その後、背負い袋から松明を取り出した。通路に取り付けられている松明から火を貰おうとしたが、その時初めて全然熱を持つていない事に気付いた。どうやら魔法の灯りのようだ。仕方なく、発火用の石と紙切れを取り出して、それで火をつける。

松明は左手で持つた。

先程のドアの前に立ち、音をたてないように小さく息を吐く。覚悟を決める。

先手必勝。

ドアを少しだけ開いてから、思い切り蹴破る。

さつきと全く同じ位置に青い觸體。

確認すると同時に、ダガーを右手で飛ばす。

完璧な軌道。

ダガーはあつさりと觸體の眉間辺りに突き刺さり、それだけにとどまらず、その周辺をバラバラに碎いた。

だが、それだけではなかつた。

残つた部分は、まるで振り子のように床をぶらぶらと揺れています。正確に言えば、振り子そのものだつたわけだが。

元々、違和感はあつたのだ。こちらと目が合つたはずなのに、身動きひとつしない。追いかけてこないのはまだしも、まったく動かないのは、意志あるものとしてはおかしい。

だが、まさか、こんな悪戯みたいな物があるとは思わなかつた。レオンは松明の灯りを近づけてみる。

髑髏の頭頂部。そこから目立たないくらい細い糸が、天井に伸びている。紛れもなく、ぶら下がつてているだけだつた。

「・・・なんだ」

ほつとしたような、騙されて少し悔しいような、複雑な気持ち。あまり気持ちがいい悪戯ではないが、噛みついてくるわけではない。だが、自分が思わず声を出していたのに気付いて、思つたより緊張していた事が分かつた。モンスターと戦うという事に、それほどの心理的な負担があつたのか。

やはり、先日的一件があつたからだろうか。

最初の戦闘が敗北だつたというのは、どうやらマイナスな部分が多いようだ。負けた経験だけで勝つた経験がないから、どうしてもいいイメージを持つのが難しい。

悪戯ひとつに、馬鹿みたいに怯えなくてはならない。そんな自分が弱く感じられて、そして情けない。

少し落ち込む。

だから、レオンは気付かなかつた。

確かめなかつたのだ。

そこが何の為の部屋なのか。

しばらくして、ダガーの分だけ増えた重さに耐えられなくなつたのか、糸が切れて髑髏が床に落下する。乾いた破碎音と、金属音。それから一瞬遅れて、カチッという音が部屋の奥から聞こえた。レオンが視線をそちらに向けたのと、弦を弾く音がしたのはほぼ

同時だつた。

その音を聞いた事があつたのは不幸中の幸いだつた。クロスボウがボルトを発射する音。クロスボウは弓の一種だが、自分の力で弦を引くわけではなく、板バネの力を利用する。ニコルが趣味で作つてゐる装置の中にそれを改造したものがあつて、発射する音を聞いた事もあつた。

だから、咄嗟に気付いた。

罠だ。

半歩身を引く程度しか動けなかつた。

一瞬前まで自分の右半身があつた空間を、視認出来ない程の速度の何かが射抜く。

背後の壁で乾いた音が響く。

壁の陰に避難してから、後ろを振り返る。

折れたボルトが床に落ちていた。

自分の身体を射抜いていたかもしれない、凶器。

跳ね上がつた鼓動を抑えながら、頭の中を整理する。要は、あの觸體を吊つていた糸がスイッチだつたのだろう。冒険者が觸體を攻撃するなり取り外したりすれば、その分そちら側が軽くなる。すると、反対側の重りか何かが下に落ちて、罠を起動させる仕組みだつたのだ。今回は幸運にもダガーが刺さつたまま残つたから、すぐには起動しなかつたのだ。

もつとしつかり天井を見ていればよかつた。せっかくの幸運をふいにするところだつたのだ。

自分は何故見なかつたのか。

落ち込んでいたからだ。

何を馬鹿な事をしてゐたのだろうか。

未熟。

その一言に尽きる。

だが、不思議とレオンはそれで気が晴れた。開き直つたと言つてもいい。

自分が未熟なのは百も承知だ。だから、危険な思いをするし、惨めにもなる。

だけど、そもそも何のリスクもなく冒険者になれるわけがない。もしそんな冒険者がいたら、頼りない事この上ない。

それを自分は、何を勘違いしていたのだろうか。今日すぐにダンジョンをクリア出来ると思っていたのだろうか。

自分は何を落ち込んでいたのだろう。これからこんな経験ばかりだというのに。

小さく息を吐く。今度は音を抑えたりはしなかつた。
来るなら来い。むしろ、来て欲しい。そう思えるくらいでないと
いけない。

まず生き残れるようにならないと。

状況を把握する。震は発動したが、それで安全を確保したわけではない。じつくり室内を観察しなければ。投げた短剣も向こうの床に残つたままだ。

松明の灯りを差しのべながら、すぐ横のドアの奥をそつと覗き見る。

あまり広くない部屋。用途は分からないが、木製の棚が奥の壁に2つ。そこにあつたクロスボウからボルトが発射されたようだ。
天井には予想通り、糸を通せる木製のリングが何カ所か取り付けられている。

床には粉々になつた髑髏。すぐ脇に短剣。

そして、ここから見て右奥の方には、これみよがしに小さな木箱が置いてある。

もしかしたら、何か役に立つ物かもしね。そういう考えが、頭の片隅にはあつたが、今の自分にはそんな余裕はない。

レオンは問答無用で、その木箱めがけてダガーを投擲した。

問題なく突き刺さつたが、普通の木材に刺さつた時のような硬質な音ではなかつた。カリカリに焼いたパンをフォークで刺した時のような、パリッとした音。

それは紫の煙を上げたかと思うと、あつという間に姿を消した。何かのモンスターだつたらしい。どんなモンスターだつたのかはさっぱり分からなかつたが。

意外にやれるじゃないか。

そんな思いがわき上がりそうになつたが、すぐに飲み込む。これから先しばらく、もしかしたらずつとかかもしれないが、とにかく今は必要ないものだ。

部屋に入つて、ダガーを2本とも回収した。今はそうでもないが、何度も投げたら刺さりにくくなつていくに違いない。次からは砥石を用意した方がいいかもしないと思った。

部屋には役立ちそうな物はなかつた。だが、クロスボウは二コルが喜ぶかもしれない。そんなに重い物でもなかつたので、持つて帰る事にした。自分が通路に張つていた罠も、忘れずに回収しておく。それから先も、とにかく扉をひとつひとつ確かめていく。中には鍵がかかつた扉もあつたが、開けられないような複雑な鍵はなかつた。罠もいくつかあつたが、気付かずにはつかかつたものはない。ところのも、明らかに不自然な物ものばかりだつたからである。最初の部屋の髑髏のように、なんとなく気になる物や無視しにくい物があつたら、なるべく飛び道具を当ててみる事にした。そして、その後すぐに、壁の陰に隠れる。難易度の低いダンジョンだからなのか、それで困るような罠はなかつた。

モンスターも少ない。途中でモモンガみたいなのが3匹飛んで来るには來たが、ほとんど嫌がらせレベルの能力しかなかつた。といふのも、どうやら田があまりよくないらしい。こちらの顔に飛びかかるときたら怖いが、ほとんどそういう事はなく、ただこちらの周りを飛び回つているだけの有様だつた。

それでもやはり、そう簡単にはいかなかつた。

レオンが今身を屈めて覗き見ているのは、もしかしたらこのダンジョンで一番広い部屋かもしれない。40メートル四方はある大広間。何も物がない部屋なのだが、それは物に限つた話である。

黒い鳥型のモンスター。何か意味があるのか、あの時のサソリと同じく一つ目である。大きさはそれほどでもないが、小動物なら十分に狩つていく程はある。その鳥が高い天井付近に3匹、休む事なく旋回している。

そして、下を守つているのは、カタカタと音をたてながら歩いている人の骸骨だつた。右手に剣、左手に盾といつ標準的な装備だが、鎧はない。その骸骨が4体。

1人だと手に余る数である。だが、骸骨の動きは遅いから、駆け抜けていけば、攻撃されずに向こう側に見える扉までたどり着けるかもしない。狭い部屋だつたら無謀な話だが、これだけ広い部屋だから可能性はある。それでも、あくまで可能性だ。骸骨の動きがあれで全力とは限らないし、扉に鍵がかかっているかもしれない。それに、上にいる鳥型のモンスターをやり過ごすのは難しいだろう。やり過ごすのが無理なら、おびき寄せるのがいいだろうか。

レオンが今いるのは、その広間に続く扉の前である。ドアを少しだけ開けて覗き見ているのだが、こちらの通路ならば、それほど広くはないから、一ノル特製の簡易罠を使う事も出来る。足払いくらいにはなってくれるかもしれない。だがそれも、倒すとなると難しい。

こちらは諦めて、引き返すべきだろうか。

ここまで分かれ道のようなものはなかつたから、引き返すなら最初の部屋まで戻る事になる。

それも仕方ないか。

そう思つた時だつた。

薪が破裂したような音。

すぐ近くで起きた突然の爆音にレオンの心臓は飛び跳ねたが、衝撃は身体にもあつた。

ドアをこちらに向かつて蹴破る何かがいたのだ。

咄嗟にドアから離れながらも、レオンの頭の中は思いの外冷静だつた。

事態を把握しようつと試みる。

骸骨の足音はしなかつた。

という事は鳥の方か。向こうからは見えないようにしていったつもりだが、もしかしたら、匂いか何かで分かつたのかもしれない。

その予測を裏付けるように、開かれたドアの向こうから、鳥が3

匹とも、一斉に襲いかかってきた。

鳴き声はない。そもそも口がない。

レオンは咄嗟にダガーを投げつけてから、身を屈めた。それが1匹に命中。後の2匹は翼をはためかせながら、こちらの頭の上を飛び抜けていく。

まだ左手には松明を持っている。それがふと頭に過ぎつた。動物ならともかく、モンスターに役に立つだろうか。

鳥は低くなつた天井にぶつかりながら旋回している。止まつているも同然だつた。

すぐにダガーを抜き、2投目。

問題なく命中。

床に崩れ落ちるモンスターを尻目に、残る1匹の動きを確認する。まだ旋回中。3投目も十分間に合つ。

だが、そこで気付いた。もう一本は左側にぶら下げているのだ。もちろん手が届かないわけではないが、時間がかかる。そこまでの余裕があるかどうか、レオンは一瞬迷つてしまつた。

結果、投擲のタイミングを失う。

モンスターは、既にこちらに滑空してきていた。

咄嗟に左手を掲げる。松明よりも、盾を掲げたつもりだつた。だが、モンスターは火を見て驚いたようだつた。滑空の勢いが衰える。今度は見逃さなかつた。

モンスターと盾が接触したと同時に、レオンの右手が腰から抜いたショートソードが、3匹目を仕留めた。

消滅していくモンスターを確認してから、レオンは振り返つた。やはりというべきか、骸骨の方もこちらに気付いたようだつた。

ゆっくりとこちらに近づいて来ている。あまり速くは動けないのか、まだ開かれたドアの向こう側だった。

レオンは迷った。進むか、退くか。今は骸骨しかない。だから、広間を通り抜けられるかもしれない。

悩む事数秒。

レオンは広間に背を向けた。

そのまま走り出す。

ショートソードを腰に差し、2匹目が落下した辺りに落ちていたダガーを回収する。

それを腰に下げながら、床に手を突き、再び反転したダガーを回収する。

駆け抜ける。
1匹目を仕留めたダガーを拾いながら、広間に飛び込んだ。ここも屋内には違いないのだが、まるで屋外に出たかのような開放感があつた。

骸骨の動きは遅い。

その間を抜けるようにしながら、レオンは奥に見えていた扉を目指す。戦わないで済むなら、それに越した事はない。

十数秒程で近くまでたどり着く。

だが、すぐに駆け寄るわけにはいかない。もし罠があるとしたら、広間のどこかよりも、扉の近くだろう。他には何の特徴もない部屋なのである。今までのパターンからすれば、一番立つ位置に仕掛けているに違いない。

走つて速くなつた呼吸を整える。

背後の骸骨達とはまだ距離がある。慌てなくとも大丈夫なはずだ。近づいてきたら音で分かるはずだし、ここが開かなかつたとしても、また駆け抜けて向こうに戻ればいい。

レオンは慎重に扉に近づく。一步一步、床の感触を確かめるように歩いた。

程なくして扉にたどり着く。

金属製の扉だった。遠くからは分からなかつたが、装飾に隠され

るようにして鍵穴があるのが見える。

開けようとしてみるが、やはり鍵がかかっていた。どれくらい時間がかかるのか、外から判別するのは難しい。それに、背後からモンスターが迫っている状況で、自分が解錠に集中出来るかは難しいところだった。頭と手に相当な神経を使うのだ。後ろの方まで気にしていられない。

やはり戻ろう。

レオンは振り返る。

だが、そこで気付いた。

こちらに迫っている骸骨が2体しかいない。あとの2体はどうに行つたのか。

その2体の姿を見つけた時、レオンは驚いたといつよりも、何故か感心してしまった。

骸骨モンスターは半分だけ、向こうの扉の前に陣取っているのである。

戦略とかそういう物とは無縁なのだろうと思いこんでいた。そもそも、この骸骨達は動きが鈍いので、意志のようなものがあるとも思えなかつた。だが、それはただの先入観だつたようだ。少なくとも、敵の退路を断つ事を思い付くくらいの知能はあるらしい。

2体ずつに分かれているというのも、なんともそつないところだつた。扉の前に1体だけだつたら、そちらを奇襲して突破出来たかもしれない。だけど、2体ずつだつたらそれも出来ない。その方が逃げられる可能性も減るし、こちらに向かってくる方も2体いるから、数の上で優位なのは変わらない。

まさに冷静沈着。

閉じこめられたのは確かだつた。

出たければ倒せという事が。

レオンは松明を床に置いた。元々この広間は、十分な魔法の灯りがある。背負い袋も下ろす。それほど重くはないが、身体が軽いに越した事はない。

左手と右手。両方に短剣を一本ずつ持つ。ちゃんと回収していく良かつたと、心からそう思った。

近づいてくる2体の骸骨は、つかず離れずといった距離を保つている。

遠距離なら攻撃し放題。とりあえずダガーを投擲しようとしたレオンだが、どこを狙おうか迷う。人型の骸骨だが、もちろん心臓も脳もない。どうやって動いているのか見当もつかない。

しばらく思索した結果、とりあえず頭を狙つてみる事にする。的として一番大きい。この距離なら、外す事もない。

呼吸を整えて、右腕を一閃。

真っ直ぐに頭蓋骨めがけて飛んでいったダガーだが、驚く事に、それは阻まれた。

骸骨の左腕が、まるで計算されたかのような正確な動きで、その軌跡を阻んだのである。

今までとは段違いの機敏な動きに、レオンの脳裏には先日のサンリ型モンスターの光景が一瞬フラッシュバックした。

だが、すぐに振り払う。冷静になれと言っている自分が、どこかにいるような気がした。

思つたより手強いかもしないというのはマイナスだが、守るうとしたという事は、頭部への攻撃が有効と考えられる。それが判明したのはプラスだ。

左手のダガーを腰に戻してから、弓を手に取る。あまり上手ではないが、こういう時に使わなければ意味がない。

矢を取つてから、構えて弦を引く。

十分弓がしなつてから、手を離した。

矢の残像だけが残る。

速度は十分だが、頭蓋骨には命中しなかった。距離が近過ぎるのであるかもしだれないが、自分の腕が足りないのが原因だろう。はっきり言って、あの小さい的に当てる自信はない。

レオンは距離を取りながら、新しい矢を用意する。

次は身体を狙う事にした。隙間の多い身体だが、的としては大きい。

2本目は胸の辺りに命中。

少し傾いてから、次々と矢を取つて射る。

3本目、4本目と命中したが、5本目はあさつての方向へと外れた。

あと半分。焦る気持ちを抑えつつ、また距離を取る。

6本目も命中。だが、あまり効いている様子はない。

7本目。

放つた瞬間、いい感触がしなかつた。力が少し抜けてしまつたようだ。どこか失敗したような気がしたのだ。だが、それが逆に良かつたらしい。

その矢は偶然にも、頭蓋骨の眼窩の辺りを射抜いていた。

骸骨は紫の煙を上げながら消滅した。

思わず声をあげそうになつたくらい嬉しかつたが、そんな場合ではない。まだもう近くにもう1体。それ以外に2体もいるのだ。

矢はあと3本。

8本目。

少し力を抜いてみたが、やはりそう上手い話はなかつた。外れたのを見て、内心かなり落胆したが、なんとか気を取り直す。

9本目。胸に命中。だが、モンスターの様子に変化はない。

ラストの10本目。

精一杯の願いを込めてはみたものの、やはり当たつてはくれなかつた。

半分溜息のような息を吐いてから、弓を背負い直す。1体倒せただけでも儲けものだと思うしかないだろ？

ショートソードを抜く。

前回のサソリの時とは違い、今度は鎧もある。それに相手も1体だ。向こうの方が、武器も盾も立派な物だが、それくらいは妥協するしかない。

レオンは駆け出す。骸骨の周りを回るようになながら、隙を窺う。レオンは騎士でも戦士でもない。正面から切り込むつもりはない。骸骨の動きは遅い今まで、こちらの動きについてこれていな。

背後を取つてから、思いつきり剣を振り下ろす。

だが、それは甘かつた。

骸骨は向こう側を向いたまま、腕だけ動かして、盾であつさりとそれを受け止めたのである。視界もさることながら、人間だとあり得ない関節の動きだつた。

その動きに目を疑う。

隙だらけだと、モンスターにも分かつたのだろうか。

やはり後ろ向きのまま、右脇腹めがけて剣を振るつてくる。

その動きに、レオンは気付けなかつた。

鎧越しの衝撃だが、裂けるような痛みがした。

レオンの身体を、骸骨は右腕一本で綺麗に吹き飛ばした。

床の上を数回転がつてから、レオンは左手をついて起きあがる。

痛みで呼吸が乱れる程だつた。

骸骨の持つ剣は立派な物だが、さすがに丈夫な鎧なだけあつて致命傷ではない。それでも、骨が折れていないので幸運だつただけだろう。だが、もちろん無傷というわけはないし、若干右手の握力が弱い気がした。

それでも、剣は手放していいない。

骸骨は振り返つてこちらに近づいてくる。

前後どちらでも見えるようだし、後ろ向きでも、剣も盾も問題なく使えるのだから、振り返る必要などないだろう。もしかして、それを隠しておくためだけにわざわざ向きをえていたのだろうか。だとしたら、なんとも小憎らしい話だ。

なんとなく、そこで悟つた。

このモンスターはかなりの剣の腕がある。訓練所のアレンと少し似ている剣かもしれない。少なくとも、自分よりもずっと上手なのは間違いない。

勝てない。

正攻法では。

レオンは距離をとりながら、右腕に巻いていた二コルのガジエットを解く。そして、それを今度は右手の手平に巻いた。その糸の先端の器具をショートソードの柄に接着させる。これで、仮に剣を手放したとしても、床に落ちる事はない。

ショートソードをぶら下げたまま、両手にダガーを握る。一刀流は自分にはまだ難しいが、今は贅沢を言つていい場合ではない。手首を曲げて右手の感じを確かめてみる。怪我の影響はさほどない。だが、剣を下しているから、とにかく重い。投擲出来ない事はないが、狙い通りの位置には飛ばないだらう。だが、それでもやるしかない。

勝つ為に必要なのは、手数。

骸骨の方を見やる。悠々と歩いているようだ見えた。

これで駄目ならもう後はない。

一呼吸する。

レオンはモンスターに向かって走り出しながら、同時に右手で投擲を行つた。

狙いは頭部。投げる前は心配したもの、上手く飛んでいる。

骸骨は盾をかざして防ぐ。

この時には、レオンはもう接敵していた。

既に、右手にはショートソードを握っている。いつでも握れるようにする為の処置だ。

それを頭蓋骨めがけて振り下ろす。

モンスターの盾はこれも的確に受ける。

剣と盾が接触する前に、レオンはあつせりショートソードを手放した。この攻撃はフェイントだ。

既に左手の短剣を繰り出している。

実はこれもフェイントだつた。そもそも、自分はまだ左手を上手く使えないのだ。

骸骨がそれを迎え撃つように、右手の剣を振り下ろすのが見える。ここがタイミングだった。

左手のダガーを離しながら、その剣に盾を合わせる。さうに、その手放し方が問題だった。

その短剣が敵の頭蓋骨めがけて飛ぶように手放す。ここが正念場。というか、ほとんど賭だった。

骸骨はそれにも機敏に対処した。

ショートソードからは既に力が抜けている。それくらいは、その剣を受けた盾から伝わってくるだろう。ならば、ダガーの方を対処するべきなのだ。それが刺さるかどうかは別にして、そちらの方が危険なのは間違いないのだから。

まさにギリギリの位置で、盾の端でその短剣を弾いた。

内心、レオンは舌を巻いた。

なんという対応力だろうか。見た目は骸骨でも、腕も頭脳も馬鹿に出来ない。

だけど、それでよかつた。

きつと出来ると見込んでいたのだから。

骸骨が短剣を弾いた一瞬後。

力を失ったはずのレオンのショートソードが、再び命を取り戻したかのように一閃し、モンスターの頭蓋骨を捉えた。

モンスターでも、もしかしたら驚いたかもしれない。

レオンは煙を上げ始めたモンスターを見ながら、そんな事を考えた。

だが、それも一瞬の事。

骸骨は敗北を認めた騎士のように、潔くその姿を消した。

右手にはショートソードがしっかりと握られている。

最後の攻撃の姿勢のまま、じつとその剣を見つめていたレオンだったが、しばらくして大きく息を吐いてから、ゆっくりと体勢を戻していく。

相手の盾を攻略する為には、2方向から同時に攻撃するしかない。

だが、向こうにも腕が2本ある。敵の攻撃を防ぎながら、さりげに両手で攻撃するのは、普通なら不可能な事だ。

だから、あんなややこしい方法をとつたのである。一度右手がフェイントだと思わせれば、特に、一度柄から手を離すのが見えたら、さすがに油断してくれると思ったのだ。そうすれば、頼りない左手の攻撃を受けてくれる。その瞬間なら、相手の剣は自分の盾が、相手の盾は左手から飛んだ短剣に対処中であり、自分の右手が空いている。だが、そこで腰から剣を抜いている時間はないのが悩みどころで、正直、一瞬でまた手放した剣を握れるかは賭だつた。

結局のところ、運の勝利。

あまり喜べない。

だけど、喜びも悲しみも、命あればこそというじゃないか。

右の脇腹はまだ痛む。重傷という程ではないが、イザベラ医師の言つ通り、これ以上戦えれば重傷を負うのは確実だろう。

そろそろ潮時だろう。

ふと、入ってきた方の扉を見やる。

まだ、門番の骸骨が2体陣取っている。意地でも逃がす気はないうだ。片方だけでも近づいてくるかもしれないと思ったが、その辺りは徹底している。少なくとも、向こうは食糧がなくとも生きていける。我慢比べならば向こうが有利という事なのだろう。

短剣を回収してから、レオンは反対の扉へ向かう。近くには、背負い袋と松明があるが、松明はいい加減消え始めていた。

装飾が施された、金属製の扉。

向こうが駄目なら、こちらを開けるしかない。

背負い袋から、解錠ツールを取り出す。

針金を差し込んで程なくすると、簡単にはいかない事が分かる。

高級品の鍵に違いない。あまり嬉しくはないが、さっきの骸骨に比べたら何でもない。

意識を頭と手と耳に集中する。

そこで気付いた。

扉の向こうから、ほんの少しだが水の流れる音がする。

今日聞いた音だ。

入り口で聞いた音。だけど、今は出口を示す音。

根拠はない。

だけど、確かに信じたくなるものなんだ。

先輩冒険者達の気持ちに一步近づいた気がする。
だが、それを確認するのはここを開けてからだ。
レオンの意識が、鍵穴の中へと深く浸透していった。

「ほら。やつぱり爆弾があつた方がよかつたでしょ？」

大きな瞳をこちらに向けながらそう言つたのは、幼い容姿が特徴の、黒つぽいショートヘアの人物。今日は紺色の上下に濃い紫のジヤケットという、ニコルにしては大人っぽい格好だが、それでも全く大人見えない。子供が親の服を仕立て直して着ているような印象だつた。もしかしたら、本当にそうなのかもしれない。

ニコルはガレージの床の上に座り込んで、見慣れぬ金属製の器具を片手に、ダンジョン土産のクロスボウを解体しているところだつた。かなり手慣れている様子で、視線はこちらに向いているが、手は問題なく動いている。

その頭の上では、カーバンクルのクロが、じつとその解体作業を見守つていた。

ガレージ内唯一のイスに座らされているレオンは、控えめに答える。

「あつたらあつたで、怖かつたと思つけど・・・松明片手だつたし火氣厳禁の代物を持つていたら、きっと松明なんて使えなかつただろう。

そこでニコルは呆れたような表情になる。

「レオンは度胸があるのかないのか、よく分からぬよね。モンスターと戦うのは平氣なのに、火薬を使うのは怖いの？普通は、そんな生きるか死ぬかみたいな経験をしたら、じゃあ爆弾のひとつでも備えておこうつてなると思つけど」

「そ、そつ？」

「もし最後の部屋で持つてたら、そんな一か八かみたいな賭をしなくても済んだわけでしょ？」

「・・・済んだかもね」

確かにそんな兵器を持ち込んでいたら、それを放り投げるだけで済んだかもしね。

ニコルは手元に視線を戻しながら言った。

「やっぱり、威力があるやつを持つておいた方がいいと思うな。今のレオンに一番足りないのは、決定力というか継戦能力っていうか、結局、ダメージの総量だよね。昨日の鳥とか骸骨みたいに一発で倒せるような雑魚ならいいけど、ボスはもつとタフなわけだから、戦っているうちに息切れするのが目に見えるよ。それに、ボスだけならともかく、取り巻きがいるかもしねわけだし、そんなのまでいたらもつとダメージを出さないといけない。火薬でも何でも、使える物は使った方がいいと思うなあ」

とても理路整然としている。本物の冒険者みたいだと思ったが、よく考えてみれば、ニコルはスニークの記憶を受け継いでいるのだ。もしかしたら、その前世の経験に基づいた話なのかもしれない。だが、それを持ち歩く事を考えると、どうしても乗り気になれないかつた。特に、灯りが必要な場所では松明を使う事になる。松明と火薬を一緒に持ち歩くなんて、考えただけでも恐ろしい。

そんなレオンの心境を読みとったのか、ニコルは解体作業の片手間といった感じで口を開く。

「そもそも、松明なんて使わなくてもよかつたのに」

「え？」

真顔で聞き返したレオンを、ニコルは顔を上げてじっと見つめた。クロスボウを解体中だった手が止まっている。その為なのか、頭の上に張り付いているクロモ、いつの間にか視線を上げてこちらを見ていた。

ライトブラウンと紫の双眸。4つの瞳に注視されて、レオンは少しじろぐ。

しばらくして、ふとニコルは後ろを振り返った。

実は、今日はガレージにもう一人いるのである。

「ラッセル。レオンに道具の説明しなかつたの？」

ニコルの質問を受けて、ラッセルは困ったような表情を浮かべる。彼は、ガレージの入り口に積み上げられた木箱の中身を確認しているようだ。

「してないけど・・・見たら分かるような物しか入れてないよ」

実際その通りだったが、ニコルはその回答が不満だつたらしい。

「もしかして、つまらない原始的な物しか入れてなかつたの? だめだなあ、ラッセルは。今は便利な物がいくらでもあるんだから、多少高価でもそういう物を入れておかないと。そうしないとラッセルだつて儲からないよ。古くて安い物よりも、新しくて高い物を使って貰つた方が、お互いの為になるに決まつてるんだし」

「そう言われても・・・僕はギルドの注文通りに入れただけだから」「ギルドに進言したらいいじゃない。もつといい物を買って欲しいつて」

「いや・・・ケイトさんが困るだけだと思つよ。道具屋とギルドの板挟みになつて」

「そういう仕事だから仕方ない・・・けど、うん。そうだね。ラッセルの言つ通りかも。ケイトさんは眞面目だから、きつと言つても聞いてくれないね。こういう時には頭が固いけど、まあ仕方ないよ」

「僕はそこまでは言つてないけど・・・」

ますます困つた顔になつたラッセルだが、ニコルはもう興味がなくなつたのか、再び解体物の方へと視線を戻す。ニコルと心伝心なのが、クロの視線も下を向いた。

ラッセルもすぐに自分の仕事に戻る。彼の前にある木箱は自分で持つてきた物で、どうやらニコルが注文していた物らしい。その中身が間違つていなかつたか確認しているようだ。

急に静けさが訪れたガレージ内で、レオンは少し気まずくなつた。自分も鍵開けの練習を始めてもいいのだが、同じ場所に3人もいるのに、何も会話がないというのは寂しくないだろうか。

昨日、レオンはダンジョンに初めて入り、そして、なんとか軽傷

だけで出来られた。出た時はもう黄昏時だったが、診療所のイザベラ医師は何も言わずに診療してくれた。そして、ただ一言、明日は休養しなさいとだけ言われて、診療所を追い出された。

そういうわけで、いつもは訓練終わりの夕方に来る事が多いこのガレージを、初めて午前中に訪問した。訓練所のアレンとも話をしたいところだが、まだこの時間は仕事中だから、邪魔をしても悪いと思ったのだ。

すると、珍しい事に先客がいたのだ。ラッセルも仕事でここに来ていたわけだが、レオンも手伝おうとしたらやんわりと断られた。今日は休養日だという事を彼は既に知っていた。誰から聞いたのかは尋ねなかつたが、だいたい予想はつく。

いずれにしても、珍しいシチュエーションには違いない。ガレージに3人以上集まる事は滅多にないはずだ。何かニコルに変化がないか、レオンは少し期待した。

だが、結果はこの通りである。

ニコルはマイペースそのもの。嬉しそうでもないし、嫌がつている様子もない。気を遣うわけでもなければ、誰かを邪険に扱うわけでもない。拍子抜けする程、普段通りだつた。

だが、それが逆にレオンは不思議だつた。ニコルは凄く落ちている。これならば、町の人とも普通にやつていけるのではないだろうか。少なくともレオンにとっては、ニコルは十分普通の人間だ。おかしいとか怖いとか、そういう印象はほとんどない。

それなのに、ニコルは外に出ようとしている。その理由が、レオンにはさつぱり分からない。町の人と距離を取らなければいけない理由なんて、一体どこにあるというのだろうか。

そんな事を思い耽つていたレオンの耳の近くで、突然声が響いた。

「レオン、生きてる？」

はつと我に返ると、やつぱりというか、案の定ニコルの顔がすぐ近くにあつた。さすがに慣れてきたのか、少し仰け反るくらいで、あまり驚かなかつた。

「あ、『じめん。ちょっと考え事してて……』

その言葉に、二コルは困ったように頬を搔く。

「考え事するのはいいんだけど……僕の気配、全然気付いてないよね。ところが、僕が田の前にいる事の方に慣れてるし。それって、ますます鈍くなつてるつて事じやない？」

鈍くなつているかどうかはともかくとしても、危機感が薄れていると言わても文句は言えない。

「……そうだね。『じめん』

「本当に大丈夫かなあ。ほんやりしてるレオンの為に、これから毎回、ガレージに罠を仕掛けておいてあげようか？」

その提案 자체はいいかもしないと思つたが、二コルの作る罠といえば、間違なく爆発系である。

「……命の保証がある罠なら」

二コルは腕を組んで真面目な顔になる。そして、一度大きく頷いてから、こう断言した。

「命の保証がある罠なんて、罠じゃないね」

物凄く重みのある言葉だつた。昨日借りたガジェットでさえ、例え馬車が通るような道に仕掛けておけば、大惨事になりかねない代物だ。しかも、あれで妥協品なのである。本来なら起爆装置になるはずだったわけだから、もし完成していたら、致命的な罠になつていただろう。

そんなものを仕掛けられたらたまらない。命がいくつあつても足りない。

「……『じめん。やつぱり遠慮するね』

レオンの言葉に再び重々しく頷く二コル。頭上のクロもそれに伴つて頷いたように見える。だが、その動作に何の意味があるのかは謎だつた。

そこで二コルは腕を解いて、普段通りの表情で聞いた。

「それより、結局レオンはどうするの？」

何が結局なのか分からず、レオンは聞き返した。

「どうするつて、何を？」

「だから、爆弾。というか・・・ああ、そつか。ちょっと待つてね」

「二コルは振り返った。

「ラッセル！」

まだ仕事中のラッセルだが、それでも手を止めてこちらを向く。

「何？」

「レオンの持ち物、ちょっとくらい融通利かないの？」

ラッセルは少し考えてから答える。

「元々、本人の希望にはなるべく応えるように言われてるんだ。だけど、あくまで予算内でだから、二コルが言うような高価な物は無理だよ」

残念がつているかと思ったが、再びこちらを向いた二コルの顔には笑みが浮かんでいた。子供に似つかわしくない邪な笑みに一瞬驚くが、よく考えたら二コルはもう16歳なのだから、全く不自然な事ではなかつた。

いざれにしても、嫌な予感がしたのは確かだ。

「レオン」

「な、何？」

「今の話聞いたよね？」

「よっぽど耳が遠くない限り、聞き逃すわけがない。

「聞いたけど」

「つまり、レオンが希望すれば、大抵の物は用意して貰えるんだよ」「安い物ならね」

すかさず釘を刺したのはラッセルである。

「・・・ラッセルさんはああ言つてるけど」

レオンの言葉に頷いた二コルは、笑みをたたえたまま「うつ言つた。

「簡単な事だよ。貰えないなら、自分で作ればいいよね」

しばらく思考に空白が出来たレオンは、首を捻つてから聞いた。

「・・・どういう意味？」

「大丈夫だよ。爆弾なんて簡単に出来るから」

あまりに自然な笑顔で言ったので、つられて頷きをうになつた。
だけど、すんでのところで気付く。

何か今、ニコルは妙な事を言わなかつただろうか。

「・・・今何て言った？」

「だから、大丈夫だつて」

「その後」

「簡単に作れるから」

「・・・その間」

そこでニコルは苦笑した。

「そんなに爆弾作るの嫌かなあ」

唖然として固まるレオン。好きとか嫌いとか、それ以前の問題として、この子供にしか見えない人間が何を考えているのかよく分からなかつた。

爆弾を作る。

そんな危険物を作らせて何をさせよつといいのか。といつか、自分を何にするつもりなのか。

そこで、仕事が済んだのか、ラッセルが近寄つてくる。

「まあ、知識として、火薬の事を知つておくのはいいんじやないかな」

彼の言葉を聞いて、レオンはやつとニコルの言葉の意味が分かつた。

「あ・・・もしかして、ニコルが言つてたのはそういう意味？」

ニコルはすました表情で首を傾ける。

「結局のところ、そう言えない事もないけどね。だけど、レオンは冒険者志望なんだから、知識がどうこうつて言つたところで、用途としては武器として使うのがほとんどだと思つよ。爆弾を作るつていう表現で正しいと思うけどなあ」

正しいのかもしれないが、そんな説明をされたら素直に頷きにくい。

ラッセルがこちらを見て、丁寧に補足してくれた。

「分かるとは思うけど、二コルは凄く頭がいいんだ。だから、何でも自分で勉強して、自分で作れるようになつて。これだけ多くの物を作れるのも、細かいところから自分で作つてるからなんだよ。その方が安く済むし、使わなくなつた物を分解して再利用したりも出来る。レオンも火薬の知識があれば自分で調合出来るようになるから、少ない予算でやりくり出来るし、ダンジョンの中の物を利用出来るようになるかもしれない」

「それに、火薬詰めたまま渡したら怖くて使えないんでしょ？だつたら自分で詰めて貰うしかないし、ある程度知識があれば、何が安全か危険か分かつて貰えると思うからね。まあ、全部覚えるのは無理でも、その火薬に対する偏見がなくなるくらいまでなら大丈夫でしょう」

「後を継いだ二コルの説明で、ようやくレオンの頭でも事情が飲み込めた。

「だけど、自分でそんな知識が理解出来るだろ？か。あまり頭がいいわけではないし、正直、火薬とか爆弾とかいつた物は、物騒で手に負えない物というイメージしかない。猛獸とか暴れ馬とかと、だいたい似たような物だ。」

そんな心境を汲み取つてくれたらしく、ラッセルはこう勧めてくれた。

「火薬に限つた話じゃなくて、もっと広い知識として教わつたらどうかな？モンスターの中には酸や毒を使ってくるモンスターもいるし、植物や鉱石なんかを見分けられるようになつたら、どこへ行っても役に立つと思うよ」

なるほど。それは納得出来ると思つていたら、そこで二コルがからかうように言つた。

「ラッセルは口が上手いよね。さすが商人」
若干照れたようにして、ラッセルが謙遜する。

「いや、僕はそんな・・・」

「だけど、女心の方はまだまだなんだよね？」

何かを誤魔化すように咳払いするラッセルだが、レオンはよく分からなかつた。

「女心？ ラッセルさんは誰か・・・」

「あ！ 僕はそろそろ失礼するね。じゃあ、また」

早口にそう言つたラッセルは瞬時に反転する。背筋がぴんとしていて、何かの式典の時みたいだつた。

その数秒後には、ガレージから姿を消していた。いつもの彼からは考えられないような機敏な動き。人が変わつたというか、まるで別の生き物みたいに思える。

果然としたレオンだったが、ニコルの方は特に変化はなく、いつもの表情だつた。むしろ、いつもより無表情だつたかもしれない。余程興味がないのだろうか。

しばらくしてから、ニコルはガレージ奥の本棚の中を捜索し始める。頭上のクロは、いつの間にか眠りこけていた。

レオンは何を聞こうか考えていたが、その結論が出るよりも早く、ニコルの方から質問していく。

「えつと、とりあえず、いろいろ勉強するつて事でいいよね？」

ラッセルの事はもうどうでもいいのか、その前の話題に戻つていた。

「あ、うん。お願ひしてもいい？」

「それはいいんだよ。僕としても、レオンの火薬嫌いが直らないと仕事にならないから。それはいいんだけど・・・」

珍しく、ニコルの歯切れが悪い。

「どうかした？」

ニコルは軽く頷く。

「ラッセルは大きく言つたけど・・・僕は火薬とか装置とか、そういうのには詳しいけど、他はあんまり自信ないなあ。全然勉強しないわけじゃないけど、他はもっと詳しい人がいると思うよ」

「そうなの？」

「うん。毒とかだったら普通に医者の方が詳しいと思うし、鉱石は

鍛治師だよね。ジョーフさんを知つてると思つけど、あそこは自分で精鍊もしてるからかなり詳しいと思つよ。まあ、あの一家は男が全然喋らないから、聞きたかつたらリディアに頼むしかないけど

「へえ・・・」

「植物は・・・フィオナさんかシャーロットかなあ」
どちらも聞き覚えのない名前だった。

「フィオナさん・・・? シャーロットって?」

ニコルはきょとんとした顔でこちらを見る。

「レオンは会つた事ないの?」

「ないと思うけど・・・」

少なくとも、名前を聞いた記憶はない。
不思議そうな顔をしていたニコルだったが、やがて納得したように小さく頷く。

「あ、そうか。レオンはアスリートだつたつけ」

今更な発言だが、外見を見てジーニアスだと思い込まれる事はよくある事だった。きっと、その時の印象がどこかに残つていたのだろう。

本捜しを再開しながら、ニコルは説明した。

「フィオナさんは伝承者の先輩なんだよ。だけど、アスリートだと縁がないかもね」

「ああ、なるほど・・・」

どうやら伝説のジーニアスの記憶を受け継いでいるようだ。アスリートの自分が会つても、あまり意味がないという事だろう。

「シャーロットは魔法関係の道具屋をしてるんだ。ラッセルの店の隣なんだけど、入つた事ないの?」

「あ、そうか。実は、僕はまだラッセルさんのお店に行つた事がなくて・・・」

レオンは苦笑いしながら説明する。ラッセルは町の中で見かける事が多いから、用事があつても、店まで行かなくて済んでしまつていたのだ。よく考えると、あまりいいお客様とは言えない。

「二コルはこちらを向いて少し微笑む。それが少し、レオンには意外だった。愛想笑いに見えるが、あまりそういう事はしない人物なのだ。

「まあ、まだレオンが行くような店じゃないと思つよ。シャーロットの店の商品はローンを使つた物も多いから、もつちよつとお金が稼げるようになつてから行つた方がいいね」

口調は普通だった。少し釈然としなかつたが、レオンも普通の質問をする。

「そのフィオナさんとシャーロットさん、植物に詳しいの？」

「魔法を使う時に植物が必要だつたりするんだよ。それと、魔法のアイテムの材料とかにも。だから、詳しいんぢやないかなあ。狩人のホレスも詳しいとは思うけど、知識の量ではジー二アスの方が断然多いと思うよ。狩人は現地の事には詳しいけど、ジー二アスはどこに行つてもやつていけるように、世界中の知識を学ぶからね。だいたい、ホレスはあんまり本なんか読まないと思うし」

確かに、ホレスは本どころか、あまり文明的なものに興味がなさそうだった。

本棚から数冊本を取り出しながら、二コルは言葉を続ける。

「まだ会つた事ないなら、会つてみたらいいと思うな。植物の勉強に付き合つてくれるかは分からぬけど」

少し気になつたので、レオンは聞いた。

「その2人つて、どんな人？」

二コルはすぐに答えず、大きな本1冊の上に割と薄い本を2冊積み上げる。体格の小さい二コルには重そうだったので、レオンは近寄つてその本を受け取つた。

そこでようやく、二コルは答える。

「フィオナさんはね、たぶんこの町で一番頭がいい人だよ」

「え・・・二コルよりも？」

迷う事なく、二コルは頷く。器用にしがみついたままのクロが少し揺れる。

「シャーロットはちょっと変わり者というか……強いて言つなら、僕に似てるよね」

最後の言葉は苦笑混じりだった。レオンには、それが何故かの
かは分からぬが。

「でも、2人ともいい人なのは間違いないよ。まあ、悪い人なんて
いないけどね」

「あ、うん。そうだね」

確かに、この町の人はいい人ばかりだ。そう思つて頷いたレオン
に、ニコルはまた少し微笑んだ。またあの愛想笑いのような微笑み。
今日はよく見られるが、やっぱり少し違和感がある。

そんな疑念をよそに、ニコルはレオンが抱えた本をポンと叩く。
「とりあえず、これを貸すから、時間がある時に読んでみて。あ、
上2冊ね。大きいのは辞書だから」

「うん……ありがとう」

「お礼はいいけど、うーん……結局、すぐには無理だよね」
レオンは首を捻る。

「何が？」

「いや、だつて、すぐには火薬の事覚えられないと思うよ。だけど、
またそのうちダンジョンに行くんでしょ？やっぱり、何か威力があ
る武器がいるんじゃない？」

「あ、うん。それなら大丈夫」

ニコルは瞳を一度瞬く。

「何か当てがあるの？」

「先輩に相談してみる」

「アレン？ それともホレス？」

「両方」

ニコルは苦笑いする。

「どちらにしても、すぐには無理だと思つけどなあ」
仮に何かアドバイスされたとしても、すぐに身につくわけではな
い。

レオンは頷いた。

「うん。でも大丈夫」

「何で？」

「すぐには無理だつて分かつてゐるから」

一瞬ニコルの動きが止まつた。瞳が大きくなる。

驚いているという事に気付くのに少し時間が必要だつた。もしかしたら、驚いた顔を見たのは初めてかもしれない。

ニコルは呟くように言う。

「・・・たまにレオンは、意味不明な事言うよね」
そんな事を言われたのは、実は初めてではない。

「そ、そう？」

ニコルは笑つた。今度はいつもの笑み。

「じゃあ、一応僕からアドバイスしておくよ

「あ、うん」

「伝承者になる為の条件つて知つてる？」

「え？」

知つてゐるが、それが何だと言うのか。

頭上の妖精を撫でながら、ニコルは言つた。愛おしむような表情だ。

「たまには、このお飾りの妖精達に働いて貰つといいんぢやないかな」

その言葉が聞こえているのかいないのか。

漆黒のカーバンクルは、今も夢の中にいるようだつた。

冬の影はもうない。

それに気付いたのは、今が初めてだったのかもしれない。少なくとも、はつきりと意識したのは今が最初。だけど、身体の方はしっかりと季節の風を覚えている。もしかしたら、乾いた冬の風が去った事にずっと前から気付いていたかもしない。

この間の雨。あれが変わり日だったのだろうか。

まだ日は高い。

春の陽気は本当に心地よい。レオンの故郷のような極寒の地はもちろんだが、どんな土地でもきっとそれは同じだろう。今のような暖かくて穏やかな午後は、何をするにも最適だし、何だって出来る。そんな可能性に後押しされた、身体が弾むような開放感がこの季節にはある。

アレンがいる訓練所の前にたどり着くと、いつものように子供達の歓声が聞こえてくる。それを聞くまでもなく、アレンがまだ仕事中なのは分かっている。

一度酒場に戻つて昼食をとり、一コルに借りた本を読み始めたレオンだったが、これを半日中続ける自信はなかつたし、一日中身体を動かさないというのが、思ったよりも苦痛だった。それならば何か手伝いでもした方がいいと思い、こうして早めに出てきたのだ。

とりあえず挨拶だけはしておこうと、小屋の横を抜けて訓練場の方へ行こうとしたレオンだったが、意外な事に、小屋の中から話し声がした。

立ち止まつて、耳を澄ませてみる。

女性2人の話し声。聞き覚えのある声だった。

少し迷つたものの、レオンは一声かけていく事にする。恐らく彼

女達も仕事中だが、それなら手伝つていけばいい。

来た道を引き返して小屋の入り口に戻るうとしたレオンだが、そこにたどり着く前に、中から人が出でくる。

女性ではなく、男性だった。とてつもなく背が高い。

「あ、どうも・・・アレンさん、仕事中じゃなかつたんですか?」近づきながら声をかけたレオンを、アレンは特に驚きもせず見下る。彼が立て話をする場合、見下さないで済む場合はほとんどないだろう。

彼は簡易防具にそつけているものの、武器は持つていない。どちらかというと、仕事終わりのよつな格好だった。

「レオン。遅かったな」

感情のはつきりしない声だが、きっと皮肉ではないはずだ。いつものアレンの口調である。それでも、一応レオンは頭を下げた。「すみませんでした。今日は休養するよう言われていたので」

「それは聞いた。今日訓練しようとしたが、一度と無理が出来ないよつこ、もつと重傷を負わせてやれとな」

「・・・ちなみに、それは誰から聞きました?」

既に広範囲に伝わってしまったようだ。その指令の発信元を特定するのは難しそうだった。もちろん、容疑者はそれほど多くないのだが。

それはともかくとして、レオンはアレンが出てきた小屋の方を見る。彼女達の話し声はまだ聞こえてくる。

「中にはいるの、リティアさんとトイジーさんですよね?仕事中ですか?」

アレンもそちらをちらりとだけ見た。

「訓練用の武具を点検しているところだ。もつ終わる。彼女達に何か用事か?」

「あ、いえ・・・」

用事がない事もないが、ここに来た目的はアレンと話す為である。

だが、話し声を聞きつけたのか、中からその2人が出てきてしまつた。リディアはいつかの白いシャツと黒いベストに、淡いブルーのズボン。だが、今日は胸の辺りに、髪と同じ色のブローチをつけている。枝に小鳥がとまっているような形。瞳とも近い色だからなのか、よく似合っている。デイジーの方は薄い茜色のワンピースだが、白いブラウスを肩にかけていた。そして、リディアのブローチと同じ色の髪留めをついている。形は何かの花をモチーフにしているようだ。

「お身体は大丈夫ですか？ レオンさん」

デイジーが笑顔で聞く。あまり心配しているように見えないが、深刻な顔をされるよりもよっぽどいい。大怪我をしたならまだしも、軽傷で済んだのだから。

それにしても本当に知れ渡っているんだなと苦笑いしつつ、レオンは頷く。

「ええ、まあ・・・すいません、お仕事中なのに」

「いいんですよ。もう終わりましたから」

「リディアさんも、お仕事ご苦労様です」

彼女は軽く頷いただけだった。

何故かそこで、会話が途切れる。

無表情のアレンとリディア。微笑んだままのデイジー。それはいいのだが、誰も動こうとはしないし、口を開こうともしない。

いい加減耐えきれなくなつたレオンが、仕方なく口を開いた。

「・・・あの、皆さん。僕はもういいですから、お仕事に戻つて貰つていいですよ」

アレンが即答した。

「だから、こゝして待つていいんだが」

「・・・何をですか？」

真顔で聞き返したレオンに、彼は少しだけ表情を動かす。

「レオンは俺にアドバイスを貰いに来たんだろう？ 話を聞かない事にはアドバイス出来ない。だから、話し出すのを待つている」

しつかりとこちらの目的を見抜いていたようだ。さすがの洞察だと思ったが、もしかしたら、そこまで情報流出していたのかもしれない。

そのアレンの言葉に、デイジーが続いた。

「私も、しつかり聞いて祖父に伝えなければいけませんから。私が伝えれば、レオンさんが祖父のところまで出向く手間が省けます」
口ではそう言つたものの、彼女の濃い瞳には拭いきれない輝きがあつた。あまり考えたくはないが、きっと戦闘系の話全般に興味があるのだろう。

下手に突っ込むのも嫌なので、黙つてリディアの方を見る。

その視線に気付いたリディアは、少し考えてからこう言った。

「・・・武器と鎧の具合を聞いておきたいから」

「どうやら全員に話す必要があるようだ。」

レオンは溜息を飲み込む。あまり格好いい話ではないから、出来るだけ聞かせたくない。少なくとも、喧伝してまわるような話ではないだろう。自分が未熟だと説明してるようなものなのだから。

だが、ここで抵抗しても無駄なのは明らかだつた。ダンジョンから帰つたその日に、既に大方の事をベティに白状させられている。だから、もう皆に知れ渡つたも同然だ。自分がいくら沈黙を決め込んだところで、彼女に聞けば全て話すだろう。

「・・・あまり面白い話ではないですからね」

せめて、それだけは言つておいてから、レオンは話す覚悟を決めた。

だが、さすがに立つたまま聞かせるのは悪いので、小屋の中を借りる事にする。屋内には、大きなテーブルが2つとイスもいくつがある。そこに、男女向かい合うように座つた。レオンの隣にアレン。彼の前にはリディア。自分の正面はデイジーである。アレンに聞いて貰う為にここに来たわけだから、この配置はおかしいような気がしたが、デイジーは聞き上手でもあるので、話易い事は確かだつた。他の2人はあまり相槌を打つたりしないのだ。少なくとも、一番興

味津々に聞いているのは、間違いなくデイジーだった。

「さあ、どうやつて話したらいいか迷うところだつた。実際、レオンはどちらかといつて話下手な方だと自覚している。だが、ベティは遠慮なく質問してきたし、ニコルの時はラッセルが、今はデイジーが話を上手く誘導してくれるので、それほど困る事はなかつた。

順序立てて、起きた事、遭遇したモンスターの事を説明していく。やはり一番の核心部分は、最後の広間での戦闘の事だつた。

「運がよかつたな」

話を聞き終えて一番最初の言葉が、アレンのその一言だつた。

「ええ、まあ・・・自分でも、よくそんな真似が出来たと思ひます」「やや小さくなりながら言つたレオンだが、それがまさに本心だつた。他の手を思いつかなかつたとはいえ、今考えてみると、そんな賭を躊躇なく出来た自分が不思議だつた。もう一度同じ事をやれと言われたら、絶対躊躇うだつ。そんな真似が出来たのも、戦闘によつて興奮状態だつたせいかもしれない。

「だが、そんな事が言えるのも命あつてこそだ。諦めなかつたのは誇つていい」

こちらを向かずに、独り言のようにアレンは言つた。表情はいつも通りだが、そんな話し方をするアレンを初めて見た。

そこに、優しさを感じた。或いは、心配したという言葉を聞いた気がした。

リディアとデイジーも、そんなアレンをじつと見つめる。しばらくの沈黙の後、再び口を開いたアレンは、もう元の声に戻つていた。

「武器は有効に使っている。もつとも、まだ武器に使われている感じだが」

「使われている、ですか？」

アレンは頷いた。

「どんな人間でも、装備が同じならだいたい同じような戦い方をす

る。自分が武器を使つてゐるつもりでも、実際には武器に戦術を縛られている事が多い。眞の意味で武器を使いこなすには、一人前よりもさらに一回り上の実力がいる

「デイジーがそこで補足してくれる。

「それは、レオンさんが使つてゐるダガーを例えると分かり易いですね」

「え、これですか？」

今日も下げてきている短剣を、レオンは示した。

彼女は頷いてから説明を続ける。

「その武器を持たされたら、どんな初心者でも利き手で握つて斬る事は出来ます。剣とは元々、そういう風にデザインされた物ですから。ですけど、もちろん他の使い方もあります。それは投擲用に重量を調整された物ですから、投げるのももちろんですが、軽い物ですから、補助武器としても使えます。慣れてくれば、武器としてだけではなく、防具としても使えますよ」

「防具ですか？」

盾と考えても、これほど面積の寂しい盾はないだろう。

デイジーは微笑んでから、また頷いた。

「今は無理だと思います。ですが、剣とは刃がついただけの棒とも言えますから、そう捉えた戦い方もあるという事です。手に馴染めば馴染む程、理解すればする程、剣は斬る物という固定観念から解放されていきます。アレンさんが言つ、武器に使われている状態については、まだその固定概念に縛られている状態の事だと思います」

彼女がアレンの方を向くと、その視線に気付いたのか、彼はゆっくりと頷いた。

概念としては分かつても、具体的に形にするのは難しい。だが、それはつまり、レオンがまだ武器に使われている証拠なのだろう。「訓練するしかないだろうな」

脈絡もなくアレンが言つ。

「とりあえず投擲は上手く出来ているようだが、それを左手で出来るようにする事。」「は、ホレスに接射を教わった方がいい」

「接射？」

「至近距離で弓を射る方法です」

「デイジーの補足が入る。

「あと、剣か・・・それは俺が教えるが、どちらかというと、俺は敵だと思った方がいい」

「はい？」

いきなり妙な事を言われて、レオンは戸惑う。今から敵だと思うのはさすがに無理があるし、思いたくもない。

だが、そんなレオンを余所に、アレンはデイジーの方を向く。

「俺の剣を教えて、狩人のスタイルには合わないだろう。いつか時間がある時でいいから、フレデリックさんに都合をつけて貰えないか?ソードマスターなら、参考になるアドバイスが出来るかもしない」

デイジーはにっこり微笑む。

「ええ、もちろん」

むしろ話したくて仕方ないのだろう。そして、自分も祖父からの話を聞きたいに違いない。もしかしたら、自分の戦闘スタイルの参考にしたいのかもしれない。

何か暗殺者とかを目指しているのだろうか。そんな想像が少しだけ頭を過ぎつたが、さすがにそれはないはずだ。だが、既に十分な腕があるような気がするのもまた確かだつた。

アレンはこちらを向いた。ここに座つてからは初めてかもしれない。

「レオン。その骸骨モンスターだが、俺に似ていると思ったのだろう?」

「あ、はい。一応・・・」

よく考えたら失礼な話である。だが、悪い意味で言つたわけではない。剣の腕が相当なものだという意味である。

アレンの表情も、真剣そのものだった。

「つまり、そいつは戦士の戦い方をしていた。それなら、俺をそいつに見立てたらいい。俺が狩人の剣を教えるのは無理だが、戦士の剣を相手にする方法を教える事は出来る。だから、明日からはそのつもりで来い。もちろん剣の基本は教えるが、それをどう使うかは自分で考える。他にも、フレデリックさんやガレットさんやホレスもいる。彼らからもアドバイスを貰え。だが結局のところ、剣を振るのはレオンだ。それを忘れるな」

彼の言葉を、レオンは頭の中で繰り返す。結局、どういう意味なのか一言で説明するのは難しいが、要するに、戦闘スタイルというのはただの技術ではないという事だろうか。だから、人からそつくりそのまま教わっても意味がない。自分で咀嚼して使うしかないのだ。

レオンが頷くのを見て、アレンは話は済んだとばかりに前を向いてしまった。その正面にはリディアがいるわけだが、彼女は一言も喋らずに話を聞いているだけである。

「祖父の方は任せております。私が上手く話しておきます」

「お願いします」

そこで彼女は、隣にいるリディアに話しかける。

「リディアは？何か話したい事はないですか？」

その言葉にこちらをじっと見つめるリディア。最近やつと分かってきた事だが、彼女は考え事をする時に、じっと目を見つめてくる癖があるようだつた。というよりも、自分の視線がどこを向いているか分からなくなる程考えているらしい。集中力が尋常ではないのだ。だが、それに気付いたお陰で、見つめられてもあまり緊張しなくなつたレオンである。

しばらくしてから、リディアは唐突に口を開いた。

「武器の手入れの方法を覚えた方がいいと思う

それを聞いて、レオンは思いだした。

「あ・・・そう。確かに、ダンジョンにいる時もそう思つたんです。特に短剣とかは、投げてばかりいるから、砥石か何かを持ち込んだ方がいいかなって」

リディアは小さく頷いた。

「さつきダガーを見た時に私もそう思つた。まだ短いダンジョンだからいいけど、数日かかるようなダンジョンもあるから、手入れの仕方くらい知つておいた方がいいと思つ。といつより、レオンは手入れの仕方知らないの？」

最後は少し責めるような口調だつた。自分が手を加えた武器だから、愛着があるのだろう。レオンも武器の手入れ方法を全く知らないわけではないのだが、どうやら今の手入れでは、リディアは不満なようだ。

「正しい手入れの方法を教えて貰えないですか？僕のやり方は、なんていうか・・・たぶん、邪道だと思うので」

狩人をしている父親に教わつた方法だが、きっと我流なのだろう。再びリディアは頷く。無愛想なようだが、話してみると結構素直で親切な人なのだ。

そこでまた、レオンは思い出した。

「あ、そうだ。リディアさん」「何？」

「リディアさんつて鉱石の事に詳しいですよね？」

少し瞳を見開いたリディアだったが、すぐに答える。

「詳しいって程でもないと思うけど、仕事で使うから、普通の人よりは詳しいと思う」

「もし時間があつたら・・・いえ、何か鉱石に関する本とか、そういう本を貸して貰う事つて出来ないですか？」

教えて欲しいと言いかけたが、よく考えなくとも、リディアが忙しいのは明白だ。毎日仕事をしているのだから。

また彼女の遠慮のない視線が固定される。ある意味分かり易い。考え中というサインみたいに思えてくる。

「別にいいけど、どうして？」

「えっと・・・そういうえばそうですね。特に目的があるわけじゃないんですけど、知つておいたら後々役に立つんじゃないかなって」

「それなら、後でいいと思うけど」

そう言われると、確かにそうだった。今は他にまつと覚える事がある。

「・・・ですよね。じゃあ、もう少し後になつたらお願ひするかもしだせん」

あつさり会話が終わってしまった、変な沈黙が出来てしまった。それを察してか、デイジーが会話に割り込んできた。といつも、アレンもリディアも、沈黙が苦ではないのだろう。

「そういう知識があれば、ダンジョンでも役に立つかかもしれませんね。ダンジョンによつては、珍しい鉱石が採取出来る場所もあるそうですから」

「へえ・・・」

そんな話は初めて聞いた。だけど、そういう物を資金に出来るから、冒険者はやつていけるのかもしれない。

「レオンさんも、もし見つけたらリディアの為に持つて帰つてあげて下さいね。リディアは珍しい鉱石なら、何でも喜びますから」

「ちょっと、デイジー・・・」

困つたような表情で止めるリディアに、デイジーは悪戯っぽい笑みを見せる。いつもお淑やかな表情とは違つ一面だが、実はレオンは慣れている。ダガーの投擲を教えて貰う時、彼女は子供みたいに笑みを浮かべる事が多いのだ。その表情と、今の笑みはとてもよく似ている。

以前から感じていた事だが、リディアとデイジー、そしてベティもだが、この3人は仲がいいようだ。もっとも、ベティは誰に対しても親しげに話すし、彼女を相手にしたら、どんな相手でもいすれ根負けして受け入れてしまうだろう。

だけど、リディアやデイジーはそういう押しが強いタイプではな

い。どちらかといふと、相手と距離をとる事が多いような、割と控えめなタイプである。だから、余計に2人の仲の良さが分かる。他の人は見せないような一面を、彼女達はお互いに見せ合っている。今も、2人の距離は近い。物理的にも、精神的にも、お互いのトリートリーを共有出来る程の親密さなのだ。

そういう仲のいい人を見ると、ついついレオンも嬉しくなってしまつ。

「デイジーさんとリディアさん、凄く仲がいいですよね。もう長い付き合いなんですか？」

2人は一瞬視線を交わす。その動作にも、慣れた感じがよく出ていた。

笑顔で答えたのはデイジーだった。

「ええ。同じ年ですから。もう17年になります」

結婚して17年みたいな言い方だった。レオンは少し笑ってしまった。

「そういうえば、髪留めとブローチ、同じ色ですよね。わざわざお揃いにしたんですか？」

何気なく言つたのだが、デイジーもリディアも驚いたようだつた。そして、それはアレンも同じだつたようだ。

「・・・本当だな。俺は全然気付かなかつた」

「え、そうでした? 僕は最初に気付きましたけど」

その言葉にデイジーが反応する。

「前も、リディアが珍しくスカートを穿いてたら言われたつて・・・。レオンさんは、変なところを見てますね」

「変なところつて・・・」

それは大袈裟だと思つたが、リディアが同意する。

「男の人は普通気付かないと思う」

確かに、アレンはそうだつた。

「あれ・・・もしかして、僕、本当に変ですか?」

不意にレオンは動搖した。これはもしかして、自分が女っぽいと

いう事だらうか。男らしさが十分とは言えないが、さすがにそこまでではないと思つていたのだが。

そんな様子を見て可哀想だと思つたのか、デイジーが助け船を出してくれる。

「それくらいなら変ではないと思ひます。女性なら一目見ただけで、同じ人が作った物だと分かりますから」

「え、なんですか？」

確かに作りが似てゐるような氣はしたが、同じ人が作ったとまでは断定出来ない。

「製法が一緒なのはもちろんんですけど、デザインの趣味が同じですから。男性はあまりそういう事を信じませんけど、女性は大事にしますよ。これを別々の人気が作ったと言われたら、ほとんどの女性が疑うと思います」

「へえ・・・」

そういうもののなのだろうか。女性の勘と田の付け所に、レオンは少し感心した。

そこでまた、デイジーが悪戯っぽく笑う。彼女は左手で髪留めに触れながら言つた。

「実はこれ、リディアの手作りなんですよ」

さすがにレオンは驚いた。デイジーの髪留めを見て、リディアのブローチを見る。そして最後に、リディアの顔を見た。氣のせいか、少し恥ずかしがつてゐるようだつた。

どう反応していいか分からなかつたが、とりあえず正直な感想を口にした。

「・・・凄いですね。売り物だと思つてました」

売り物は売り物でも、きっと高級品だと思つていた。デザインはそれほど複雑ではないが、精巧な作りで、手作り感が全くない。女性ならいざ知らず、男性のレオンなら、店に陳列してあつたとしても不思議に思わぬだらう。

デイジーは隣のリディアを見た。

「昔から得意なんです。今では、きっと町の誰よりも上手です」

「・・・プロだから」

力強く頷いてからリディアが言つ。どうやら、プロといつ言葉に拘りがあるようだ。

「この髪留めも、6年前の誕生日に贈つてくれた物なんですよ。今はもつと上手になつてゐるはずです。でも、私にとっては、上手でも下手でも、とても大事な物です。リディアが本物のデイジーの花を見ながら作つてくれた物ですから」

「え？ その花がデイジーって言つんですか？」

全然知らなかつた。花の名前には疎いレオンである。

デイジーが淑やかに微笑む。

「やっぱり男性ですね。この辺りでは有名な花ですよ」

知らなかつたのはいただけないが、男性扱いされたような気がして、無性に嬉しかつた。

仲良しの2人は、また慣れた様子で視線を交わす。デイジーはもちろんだが、あまり表情が豊かとは言えないリディアも、少し柔らかい表情になつてゐる気がした。

その光景を見て、なんとなくよかつたなと思つた。少なくとも、いい休日だつたと思えた。たまにはこういう日があつてもいい。よく考えてみたら、この町に来てからは初めての休日だつた気がする。毎日毎日訓練して、勉強してばかりいた。雨が降つた日も、とにかくじつとしているのが嫌で、酒場を手伝つたりしていたのだ。だけど、今日は怪我のせいで訓練出来なかつた。晴れていたから、手伝う程の仕事もない。

正直、身体が疼いて仕方なかつたのかもしれない。どこか心が落ち着かない一日。

それでも、今初めて、ほつと出来たような気がする。

また明日から頑張れる。

正面の少女の頭をなんとなく見やる。

そこには、花びらの多い小さな花が、その名を持つ少女のようだ。

慎ましく佇んでいた。

狩人と一言で言つても、その生活は様々であるらしい。

レオンの父親も狩人だった。少なくとも、村の人は皆そう認識していたし、自分でもそう主張していた。だから、それを幼い頃から見てきたレオンも、きっとそうなんだと思っていた。

だけど、最近になって、その認識が揺らぎつつある。

隣で弓を引いている男。

あまり逞しい身体とは言えない。さらに、彼の着ている服が、もう少しで布切れと化すその一歩手前といった有様なので、どうしても見窄らしく見える。長めのダークブラウンの髪も、手入れ云々以前の問題で、恐らく無造作に伸ばしているだけに違いない。

それでも、やはりただ者ではない。一見細身に見える身体だが、若木のようにしなやかで、内には相当な力が秘められている。弓をいっぱいに引いている今も、彼の身体は微動だにしない。まるで彫刻かの如く、遠くの一点を見つめたまま静止している。通常なら、弦を引く手には大きな負荷がかかるはずだが、彼の右手はまるで楽器を弾いているかのように静かに佇んでいる。

その瞳は、右目だけが新芽のような緑色。

一瞬その目を細めるや否や、芸術作品のように美しく留まっていた彼の時が弾けた。

驚く程、音が小さい。

それなのに、消えてしまったと思える程の、田にも留まらぬ矢の速度。

林の方に飛んでいったはずだが、レオンの田ではその軌跡を追う事が出来なかつた。

わずかに遅れて、林から鳥が数羽飛び立つていくのが見える。

ここからその地点まで400メートル。もしかしたら500メートルはあるかもしれない。

何度も見ても凄い。名人というか、もう超人だと思うしかない。

その凄腕の射手の方に視線を戻すと、彼は流麗な動きで弓を下ろしていた。これも何度も見ているが、まるでその動きだけ練習していたかのように、全く同じ所作である。同じ時を繰り返しているのかと疑ってしまう程だった。

彼は首を少しだけ捻った。

縁の右目だけが、こちらを見据える。

「分かったか？」

これも何度も質問だった。いい加減申し訳なくなるから、出来るなら分かったと言いたいところだった。

しかし、分からぬものは仕方ない。

「・・・いえ、さっぱり。というか、今思つたんですけど」

控えめな声で前置きすると、男は少しだけ頷いたように見える。「林に向けて矢を射つてますけど、大丈夫なんでしょうか。動物に当たるかもしれないし、誰かいないとも限りませんし」

最初はそもそも届くと思つていなかつた。届くなんてあり得ない距離なのだ。

彼の返事は簡潔である。

「若に当てている。問題ない」

「・・・見えるんですか？ここから林の中が」

「ああ」

どうやら本物の超人だつたらしい。視力が尋常ではない。

そこで、明るい少女の声が、目の前の男を挟んだ向こう側から聞こえてきた。

「レオンもさ、いい加減突っ込んでもいいと思うな。見ただけで分かるかーってはつきり言わないと、ホレスは平氣でこれを一日中続けると思うよ」

男の陰になつているから姿は見えないが、もちろん誰の声かは分

かる。

それはそうと、言い方はともかく、彼女の言つ事も一理あった。

「・・・すみません。やっぱり見ただけだと無理みたいですね」

怖ず怖ずと告げると、ホレスは視線を遠くにやる。

「そうか・・・悪いな。人に教えた経験がほとんどないから、あまり教え上手じゃない」

「いえいえ！僕の方こそ、なんていうか、飲み込みが悪くて・・・」

恐縮するレオンに、ベティが笑いながら言つた。

「そこでもっと押さないと。下手でもいいから努力しろーとか言ってみたら？」

「・・・そこまで図々しくはなれないです」

「ホレスと会話しようと思つたら、とにかく押さないとダメだよー。レオンもホレスも全然押しがないから、言葉は交わしてるけど、本当の意味で会話になつてないし。全然摩擦が起きてないんだよねー。もつとお互いの事を分かり合つ為に、本音で会話しないと」

レオンとホレスは、顔を見合せた。

しばらくしてから2人はベティの方を見て、同時に言葉を発する。

「本音で話しますけど」

「本音でしか話せない」

男性陣の視線を浴びながら、彼女は苦笑いした。

「じゃあ、嘘でも・・・いや、とにかく、ああ、もういいかー。私が通訳するから、とにかく頑張つてー」

投げやりに言いながら、彼女は寝心地良さそうな草原に背を預ける。

訳が分からない男2人は、また視線を交わした。さっぱり分からぬという事を、互いに確かめ合う程度の意味しかなかつた。

駆け抜けていく春風が緊張を解す。

「・・・そろそろ休憩しよう」

ホレスがそう口になると、ベティが瞬時に跳ね起きる。彼女のポニテールが、本当の馬の尻尾みたいに跳ね上がつた。

「昼飯だ！」

「昼飯はやめる」

「お昼ご飯だ！」

一瞬の会話。決まり文句みたいなやりとりに、レオンは呆気にとられる。案外、本当に昼食前の決まり文句なのかもしれない。

それはそうとして、そこで昼食となつた。

3人がいるのは、コースアイ南西部の平原。のどかな草原が広がつていて、南北両側に、それぞれ違つた高さの山々を望む事が出来る風光明媚な場所である。さらに西には、先ほどホレスが矢を放つた林があり、そこから時折鳥や小動物が顔を見せる。ピクニックにはもつてこいの場所である。

汲んでおいた水で手を洗つてから、大きなバスケットを囲うようにして座つた。バスケットの大きさは尋常ではなく、旅行鞄の代わりに使えそうな程である。

ベティがここにこしながら、その蓋を開ける。今日の彼女は、淡いオレンジのワンピースに白いエプロン。ある意味この景色に一番似合つている。

「今日はサンディッチ！私の手作りだよー」

その言葉通り、中にはサンディッチがぎっしり詰まつていた。意外にも野菜が多いようで、見た目も鮮やかだ。

「凄いですね・・・」

「美味しそうでしょー？」

「え？あ、はー」

レオンの咳きは、出来映えよりもむしろ、その量に対するものだつた。これはいつたい何人分だろうか。3人どころか、6人いても間に合いそうなくらいある。これだけ作るうとしたのもさすがだが、実際に作るのは相当大変だつたはずだ。

もちろん、美味しそうなのも間違いない。

ふと気付くと、ホレスが右手を顔と胸の前で忙しく動かしている。何かの作法というか、神様に祈りを捧げているようだ。

気になつてそれを見つめていたレオンだったが、その動きもあつ
という間に終わった。

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

少女の声に続いて、男2人の声が平原に伝わつていく。

一口食べてみて、レオンは驚いた。

ベティお手製のサンドイッチは、いつもレオンが酒場で食べているこつてりした料理とは違つて、かなりあつさりした味だったのである。

思わず、食べかけのサンドイッチを見つめる。

「何か、変な物入つてた？」

その声がかなり近くから聞こえたので、レオンは慌てた。

いつの間にか、ベティの顔がすぐ近くにある。彼女はレオンの顔と、レオンの左手にある食べかけのサンドイッチを交互に見つめていた。

「いえ、そういうわけじゃ……」

「そう？ 何か慌ててない？」

「慌てるのは……というか、ベティさん、わざとやつてしませんか？」

必要以上にお互いの距離が近いような気がした。

案の定、その言葉を聞いたベティの表情に笑みが浮かぶ。予想通り悪戯だつたようだ。

「レオンも少しばかは耐性出来たねー。私の努力の賜物だよね」

彼女は可笑しそうに言う。確かに彼女のお陰はお陰かもしれないが、きっと努力とは少し違うものだらつ。

「……喜んでいいんですかね」

「ダメダメ。もっと精進しないと」

「……つまり、まだ僕で遊ぶ気満々ですか」

「うわー・・・・レオン、鋭くなつたね。じゃあ、『褒美』に、サンドイッチ食べさせてあげる

彼女はこちらを見て微笑んだまま、無造作にバスケットの中に左手を突っ込む。

咄嗟に右手を出して阻止しようとしたレオンだったが、その前に彼女の右手がレオンの胸ぐらを掴んだ。

失敗したと思ったが、もう遅かった。

身体にかかる浮力。

見事なくらい鮮やかに、右腕一本で押し倒される。

柔らかい草原のクッシュョン。

お陰でそれほど痛くはなかつたレオンだったが、もちろんいい状況ではない。

彼女の左手が飛んでくる前に、両手を顔の横に擧げる。左手には食べかけのサンドイッチ。

だけど、彼女は止まらなかつた。

次の瞬間には、レオンの口の中がサンドイッチで埋め尽くされたいた。量が多い。胸ぐらを掴まれたままだったので、呼吸するのが辛い。

サンドイッチをねじ込んだ左手を戻しながら、ベティは少しだけ首を傾げた。

「こつちはまだまだだねー。位置から考えても、私の左手に間に合うわけないんだから、せめて右手に注意しないとダメだよ。というか、逆に私を押し倒すくらいじゃないと。そうしないと、もしバスケットの中に武器が仕込んであつたら、仮に右手に対処出来たとしても、その後、武器を持った左手に襲われるんだから

その言葉は聞こえていたものの、レオンはサンドイッチを飲み下すのに精一杯だった。

返事がないのにも構わず、ベティの考察は続く。

「最後の左手には間に合つてたけど、あれだつて、もう押し倒された後のわけだから、あの体勢で攻撃を防御するのは難しいでしょ？ やっぱりね、戦いは先手必勝。今ので言えば、私の右手が届いた時点で、とこりか、レオンが私の左手に気を取られた時点で、もう勝

負は決まってたんだよ。まず冷静に私の右手を弾く事。出来れば逆にこちらを押し倒す事。それを一瞬で判断して実行しないと

よつやく、レオンはサンディッシュを飲み込んだ。

「・・・せめて、左手を掴んでおくんでした」

最後にサンディッシュをねじ込んできた手の事である。

普段から彼女のこの手の奇襲はあるのだが、女性を相手に本氣で戦えないと訴えたところ、両手を顔の横に見せて降参の意志を伝えれば、そこで戦闘終了というルールが定められた。

だが、今回はそのルールが破られた事になる。レオンの言葉は、その事に対する不満を込めたものだった。

ベティは口元を少し緩める。

「サンディッシュを食べさせてあげるって言つたでしょ？最後のはただのご褒美。どっちにしたって、怪我するわけじゃないんだし」

怪我はしないかもしれないが、危うく窒息しそうにはなった。

レオンは小さく息を吐く。よくある事だからとはいえ、いい加減慣れてきた自分が怖い。

「さつてと・・・じうじょっかなー」

やたら楽しそうなベティの声が上から響く。

レオンは背筋が冷たくなった。いつもの彼女なら、先程のような感想を述べて終わりなのだ。それなのに、今日は身体を退ける気配がない。それどころか、まだ何かを企んでいるような表情だった。

身の危険を感じた。

すぐに状況の把握に努める。地面に押し倒された状態だが、彼女の右手が胸ぐらを、右足が腹の辺りを押さえているだけだ。完全に組み敷かれているというわけではない。自分の両手は自由だし、体重もこちらの方があるだろう。しかし、彼女は腕が立つし、それに何より、下手に暴れると、彼女が怪我をしないか心配だった。

交渉しよう。レオンは密かにそう決心した。

「あの・・・ベティさん？もう退いて貰つてもいいですよ」

ベティは笑顔になつた。だけど、何かを覆い隠しているのがみえ

みえの笑顔だった。完全には隠せない程、隠そうとしている物が強大なのか。

「私が勝ったわけだし、レオンをどうしようと、私の自由でしょ？」

冗談だとしても、彼女の今の表情を見れば、全然笑えない。

「いえ、そんなルールはないと思しますけど……」

「勝負の世界では常識だと思うなー」

「常識って……」

「ここからレオンが逆転したら、私を自由にしていいって事になるわけだし。だつたら、公平な条件だと思わない？」

あまり思えなかつたレオンだが、口に出すとまことにような気がしたので、無理矢理別の話題に移つた。

「とりあえず、昼食をいただきませんか？ほら、せつかくベティさんが作つてくれたわけですから」

その瞬間、胸ぐらを掴んでいるベティの右手に力がこもつたような気がした。咄嗟にレオンの身体が緊張したが、幸いと言つべきか、攻撃はなかつた。

草原の爽やかさがかき消される程、重苦しい沈黙。

何故こんな事になつたのかと思つてみると、変化が突然訪れた。

ベティが急に笑みを引っ込めたのだ。

レオンは目を疑つた。

無表情。いや、明らかに落ち込んでいる。

いつも明るい彼女がこんな表情を見せたのは、もちろん初めてだつた。

「……美味しいなら、無理して食べなくてもいいよ」

トーンの低い声に、今度は耳を疑つた。

「はい？」

びつくりの連続で、こんな間の抜けた返事を返すのがやつとだつた。

状況がさっぱり分からない。

「サンドイッチ。どこが口に合わなかつた？」

また訳の分からぬ質問だった。

だけど、いつになく深刻な彼女の顔と声だった。もしかしたら、これが泣きそうな顔なのかもしれない、一瞬だけ思った。

「えっと・・・ちょっと待つて下さい」

そう断つてから、レオンは左手に残っていたサンドイッチを口に放り込んだ。倒れたままだが、それほどの量ではないので、喉に詰まる事はない。一瞬、ベティの瞳が大きくなつたような気がしたが、それには構わぬ、とにかく口の中に感覚を集中した。

野菜の食感も残つてゐるし、パンも固くない。味は最初感じたようすに素朴だが、少し胡椒が利いてゐるようだ。だけど、野菜やハムの味を邪魔する程ではない。

凄く無難にまとまつてゐる。感動するような味ではないかもしないが、そもそもサンドイッチで人を感動させるのは難しいのではないか。逆に、どこか欠点を見つけると言われても見あたらないから、そういう意味では出来がいいと言える。

それに、ベティが作つてくれた料理なのだから、普通のサンドイッチよりも美味しく感じる。例え有名な料理人だとしても、赤の他人が作つた物と、知り合いが作つてくれた物では、やはり味わいが違つ。

結局、レオンの口から出たのは次の二言だった。

「・・・これ、口に合わない人がいるんでしょうか？」

もし欠点を指摘出来る人がいるなら、それはきっと、サンドイッチ自体に何か恨みがある人ではないだろうか。偏った目で粗探しでもしないと、欠点と思えるような箇所はない。そうとしか思えなかつた。

だけど、ベティはその答えを聞くなり、すつと目を細めた。

レオンの顔から血の気が引く。

「・・・今から正直に言えば、命だけは保証してあげるけど？」

彼女の目は完全に据わつてゐる。この状況で笑える人がいたら、きっとその人は、前世が相当な猛者だったか、或いは、今現在相当

な猛者であるか、そのいざれかだらう。

両手を顔の横に持つてくる。今の彼女がこのルールを覚えているかは分からぬが。

「しょ、正直に言つてますけど・・・」

「へえ・・・未練はないって事でいいの?」

ベティが握つた左手を持ち上げる。

「な、何で信じて貰えないんでしょうか・・・」

声が尻すぼみに小さくなる。

彼女は微笑んだ。だが、目は笑つていなかつた。

「レオン。冥土の土産に教えておいてあげる。女の子はね、手料理を作つたら、絶対最初の一口は見逃さない。見てないふりをしていても、こつそり見てる。その時の反応の為に作つていいと言つても過言じやないんだから」

最初の一口。自分がどんな反応をしたか、必死に思い出さうとする。

それ自体は難しくなかつた。

だけど、何故ベティが不満なのか、それがよく分からぬ。

「さあ、どう? 正直に言つ気になつた?」

結論が出るよりも早い、最終宣告。

もうなりふり構つていられなかつた。

「わ、分かりました! 正直に言います!」

彼女は頷いた。拳は握つたままだつたが。

なんだか不条理な氣もしたが、とにかく誠意を尽くして話すしかない。

「一口食べてみて、とにかく最初に思ったのは、意外にヘルシーなんだなつて事です。ほら、いつも酒場で食べる料理つて、こつてりした物が多いじゃないですか。だから、新鮮だつたというか、どちらかというと、村ではこういう物ばかり食べてたので、懐かしかつたというか・・・あと、ベティさんが作つたつて聞いてたので、味付けが素朴だつたのが意外だつたというか、とにかく、全然、そ

の、美味しくないとか、口に合わなかつたとかじゃなくて、ただ、予想と違つたから驚いただけなんですよ！味とかそういう意味では、むしろ美味しかつたですよ！」

最後を強調すべく必死にアピールした。
だがそこで、ようやく助けが来た。

「ベティ」

ホレスの一声。いつもの彼の声だった。

それなのに、その声には驚く程効果があつた。

一瞬ベティの表情が乱れたかと思うと、彼女は慌てたようにレオンの上から飛び退いた。

解放された事に安堵するよりも、彼女の反応が気になつて、じつとそちらを見つめてしまつ。

彼女は気まずそうに視線を逸らして、元の位置に座り直した。俯いたままで、こちらの顔を見よつともしない。心なしか、少し元気がないようにも見える。

いつもの彼女とは正反対と言つても良かつた。

呆気にとられたままのレオンの耳に、ホレスの声が届く。

「早く食べろ。昼食が夕食になりかねない」

「え、あ、はい・・・」

その言葉に、レオンは反射的に身体を起こして座り直す。
誰も、何も言わない。

ベティとホレスを交互に見るのが、ベティは俯いたままだし、ホレスは林の方を見ているだけだつた。

さすがに気になつたので、レオンは怖ず怖ずと尋ねた。

「・・・ベティさん、大丈夫ですか？」

彼女がこちらを向く。まるで人形みたいな表情。さすがに少し気圧された。

「・・・『じめんね』

やつと届くよなが細い声だつた。本当に彼女の声だろうかと疑つてしまつた程だ。

次に口を開いた彼女の声は、いくらか声量が回復していた。だが、視線がさまよつていて、いつもの彼女とはまるで別人だつた。

「「めん。私、ちょっと、その・・・ああいうのはだめなんだ。そ の、レオンが嘘を吐いてるつて思つたから」

「え？・・・あ、いえ、分かつて貰えればいいんですけど」

よく分からぬものの、ベティのあまりの深刻さにそう返事した レオンだつたが、彼女は首を横に振つた。

そこでホレスが唐突に口を挟む。

「俺はバターで死にかけた事がある」

端的過ぎて分かりにくい説明だつた。普通に考へても、バターと

死が結びつく事なんてあるだろうか。

その後をベティが引き継いだ。

「昔からね、今日みたいに、ホレスに差し入れするのはよくある事 なんだ。ホレスは昔から、何でも美味しい美味しいって食べてくれるから、つい嬉しくて、いろいろ作つて持つて行つてたんだよ。だ けど・・・だから、気づかなかつたんだ」

それつきり黙つてしまつ。

だけど今度ははつきり分かつた。無表情が崩れそうになつていて、 今度こそ、本当に彼女は泣きそうだつた。

レオンは何も言えなかつた。いつも明るい彼女だし、以前お祖父さん の話を聞いた時も、彼女はここまで表情をしなかつた。

余程辛い事なのだろう。

重い沈黙を破つたのはホレスだつた。

「どうやら、俺は牛乳とかバターとか、そういう物が食べられない 身体らしい。ただそれだけの事だ。ベティが悪いわけじゃない。俺 が自分の身体の事に気付かなかつた。自分の身体に異常があつたの に、それを気にも留めなかつた。自業自得だ」

まだ話の細部は掴めないが、あまり聞きたい話とも思えない。ベ ティにこんな表情をさせてまで聞きたい話はない。

「いえ、もういいです。僕は全然・・・もう何も気にしてませんし、

それに、嘘を吐いたりもしません。これでいいですよね？」

その言葉を否定したのは、他ならぬベティだつた。

「ううん・・・やっぱり、聞いておいた方がいいと思つ」

彼女は真つ直ぐにこちらを見つめた。いつになく真剣な表情だつた。

それを受け止めるレオンも、背筋が自然と伸びる。

「私も詳しくはないけどね、食べ物が原因で人が死ぬ事があるんだ。イザベラさんが調べてくれたんだけど、最初は身体が痒くなるとか、少し気持ち悪くなるとか、そんな程度でも、次に食べたら呼吸が止まつたりする事もあるんだつて。ホレスがそうなんだよ。最初は少し発疹が出ただけだつた。だけど、その次は・・・」

ベティは言葉を濁したが、それが何よりの説明になつていて。

つまり、彼女が持つていた料理で、ホレスが死にかけてしまつた。彼女の料理に使つたバターが、彼の命を奪うところだつたのだ。

「最初の時も、その時も、ホレスは私の料理を、美味しいって言ってくれたんだ」

「美味しかつたからな」

ホレスが即答した。彼にしては早い回答だつた。

彼の方を少しだけ見て、ベティは視線をこちらに戻した。

「だけど、正直に言つてくれたら、もしかしたら気付けたんじゃないかつて、今でも思うんだ。だから、レオンも、料理くらいとか思わないで、何でも正直に言つてね。軽い嘘だつて思わないで欲しい。なんていうか、レオンとホレスは似てるから、2人とも優しいから、だから余計に心配なんだよ。私に気を遣つたせいで、突然いなくなるんじやないかつて・・・ごめん。縁起でもないね。だけど、そんなつまらない嘘は吐かないで欲しい」

この表情を見ているだけでも、その一件が彼女の心にどれだけの影を落としているのかが分かる。モンスターに襲われた時よりも、祖父が亡くなつた時よりも、彼女には辛い事だつた。それは、彼女自身や祖父の命が、ホレスの命よりも軽いという事では決してない。

ただ、自分のせいでも身近な人が消えてしまう。その恐怖が計り知れない程大きいものだつたという事なのだ。

彼女の過剰とも言える行動は、自分が嘘を吐いたと思って、どうしても見過ごせなかつたのだろう。もしかしたら怒つっていたのかもしれない。

「こう言つとベティは怒るんだが

ホレスがそう話を切り出した。

「俺は、あの時死にかけてよかつたと思つていてる」

そんな事を言つたら、さすがに怒るだろう。だが、ベティの方を見ると、彼女は少し口元を緩めて肩をすくめただけだつた。どうやら、もう怒りきつた後らしい。

「レオン。狩人になる条件を知つていてるか？」

知らないし、考えた事もない。レオンの父親は、きっと自分で名乗つていただけだつた。

首を横に振つてみると、ホレスはリアクションせずに話を続けた。

「自然の一部になる事だ。人間は肉体が滅んでも、来世でまた新しい肉体として生まれ変わる。自然も同じだ。一日を繰り返し、季節を繰り返す。土から植物が生まれ、それを動物が食べ、動物が死ぬと土に還る。その輪の中に入るのが狩人だ。自然の営みを見て、自然を理解して、その中で暮らす。そして、その一部になる。俺もずっとそうして生きてきた。だが、レオン・・・そのうちこう思うようになるんだ。俺が生きていても死んでいても、結局同じ事だとな

生きていても死んでいても同じ。レオンには難しい言葉だつた。

「俺がこうして生きていても、或いは死んで土になつていても、自然にとつては同じ事だ。俺はその一部でしかない。ただ、土なのかそれ以外なのか、せいぜい場所が違うだけだ。一日に例えるなら、昼なのか夜なのか、太陽がどこにいるのか、そんな程度の意味だ。自然から見れば、俺が生きているか否かというのは、その程度の違ひしかない。俺はずつとそう信じていたし、それでいいと思つてい

た。俺の命に、俺が生きている事に価値はない。この身体にも、全く未練はない。だから、あの時、最初に身体に発疹があつた時も、何とも思わなかつた。何かおかしい、病気かも知れないとは思つた。だが、それだけだ。放つておけば死ぬかも知れないと、ほんの少しだが考えた。だが、重要な事とは思えなかつた。どうせ同じ事なんだからな。だが・・・

彼の右目だけが、彼の大事な家族を一瞬捉えた。

「あの日、俺は人生で一番苦しい時を過ごした。息をするのが難しい程だ。これで死ぬかも知れないと思った。それでいいとも思つた。だが、声が聞こえた。ベティが俺の手を握りながら、ひたすら俺の名前を呼ぶのが聞こえた。後で聞いた話だが、丸一日以上、ずっとだ。ベティは泣いていたな。そんな声を聞いたのは初めてだつた。

その声を聞きながら、俺は考えた。何故彼女は泣いているのか。俺が生きていても死んでいても、同じ事だ。そもそも、生きている者は皆死ぬ運命だ。また来世になれば生まれ変わる。だというのに、彼女は何を泣いているのか。分からなかつた。だが、レオン。俺は考へてゐるうちに気付いた。もしかしたら、自然は輪を描いているわけではないのかも知れないとな

自然が輪を描いているわけではない。

ホレスは視線を遠くにやる。

「何かはつきりとした答えを得たわけじゃない。ただ漠然と、もしかしたら、俺は間違つていたのではないかと考えただけだ。自然の一部になつた氣でいたが、よく考えれば、自然そのものとは違う。俺が自然の一部だと思つてゐるにも関わらず、その中心からは自分を外している。それが矛盾のよつた気がした。何か俺は見落としている。そして、もしそうなら、俺は何をしてゐるんだと思った。ベティを泣かせたまま、どこへ行く気なのか。不思議なもので、そう思つた次の瞬間には、俺の意識が戻つてゐた。その時、確かに俺は確信した。輪の構造よりも、もつと世界を忠実に示す構造があると。その一端に触れたから、俺は帰つてきた。その一端が、彼女を泣か

せた。そしてレオン、弓を引く時もそうだ

「え・・・弓ですか？」

ベティの声がそこに割り込んだ。もつ、いつもの彼女の声だった。「その前と後だと、ホレスの弓の腕、全然違うんだよ。前は名人くらいだつたけど、今は超人くらいあるし」

どちらにしても、レオンにしたら凄過ぎる腕前に違いない。

しかしそこで、連想するものがあつた。短い時間で、急に腕前が上がる。こういう話を以前聞いた事がある。

こちらの表情から読みとつたのか、ホレスがその疑惑に答える。

「いや、俺は伝説の記憶に触れたわけではない」

「違いますか？伝承者にアドバイスされた人の中には、そういう人もいるつて聞きましたけど」

最初にフレデリック邸を訪ねた時、デイジーが言つていた事だ。「俺は伝承者にアドバイスされた事がないから、はつきり違うとは断言出来ない。だが、俺は違うと思っている。実際、俺はそういう記憶を見た覚えがない。ただ、死にかけていた時はとにかく朦朧としていたから、覚えていないだけかもしれないが」

そんな状態だつたのに難しい事を考えていられるというのは、やはりそういう生活を送つてきたからだろうか。ずっと自然の中で育つてきたのだ。よく考えてみれば、牛乳やバターが駄目だという事にその事故の時まで気付かなかつたのは、それまで口にした事がなかつたからではないだろうか。いつたい彼はどんな生活をしていたのだろうか。

少なくとも、レオンの父親とは違う。父は間違ひなく片手間にやつていた。それが良い悪いという話ではきつとない。村は人手が少なかつたから、兼業が基本なのだ。

だが、ホレスはまさに生糸の狩人なのだろう。もしかしたら、ずっと1人で暮らしていたのかもしない。

ホレスはこちらを見ながら話を続ける。

「弓はただ決められた姿勢で引けばいい物ではない。いや・・・決

められた姿勢を教わるというのも、恐らく悪くはない。だが、それだと精度に限界があるし、動きながら射るのは難しい。だから、レオン。弓を射る時には、『』と矢と目標だけに注意していれば駄目だ。風や空気はもちろん、もつと広い意味で、空間の繋がりのようなのを意識しろ。自分の力が弓や矢にどう伝わっていくのか、そしてそれが他の物にどう伝わるのか、まずはそれを理解しろ。少なくとも、それが出来なければ狩人の『』とは言えない。直射でも曲射でもそれは同じだ。狩人にとって、それが基本でもあり、真髓でもある。彼の言葉を反芻してみる。空間の繋がり。力の伝わり方。それが真髓。

これ以上分かりにくい話があるだろうか。

「・・・難しいですね」

思わずそう漏らしてしまった程、難しい概念だった。口で言われてもさっぱり分からぬ。それに、仮に理解出来たとしても、実践出来る気がしなかった。

難しい顔をしているレオンを見て、ベティが微笑みながら言つた。「とりあえず、先にお昼済ませた方がいいよ。お腹減つたら、頭も働かないし」

「・・・そうですね」

ベティの方を向くと、彼女はもう食べ始めている。いつもの笑顔に戻つてゐるようで、レオンは安心した。

彼女特製のサンドイッチを頬張る。あつさりしてゐると思ったが、バターやマーガリンを使つていないと、いう事だらう。だが、パサパサ感はない。何か工夫があるようだ。

「これ、全然パサパサしてないですよね。何か秘訣があるんですか？」

彼女は水筒に口をつけてから、ゆっくりと頷いた。

「もちろん。でも、秘訣って程じゃないよね。乳製品を使わなくて、意外となるとかなるもんだよ」

「へえ・・・」

そつは言つても、代用品を使えば、普通はそれだけ質が落ちる気がする。だが、この特製サンドイッチには全くそれが感じられない。ここまで工夫してくれるのは、やはりそれだけの愛情があるからに違いない。

「つちはお母さんが調理場に入り浸つてゐるから、その影響で私も料理好きなんだよね。だから、こいつは試行錯誤は割と好きだし、結構得意だし。といふか、私つて、よく考えたら、家事はそこそこ得意だなー。うんうん。いつでも嫁に行けるねー」

実際には、彼女はガレット酒場の一人娘なわけだから、嫁に行かれると大変かもしれない。だけど、そこに口を出す程、まだ自分は親しくないだろ？

そんな事を考えていたレオンだったが、そこで思わず奇襲がやつてきた。

「というわけで、よろしくね、レオン。出来る嫁を貰つて、幸せ者だねー」

結果、激しくむせた。

ベティはその背中を叩いてくれた。顔は笑っていたが。

「そんなに喜ばなくともいいのにー」

「・・・喜んでません。驚いただけです」

「正直だなー、レオンは。うん、でも、今回はそれで許してあげようかな」

彼女は笑顔でそう言つた。許すも何もないのだが、嘘を吐かないで欲しいと言つた手前、正直に言つたレオンに敬意を表してくれたのだろうか。

小さく息を吐いてから、またサンドイッチに手を伸ばしたレオンに、思いついたようにベティが口を開く。

「そう言えれば、お詫びしないとね」

手を止めた。どう考へても、彼女からのお詫びなんていい響きとは言えない。

「お詫びなんていいです。何も被害を被つてませんから」

予防線を張るよつに言つた言葉。

ベティは少しだけ首を傾げる。

「・・・やつぱり、似てるよね」

「はい?」

「ホレスもねー、ずっとそつと見つんだよ。お詫びなんてされたら困るつて。ごめんつて謝つても受け取つてくれないんだ」

そこで、その本人から声が飛んだ。

「ベティは何も悪くない」

そちらをちらりと見たベティだったが、やがてまた首を傾げた。

「・・・私の周り、どうしてこういう男が集まつてくるのかな」

それはきっと、誰にも答えられない問いだった。

だけど、レオンはひとつだけ分かつたような気がした。それは、ホレスがベティからのお詫びを受け取らない理由。以前、モンスターから助けてくれたお礼も拒否していた。

なんとなくだが、レオンにはホレスの気持ちが分かる。もしかしたら、ベティの言う通り、2人が似たもの同士だからかもしれない。だけど、もつと根本的なもののように思える。

それがつまり、ベティとホレスの微妙な関係の要因。

これも難しい。

だけど、弓の真髓程ではない。

働き過ぎた為か、頭が変な熱を帯びてきた。

その脳に増援を送るべく、レオンは自然味豊かな特製サンドイッチを頬張った。

偶然なのか、それとも再挑戦させてやるひつという誰かからの気遣いだったのか。

前と全く同じ大広間だった。

黄色混じりの不思議な石材で40メートル四方の壁面を埋め尽くした部屋。魔法の松明の灯りによつて視界も十分確保されているが、その中身を見て驚いたのは失敗だった。

それでも、怪我をしなかつたのは、不幸中の幸いだつただろひ。

一週間前と全く同じように黒鳥田玉モンスターに奇襲され、同じように短剣を投擲して叩き落とした。「ご丁寧に、数も全く同じで、行動パターンも同じだつた。今回は普通の松明を持ち歩いていなかつたが、さすがに慣れもあつて、落ち着いて対処出来た。

その後、前回は見事に閉じこめられた。

だが、今回は違う。

レオンは右手で頬を搔く。本来なら、モンスターの前でこんな余裕を見せてはいけない。だけど、今はそれくらい余裕があつた。そして同時に、こんな簡単でいいのかという、なんともやりきれない感覚で頭がいっぱいになつた。

ほぼ直立姿勢。その無防備ともいえる体勢で、レオンが見下ろす先には、前回大苦戦した骸骨モンスターがいた。

ただ、身長が4分の3くらいになつてているのだが。

もつと具体的に言うなら、この骸骨には膝から下がない。

それでも、膝立ちの状態でこちらに近づいてくる。だが、元から腕以外は緩慢なスピードでしか動けないから、はつきり言つて、ほとんど移動出来ていない。きっと、赤ちゃんのハイハイの方が速い。じうなつてしまつたら、モンスターというよりも、障害物と同じ

である。

それでも、一応倒しておく事にする。
レオンは無造作に距離を詰めた。普通に歩いて近づいているだけである。

間合いに入つた瞬間、骸骨は右手の剣を振り下ろしてくる。
それを盾で受けたレオンは、既に握っていた右手のショートソードを振るつた。

骸骨の右手首を斬り落とす。離れた部分は、すぐに溶けるように消えていく。

これで、ほとんど無害。

その後、盾しかないモンスターを倒すのに、さほど時間はかからなかつた。

だけど、素直に喜べないレオンだつた。

今回が3回目のビギナー・アイである。だけど、前回は下見のよつなもので、すぐに出でてしまつたから、今回が2回目と言つてもいいかもしない。

その間に一週間という時間が過ぎたが、レオンの実力がそれほど増したわけではない。剣ではまだアレンに勝てないし、投擲もまだ左手では難しい。弓もまだまだだし、火薬も勉強中。最初にここに来た時と、ほとんど同じ条件である。

それなのに経過は全然違う。前回は限界だったこの部屋も、今はまだ傷ひとつ負つていない。それどころか、ほとんど武器を消費していない。まさに無傷という状態だった。

何故ここまで違つのか。

理由はいろいろ考えられる。だけど、端的に言えば、この場所に慣れてきたという事だらう。

最初に入った時は、とにかくおつかなびっくりという有様だつた。一步進む毎にびくびくしていだし、何も加減が分からなかつた。そんな状態では、身体もそつだが、精神的な負担もかなりのものだつたはずだ。

今なら、自分があの時、どれほど緊張していたのかがよく分かる。なぜなら、今なら考えればすぐ分かるような事に、あの時は全く気付きもしなかったのだから。

例えば、さつきの骸骨モンスターにしてもそうだ。前はとにかく頭ばかり狙っていた。そこが急所だと思い込んでいたからで、実際その通りだったのだが、よくよく考えてみてみれば、馬鹿正直に急所ばかり狙う必要はない。といつも、急所は向こうだつて分かっているのだから、そこを入念に防御してくるのは当たり前だ。そんな場所ばかり狙つても、全然効率的ではない。

そこで、今回はまず足下を狙つた。理由は簡単で、相手の盾が届きにくいからである。これはアレンに聞いた知識だつたが、普通に考えれば分かる事だらう。だが前回は、それを考えようともしなかつた。

そして、今回やつてみると、あつさつと相手の足を止める事が出来た。少し屈めば盾も届くはずだが、急所以外はどうでもいいのか、足を守ろうともしなかつた。

その結果が、さつきの状態である。まず移動出来なくして、次に武器を使えなくする。徐々に相手の戦力を減らすようにしていけば、問題なく倒せる相手だつたのだ。

気付いてみれば、あまりに呆気ない。

これが他人の話なら、笑つて済むかもしれないが、前回は、一歩間違えれば生きて帰れなかつたかもしれない。全然笑えない話だつた。

それでも苦笑いが出てしまう。武器をしまつてからは、溜息が出てた。

とりあえず、進もう。

入ってきたのとは反対の扉へと進む。これも前回と同じで、ツタのような装飾の施された金属製の扉。恐らく鉄製だと思うが、鉄よりも色合いが少し黒っぽい気もする。

扉に注意しながら鍵を開ける。その途中で気付いたが、向こうか

ら水の音がしない。どうやら前回と一緒になのはこの部屋の中だけで、向こうは違う構造のようだ。少なくとも、導きの泉ではない。

鍵を開けるのに10分はかった。

ゆっくりと扉を開ける。向こうは真っ暗だった。この部屋の灯りが、扉の向こうへと差し込んでいく。

レオンは扉を大きく開ける。体勢を低くして、右手に短剣を握っている。奇襲に対応する為である。

だが、何も起きない。

後ろに放り出していた松明を掴んでから、レオンはその暗闇を照らしながら進んだ。

この松明だが、全然熱くない。つまり、魔法の灯りである。魔法のアイテムという物は、便利だが、かなりの高級品で、普通ならレオンが手に入れられる代物ではない。

実は、これはダンジョン内に設置してある物を勝手に拝借した物である。

あるものは人様の物でも何でも使え。これはニコルの言葉だが、以前言っていた、普通の松明なんて使わなくてよかつたという言葉も、要は同じ意味だつた。つまり、わざわざ灯りを用意しなくとも、そこら中に灯つていてのを拝借していけばいいと言うのである。これも最初は考えもしなかった事だが、よく考えればその通りだつた。魔法の松明はかなり高い位置にあって、普通は手が届かないのだが、ニコルの簡易トラップを壁に張つて足場にした。取り外しは全く問題なかつたし、魔法の効果も消えなかつた。そのおかげで、光源は全く問題ない。熱を持たないから炎としては使えないし、壊す以外に灯りを止める方法がないから、一度消したら一度と使えない。それでも、普通の松明と違つて制限時間もないし、ちょっとやそつとの事で灯りが消えたりしない。かなり便利な物と言える。

ちなみに、先日下見に来た時に、これをダンジョンの外に持ち帰つてみた。一応魔法のアイテムなのだから、もしかしたら高く売れるのではないかと思つたのである。だが、外に出た途端、モンスター

ーが消滅する時のように煙を出して消えてしまった。ギルド窓口のケイトに聞きに行ってみたところ、ダンジョン内でしか使えないアイテムで、さらに、どのダンジョンにあるわけではないから、あまり当てにしないで下さいといつ事だった。

それでも、あつたのだから、使うに越した事はない。

魔法の灯りを照らしながら慎重に歩みを進める。幅2メートル程の廊下で、両側の壁や床はもちろん、天井にも注意を払うが、何もない。ただお馴染みの石レンガが並ぶだけである。

レオンの足音だけが小さく響く。思ったより長くて先が見えない。あまり広い通路とは言えないから、どこか圧迫感を感じる。距離にして100メートル、もしかしたら200メートルは歩いたかもしれない。

それくらい歩くと、変わり映えのしない通路によつやく変化が訪れた。

まず気付いたのは、壁と天井に、人がよじ登れそうな程太い緑色のツタが蔓延つている事だった。だが、普通の植物ではない事は明らかだ。

そのツタは、かなり遅いながらも、壁を這つようこぼしへ蠢いているのだから。

もちろん、レオンはすぐに歩みを止めた。

モンスターに違いない。壁と天井をびつしつと、そして、途中からは床もだが、完全に覆つてしまっている。その根元というべきか、それが生えている本体は通路の奥の方にあって、ここからは灯りが届かない。

緑色のツタはゆっくりとこちらに近づいてきているようだ。

とりあえず、レオンは後ろ足で後退する。

ツタはあまり動きが速くない。だが、ここを駆け抜けっていく氣にはならない。絡みつかれたら抜け出せないどころか、簡単に骨を折られそうな気がする。

ある程度離れると、ツタはこちらに近づかなくなつた。どうやら、

長さの限界があるようだ。

そこでレオンは落ち着いて考える。

燃やすという選択肢を一番に思い付く。だが、生木はそう簡単に燃えないし、燃料があるわけではない。何より、ただの植物ではなくて、モンスターなのだ。何が起きるか分かったものではない。

次に思い付いたのが、撤退するというものだつた。どうしようもないならそれしかない。他にも分岐があつたから、そちらを進めばいい。だが、出来る事なら、通路の奥がどうなつてているのかを確かめておきたい。もしかしたら、そちらに下り階段があるかも知れないのだ。

この松明を放り込んだら見えるかもしれない。だが、それをすればこの辺りが真っ暗になるに違いない。どこからかもうひとつ拝借してこようかと思ったが、そこでレオンは、普通の松明を使う事にした。

どうせなら、こちらを放り込んでみよう。

通路の奥も確認出来るだらうし、モンスターが火にどういう反応をするかも分かる。

背負い袋から取り出した松明に、発火用具と紙で火をつける。熱い方の松明を右手に持ち、それをなるべくゆっくりと、奥へ放り投げた。

せめてモンスターの本体が見えて欲しい。

その程度の期待しかしていなかつたのだが、その予想外の効果にレオンの目は釘付けになる。

松明がツタのカーペットの上に落下するなり、その炎があつとう間に燃え広がつた。

一瞬で通路内が昼間のようになる。

場違いにも、レオンは綺麗だと思つてしまつた。

それくらい綺麗に燃えたのである。地面のツタに燃え移つた火は、あつという間に壁と天井のツタに広がり、通路の奥まで走るようになつて赤く染めていった。奥には予想通り、モンスターの本体らしきもの

がいたが、それも炎の中に包まれて確認出来ない。悲鳴を上げるでもなく、また身悶えるわけでもなく、ただのキヤンプファイアが燃えているような、そんな光景だった。

そこで、レオンは気付いた。

燃え上がるモンスター。そのすぐ後方に下り階段らしき通路が見える。実際には階段は見えないのだが、通路が地下の方へと傾斜しているのが分かる。

もしかしたら、今日2階層田まで進めるかもしれない。

期待が膨らんだが、それも一瞬だけだった。

モンスターは倒せば消えてしまう。だから、燃え上がっていたとしても、消えた瞬間にまた暗闇になる。そう考えていたのだが、実際にはそうならなかつた。

最初に気付いたのは、その違和感だった。

炎はもう消えている。それなのに、この通路内には薄明かりが灯つていて、うつすらと奥まで見渡す事が出来るのだ。

さらに、それだけではない。

ツタはほぼ消滅しているのに、奥に鎮座している本体が何故か消えないものである。どこか花の蕾のようにも見える黒い人間大の橢円形。

その正体が分かつたのは、その直後だつた。

漏れてくる閃光。

花が開花しているというより、むしろ、卵が羽化している感じである。黒い殻が剥がれるようにして落ちていき、中から溢れてくるオレンジ混じりの白色光が通路内を明るく照らしていく。

炎とは違うが、それもやはり綺麗だつた。

殻の中から出現したのは、オレンジに光り輝く蝶。

だが、明らかに普通の蝶ではない。そもそも、普通の生物ではない。光が集まつて出来たような、そんなぼやけた輪郭をしている。モンスターと考えるのが自然だつた。

蝶という事は、もしかしたらさつきのはサナギだつたのだろうか。

いすれにしても、そこから漏れ出た光が薄明かりとなつて通路を照らしていたのである。

それどころか、炎の力で羽化したようにすら思える。もしかしたら、ツタの方はその為の囮とまではいかないにしても、ある種の共生関係だったのだろうか。火を使わなければツタが、火を使えばこの蝶が戦うという関係。

とにかく、こいつを倒さないと下へは進めない。

攻撃には距離があり過ぎる。投擲は届かないだろうし、弓は届いても、恐らく命中しない。

まず距離を詰めるしかない。

だが、そこでモンスターが先に動いた。

蝶の輪郭は動かない。しかし、その少し手前で赤い光が小さく軌跡を描いている。

それは、レオンが人生で3度目に見る、魔法の発動兆候だった。術者の前で光の文字が描かれる。それがあらゆる魔法に共通して見られる、発動前の兆候らしい。全く意味のない文字ではなく、ジーニアスが見れば、およそどんな魔法なのか分かるという話だ。だが、アスリートのレオンには分かるわけがない。

とりあえず魔法がくる。

距離を詰めようとしていたレオンは、それを思い留まつて身構えた。

どんな魔法なのかは分からぬ。前と同じ目眩ましだったとしたら、今から目を逸らしておくべきに違いない。だが、前回とは文字の色も形も違う。

光の軌跡が止まった。

その次の瞬間、炎で出来た矢のようなものが、モンスターの目前から一直線に、レオンめがけて飛来してくる。

本物の矢よりは遅い。

それが判断出来るくらいの余裕はあった。

頭めがけてきたそれを、身体を右に逸らして避ける。右手が床に

触れた。

炎の矢はその熱だけを残して、先程までレオンがいた跡を貫いていく。

わずかに遅れて、遙か後方で音が響く。

その音に一瞬静止したレオンは、首だけ捻つて後方を確認する。

入ってきた金属製の扉がない。

先程駆け抜けていった炎の矢は、その重厚な扉を吹き飛ばす程の威力を持っていた。

何かを呴きたくなつたレオンだが、そんな場合ではない。

モンスターの方へ視線を戻すと、案の定、既に魔法の発動兆候が始まつていた。

先程と同じ赤い光。文字も同じに見える。

どうするか迷つた。出来るなら逃げた方がいいと思つたが、向こうの扉までは相当な距離がある。そこにたどり着くまでに、何度もさきの魔法を避けなければならないだろうか。

魔法を妨害する方法を、以前二コルと話した事があつた。火薬とか閃光弾とかいろいろあつたものの、結局一番汎用性があるのは、術者を攻撃する事。傷を負わせればもちろんだが、その精神集中を乱すだけでも、魔法を失敗させられる可能性がある。

2発目の炎の矢が放たれる。

レオンはそれを左へ駆け出しながら避けて、そのままモンスターの方へ走り出した。そのまま右手にダガーを握る。左手に持つていた魔法の松明は、とつくに投げ捨てた。

蝶に迷いはない。既に3発目を準備し始めていた。

駆け寄りつつその赤い文字を見る。今までの発動時間から考えるに、投擲の射程に收めるまでに、もう一度避ける必要がある。

だが、距離が近くなっている。近ければ近い程、当然避けるのも難しい。

もつと進もうと思えば進めるが、レオンはモンスターの40メー

トル程手前で止まつた。避ける為には、これくらい距離が欲しい。次を避けた後なら、なんとか投擲の射程に収める余裕があるはずだ。

その一呼吸後、3発目の炎の矢が飛来した。

さすがに、その姿は一瞬しか見えない。

だが、元から見て避けようとは思つていなかつた。1発目も2発目も、矢はレオンがいた位置を正確に射抜いている。だがそれは、放たれる直前の位置なのだ。逆に言えば、発射するタイミングで横へ動きさえすれば、見えなくても避けられる。

今回も、なんとかタイミングを合わせる事が出来た。

脇をすれ違つていく熱の固まり。

それを確認して、レオンは駆け出す。

蝶型モンスターは一度も動いていない。やはり魔法の準備を始めているが、今度は間に合うはずだつた。

距離は30メートル程。

もう少し。そう思つた時、赤い光の軌跡が止まつた。

驚いた。魔法が完成したのだと理解はしたが、いくらなんでも早過ぎる。まだ数秒しか経つていない。

だが、レオンはすぐ自分の勘違いに気付かされた。蝶は魔法の準備をしていたが、同じ魔法とは限らない。

赤い文字が一瞬輝いて消えると同時に、レオンの前方に火球が出現する。人の頭蓋骨くらいの大きさだと思ったのは、きっと少し前にそれを見ていたからだろう。

すぐに止まろうとしたが、走つているわけだから、急には止まれない。

火球が力を溜めるように、一瞬収縮した。

悪い前触れとしか思えない。咄嗟に左手を前方にかざす。盾は小さいが、ないよりはましだ。

その後。

火球から放射状に放たれた熱波によつて、レオンの身体は後方に吹き飛ばされた。

足が床から離れる。

宙を舞つた後、床に叩きつけられたレオンは、その上を散々転がりまわつてからようやく止まつた。全身の痛みと焦げた匂いにせき込みながら、床に手を突いて、必死にモンスターの姿を探す。

その姿を確認したレオンは、正直嫌になつた。

かなり飛ばされたらしい。距離がだいぶ開いてしまつている。また最初の位置に戻つていると言つてもよかつた。まるでやり直しさせられているような気さえする。

そして、さらに追い打ちをかけるのは、モンスターがもう魔法の準備を始めている事だった。

休む暇もない。

体勢を起こしながらレオンは考えた。これは勝てるのだろうか。敵はまさに遠近両用。どちらの魔法も威力十分。しかも、場所が悪過ぎる。身を隠すような障害物がないし、逃げようにも出口が遠い。もしかしたら、この状況を狙つた設計なのだろうか。

迷ついている内に、炎の矢が発射される。なんとか避けたものの、ようめいでしまつて、壁に手を着いた。

後方で、炎が着弾する音が響く。

モンスターは再び魔法準備。疲労している様子はないし、そもそも疲労という概念があるとも思えない。

それを見て、レオンは決心した。

捨て身で行くしかない。長引けば長引く程、こちらが不利なのだ。決心すれば、身体は勝手に動いた。

もう一度距離を詰めるべく走り出す。

数秒後に放たれた炎の矢をやり過ごし、再び40メートル程まで距離を縮めた。

そこで立ち止まる。

再び発射された炎の矢を、タイミングを合わせて避ける。

だが、レオンはそこで距離を詰めなかつた。逆に、そのままの向きで10歩程後退する。

モンスターはすぐに火球を発生させた。だが、その位置はレオンのかなり前方、前にレオンを吹き飛ばした時の位置とほぼ同じである。

すぐに収縮し、起爆する。

体勢を低くしてそれを防ぐレオン。この位置でもかなりの風圧を感じるが、この姿勢なら耐えられない程ではない。熱いのは熱いが、我慢するしかない。

モンスターは再び魔法準備を始めた。

レオンはその場から動かずに、発動されるのを待つた。だが、心中で5数えたところで、自分の予想が正しかった事を半ば確信した。

遠距離の炎の矢。近距離の火球。どちらを使うのかを判断する基準は、こちらとの距離以外にない。そして、その距離をいつ計測しているのかといえば、魔法の準備を始めた時に違いない。相手との距離を見て使う魔法を決めているのだから、当然だ。

だから、先程の位置だと火球を使ってきたが、少し離れたこの位置だと炎の矢を準備している

のだ。まだ実際に放たれたわけではないが、準備時間の長さから言つても間違いない。

近距離用の火球は近くでしか使えない代わりに、準備時間が短い。だから、とてもじゃないが近づく余裕がない。だが、炎の矢の方はかなりの発射間隔がある。この魔法の準備中ならば隙をつけるはづだ。

つまり、炎の矢と火球の境界に見当をつけて、ギリギリの位置から距離を詰める。だいたい50メートルくらいではないかと思つていたのだが、それは正しかったようだ。だが、そこから距離を詰めて投擲距離まで持ち込めるかというと、かなりシビアだろう。

それでもやるしかない。成功しなければ、奥に進めないどころか、たぶん無事に帰れない。

そこで炎の矢が発射された。

しつかり避けつつも、レオンの目はモンスターから離れない。魔法を準備が始まるのを待つてから飛び出さないと意味がない。

蝶の前方に赤い点が発生する。

ここだ。心の中でそう叫んだのと、身体が走り出したのはほぼ同時だった。

赤い光が、もはや見慣れた軌跡を描いている。

この数秒が勝負。

両手にダガーを握る。最初に握っていた物は、吹き飛ばされた時にどこかへ行ってしまった。だから、あと2投しか出来ない。どうせこれが最後のチャンスなのだから、両方持つておいて損はない。先程の40メートルの位置を越える。

意外に余裕があるような気がした。攻撃を避けるとき、思つたよりも体勢を崩されなかつた。走り出しがよかつたのだろう。

だが、ここでレオンにとつて予想外の事が起きる。

文字を描いていた赤い光が、不意に消失したのだ。

その直後、新しい点が再び出現した。

自分でも驚くくらい、瞬時に理解出来た。つまり、炎の矢をキヤンセルして、別の魔法を準備し始めた。恐らく火球に違いない。魔法知識のないレオンは、そんな事が出来るとは知らなかつたが、予想出来なかつたとは言えない。

火球の為の文字を描く光を見ながらも、レオンは足を止めなかつた。

今から後退しても間に合わない。それに、今回は前回とは違う。相手の魔法準備は同じ地点からだが、こちらはもつと手前から走り出している。助走分だけ勢いがあるのだ。

30メートル地点でも、相手の魔法は完成しなかつた。

ここで投げれば当たるかもしれない。だが、確実を期す為にも、もう少し近付きたい。

20メートルにならうといつてここで、火球が出現した。

驚いた。

まさに目の前だつた。熱が直に伝わつてくる程の距離。レオンは滑り込むようにしながら、その下を通り抜ける。

頭上の火球が、一度収縮する。

ダガーを持った両手で、頭を庇つた。あまりの近さに、こんな防御をしても無意味に違いないと思つたが、身体が勝手に動いた。

その直後、爆風の風圧によって、身体が床を飛ぶ。

壁や床が分からなくなる程揉みくちゃにされながらも、レオンが考えていたのは唯一つだけだつた。

武器を離してはいけない。

風が止んでから、周囲を見渡す。

気のせいか視界がおかしかつた。ぼんやりとしたはつきりしない視界。

それでも、モンスターの位置は分かつた。

真つ暗の視界の中にも、オレンジに光る場所がある。確かに蝶の姿をしていたはずだが、今はよく分からない。

だが、場所さえ分かればいい。

倒れままダガーを投擲した。身体を起こす余裕がない事を、直感的に理解していた。

実際のところ、本当に投げられたのかは自分でもよく分からなかつた。

オレンジの光が消失した。

漆黒。

静寂。

倒したのか、それとも自分が葬られたのか、その直後はよく分からなかつた。

それでも、音がした。

金属音。ダガーが床に落ちた音に聞こえた。

もちろん、それがモンスターを倒した証明にはならない。だけど、投げられたのはどうやら確からしい。その事実に、何故かたまらなく安堵出来た。

その感情を笑みに乗せたまま、レオンの意識は身体から離れていた。

白い背景。紅い双眸。

どうしてなのか、あの光景を思い出していた。

ダンジョンの中で、じつとこちらを見ている妖精。もしかしたら、あの妖精が自分の魂まで案内してくれる妖精なのか。魂の試練場の最下層で、アーツの場所を示すと言わわれているカーバンクル。その光景なのだろうか。

だとしたら、未来の光景を見たという事なのか。

それとも、もしかしてあれが自分の前世の記憶なのか。

前世の自分はダンジョンの中に行くような人間、つまり冒険者だったのだろうか。だけど、前世の記憶は寝ている時に夢として見るのが普通だ。あの時は、少し特異な状況だつたけれど、寝ていたわけではない。

ただ、レオンは前世の記憶はあるか、夢 자체を見た事がない。だから、夢と似ているのか判断出来ない。寝ている時は、ただ真っ暗なだけ。

あのダンジョンの中のように。

オレンジ色の蝶と戦つた、あの通路と・・・

そこで物音がした。

ドアが閉まる音。

レオンの視界が、日が昇るよつに明るくなつた。

まるで背景の一部のよつだつた自分の身体に、感覚が戻つてくる。仰向けに寝ている体勢。

下は柔らかい。

ベッドの上。木の天井。

そして、足音が近づいてくるのを認識するや否や、視界に見知つ

た少女の顔が入つてくる。

ライトブラウンの髪と瞳。女性だというのは分かるが、男前な印象もある不思議な顔立ち。あまり彼女の笑顔を見ないが、仕事に一生懸命で、どこか充実しているように見える。

「あれ・・・リディア？」

自分の声が掠れているのに気付く。口の中が乾燥していた。
身体を起こそうとすると、リディアがそれを止める。

「まだ寝てた方がいいと思う。待つてて。イザベラさんを呼んでくるから」

その言葉を聞いて、ここがビギナーズ・アイ横の診療所だという事に気付いた。

「・・・どうして僕はここにいるんです？」

蝶のモンスターと戦つたところまで覚えているが、その後の事が記憶にない。そのモンスターにしても、倒したのかどうかすら定かではない。覚えている一番新しい記憶は、確かに火球の魔法の熱波を至近距離から浴びて、床を這いずり回された事。とにかく、床との摩擦やら壁とぶつかつたりやらで身体中が痛かつたのだけはよく覚えている。

リディアは淡々と答える。

「私はよく知らないから。イザベラ先生に聞いた方がいいと思う」レオンが何か言う前に、広間の奥のカーテンを手で退けながら、そのイザベラが姿を見せた。彼女とリディアは雰囲気がよく似ている。颯爽とした振る舞いもそうだし、髪も瞳も明るい。今日は2人とも白いブラウスを着ているから、歳の離れた姉妹と勘違いされそうだった。

イザベラはベッドの横に立つなり、こちらの顔を見下ろしながら真顔で言った。

「顔色がいいな。若い女の子が効いたか？」

その一言で急激に血圧が上がった気がした。取り乱したレオンは起きあがろうとしたが、背中に鋭い痛みが走つて顔をしかめた。

女医の方はその慌てぶりに面食らったような表情をしたが、すぐに元の表情に戻った。

「そうか。いや、悪かった。レオンはそういう子だったんだな」「どういう子だと思われたのか少し気になつたが、とりあえず一番聞きたい事を先に聞く事にする。

「あの・・・僕、どうやって帰つてきました?」

ダンジョン内に他の誰かが救出に向かうのは事実上不可能だから、自分で出てきたと考えるしかない。だが、その記憶が全くなかった。彼女の回答は簡潔だった。

「歩いて帰つてきた」

「え・・・僕ですか?」

歩いたどころか、起きていたとも思えない。ただ眠つていたらここに戻つてきただよな、そんな印象しかない。

イザベラは軽く頷いてから口を開く。

「まあ、朦朧とはしていたな。だが、誰か助けにいけるわけがないから、自分で歩いたと考えるしかないだろ?歩いたといつても、ここに勝手口の前までだ。そこで物音がしたから、行ってみたらレオンが倒れてた。それが今日の早朝だ。意識があるようないよくな、そんな状態だったから、とりあえずベッドまで運んで治療して寝かせていた。頭を打つている可能性もあつたから心配していたが、夕方になつてやつと目を覚ました。それが今だ。理解したか?」

「えつと、すみません・・・僕がダンジョンに入つたのは、昨日ですか?」

「そう」

つまり、丸一日経つて出てきたという事らしい。あの蝶型モンスターと戦つてから何時間後の事だろうか。ダンジョン内では時間感覚があやふやだから、はつきりとは言えないものの、1時間や2時間程度ではないはずだ。そんな長時間もかけて、自分はどうやってダンジョンから出てきたのだろう。

その記憶を何とか辿ろうとしているレオンに、イザベラが少し諭

すような口調で言つ。

「私が思つていたよりも丈夫な身体だからよかつた。だけど、全身傷だらけだつたし、鎧もボロボロだ。頭からも出血してたし、鎧には焦げたような跡もあつた。どんなモンスターと戦つたのかは知らないが、大怪我しなかつたからいいとは思わない事だ。リディアもあの酒場娘も心配していた。まだ見習いなんだから、まず自分の身体を大事にしなさい」

「……はい。すみません。ありがとうございます」

逃げたくても逃げられる保証がなかつたから戦つたわけで、そういう言い訳が出来ないわけではなかつた。だけど、それでも逃げるべきだつたかもしれない。少なくとも、戦う場所は選ぶべきだつた。それを怠つたのだから、反省しなければならない。

イザベラは少しだけ表情を緩める。

「身体が動くようなら、もう帰つてもいい。それほど深刻な怪我はない。だけど、頭を打つている可能性もあるから、念のために明日は安静にしてなさい」

「はい。分かりました」

レオンが返事をすると、用事は済んだとばかりに、彼女はカーテンの向こう側へと戻つていつた。そちらが、イザベラ先生の居住スペースなのだ。3人も子供がいるから、きつと忙しいに違いない。こんな事を言つてはいけないのかもしれないが、やはり、自分の為に早朝から仕事をさせてしまつてのが、少し心苦しい。

イザベラの足音が聞こえなくなつてから、レオンは身体を起こした。

「大丈夫？」

リディアが聞く。彼女は丸イスに腰掛けていた。

相変わらず表情には出ないものの、イザベラ先生曰く、彼女も心配してくれていたようだ。レオンは少しだけ微笑んで見せた。

「大した事はないです。リディアさんも、わざわざすみません。忙しいのに、見に来てくれたみたいで……」

だが、彼女はあつやつと囁いた。

「仕事だから」

「え？・・・あ、仕事の次いでつて事ですか？」

リディアは軽く頷いてから、すぐ脇に置いてあつた布袋の中に両手を入れる。そこから取り出した物を、包んでいた布を取り払つてから、レオンに差し出した。

それはレオンが使つてゐる物と同じスローライニングダガーだつた。だが、明らかに新品である。

「・・・どうしたんですか？これ」

それを差し出す意図がよく分からなかつたので聞いてみると、彼女は簡潔に答える。

「補充」

あまりに端的過ぎる言葉にすぐには理解出来なかつたものの、しばらく考えてから、レオンははつとなつた。

反射的にいつも短剣をぶら下げている辺りに手をやるが、そこには短剣どころか、それをぶら下げておく革ベルトもなかつた。治療したのだから当たり前だが、鎧も着ていらない。その下に着ているインナーウェアだけの状態である。

ふとリディアがベッド脇の方へと視線を送るので、そちらを見てみると、そこにある低い棚の上にベルトと短剣が置かれていた。新規ではなく、いつもレオンが使つてゐるものだ。

だが、そこには短剣が2振りしかない。

回収し損ねた。ダンジョン内で回収し損なえば、それは即ち、永久に見つからないという事と同義だ。

レオンは棚の上にある物を見つめながら、固まつてしまつた。

鍛冶師の父娘が丹誠込めて作つてくれた物を紛失してしまつた。しかも、長年使つて壊れてしまつたとかなら分かるが、自分の勇み足のせいだ、一ヶ月もせずになくしてしまつた。

どんな顔をして謝ればいいのだろう。

だが、そこで聞こえてきたリディアの声は、いつも通りだつた。

「投擲武器だから、なくなるのが普通」

彼の方に視線を戻すと、やはりいつも通りの彼女の表情だった。当たり前だが、嬉しそうには見えない。だけど、その無表情に救われたような気がした。

「無理して拾わなくていいと思う。それよりも命の方が大事だから。もちろん、粗末に扱つて欲しいわけじゃないけど」

淡々と述べる彼女。だけど、彼女が自分の作った武器に愛着を持つている事も、レオンはよく知っている。

差し出された短剣を受け取る。

リディアの瞳に視線を戻してから、レオンは言った。

「ありがとうございます。でも、大事に使わせて貰います」

彼女は少し顔を伏せただけだった。

心なしか顔が赤いような気もするが、理由がよく分からない。

そのまま、静寂が訪れた。リディアは何も言わないし、出て行こうともしない。まだ何か用があるのだろうかと考えて、はたとレオンは気付いた。

「あ、そういうえば……僕の鎧、もしかして修理に持つて帰つてます?」

この部屋には見当たらないのだ。イザベラもボロボロだったと言つていたし、その可能性が高い。

リディアは顔を上げてから頷く。

「ちょっと時間がかかると思う。たぶん一週間くらい。だから、ダンジョンにはしばらく入れないから」

「あ、はい……分かりました」

何故か、再びの沈黙。

何か他に用事があるのだろ?と思つたのだが、鎧の事ではなかつたようだ。

今度は、リディアはじつとこちらを見つめている。だが、レオンの顔に何かついているわけではなく、考え中のサインだった。まるでこの顔に眼力で穴を空けようとしているかのようだ、一点を見つ

めて動かない。一回気付けばそれほどでもないが、それまではさすがにドキドキする。

仕方ないので、受け取った新品の短剣の棚の上に置いた。

「どうしてレオンは冒険者になりたいの？」

唐突な質問だった。

どうしてそんな事を聞くのだろうと思つたが、彼女の瞳にからかつている色はない。そんな事をするような人でもない。

「えつと、ベティから聞いてないですか？僕の前世の話なんですか？」

「聞いてる。でも、それがよく分からなーから」「え？」

「そんなに前世を知りたいの？」

言われてみれば、確かに他の人にはよく分からぬ動機なのかもしない。

だが、簡単に説明出来る気持ちでもない。どうやって話したらいだらうか。

リディアの言葉がさらに続いた。

「前世が見えなくても、レオンは十分生きていけると思う。見えなくともいいんじゃない？それで納得出来ないのはどうしてなの？」

「あの、すいません・・・どうして、急にそんな事聞くんですか？」

どうしても気になつたので、レオンは尋ねた。あまり口数が多くない彼女だけに、尚更こんな事を聞いてくるとは思わなかつた。

リディアは少し躊躇つような素振りを見せたが、それでも話してくれた。

「鎧を見たから」

「え？」

彼女の声が心なしか小さくなる。

「私はダンジョンに入った事がないからよく分からなかつたんだけど、あの鎧を見て分かつた。本当に命懸けの場所なんだって。私も作るのを手伝つた鎧だから、どれくらいの力が加わつたのかは見れ

ば分かるから。だけど、どうしてそこまで頑張るのかなって。特に、レオンは1人だから。たった1人でそんな場所に行って戦うなんて、どうしてなのかなって思ったから。そんなに前世が大事？そんなに頑張れるレオンなんだから、前世なんてなくてもいいんじゃない？私もデイジーもラッセルもガイさんも、前世とはあまり関係のない仕事をしてる。そういう人だってたくさんいる。そう納得するのはダメなの？」

彼女の表情はいつもと同じ。つまり、真剣そのものだ。

対するレオンは少しさにかんだような表情で答える。真面目な顔では言えない。自分の弱いところを説明しているようなものだからだ。

「あんまり言いたくはないんですけど・・・やっぱり、僕は不安なんだと思います」

リディアの表情は動かない。

「結局僕は、前世を知りたいというよりも、前世がある事を確かめたいんだと思うんです。自分のルーツがちゃんとあるんだって事を、この目で見てみたい。他の人がみんな持っているものだから、余計に気になるんです」

「命懸けでも知りたい事なの？」

レオンはそこで照れたように頬を搔く。

「リディアさん。それは違うんです」

首を少し傾けた彼女に、自信なさげなレオンの声が伝わる。

「こういう言い方もなんんですけど、結局、僕も冒険者になりたいだけなんです。そもそも、僕の前世が分かるとしたら、魂の試練場をクリアした時です。それは、冒険者にとってゴールではなくて、スタートです。そこをクリアして終わりなんて、さすがにそんな事は思ってないですよ」

「どういう意味？」

「つまり、僕が命を懸けてるのは、冒険者になるためですよね？他の冒険者見習いの人と同じです。その為に命を懸けるのは普通の事

ですよ。僕が言うのもなんですけど、命を懸けた事がない冒険者なんて頼りないですから。ただ、前世を知らないっていう不安を抱えたままだと、頼れる人間になれないと思つたんです。自分に自信のない人間が、人から頼られる人間にはなれっこないですから」

リディアの視線は動かない。よく見ると、どうやら考え中らしいと分かつた。レオンはあまり説明が上手くないだけに、理解する方も大変だろう。

「・・・つまり、前世を知りたいのはついで？」

ついでというのもあんまりな言い方だが、全く見当違いではない。「なんというか・・・前世を知りたいのは確かです。それを知る事で、自分の足元がしつかりするような気がするんです。ですけど、冒険者になりたいっていう気持ちも確かになんですよ。両方あると思つて貰えればいいです。最終的には、人の期待を背負えるような人間になるのが僕の夢というか、憧れなんです」

彼女の視線がこちらの目を捉える。今度は考え中ではないようだ。何度か瞬きしているからである。考え中の場合、まるで時が止まつたかのように静止するから、独特の違和感があつて分かり易い。

そんな事を悠長に分析していたレオンだつたが、よく考えると、それはつまり見つめられているという事だつた。その事に不意に気付いた途端、気恥ずかしくなつて視線を逸らした。

こうなると、気まずい沈黙でしかない。

そこで、勝手口のドアがノックされる。

その音で固まりかけていた空氣から解放されたレオンは、リディアの方を見る。その表情はほとんど変わらないものの、彼女も訪問者に心当たりがないのはよく分かつた。

どちらかが返事するよりも先に、勝手口が開く。入ってきたのは、レオンの知らない男性だつた。

この町では一般的な、ダークブラウンの短髪に瞳。ブルーのシャツに象牙色の上着とズボン。その服の組み合わせはあまり見かけない感じだが、スッキリとした顔立ちに不思議と似合つてゐるし、結

構上等な服のようだ。だが、気のせいか、サイズが少し窮屈なようだ。身長はそれほどでもないが、体格はいい。というより、物腰から言つても、明らかに荒事の経験者である。

根拠はないものの、レオンは直感で、この人は冒険者だらうと思つた。

男はこちらを一瞬だけ見たものの、リディアを見るなり笑顔になつて親しげに話しかけた。

「やあ、リディア。お久しぶりだね」

ここにこととしている男に対して、無表情なままのリディア。イスから立ち上がったから、挨拶を返すのかと思ったがそうではなく、訝しげに質問した。

「・・・いつ帰つてきたの？」

結構辛辣な物言いのような気がした。彼女は基本的に無愛想と言えるかもしれないが、言葉が刺々しいわけではない。それなのに、挨拶を返さないのは珍しい。

勝手口から数歩進んだ位置で立ち止まり、男は答える。

「今日だよ。決まつてるだろ？ 今日帰つたから、こつして挨拶に周つているんだ。さつきリディアの店にも行つてきたんだけど、会えなくて残念だと思つていたところさ。だけど、ここでこうして会えたんだから、僕の運も捨てたものじゃないね」

大袈裟な言い方だと思ったが、彼なりのジョークなのだろうか。リディアはくすりともせずに言葉を返す。

「じゃあ、ベティにも挨拶したら？ ここで待つてたら来ると思つけど」

その一言で、男の笑顔は固まつた。

「・・・悪いけどここで失礼するよ。イザベラ先生によろしく伝えとおいてくれないかな」

依頼口調だつたが、彼は答えを待たずに勝手口からそそくさと出て行つた。

本当に顔を見せただけという訪問だった。もつとも、イザベラ本

人には顔すら見せていないのだが。

とりあえず、さつきの男が誰だったのか聞こうとした時、勝手口の外の方から声が聞こえた。

「あっれー。ブレットだね。いつ帰つてたの？」

ベティの声だった。

答える男の声は、明らかに取り乱していた。

「や、やあ、ベティ。『ご機嫌いかがかな？』

強いて言うなら、尋ねた本人よりはいいだろう。本人の声はどう聞いても、機嫌がよさそうには聞こえない。

「お陰様で元気だよ。そういうブレットは、ちょっとくらい強くなつた？」

話している光景を直接見られないレオンだが、雲行きが怪しいのは分かつた。ベティの場合、そんな質問をした時点でのそれを実際に確かめる事が半ば決まつてているのだ。

「そ、そうだね。だから、ベティも、もう……うわー！ ちょっと！ つた！」

待つて貰えなかつたようだ。地面に小麦袋を叩きつけたような音が響いたからである。

「うーん……だめだなー。ちゃんと訓練してる？ まだレオンの方が倒しがいがあるなー」

喜んでいいのか悪いのか、判断しにくい言葉である。

やがて、服を払うような音がしてから男の声が聞こえた。

「・・・と、とにかく、これで失礼するよ」

颯爽とというより、明らかに走つて逃げていくのが、足音で分かつた。

今のやりとりはなんだつたのだろうか。そう考えていくうちに、勝手口のドアが開いてベティが入つてくる。彼女はノックしなかつたが、よくある事だつた。

彼女はこちらの顔を見て、少しだけ瞳を大きくした。

「あれ、もう起きてても平氣なの？」

彼女にも心配をかけたのだ。そう思つて、レオンはなるべく明るく微笑んだ。

「はい。明日は安静という事ですけど、もう帰つてもいいそうですね。すみません。ベティさんにも心配かけたみたいで・・・」

彼女の普段着とも言えるエプロン姿だが、仕事中なのは間違いない。

ベティは笑つて手を軽く振る。

「いいよいよ。ちゃんと帰つてきたんだから。それより、リディアもいたんだねー。ブレットも来たみたいだけど、平氣だつた?」

その質問の意味がレオンにはよく分からなかつたが、聞かれたりディアは小さく頷く。

「最初にベティの名前を出したら逃げていつたから」

「そつかー。でも、リディアがいるつて分かつてたら、もう何発かおまけしてたなんだけどなー」

そう言つてウインクしてみせるベティに、内心レオンはぞつとしだが、リディアは小さく頷くだけだった。珍しく、どこか嬉しそうな表情に見える。

「あの・・・さつきの男性がブレットさんですか?」

ボニー・テールの少女2人がこちらを見たが、答えたのはやはりベティの方である。

「そうそう。レオンにとつては冒険者の先輩だね。でも、さすがにレオンにはちよつかいで出でなかつたでしょー?」

「ちよつかい?」

それどころか、挨拶すらなかつた。

「あいつは女の子を見たら、見境なく口説くんだよねー」

「女の敵」

リディアの眩きに、ベティは苦笑した。

「敵は言い過ぎかもしないけど、でも、結構鬱陶しいんだー。私とかはまだいいんだけど、リディアはあんまりそういうのに慣れてないから困つてたんだよね。だから私がちょっと懲らしめてやつた

んだよ。あれは・・・何年前だっけ？」

「4年前」

「もしかして、この町の人ですか？」

「2人ともいつ帰つてきたのかと聞いていたし、4年前なら、ベティとリディアはもちろん、先程の男性も恐らく、16歳未満の未成年だろう。」

遠い目をしながら、ベティが答える。

「そう。あの時はまだ、ブレットもリディアも13歳か。普通は誰か好きな女の子が出来て、その子を一途に想うんだろうけど、あいつは最初から見境なく口説いてたよね・・・うん、やっぱり、あの時ちゃんと頭を押さえといて正解だつたなー。そのまま調子にのつてたら、たぶん本物の女の敵になつてたよね」

その結果、ブレットは名前を聞くだけで逃げ出す程、ベティの事が苦手になつたらしい。いつたい何をしたのか、想像するのも恐ろしい。

ベティは口元に笑みを浮かべながら言った。

「レオンもリディアに鬱陶しつて思われたら、私がきつちり成敗してあげるから」

「・・・思われないよう努めます」

口説くとかそんなつもりはないから大丈夫なはずだが、気を付けるに越した事はない。

だが、そこで意外にも、リディアから不満の声があがつた。

「鬱陶しくはないけど、レオンはちょっと他人行儀過ぎると思う」他の時なら普通に聞けただろうが、今は、直前のベティの発言のせいで、彼女の言葉は重みが違つ。

「いえいえ！そんな事は・・・」

面白そうな口調で、ベティが言った。

「そうかもねー。もうすぐコーストイに来て1ヶ月になるわけだし」

「それに、一コルには敬語を使ってないってラッセルが言つてた」意外なところから、余計な情報が伝わつていたようだ。この時ば

かりは、ラッセルを少し恨んだ。

「何でー？あ、そうか。同じ年だから。じゃあ、シャーロットにも敬語使わないって事になるよね・・・つん、それはちょっとまずいような気がする」

「・・・何がですか？」

ベティはその質問を無視した。

「よしーじゃあ、これからレオンは敬語禁止

突然の言論規制に唖然となつたが、すぐにそれは翻された。

「・・・は可哀想だから、そうだなー、じゃあ、まずは、さん付け禁止。呼び捨てに挑戦」

それも結構厳しい。

レオンはしばらく待つてから、怖ず怖ずと申し出る。

「あの・・・例えば、ガレットさんとかフレデリックさんとかは、さすがに呼び捨てには出来ないと思うんですけど」

特に前者は、呼び捨てにした瞬間拳が飛んでくるだらう。腕を組んでしばらく考えていたベティは、小さく頷いてから口を開いた。もつとも、表情は笑みが浮かんでいたから、真面目に考えていたとは思えない。

「仕方ないなー。じゃあ、10代の知り合いは呼び捨て。これでいいでしょ？」

10代。ベティ、リディア、ラッセル、デイジー、ニコル。後は、まだ知り合いとは言えないと思うが、ブレットとシャーロット。思つたよりもな条件だった事に驚いてしまつた。何か罠があるのだろうかと疑つたが、疑つたところで、どうにかなるとも思えない。

「はい。リディアで練習」

いつの間にか、リディアの両肩を掴んだベティが、彼女とレオンを向き合わせるようにしながら言った。

「・・・何で私なの？」

リディアの疑問にベティは満面の笑みを返す。訳が分からぬ。

次に彼女はこちらに視線を送ってきた。早くしろという催促だと

いうのは分かつたが、何とも不条理な気がしたのは、きっと気のせいではない。

仕方なくリディアの方を向く。目が合つと、何故か緊張してきた。息を落ち着ける。自分はどうしてこんな事をしているんだろうと思いつながら。

「よろしくお願ひします・・・リディア」

同様せずに言えたと思ったが、彼女の頬が朱く染まるのを見て、こちらも顔が熱くなつた。

耐えきれずに視線を逸らす。

遊ばれていた。気付くのに遅過ぎたけれど。

「2人とも顔が朱いねー。ベッドで休んでいつたら?」

ベティの追い打ちが自分にとつては強烈だった。顔が真っ赤になつたに違いない。

分かりたくなかったが、なんとなくレオンは、ブレットが彼女を恐れる理由が分かつたような気がした。

身体は心を映す鏡。

そんな言葉を思い出したのは、青空を背景にくるくると舞つ剣を見ていた時だつた。

その剣自体には、何か特別なものがあるわけではない。ただの剣。訓練用だから、剣先や刃は潰してある。

だが、それは自分が握っていた剣だつた。

自分の武器を弾き飛ばされたという事は、自分は今丸腰の状態。だというのに、呑気に飛んでいった物を見ている場合ではない。いつもなら、すぐに間合いをとるか、それとも相手の懷に飛び込むか考えているはずだ。まさか、自分はあの飛んでいく剣を空中でキャッチするつもりだろうか。それはそれで奇策かもしれないが、現実味がこれっぽっちもないし、そんな余裕を相手が与えてくれるわけがない。

ただ、どちらかというと、そんな行動をしている自分よりも、この行動に対して全く危機感がない自分に驚いていた。戦術を間違える事はよくある。だけど、それに対して何とも思わないのは初めてだつた。

何を諦めているのだろう。

諦める。

その一言が思い浮かんだ時、レオンの脳裏に先程の言葉が閃いた。身体に危機感がない。訓練に身が入っていない。

この時初めて、自分の心が思つたよりも重傷な事に気が付いた。それとほぼ同時に、レオンの頭めがけて剣が振り下ろされてくる。十分な速度。場所が場所だけに、当たれば怪我どころか、死を誘発してもおかしくはない。

だが、レオンはそれに対しても、一歩も動けなかつた。いつもなら避けられるはずだと頭では分かつてはいたが、身体は家畜の牛のように鈍いままだつた。

レオンの髪を撫でるよつにして、それは寸前で止まる。その剣の主であるアレンは、そんな無防備なレオンを見て溜息を吐いてから、剣を肩口に戻した。いつもリアクションの薄い彼が溜息を吐いたという事は、よつほど呆れたに違ひない。それを頭では理解していたレオンだが、何故かどうしても本氣で反省しようとは思えなかつた。

「休憩だ。少し休んだ方がいい」

素つ気ないようだが、労つてゐるよつにも聞こえるアレンの声。

「・・・はい。すみません」

その言葉を返すのが精一杯だつた。

アレンはそのまま小屋の方へと歩いていく。だが、レオンはあまり動く気になれなかつた。何をするでもなく、ただ土の上に突つ立つたまま、遠くに見える山と空の境界を眺めていた。

イザベラ先生は何か身体に後遺症が出ないか心配していたようだが、幸い何もなかつた。一日安静をとつた後の、今日はその翌日。こうして訓練にも出て来られたし、体力トレーニングも問題なくこなせた。

だが、いざ剣を握つてみるとあの有様だつた。

最初から、なんとなく動きが鈍いよつな違和感があつた。訓練に間が空いたから、きっと身体が鈍つたのだろうと思つてはいたが、どうやらそれだけではなかつたようだ。

心の中の何かが欠けてしまつたようだつた。

原因は何だろうか。

そんな前置きを心の中でしたものの、実のじぶん考えるまでもない。やはり、蝶のモンスターとの戦いだらつ。死闘といつよりも、はつきり言つて、死にかけていたのはこちらだけだつた。今こつして生きているといつう事は、恐らく倒せたとい

う事だとは思うが、その記憶がないばかりか、実感すらない。どうやって勝ったというのか。

今回こそ、本当に運があつただけなのである。自分は攻撃を避け間合いを詰める事に精一杯で、モンスターの弱点を探ろうともしなかった。攻撃しさえすれば勝てると思いこんでいたが、それはこちらにとつて一番都合がいいケースに過ぎない。

光が集まつたような不可思議な形態のモンスターに対して、ダガーをぶつけたところで本当に効果があつただろうか。あつたとして、一撃で倒せたのだろうか。攻撃すれば魔法を妨害出来ると思つていたが、それだけ絶対ではない。もしかしたら、こちらの攻撃は何も効かなかつた可能性もある。

それだけなら逃げればいい。だけど、仮に逃げよつとしたとして、も、自分は逃げられただろうか。

結局、自分は何も勝つていない。

何も出来なかつた。

どうしようもなくなつて、否応なく溜息が出てしまつ。やがて逃げようとしているような氣もする。真剣に悩むべきなのに困った振りをしているだけのような、そんな冷めた目で見つめている自分が、心のどこかにいるような気がした。

そんなに自分の前世が大事なのか。

リディアに聞かれたその言葉を思い出す。

彼女に答えたように、立派な冒険者になる為に、或いは自分自身に自信を持つ為に、この道を進もうと決めた。だけど、彼女の言う通り、ここでこの道を諦めたところで、自分が失うものは何だらうか。

前世なんてなくとも生きていける。それは、村にいる時から皆が言つてくれた言葉もある。当然ながら、皆の優しさからかけてくれた言葉だ。

だけど、その言葉に甘えて生きるのは嫌だった。それに、いくら目を瞑つたところで、時折訪れる空虚さを無くす事は出来なかつた。

自分は何故人とは違うのか。何故人にはあるものがないのか。ある日突然自分が消えてしまうのではないか。子供心にそんな事を考えて、父や母に甘えたくなつたのは、一度や二度ではない。

父も母も慈しむように自分の頭を撫でてくれたが、そんな両親ですら、自分とは違う。成長するにつれ、その事に漠然と気づき始めた頃は、そんな自分に嫌気がさした事もあつた。両親の愛を疑つて、いるような気がして、自分が情けなくなつたのだ。

だけど、いつしか、これがきっと孤独という事なんだと想い至つた。

誰にも分かつて貰えない気持ち。世界中の人会つて確かめたわけではないけれど、事実がどうとかではなく、もしかしたら一人きりかもしれないと考えた時の言いようのない不安の方が、自分の心にとつてはずつと重要で大きい。

この想いだけは、今まで誰にも話した事がない。ベティに個人情報暴露させられた時も、一昨日リディアが心配してくれた時も、そして、両親にだって、誰にもある。こんな格好悪い話はしたくないし、それに、聞けばきっと、相手が悲しい顔をするだろう。そんな表情は見たくない。だけど、両親はきっと気付いていただろうと思う。だからこそ、自分が冒険者になりたいと言つた時、何も反対しないで送り出してくれたに違いない。

その想いを胸に潜めながら、そしてそれを力に変えながら、今までやつてきた。それは今も変わらない。この孤独を克服したいとう想いは、消しようがない。

だけど、想いだけではどうにもならない。

その言葉が心にかつてない程大きくのしかかつていてを感じて、今まで自分が、漠然とどうにかなると想えていたのだと思い知る。自分みたいなのが、本当に冒険者になれるのだろうか。そう考えた事が全くなかったわけではないが、答えはいつも、やってみなければ分からぬだった。

少しだがやつてみた。果たしてどうだらうか。

もしかしたら、自分は無茶な事に挑戦しているのだろうか。

また溜息が出る。

頭が働かないというよりも、さっきから同じ事を繰り返し考えているだけだった。何も答えが出ない思案。疲れるだけである。

ちょうどそこで、アレンが小屋の方から戻ってきた。剣はなく防具だけ。どうやら訓練は終わりという事らしい。まだそれほど訓練していないが、自分が腑抜けているのが原因だろう。

「・・・休む時はしつかり休め。突っ立つているだけだと、何事かと思われる」

「そうですね・・・すみません」

「子供達が心配して見ている」

「え?」

振り返つてみると、少し離れた場所で訓練中の子供達が、確かにこちらを見ていた。向こうも休憩中なのだろうか。教師の男性と10歳前後の子供が3人、固まって座つて話をしている。

「・・・すみません」

アレンに視線を戻しながら謝ると、彼は小さく息を吐く。「実は、デイジーが来ている。小屋の前で待つていてるから、会つてこい」

デイジーがここに来る事自体は珍しくない。だけど、差し入れのついでにとかならともかく、自分を直接訪ねてくるのは珍しい。

「僕に用事ですか?」

「ハルクもいる」

聞いた事のない名前だった。だが、アレンはすぐに言い直す。

「フレデリックさんのカーバンクルの名前だ」

それならば見た事がある。焦茶色の毛で深緑の瞳のカーバンクルだ。最初にお屋敷を訪ねた時以来見ていないが、よく覚えていた。

子供達の方を見ながら、アレンは言った。

「しかし、レオンは見かけによらず芯の強い人間だと思っていたが・

・・

その言葉につい視線を逸らしてしまつ。

「・・・すみません」

「いや、むしろ安心した」

「え?」

視線を戻した時は、アレンは既に小屋の方を向いていた。
「行つてこい。悪いが俺は他にする事がある。デイジーによろしく
伝えておいてくれ」

そう言うなり、彼は小屋の方ではなくて、さつき見ていた子供達
の方へと歩いて行つた。指導の手伝いをするのかもしれない。彼が
受け持つてているのは、自分1人だけではない。

なんとなくそちらを眺めていたレオンだが、やがて小屋の方へと
歩を進めた。

何の用事だらうかという疑問があつたものの、その推測に集中出
来なかつた。先程から堂々巡りしている思いが、思考力を半ば奪つ
てしまつてゐる。

結局、何も考へていなゝ状態で小屋の入り口まで着いたが、意外
な事に、そこにいた人物はデイジーだけではなかつた。

確かに、ブレットという名前だつた。今日は全身グレイで統一した
服装だが、体つきと短髪から見ても間違ひない。彼とデイジーは向
かい合つて、親しげに話している様子だつた。

もしかして、今行つたら邪魔だらうかと思つたが、デイジーの方
がすぐにこちらに気付いて、優雅に会釈した。薄紫のブラウスに長
い黒髪がかかつていて、下は白が基調の柔らかそうなロングスカー
ト。さらに、白い高そうな日傘を差している、彼女らしいファッシ
ヨンだつた。

そして、聞いていた通り、左肩に茶色のカーバンクルが乗つてい
る。しがみついているのではなくて、礼儀正しく座つてゐる感じだ
つた。もしかしたら、相手によつて乗り方を選んでいるのだろうか。
近づいていくと、デイジーは笑顔のままだが、ブレットは不満そ
うな表情だつた。やはり邪魔だつたのかもしれない。

「レオンさん。お忙しかったでしょ？訓練中のところを呼びつけてしまつて、申し訳ありません」

いきなり謝られたので、レオンは恐縮して両手を振る。

「いえいえ！そんな事は・・・」

そこでデイジーは、少し首を傾げてこちらを見つめたまま動かなくなつた。リディアならともかく、彼女にしては珍しい事だつた。どうしたんだろうと思つたところで、ブレットが口を開く。

「君がレオンか？」

かなり冷たい声だつた事に驚いたが、レオンはそちらを向いて答える。

「あ、はい。ブレットさんですね。初めまして」

軽く頭を下げるが、彼の視線は心なしか冷たい。もしかしたら、これが彼の普段の表情なのかもしないが、デイジーやリディアと話していた時とは正反対の表情と言つてもいい。

「見習いなんだつて？剣を下げているけれど、ジーニアスじゃないのか？」

「ええ、まあ・・・魔法はわざぱりなので」

「ふうん・・・弱そうだけど、大丈夫なのか？」

何度も言われているので、さすがにその言葉にも慣れた。レオンは苦笑いしながら答える。

「大丈夫とは言えないかもしませんけど・・・でも、なんとか頑張つてているつもりです」

「頑張つたからって、どうにかならない事もあるだろ？？」

「・・・そうですね」

その言葉は、今のレオンには重かつた。だけど、落ち込んでも仕方ない。ただ淡々と、その一言だけ返した。

ブレットは少し目を細めたが、彼もそれつきり何も言わなかつた。気まずい沈黙の訪れを制するように、デイジーが微笑みながら言った。

「立ち話もなんですから、小屋の中をお借りしませんか？レオンさ

ん、お時間は平氣ですか？」

「あ、はい・・・今日はもう訓練は終わりですから、大丈夫です」普通はこんな時間に訓練が終わるわけがない。その事は、ここによく差し入れを持ってきてくれるデイジーもよく知っている。

だから、理由を詮索されたら困ると思つていたのだが、デイジーは何も聞かずに微笑んだままだつた。

「僕も同席させて貰う」

ブレットが唐突に言つた。

その言葉を受けて、デイジーが少し困つた表情で聞いてきた。

「よろしいですか？本当は2人きりの方がいいのですけど、ブレットがどうしてもつて・・・」

「当然だ。こんな場所でデイジーと男が2人きりなんて・・・そんな状況を見過ごせるものか」

「・・・という事らしいんです。すみません、レオンさん。大袈裟だと思つのですけど、少しだけ付き合つてあげていただけませんか？」

別に断る理由はなかつた。いまいちブレットの思考が理解できなかつたのだが、彼なりに見過ごせない何かがあるという事だろ。構いませんけど・・・あの、そもそも今日はどうじつお話ですか？」

彼女は答えなかつた。微笑んだまま小屋の中へと入つていく。実際には、彼女がドアを開けようとしたら、ブレットが微笑みながらそれを制して、代わりに開けた。女性に対する気遣いという事らしい。そんな作法をレオンはよく知らないので、素直に感心した。

小屋のテーブルを借りて、その周りに3人が腰掛ける。レオンとブレットが並んで座り、向かいにデイジーが座るという配置だつた。どちらの正面というわけでもなく、じつちつかずといった中間の位置である。

彼女の肩のカーバンクルは、その縁の双眸でじつといひながら見ている。その事がレオンは気になつた。

「実は、昨日リディアから話を聞きました」

その言葉から、デイジーの話は始まった。

「いろいろレオンさんに言つたみたいですね。リディアはそれを後悔していたみたいですね。言に過ぎてしまつたと・・・ですから、リディアの事を悪く思わないで下さいね」

「いえ、悪く思つなんてそんな事は・・・」

反射的にそう答えたが、デイジーはじつといひながら見てから尋ねた。

「そうですか？でも、今、そのせいでお悩みではありますか？」

すばり言い切つた。レオンは声も出なかつた。

見て分かるほど、自分は暗い顔をしているのだろうか。

「情けない。女の子に何か言われた程度の事で」

その声にそちらを向くと、ブレットが腕組みしてつまらなそうな表情をしていた。

「デイジーもそんな事でわざわざ来たのかい？いくら伝承者の手伝いとはいえ、そんな事まで面倒をみなくていいだろ？」「

言われたデイジーはブレットに微笑みを向ける。気のせいか、いつもより凄みが増しているような気がした。

「黙つていて貰えませんか？今は大事なお話をしているんです」

ブレットはあからさまに視線を逸らした。

「そ、そ、うか・・・いや、済まない。話の邪魔をする気はないんだ」

彼の声はこもり気味だった。何かレオンの知らない力関係があるようだ。うつかり忘れそうになるのだが、デイジーもいろんな意味でただ者ではない。

彼女の視線がこちらに戻つてくる。

「言つ方は悪いですけれど、ブレットの言つ事も間違ひではないと思ひます。普段のレオンさんなら、きっとそこまで悩まなかつたと思ひますから。ですが、リディアの言葉はタイミングがタイミングでしたから・・・。今日お話を来たのは、リディアの気持ちを少しだけお伝えしておこうと思つたからなんです」

「気持ちだつて！？」

まさしく大袈裟に反応したブレットだつたが、デイジーが一瞥すると大人しくなった。

「リティアの気持ちと言つても、最初にリティアが口にしただけなんですよ。この町でレオンさんが知り合つた人全てが、きっと同じ気持ちだと思います。ですから、差し出がましいようですけれど、私が代表して説明するだけなんです。それをまず分かつていただけますか？」

レオンが頷くと、彼女は優しく微笑んだ。

「それでは・・・まずお聞きしますけれど、レオンさんは、冒険者になるのが夢という事ですよね？冒険者は立派な方々だから、その横に自分も立つてみたい。そういう気持ちでこの町に来られたのですよね？」

「はい。そうです」

デイジーは変わらず微笑んでいたが、少しその性質が変わったような気がした。曇つた表情を笑みの下に隠して抑えていいるような、複雑な表情だつた。

「それでは、いざれ分かる事ですから、はつきりとお伝えしておきます。レオンさんのような動機でこの町にやつて来られる方は、実はほとんどいないのですよ」

「え？」

驚きの声を上げると、彼女はブレットの方を見た。

「例えばブレットの場合・・・どんな動機でしたかしら？言つてみて下さい、ブレット」

珍しくからかうように聞いたデイジーに、バツが悪そうな表情を浮かべたブレットはそっぽを向いて答えた。

「そんな人に話すような、大した動機じやない」

「そう。つまらない動機なんです」

まるでブレットの回答を予測していたかのような早さで、デイジーはすぐにこちらを向いて説明した。

そんな彼女に、ブレットは何か言いたげな視線を送ったが、それも一瞬だけだった。

置いてきぼりのレオンに、デイジーは補足してくれた。

「この付近には初心者向けダンジョンが揃っていますから、毎年ユースアイには見習い冒険者の方々がいらっしゃいます。ですけど、そうですね・・・その半分くらいの方は、なんとなくやつてくるだけなんですよ」

「・・・なんとなくですか？」

これ以上ないくらい曖昧な動機だが、デイジーは躊躇なく頷いた。「なんとなく、ただ剣が上手く使えるからとか、魔法の才能があるからとか、要は向いていると思ったからなんです。後の半分は、もつと単純です。ただ、お金が儲かると思ったから。それだけの理由です」

冒険者とは儲かる職業なのだろうか。まず、レオンにはそんな認識がなかつたが、いずれにしても、自分が持つていた冒険者のイメージとは全然違う。

「他にも、例えば、ここはサイレントコールドの故郷に近いですから、彼女に憧れてこの地までやってくる方もいらっしゃいます。レオンさんのような方も、もちろん全くいらっしゃらないわけではないです。ブレットのよつた方は・・・さすがに聞いた事はありますせんけれど」

最後は失笑が混じつていた。いつたいどんな動機だったのか気になつて、ブレットの方を向いてみたのだが、彼は気まずそうに視線を逸らした。

「でも、そういつた方々は、ほんの一握りです。そうですね・・・毎年1人いらっしゃるかどうかくらいだと思います」

「え・・・本当ですか？」

「ええ。私がお会いするのはガレットさんのお目にかなつた方々だけですけれど、100人に1人はいないと思います。私の想像よりも遙かに厳しい選考基準かもしれませんから、もしかしたら、10

「00人に1人という事もあるかもしれませんね」

お金儲けの為に冒険者になつて悪いというわけではない。だけど、そこまで偏つてはいるとは思わなかつた。少なくとも、イブはそんな人物ではない。レオンの村出身で、サイレントコールドと呼ばれる彼女は、人と自然を愛し、世界の為に災厄級のモンスターに立ち向かつたと言われている、強くて優しい女性だつたと言われている。だがよく考えてみると、レオンにはそれ以外の冒険者像がなかつた。村には元冒険者が1人もいないし、前世が冒険者だつた人は母親を含めて数人いるが、その記憶も断片でしかないから、曖昧な情報が多い。

唖然としていたレオンに、ディイジーが淑やかに首を傾げる。

「驚かれましたか？」

「……はい。僕が世間知らずという事がよく分かりました。あ、いえ、元々分かっていたつもりですけど、なんというか、思い知りました」

彼女は微笑んでから、こちらを見つめて居住まいを正した。

「それで、レオンさん。つまり私が言いたいのは、この町の人にとって、冒険者がどういう風に思われているのかという事なんです」

「どういう風、ですか」

考えてみようとしたが、ブレットがすぐに口を出す。

「僕が言うのもなんだけどね、冒険者っていうのはろくな奴がいい」

ディイジーが苦笑して頷いた。

「あくまでもこの町ではですけれど、そう思つている方が多いんです。特に見習いの方々は、まだ若い方も多いですから、乱暴な振る舞いをしたり、迷惑をかけたり、そういう方も多いんですよ。この町はそういう人達とずっと接してきてるんです。特に、私やリディア、ベティやラッセルは、幼い頃から仕事を手伝つていますから、冒険者をずっと直に見てきているんです。そんな中でもリディアは、あまり人付き合いが上手ではありませんから、冒険者を毛嫌いして

いるところがあるんです。その・・・リディアは目立つ姿ですか
ら、そういう方々の振る舞いに嫌な思いをさせられる事が多かつ
たですから」

「実際、そういう冒険者は多いよ。ちょっと腕が立つからって、い
い気になつての奴も多い。特に見習いの中には、何か勘違いしての
奴もいるね。自分が世界で一番強くなるとか、そういう事を本気で
信じてる奴もいる。信じるだけならいいんだけど、それで大きな態
度に出る馬鹿もいるんだ。自分は特別だから、それらしく周りが振
る舞う事を要求する馬鹿がね。リディアだけじゃなくて、デイジー
だつて、そういう馬鹿から言い寄られた事があるだろ?」

満面の笑みを浮かべながら、彼女は答えた。

「ええ。今、目の前にもいます」

どうやら皮肉のようだが、今回ブレットも涼しい顔をしていた。

「デイジーやベティはそういう馬鹿をあしらつ事くらい、なんて事
ないんだよ。だけどリディアは慣れてないから、いい気になつた馬
鹿がつけあがるんだ。まあ、つけあがつたらあがつたで、そこでベ
ティが出てくるから、一度といい気になれないような思いをさせら
れるんだけどね」

何とも末恐ろしい話だが、それもリディアを守る為なのだろう。
よく考えてみれば、ガレットといいベティといい、この町の人々
が冒険者達と付き合つていい上で、結構重要な役割を果たしている
ようだ。あの父娘がしつかり面倒を見てくれるというか、問題があ
つても処理してくれるわけだから、いるといないとでは安心感が違
うだろ?」

それはそうとして、レオンにはまだ話が見えなかつた。

「とりあえず、冒険者がどう思われているのかは分かりましたけど、
それが一昨日の事とどう繋がるんですか?」

デイジーは軽く頷く。

「つまりリディアも含めたこの町の人達にとって、レオンさんは冒

冒険者見習いとしては珍しい方なんです。特にリディアは、ある種の偏見を持っていたと言つてもいいです

「偏見ですか？」

そんなものを持たれていただろうか。そんな感じはしなかつたのだが。

少しだけ笑つてからデイジーは言った。

「付き合いが短い人には分かりにくいと思いますけれど、今はリディアも、レオンさんにだいぶ心を開いているんです」

「・・・そうですか？」

全然気付かなかつた。ずっと変わらないというか、基本的に表情に出ないから分からぬ。究極のポーカーフェイスと言つてもいい。分かる事といえば、考える時の癖と、どうやら赤面症らしいという事だけだつた。その赤面症にしても、一昨日気付いたばかりである。そこでデイジーは眞面目な表情に戻つた。

「ですから、どうか分かつて下さい。リディアがあんな事を言つたのは、レオンさんを心配したからなんです。今までのリディアにとつて、武器や防具を作るのは、ただそれだけの仕事だつたんです。どんな人が使うとか、そんな事はどうでもいい事でした。考えもない事だつたんですよ。冒険者なんてどうなつてもいい。自分はただ注文通りに、出来るだけいい仕事をするだけ。リディアはもちらん仕事が好きですけれど、人一倍没頭出来るのは、他の事を忘れたいと思つてゐるからなんです」

「え・・・」

そんな風にリディアを見た事はなかつた。ただ仕事が好きなんだと思つていたのだが、どうやらそれだけではなかつたらしい。

デイジーは真摯な瞳で話を続ける。

「ですけれど、レオンさんは今までの冒険者と全然違う人なんです。少なくとも、どうでもいい人間とは思えなかつたんです。ですから初めて、自分が作つた防具の向こうにそれを着てゐる人を連想してしまつて、それで怖くなつたと言つっていました。前はただの壊れた

鎧でしかなかつたんですよ。でも、レオンさんの鎧を見て、傷つく場面を連想してしまつたんです。リディアは一昨日初めて、ダンジョンがどれほど恐ろしい場所なのか分かつたんですよ

「・・・つまり、僕はどうでもいい人間だつたのか」

「昨日が初めてなら、確かに例外がなければそういう事になつてしまつだらう。

だが、ブレットの弦はあつさり無視された。

「ああ見ても、リディアは思いやりのある子なんです。レオンさんにあんな事を聞いたのは、ダンジョンの怖さを知つて、つい心配で、居ても立つてもいられなくなつたからだと思います。リディアにとつては初めての事ですから、動搖したんだと思います。最初に言いましたけれど、今はリディアも後悔しています。きっと近いうちに謝りにいくと思います。ですから、どうか分かつてあげていただけませんか？」

レオンは両手の平を見せる。

「いえ、そんな。僕も最初に言いましたけど、悪くなんて思つてないですから。むしろ、そんなに心配させてしまつて・・・僕が謝らないといけないくらいです」

逆にこちらが申し訳ない。自分はそんなに心配して貰えるような人間だろうか。ただ無謀な夢を抱いているだけの、愚かな人間なのがもしかれないのに。

デイジーは真面目な表情のまま、話を続ける。

「これも最初に言いましたけれど、その気持ちはリディアに限つた話ではないんですよ。ですから、今日こうして私が来ました。他の方々はともかく、私は伝承者である祖父の手伝いをしているだけですから、こういう時にお役に立たないといけませんから」

「え？ お役つて・・・」

そんなたいそうな身分ではないから、惑つたレオンに対し、デイジーは落ち着いた笑みを見せる。

「私にとつても、レオンさんは他の見習いの方とは違います。もち

ろん、他の方を差し置いて特別扱いは出来ません。ですけれど、出来る範囲で、レオンさんが立派な冒険者になれるようにお手伝いさせて下せー」

しばらく、レオンは言葉が出なかつた。

そんな言葉をかけて貰つて、嬉しくないわけがない。だけど、自分は本当にそんな人間なのだろうか。ダンジョンの中で自分がどれだけ弱い人間なのか、見ている人は誰もいないのだ。

それでも、数分前とは何かが違う。そんな感覚があつた。

「・・・僕なんかがなれるでしょうか」

絞り出すようなその声を聞いて、ディイジーは微笑んだ。いつにく優しい、本当に花のような笑顔だつた。

「私はなれると思いますよ。レオンさんは、『自身で思つているよりも、ずっと素質があると思います』

そうは思えない。それなのに、レオンは自然に微笑む事が出来た。今まで心にあつたわだかまりが、根こそぎ消えていつたわけではない。

だけど、確かに変わつた。昼と夜が入れ変わるよつ。

何を悩んでいたんだろう。

何が変わつたのだろう。

それでも、まだ頑張れる。

根拠はない。論理もない。だけど、そう思えただけで十分だつた。そこでブレットが口を挟む。

「こう言つちゃなんだけど、この辺にある初心者ダンジョンに苦戦してゐるようなら、才能があるとは言えないと思うよ。よく知らないけど、鎧が壊れるような戦いをしたんだろう。初心者ダンジョンでそんな羽目になるようなら、今からでも考え方直してみたらいい」

抑揚のない口調。だけど、彼にしては穏やかな物言いに聞こえた。

「・・・そうですね。無茶をしたと思います。もっと慎重にならなといといけませんよね」

はにかむようにして答えたレオンを見て、ブレットは面食らつた

ような顔になつた。

その言葉に、余裕の笑みを浮かべたティイジーが続く。

「ブレットは最初から慎重でしたね。仲間が集まるのを待つていたくらいですから」

やや目を逸らしながら、ブレットはぶっきらぼうに答える。

「別にいいだろ？ 大人数の方が安全だ」

「そうですね。別に構いませんよ。ですけれど、レオンさんはまだ仲間がいませんから、あまり参考にならない意見ですね」

物凄い勢いでブレットがこちらを向いたので、思わずレオンは気圧された。

「・・・仲間がいない？」

呟くような声で聞かれたのでたじろいだものの、すぐに答える。

「ええ・・・まあ」

「仲間がないのにダンジョンに入ったのか？」

「そ、そうですけど・・・」

尋問しているような目で、彼がじっとこちらを睨んでくる。何か悪い事をしただろ？ かと、身に覚えもないのに確認してしまった。やがて彼はティイジーに視線を戻す。彼女はいつもの微笑みを返すだけだつた。

唐突に、彼は立ち上がつた。

「・・・失礼する」

「え、あれ？」

急に帰ると言い出した事に對してつい妙な声を出してしまったレオンだが、即座にブレットがこちらを睨みながら聞いてきた。

「何か文句があるのか？」

「いえいえ！ 別に・・・」

「レオンと言つたな」

名前を確認される。今日既に一度目だから、いい加減覚えられているのではないだろ？ もしかしたら、その台詞が言いたいだけかもしれない。

「あ、はい」

「ガレットさんのところへお世話をなっているのか?」

「そうですけど……」

「彼は少し考えてからこうつ言った。

「……ベティには気を付ける」

理由が分かるだけに、重みのある言葉だった。今更聞いたところ
で、もう遅いかもしれないけれど。

「……ご忠告、ありがとうございます」

するとブレットは、今度は真っ直ぐにこちらを見下ろしてきた。
「いずれ決着をつける。だけど、今はまだひょいこのようだし、奇
襲は趣味じゃない。いずれ正式に決闘を挑もう。その時を覚悟して
おけ」

「……何ですか?」

何故決闘なんてしないといけないのか。その理由に見当も付かな
い。

「彼は無言で歩き始め、去り際に一言だけ言った。

「リディアの為だ」

意味不明だつた。

ブレットがいなくなつた小屋の中でしばらく考えてみたが、理解
出来そうもなかつた。いったいどうこうつ意味なのか。そもそも彼は
何を考えているのか。

「面白いでしょう?」

不意にディジーが聞く。いつか聞いたような気がする言葉だが、
やはり答えにいく。

「……よく分かりません」

無難な答えを返すと、ディジーは少しだけ笑みを控える。

「変わつた人ですけど、悪い人ではないんですよ。リディアやベテ
イは鬱陶しいなんて言いますけれど……もしかしたら、少し鬱陶
しいかもしれません。ですが、慣れればそれほど困るわけではな
いと思います」

結局鬱陶しいらしい。

「えっと、とりあえず、悪い人ではないのは分かりました」
それ以上の事は全く分からなかつたが。

デイジーは微笑む。こちらもつられて微笑んでしまつような、柔らかい笑みだつた。

「・・・デイジーさん、今日はわざわざありがとうございました」
彼女は笑顔のまま首を横に振つた。

どういう意味だらうと訝しんだが、すぐに思に至る。

「・・・デイジー。本当にありがとうございます」

ベティとの誓約は、1口もあれば完全に定着してしまつのである。彼女が満足そうに頷くと、今まで肩に乗つて大人しくしていたカーバンクルのハルクが、音もなくテーブルの上に飛び降りた。

「私の用は済みました。あとは、この子の用に付き合つてあげて下さい」

「え？あ、はい・・・」

カーバンクルの用事とは何だらうか。

茶色の中に沈み込むよつた深緑の瞳。その双眸で、じっかりとじつめてくる。

何故か、そのまま動かない。

しばらく待つても何も起きないので、レオンはデイジーに尋ねる。

「あの、用事つていうのは？」

彼女は笑つて首を振る。

「私には分かりません。この子が勝手についてただけですから

「え、勝手にですか？」

「はい。祖父が頼んだわけでもないですよ。皆さん、よく勘違いされているのですけれど、カーバンクルは、頼んだからといつていつでも力を貸してくれるわけではありません。どちらかというと、自分の意志で力を使う事が多いんです。それに、凄く頭もいいんですよ。もしかしたら、人間よりも、力の使い時をわきまえているかもしません。先の未来まで見通しているような、そんな思慮深さを

感じる時もあるんですね

「へえ・・・」

そんなに優秀だとは意外である。村にいたあのペット同然のカーバンクルは、いつたい何だつたのだろうか。

レオンの感心した声が合図だつたかのように、突然ハルクがこちらの肩に飛び乗つてくる。本当に軽い。大きさはリストより大きいはずだが、重さはその半分もないのではないだろうか。

最初は肩に乗つたカーバンクルだつたが、すぐに頭上に飛び移つてくる。

その一瞬後には、周囲に変化が起き始める。

戸惑いつつも、レオンは驚かずにはいられなかつた。

時間が遅くなつていくあの感覚。以前、あの蒸留所で経験した感覚とよく似ている。

デイジーは動いていない。だけど、時間の変化は音で分かる。最初は多少気になる程度だつたものの、次第に、放たれた矢を樂々手掴み出来そうな程、スローモーションになつていく世界。

やがて、時が止まつた。

その一瞬と言つてもいい時間で、レオンは長い時を見た気がした。場所は屋外。

ここよりももっと人が多い町。その一角の訓練場。ここの中のよりも狭いが、中で剣を振つている人間は多い。そのほとんどが子供だつた。

皆笑つてゐる。

剣を振つてゐるのは男の子がほとんどだ。女の子は奥に見える建物で、何か料理してゐる様子だつた。そちらも楽しそうだつた。自分も楽しい。

幸せな気持ち。その気持ちが流れ込んでくる。

やがて、自分の腰の辺りにまとわりついてきた男の子が、こちらの顔を見ながら言つた。

僕もお兄さんみたいな冒険者になる！

自分が体験している彼。伝説の男の気持ちが分かった。

言いようのない程、嬉しい。

溢れ出してくる優しい気持ち。

その子供の笑顔が最後だった。

気付くと、レオンの意識は小屋に帰っている。

静かだった。

だけど、心は感情でいっぱいだった。その感情に身を任せゆつにして、レオンはじつと目を瞑つた。

しばらくして目を開けると、ティイジーは首を少し傾けて聞いた。

「・・・いかがでしたか？」

相応しい言葉を選ぶ。だけど、すぐに諦めざるを得なかつた。あんなに大きな感情を経験したのは初めてだつたのだ。結局、口から出たのはこの一言だけだつた。

「・・・僕も負けられないですね」

偉大なるソードマスターにも。その彼に憧れた少年にも。

だけど、何より、見た光景そのものが羨ましい。

夢だけで出来ていい。そんな場所だった。

伝説となつた男の夢。その彼を夢にした子供達。今まで見た事がないくらい、夢で溢れている場所。

自分もいつか、その場所に立つてみたい。

ティイジーは一度だけゆつくりと頷いた。

「本当に今日はありがとうござります」

頭を下げる時、頭の上にいたハルクが音もなく目の前のテーブルの上に降り立つてくる。

何か言いたげにこちらをじっと見る緑色の瞳。

レオンは貰つた気持ちそのままに、その焦茶色の妖精の頭を優しく撫でた。

「ハルクも、本当にありがとう」

気持ちよさそうに目を細めたカーバンクルは、どこか優しく微笑んでいるよつにも見えた。

振り返って、弾む息を整える。

ビギナーズ・アイの通路。ここ数日間、毎日のように見てくるこの光景に、馬の蹄の音が響きわたる。

近付いてくるその音を身構えて待ち構えていると、やがて奥の曲がり角から、ほぼ実寸大の馬型モンスターが姿を見せた。ただし骨だけの状態である。

ここは基本的に、比較的小型の生物か、或いは大型でも骨だけになっているか、そのいずれかの形態をしたモンスターがほとんどだ。この間のツタのような例外がたまにあるものの、その場合、どちらかというと、モンスターというよりも罠という印象が強い。近付かなければ襲つてこないからである。

それはそうと、今はこの馬型モンスターの相手をするのが先だ。レオンが待ち構えているのは、あまり幅のない通路だつた。せいぜい3メートルくらいの幅である。モンスターはかなりの勢いでこちらに駆けて来ているが、突進を避けるのには向かない場所である。骨だけとはいえ、馬の脚力には馬鹿に出来ない威力があるはずだ。それでもこの場所を選んだ。ここでないと無理だったのだ。

身を落として待ち構えるレオンまであと少しといった場所で、モンスターは突然体勢を崩す。まるで見えない糸にひつかかったように。

実際、その通りである。

通路に仕掛けられていた罠に気付かず、盛大に倒れるモンスター。突進の勢いが強過ぎたせいか、骨格が何本か外れてしまつたようだ。積み木が崩れるように、脚の骨が床に散らばる。

この時を待つていたレオンが、その隙を逃すはずがない。

牽制にダガーを投擲し、さらにショートソードを抜いて近付く。一撃で倒せる保証はない。隙を作つて、そこに近接武器でとどめを刺す。これがセオリーだった。

だが、今回はその必要はなかつた。

短剣を頭にもらつたモンスターは、空氣に溶けるようにその姿を消滅させていく。勝負がついたのだ。

その姿が完全に消えると、ダンジョン内は再び、音をも飲み込むような静寂に戻る。

レオンは息も吐かなかつた。

本当に慣れてきたようだ。

周囲の気配に注意しながら、レオンは装備を回収していく。この手順も、身体はすっかり覚えてしまつていて。頭は周囲に感覚を研ぎ澄ませつつも、身体はいつもの手順を勝手に行つてくれる。効率が良くなつてきたと特に実感するのは、大抵こういう時である。

回収を済ませてから、レオンはモンスターが駆けてきた方へと踵を返す。さつきのモンスターは、この曲がり角の先の小部屋の中にいたのだが、こちらまでおびき寄せたのだ。その部屋で戦う事も出来たのだが、それでは室内に罠がないかどうかを確かめられない。安全な場所を選んで戦うのが基本だ。

その心得も、ようやく身についてきた。

蝶のモンスターと戦つたあの日から、既に2週間が過ぎた。最初にビギナーズ・アイに挑戦してから、もう3週間は経過している。イザベラ先生は、1人でクリアするのに2週間以上かかると言つていたが、下手をすると1ヶ月はかかりそうである。それでも、最初の頃はいざ知らず、今はその事に対して、焦りのよつなものは全くない。

あの頃の自分が焦つていたと直覺出来るよつになつたのも、つい最近のことだ。

コースアイでは自分は余所者だという思いが、どこかにあつたのかもしれない。だから、早く強くならないといけないと思つていた。

それどころか、強さを証明出来なければ、ここから追い出されてしまうと考えていたのかもしれない。いつまでもここにいられるわけではない。もっと頑張らないと見限られてしまつ。そんな思いが、自分を先へと先へと、追い立てるよう歩みを進ませていた。退ける時に退かなかつたのは、その思いが邪魔をしたからだ。目の前の危険よりも、町の人々に見限られる方がよっぽど怖かつたのだ。

だけど、もうその恐怖はない。

今では、危険に飛び込む事だけが勇氣ではないと分かる。退き際を見極められるのが強さの一部だという事も分かる。それを冷静に見つめる事が出来たのは、コースアイの町の人達が自分を受け入れてくれたからだ。もう何にも追い立てられていない。ゆっくりとでも、一步一步先へ進む事が出来るのは、その支えがあるからこそである。

鎧の修理が終わつてから毎日、レオンはビギナーズ・アイに通い続けた。だが、その滞在時間はとても短い。新しいモンスターに遭遇した場合、戦いはしても無理に倒そとはしない。だから、1時間もしないうちに出てきた事もあつた。だけど、それでいい。剣や弓の訓練、道具や知識の勉強等、外で他にする事がいくらでもある。ダンジョンに入る時はクリアの為ではなく、実戦経験を得る為なのだ。

本当に、少しづつ少しづつ、ここに空氣に慣れる事に時間を費やしてきた。

先日の蝶型モンスターには再遭遇していない。しかし、仮に遭遇したとしても、今度は正しく対処出来る自信がある。少なくとも、逃げるべきだと思ったら、迷いなく逃げられる。それはダンジョンで生き残る上ではとても重要な事だ。

しばらく歩くと、先程のモンスターが待ち構えていた部屋にたどり着く。入ってきたドアは、馬が通るのを考慮した為なのか、かなりの大きさだったが、部屋自体は対して広くない。馬小屋だと考えると、せいぜい2頭が限界だろう。

調べてみたが、他のモンスター や罠はないようだ。そもそも、何も置いていない、飾り気のない部屋なのだ。それでも灯りはあるから、視界には困らない。

ただ、入ってきたのとは別に、向かいに扉がひとつだけある。こちらはあまり大きくない。人間用の普通サイズだ。金属製のドアで、いつかの広間と同じように、シタのような装飾に鍵穴が隠されている。

嫌な予感がしつつも、とりあえず解錠する。鍵のタイプも以前と同じだった。だから問題なく開けられたが、嫌な予感はますます募る。

それでも、開けないわけにはいかない。ゆっくりと、ドアを少しだけ開いて、向こう側を覗き見る。

向こうも灯りがあるようだ。かなり明るい。

さらに、慎重にドアを開いていく。

そうして明らかになつた光景を見て、レオンは少し面食らつてしまつた。

下り階段があつた。

ほんの数メートル通路が続いた先に、確かに階段が下へと続いていたのだ。

これはつまり、2階へと進めるという事だった。

別におかしい事ではない。むしろ先に進めるのを喜ぶべきなのだ。だけど、あまりに容易にここまでたどり着けたので、つい驚いてしまつた。以前は、この階段があまりにも遠く感じたものだが、今日は、ここまで進もうとすら考えていなかつたのにたどり着いてしまつた。そのギャップに戸惑つてしまつたのだ。

複雑というか、変な気分になつたが、レオンはその階段を進んだ。階段は意外と長い。だが、下には部屋の灯りが見える。入り口にあつた階段と同じくらいの道のりのようだ。

何事もなく階段を下りきつてみると、そこには、白い泉とカーバンクルの像。つまり、導きの泉である。妖精の像はこちらを向いて

いた。

立ち止まつて考えてみる。今下りてきた階段は、確かに地下1階から2階へと下りる階段だつたはずだ。だけど、泉の像がこちらを向いているという事は、ここを上つたら地上に出るという事なのかな。自分で考えておいてなんだが、本当だらうか。だが、試して地上に出たら、それはそれで馬鹿みたいである。

見るだけ見てみようと振り返つて、階段の先を見上げてみる。遠いからはつきり見えないが、確かに外の明るさだとしてもおかしくはない。

地上にすぐ帰る事が出来るのはありがたいが、よく考えてみると、先程までいた1階の部屋に戻る事は出来ないようだ。こういうケースもあるのなら、階段を下りる時は忘れ物に気を付けなければならない。捨いに戻ろうにも、もう一度と戻れないのだから。

何はともあれ、レオンはそこで少し休憩する。しばらく考えた後、もう少し進んでみる事に決めた。今日はまだあまり戦闘していない。体力も装備もほとんど消費していない。それに、退路もこれ以上ないくらい確保出来ている。すぐそこに帰り道があるので、万が一怪我を負つたとしても、診療所まで徒歩5分もない。

進める道は、階段の向かいの壁にあるドアだけのようだつた。こゝも金属製。ただし、装飾も何もなく、鍵も付いていない。

気を付けながら開けてみると、そこは通路だつた。ただし、今度は結構広い。長細い大部屋と言つてもいいかも知れない。

奇襲や罠に注意しながらその道を進む。灯りは十分だつた。だから、道の先にあるものが最初から見えていた。

大扉である。

もちろん遠くからでも分かつてはいたが、すぐ近くに立つてみると、その巨大さに圧倒される程だつた。両開きの扉だが、その片方だけでも床に倒せば、大人が30人は横になれそうだ。それは誇張でもなんでもなく、もし持つて帰れたら、これ1枚で家の床や壁として成立しそうである。黒光りしているがどうやら木製らしく、表

面には植物が絡み合つたような彫刻が施されている。その中心に目玉のような物が描いてあるから少し不気味な感じだが、芸術作品としても申し分のない風格があった。

これ以外に扉のようなものはない。だから、進もうと思つたらここを開けるしかないのだが、罠云々以前の問題で、まず、この重そうな扉が人間の力で開くのかどうか疑わしかつた。

それでも、とりあえず挑戦してみるしかない。

軽く押してみたがびくともしないので、両手に体重をかけて押してみる。すると、わずかだが両扉の間に隙間が出来た。扉の向こうも暗くはない。

身体を押し当てるようにして、さうに体重をかける。隙間がある程度広がつたところで、レオンは向こう側を観察した。重い扉を支えながらだから辛い体勢だが、不用意に入るわけにはいかない。入つてから向こうにモンスターがいる事に気付いたら、簡単には逃げられない。この重い扉を開けなければならぬからである。モンスターに襲われながらここを開けるのは、事実上不可能と言つてもいい。

扉の向こうは、いつか骸骨モンスター達がいたのと同じような大広間だつた。ただし、それよりも一回り広く、さらに、中には何もない。もちろん、見える範囲ではだが、気配も何も感じない。部屋の向こう側の壁に、こちらと同じくらい巨大な扉がある。

意を決して、レオンは部屋の中に飛び込んだ。

身体で支えていた扉がゆっくりと閉まつていぐ。音はほとんどしない。完全に扉が閉まつた時もほぼ無音で、まるで吸い込まれたかのようだつた。

完全な静寂。何もないとはいへ、閉じこめられたに等しい状況だから、居心地がいいものではない。

とりあえず、向こうの扉まで歩く。

扉を張ろうにも、何も無さ過ぎる空間である。何かスイッチを用意したとして、せいぜい床に仕掛けるくらいしかいだらう。壁も

天井も遠すぎるし、明るいから妙な物があればすぐに気付く。第一、本当に何もない部屋なのだ。

だが、それはレオンの思い込みだった。

広間の中央辺りに差し掛かった時、突然その異変は起きた。レオンが目指していた扉。その黒い一枚板が一瞬で粉々に砕けてしまつたのだ。

というより、扉ではなかつたというのが正しい。少なくとも、レオンが入ってきた扉とは明らかに違う。ボロボロと崩れ落ちていく破片は、まるで羊毛のように、全く落下音がしなかつたからである。その黒い破片は瞬く間に消えていく。紫の煙を上げながら。

擬態。別の植物や昆虫に姿を偽装できる生き物は多いが、さすがにモンスターともなると、人工物にも擬態出来るらしい。

呑気に感心していたレオンだが、身体はしつかり動いていた。その異変に気付いた瞬間に、既に背中の「」に手をかけている。距離から考えれば、弓が一番有効だ。

だが、擬態を解いたモンスターの姿は、レオンのどんな予想とも一致しないものだつた。

目玉が中央にある。これはまだよくある事だつた。しかし、それ以外は何かの生物に似た形態をしているものが普通だつた。人だつたり、鳥だつたり、蝶だつたり、馬だつたり。いろいろなバリエーションがあるものの、一目見て分からなかつた事はない。

しかし、今回は分からなかつた。

そもそも、生物の形状をしていないというのが正しい。

八面体。綺麗にカットされた宝石のような形状をしたそれは、その半透明の器の中に大きな目玉を宿し、ただ床の少し上の空間を浮いていた。飛んでいるとかではなく、本当に空中で微動だにしない。人の大きさ程もある赤い結晶の中で、ギョロギョロと動く目玉。あまりに予想外の姿に、レオンも呆気にとられてしまった。

その為、モンスターが先手をとつた。

突如出現した赤い光が、モンスターの目前で文字を描き始める。

魔法の準備だが、レオンはあまり驚かなかつた。あんな形状だから、魔法でも使わないと攻撃出来ないだう。他の手段といえば、体当たりくらいではないか。

冷静に矢を取つて、弓を構える。

躊躇なく、一瞬で矢を放つ。

ホレスが教えてくれた弓の神體はまだ理解出来ていない。だが、それなりに腕が上がつているのも確かだつた。

のが大きいのもつた、その矢はモンスターに命中する。しかし、本当にただそれだけだつた。

レオンは顔をしかめる。矢があつさり弾かれてしまつたのだ。とてもなく硬い。モンスターの体というか、結晶体には傷ひとつ付いていないよう見える。

続けてもう1本射てみるが、結果は同じだつた。傷つけるどころか、魔法の準備を妨害する事も出来ていない。

弓を諦めて捨てる。次の手を思案していたといふ、モンスターの反撃がきた。

赤い文字が消える。

魔法の襲来に対して準備するレオンだつたが、その規模に度肝を抜かれた。

いつか蝶が放つてきた炎の矢。それと同じ形態の魔法だが、その数が尋常ではない。

20本。いや30本はある。モンスターの目前を埋め尽くすように出現したそれらは、その全ての鎌をこちらに向けている。

確かに驚いたが、それでも身体は動いた。誰だつて同じ状況に立たされれば、嫌でも身体は動くだろう。動かないと、最悪の事態になるのは必至である。

タイミングがどうこうなんて言つてられない。レオンはただ闇雲に、左へ、モンスターを中心にはくように駆けた。

その直後、矢の雨が一斉に飛来する。

床や壁。レオンの足跡を辿るように着弾していくそれらは、その

度に爆炎と轟音をまき散らしていく。その衝撃で部屋が崩壊するのではないかと思える程だった。

とにかく、必死で走るしかない。

最後の一矢がすぐ脇の床に落ちた後、最近では一番かもしない程安堵した。しかし、息を整えながら自分が走り抜けた跡を確認してみて、レオンは絶句する。

ニコルがとんでもない実験をしたのだろうか。そう思えるような、荒れ果てた惨状。

よく生きていられたな。

その感想を抱くのがやっとだった。

だがもちろん、モンスターの攻撃はそこで終わりではない。結晶がくるつと回転し、目玉がこちらを捉えるや否や、再び魔法準備が始まる。今度の光も赤色だった。

またさつきのよつな、命からがらの事態になるのは堪らない。しかし、ここで距離を詰めるのは躊躇したレオンだった。以前の蝶との戦いを思い出す。近距離用の魔法だつて、当然使えるはずなのだ。不用意に近付けば、その餌食になる可能性もある。それに、そもそも近付いたところで、何か有効な攻撃手段があるだろうか。放たれた矢を軽々と弾くあの硬度は、相当なものに違いない。

一度撤退するべきだろう。だが、あの重い扉をどうやって開けるか。モンスターが擬態していた扉は完全に偽物だつたらしく、元あつた場所には、ただの壁があるだけである。この部屋から出ようと思つたら、入ってきた扉から出る以外にない。

そうこう考へてゐる間に、魔法の準備は進んでいく。だが、準備時間がかなり長い。先程の魔法もそつだつたが、どうやら威力のある魔法程、そして射程がある魔法程、準備時間が長く必要であるらしい。

逆に言えば、これだけの大技を使うだけの余裕があるという事だろつ。準備中に仮に攻撃されたとしても、防御に絶対の自信があるか、或いは瞬時に別の魔法が使えるのか。

高威力の魔法と強固な防御。それらを併せ持つている。

そこでレオンは、扉を開ける手段を思い付く。

思い付いたと同時に、その扉の方へと駆けだした。

モンスターは追つてこない。魔法の準備中だからなのか、或いは

動く気がないのか。広間の奥に陣取つたまま。

扉の前にたどり着いた時、再び無数の炎の矢がモンスターの前に出現する。

レオンはそこで立ち止まらずに、そのまま駆け抜ける。

直後に、一斉に矢が襲来してきた。

響きわたる轟音。だが、それが狙いである。

自分が避けた炎の矢のうち、そのうちの幾つかが扉に着弾してい
るはずだった。それで壊して貰おうという算段である。

だがもちろん、いちいち扉に当たつたか確認する余裕なんてない。
目論見はあつても、レオンが実際にしている事は、ただ必死に炎の
矢から逃げ回つているだけである。

しばらくして、轟音が止んだ。

また魔法準備を始めるモンスターを尻目に、レオンは扉の方を振り返る。

なんというか、ちょっと感心した。全く無傷といつわけではない
が、その漆黒の壁は泰然として残つていて。その周囲の壁や床は散
々な惨状なのに、その丈夫さは見事としか言いようがないだろう。
いずれにしても、簡単には壊れてくれそうにはない。

よく考えてみれば、それも当然かもしない。経験則から言つて、
ダンジョンの構成とそこに潜むモンスターの間には、確實に作戦み
たいなものがある。今回で言えば、重い扉はこちらを閉じこめる為
の物なのだ。それが簡単に壊れてしまつては意味がない。

そこから考えを広げれば、逃げられなくなつた冒険者達が捨て身
で攻撃に出てくるのも計算済みだらう。

つまり、まだ切り札を残しているはずだ。

どんな切り札だろうか。この間の蝶のように、近距離魔法だらう

か。

それくらいは使えると考えるのが自然だった。

だが、そこで少しレオンは違和感を感じた。そんな切り札があるのなら、近付いてきて使えるいいのではないだろうか。実際、そうされるのが一番困る。こちらを追つてこないまでも、例えば部屋の中央で火球を爆発させるだけでも、被害は甚大だろう。向こうは防御も鉄壁なのだ。それで問題ないのではないか。

もしかして、近距離魔法は使えないのだろうかと一瞬考えた。だが、信じて懷に飛び込む気にはなれない。その予測が外れていいたら大怪我では済まないのだ。せめて魔法発動の文字が解読出来れば、飛んでくる魔法が分かるはずなのだが、それも出来ない。そのお陰で、不用意に扉を開けようとも出来ない。準備時間が長いなどと高をくくつていて油断したところを、不意打ちされないとも限らないのだ。

再び放たれた炎の矢を、部屋中を走り回つて避ける。もひ、炎の雨と呼んでもいいくらいだつた。床の大部分が、焦げて陥没してしまっている。そのうち走り回るのも難しくなるかもしれない。ぐずぐずしてはいられない。

炎の雨が止んでから、レオンは距離を詰めた。

だが、モンスターの40メートル程手前で立ち止まる。前回の経験から言って、これ以上近付くと、火球を使われた時に避難が間に合わない。

モンスターは特にリアクションしなかつた。既に準備し初めていた魔法の赤い光も、変わらず文字を描き続いている。

レオンは数歩後退する。そろそろ危ないという予感があった。予想通り、炎の雨が飛来する。

雨とは言つても、実際には矢だから、その軌跡は床と平行に近い。1本ならともかく、避けながら距離を詰めるのは難しい。

否応なく後退させられながらも、レオンはなんとか走り回つて回避出来た。

最後の矢が壁に当たって爆炎を上げるや否や、モンスターの魔法準備は始まつた。

さすがに息が上がつてゐる。早く攻撃に出でてしまいたい気持ちを抑えながら、レオンは必死に考える。

相手が近付いてこないのは何故なのか。近距離魔法が、つまり火球が使えないからなのか。だがそうなると、相手が別の切り札を用意している事にならないだろうか。その切り札と、このモンスターが動かない事には何か関係があるのだろうか。

自分なら、どういう切り札を用意するだろうか。

思い付かない。だが、切り札があるのは確かなのだ。自分に予測出来ないのは、何か先入観を持っているからではないか。

もしかしたら、魔法ではないのかもしれない。

そこで、レオンはようやく閃いた。

その仕組みを予測する。それを意識しながら、よく目を凝らして床を観察した。そのわずかな痕跡によつやく気付いたが、そこで意外な収穫もあつた。

この結晶型モンスター。どうやら、一応生物を模していたらしい。右手でダガーを握る。距離はかなりあるが、威力はそれほど問題ではない。

しつかり狙いをつけてからの投擲。

モンスターが浮いてゐる、その上の空間をめがけて。

ダガーがそこを通り抜けた時、確かに糸が切れるような音がした。それと同時に、モンスターの角張つた身体が傾き、床に横倒しになる。

だがそれだけではなかつた。ここまでは予想通りだつたが、それ以上の効果があつたのだ。

床に倒れたモンスターは、先程までの硬さが嘘のように、ガラスの如く砕け散つてしまつたのだ。

目玉が不気味に蠢いた気もしたが、ただそれだけだつた。

あつという間に、紫の煙と共に消え去つてしまつ。

なんとも呆氣ない幕切れだつた。

しばし啞然となるレオンだが、すぐに気を取り直して、腰のショートソードを抜いた。それを右手に少し前進し、その剣で前方の床を少し撫でてみる。

確かに、非常に細い粘着質の糸が、剣にまとわりついてきた。引張つてみると、なかなか強度もある。

その付近にも、よく目を凝らして見れば、同じような糸が張り巡らしてあるのが分かる。気付かずにここを通り抜けようとしていたら、完全に足止めされていたに違いない。

蓑虫という虫がいる。言つてみれば蛾の幼虫なのだが、さっきのモンスターは形こそ違つたものの、どうやらその蓑虫を模したものらしい。というより、蓑虫そのままの姿だつたら、さすがに一瞬でばれてしまつただろうから、敢えて形をえていたのかもしれない。最初は扉の姿に擬態していたが、もしかしたらそういうのが得意だつたのだろうか。

蓑虫は粘着質の糸を使って蓑を作つたり、ぶら下がつたりする。さつきのモンスターも浮いているように見えたが、実際は糸で吊つているだけだつた。矢で射つても揺れなかつたのは、モンスターが重かつたからだらうか。それを支えられる程だから、糸の強度も相当なものだ。

そして、その同じ糸を自身の周囲の床に張り巡らせていた。これが切り札だつたのだ。言つてしまえば罠である。その罠にかかつて動けなくなつたところに、あの炎の雨を浴びせる算段だつたのだ。

さらに言つなら、あのモンスターが動かなかつた理由も、火球を使わなかつた理由も予想がつく。動かなかつたのは、そもそも動けなかつたのだろう。火球を使わなかつたのは、使えなかつたのかもしないが、きっと張り巡らせた糸が吹き飛んだり燃えたりするのを嫌つたのだろう。床すれすれに張つた糸だから、炎の雨なら上を通るから問題ないが、火球は全方位に影響が及ぶから使えなかつたのだ。

最後は、まさかあれだけで勝てるとは思つていなかつたが、せめて驚いてくれれば魔法を失敗させられるかもしれないとは思つていた。最後の呆氣なさだけは、本当に予想外である。

何はともあれ、生き残れてよかつた。それに、ちゃんと相手を分析する事が出来た。自分の成長を実感出来たような気がして、それが何よりの報酬である。

投げたダガーを回収すべく、レオンは剣を使って張り巡らされている糸を切断していく。この糸は何故か消えない。モンスターがまだいるかも知れないから、油断は出来ない。

それでも何事もなく、短剣の落ちた場所までたどり着いた時、レオンはようやくそれに気付いた。

この時ばかりは、レオンの警戒心も吹き飛んでいただろ。モンスターが消滅した場所。

そこに小さな赤い石が落ちていた。

幽靈を見つけたような表情で、レオンはその石を拾つた。中を水流のようなものが渦巻いている。

呆然としながらも、頭は申し訳程度には働いていた。確かに、これは2階層のダンジョンだと聞いていた。そして、確かにここは2層目だ。最初の導きの泉を除けば、1部屋目と言つてもいいが、とにかく2層目なのは間違いない。というか、よく考えてみれば、これ以上先の部屋はないのだ。ここに見えていたはずの扉はモンスターの擬態だったのだから。だから、言つてしまえば、ここがこのダンジョンの最深部だと言える。

だから、さつきのがボスだつたとしても、不自然というわけではない。

レオンの心中では、まさに今摘んでいる魔石のよう、言つようのない感情がぐるぐると渦巻いていた。

これは喜んだらしいのだろうか。だが、何か損をしたような気がするのは気のせいだろうか。

心の整理は簡単ではなかつた。

それでも、それを売了出来た時、レオンの口から自然と声が漏れ

た。

「・・・やつた」

その一言があまりにも大きく聞こえた。自分で慌てた程だつた。他に聞いている人間は誰もいないというのに。

胸に手を当てて呼吸を整える。

落ち着こう。まだダンジョンから出られたわけじゃない。

結局レオンはそれつきり、ダンジョンから出るまで一言も言葉を発しなかつた。何か口にしてしまうと、我を忘れてしまいそうだつた。ここで我を忘れてしまつては、せつかくの成功に傷を付けてしまう気がしたのだ。

それでも、やはり抑えきれず、表情には満面の笑みが浮かんでしまつていたが。

村から出て1ヶ月半。春真っ直中といつたある日。

レオンはダンジョンをクリアする喜びを、初めてその胸に仕舞い込んだ。

ビギナーズ・アイを出た頃には、既に夜が更けていた。

ダンジョン内では時間の感覚が曖昧だ。太陽が今どの辺りにあるのか、確認する術がないからである。自分では数時間程度だと思っていたが、いざ外に出てみると半日以上経つていたというのも珍しくない。今日も、出る前まではまだ夕方だらうと思っていたが、実際は完全に日が沈んでしまっている。

いつもこのギャップを認識する度に、急にお腹が減った気になる。確かにほとんど何も食べていなかつたのだが、さっきまでは全然空腹感がなかつたのだから不思議である。時間の感覚といつもの、目で見ないと実感出来ないものなのだろうか。

闇にうつすらと浮かぶ石畳の上を、レオンは唯1人歩いている。うら寂しい光景だが、そんな事は全く気にならない。それを忘れられる程の嬉しさが、自分の身体から光として溢れ出でているような気さえする。

帰り道がいつもより明るい。

本来なら、この足ですぐにギルドに向かうべきだつた。魔石の鑑定は、原則ギルドでしか行えない。持つていても役に立つわけでもないし、金銭的にも価値があるものだから、盗難に遭う可能性もある。

だけど、実はギルドにも営業時間がある。冒険者達は、規則正しいとは正反対の生活をしているにもかかわらず、意外にも、ギルドには夜間営業なんてものはない。もしかしたら、もつと大きい町のギルドにならあるのかもしだれないが、少なくともコースアイのギルドにはない。従業員が少ないから、そこまでするのは無理なのかもしない。

そういうわけで、こんなに日が沈んでしまってからでは、ギルドを訪ねても誰もいない。カーバンクルのシニアはあの建物に居っているという事だが、いくら優秀でも、さすがに魔石の鑑定までは出来ないだろう。

ふと、シニアの姿が脳裏を過ぎた。イエローの毛並みに藍色の瞳をしている。レオンがギルドを訪ねる事があると、大抵受付のケイトの頭の上で寝ている。小振りな帽子だと見間違えそうなくらい、綺麗に丸まっているのが常である。もしかしたら、ケイトも半ば帽子だと思っているかも知れない。実際、ファッショングループみたいに思える時もある。

今頃はどこに寝ているのだろうか。

事務所のどこかで丸まっているシニアを想像して、ちょっと心が和んだ。こんな無駄な想像をしている時点で、相当機嫌がいいのが自分でも分かる。

そんな事をしているうちに、ガレット酒場の入り口に到着した。さすがにまだ灯りは消えていない。こちらはまだまだ営業時間中である。

だが、扉の前に立つた時、レオンはいつもと違う事に気付いた。いつもなら、ここに立つた時に、中の喧騒が嫌というほど聞こえてくるはずなのだ。特に、夜といえば、酒場にとつて一番繁盛する時間帯である。この酒場は冒険者が客の大半を占めているから、そういう常識が丸々通用するわけではないものの、基本的には、ここも夜が一番込み合つ。酒場店主の目が届いているから、どんちゃん騒ぎという程ではないものの、それでも十分過ぎる程賑やかになるのが、毎晩の定番だった。

それなのに、今日は喧騒が聞こえてこない。全く物音がしないと、いうわけではないものの、どこか静まりかえったような空気が、中から伝わってくる。

もしかして、思ったよりも深夜になってしまっているのだろうか。だから、お客様も大半が帰ってしまった後なのだろうか。

そう考えながらも、レオンは扉を開けて、中に一歩足を踏み入れる。

だが、そこで足が止まってしまった。

店内はいつも通り、満席という程ではないが、テーブルの多くのが屈強な男達で埋まっている。そのテーブルも床も壁も、両奥にある階段も、毎朝店主が手持ち無沙汰に掃除しているからなのか、キラキラと輝いて見える。照明が多いものもあるかもしれない。手入れの行き届いた内装がその光をしつかり反射している為、光が乱舞しているような印象である。

ただ、レオンが足を止めたのは、そういう内装云々が問題なのではない。

自分が店内に足を踏み入れた瞬間、店内の男といつ男の視線が、一斉にこちらを向いたからである。

しかも、全然友好的な視線ではない。

この眼力があれば、それだけでモンスターを倒せる。

そう思われるくらいの迫力があった。

もちろん、レオンは指一本すら動かせなくなつた。ここで何かが

終わるような、そんな予感までした。

どういうわけか、誰も何も言わない。

何か聞こうと思ったが、身体がその命令を完全に拒否していた。

きつと防衛本能が働いていたのだろう。

動いたらまずい。何も分からなくとも、それだけは確かだつた。

そんな熊をも殺せそうな沈黙が、十数秒だけ続いた。レオンの体感時間では、十数時間だつたかもしれないが。

その時間に終わりを告げにきた人物は、レオンの正面から歩いて近付いてきた。

「よう、レオン。少し遅くなつたんじゃないか？」

この場の雰囲気をものともせずに話しかけてきたのは、少し顎鬚を伸ばした親しみ易そうな男性。上下グレイの一見上等そうなファッショングだった為、一瞬分からなかつたが、その声でレオンはやつ

と気が付いた。

「あれ・・・ガイさんですか？」

行商人のガイ。この町までレオンを乗せててくれたのが縁で知り合った人である。その時は名前を教えてくれなかつたものの、最近また会う機会があつて、その時にベティから名前を教えて貰つていた。ただ、ガイという名前は商売上の通り名らしく、本名は違うらしい。

ガイは微笑んではいたものの、ほとんど口元だけだつた。

「遅い帰りなんだな。ビギナーズ・アイに挑戦中なんだつて？」
様子が少しおかしいような気がするものの、レオンは頷いた。
「はい、一応・・・あ、でも、今日なんとかクリア出来ました」
彼はそれには無反応だつた。

「疲れて帰つたところ申し訳ないんだけど、ちょっと出てくれるか？」

「・・・はい？」

帰つて来たのに、いきなり出るとは何事だらうか。

その戸惑いの声も無視して、ガイはレオンの身体を反対向きに振り返らせる。そのまま背中を押してくるので、仕方なくレオンはそれに従う。ちゃんと足が動いたのが、自分でも不思議だつた。

2人とも外に出てから、彼は酒場の扉を閉める。言ひようのない開放感があつた。

そこでようやく、ガイはいつもの笑顔を見せる。それでも、いつもよりは控えめな笑みだつたかもしれない。

「タイミングが悪かつたな。実は、ちょっとした騒ぎがあつてな」
「騒ぎですか？」

ガイはそのまま歩き出した。レオンもそれに着いていくと、酒場のすぐ脇の路地へと進んでいく。どうやら、酒場の勝手口を目指しているようだ。普段はほとんど使わないが、たまに酒場の手伝いをする時に通る事がある。ガイも、商品の搬入をする時に使つてゐるのだろう。

彼は唐突に口を開いた。

「レオンは見た事ないんだろうな」

「・・・何をですか？」

「ひねくれた冒険者見習いが来た時なんか、結構見物なんだけどなあ」

話が飛び過ぎてよく分からぬが、冒険者見習いといふ言葉にて、

レオンは反応した。

「もしかして、冒険者見習いの人人が来たんですか？」

勝手口の扉にたどり着く。こちらを横目で一瞥してから、ガイはその扉を開けた。

その中は資材置き場のような場所である。数メートル先の正面にまたドアがあつて、そこを開けると、右側に部屋が並ぶ廊下にたどり着く。そこがガレットやベティの居住スペースなのだ。ここからなら、少し先の通路を右に行けば調理場に出られるし、すぐ近くの階段を上がれば2階の宿場にも出られる。

ガイはその階段を上がっていく。

「まあ、あれだ」

急に口を開いたかと思えば、彼の口調は歯切れが悪かつた。

「・・・何ですか？」

一瞬だけ口元を上げてから、ガイは答える。

「見習いは来た。というか、俺が乗せてきた。だけど、まあ、その後だよな、問題は。俺も道中一緒にいる時、大丈夫かなって思ったんだけど・・・」

本当に歯切れが悪い。だが、なんとなくレオンは思い当たる事があつた。

「もしかして、不合格だったって事ですか？」

この町に来たその日の事を思い出す。ガレットの役目は、見習いとしてやってきた人間を見定めて、必要なら追い返す事らしい。しかも、追い返す手段は選ばないというか、むしろ、明らかにバイオレンスな手段を選ぶ。

階段を上がった先は、掃除用具等が閉まつてある倉庫である。奥にある扉を開ければ、そこから先は全て宿場用のスペースだ。

彼はその扉に手をかけたが、すぐに開けなかつた。

こちらをじつと見てから、眞面目な表情で口を開く。

「レオン」

今日の彼は、やはり少し様子がおかしい。そう思いながらも、レオンは返事をする。

「はい」

ガイはにこりともせず言った。

「男に生まれた事を後悔する覚悟はあるか？」

時が沈黙した。

まず、言葉の意味が分からぬ。さらに、その意味を推測しようとしても、そんな後悔をする状況が想定出来なかつた。

「・・・えつと、どういう意味ですか？」

彼はドアから手を離して腕を組んだ。

「いいか、レオン。心して聞けよ？」

「え？ あ、はい」

「世界にはな。もうこれでもかつていうくらい、美人が大勢いる」

一瞬にして、聞く気が失せてしまった。

「・・・いえ、もういいです」

だが、ガイは話を止めなかつた。

「だからな、たまに理不尽な性格をした美人もいる。例えば、もつと背が高くないとダメとか、目がもつと大きくないとダメとか、行人なんかダサイとか、前世が料理人なんてつまらないとか・・・とにかく理不尽だけどな。まあ、それは仕方ない」

「・・・仕方ないですね」

後半はかなり具体的だつた。その内容が目の前にいる人と完全に一致しているのは、きっと氣のせいではない。

「そう。仕方ないんだけど、でも、やっぱり言われたら傷つくだろ？ 傷つくんだ、これが。それを忘れるなよ、レオン。お前は1人じ

やない」

ガイは1人で勝手に何度も頷いている。

「いや、あの・・・何がですか？」

「さあ、とにかく行くか。心配しなくて大丈夫だ。俺がついててやるから」

全然人の話を聞いてなかつた。

レオンは何か言うよりも早く、ガイは目の前の扉を開けた。さつさと歩いていく彼に着いて廊下を進んでいくと、奥にドアが開け放たれた一室があるのに気付く。その扉の陰からはみ出しているのは、山男をさらに少し強化したような、筋骨隆々とした逞しい身体だつた。

顔は見えないが、もちろん誰かは分かる。ここにこの主人のガレットである。

2人がある程度の距離まで近付くと、気配で分かつたのか、彼はドアをさらに開いてこちらを確認してきた。

そこでレオンは気付いた。最初はドアに隠れていて見えなかつたのだが、その部屋の入り口付近、ガレットが立つすぐ近くに、誰かいる。顔等はほとんど見えなかつたものの、服装から、どうやら女性らしいというのは分かつた。

ドアの陰から出てきたガレットが、部屋の手前でレオンとガイを出迎えた。

「帰つたか、レオン。明日になるかと思つたが

「え？」

そこで、扉の向こうから声が聞こえた。

「あ、レオン帰つたの？」

ベティの声である。だけど、いつも彼女よりも、声のトーンを抑え気味だつた。夜だから周囲に気を遣つているのだろうか。

娘の質問に答える代わりに、ガレットは振り返りながら言つた。

「とりあえず、部屋に入つて、そこで・・・

だが、すぐにベティの声が割つて入る。

「それはちょっとなー。どう考へても、お父さんと同じ部屋なんて耐えられないだろうし」

よく分からぬ答へだつた。何が耐えられないのだろう。

しかしそこで、新しい人物の声が聞こえた。

「いえ、私、大丈夫です」

全く聞き覚えのない声。ただ、女の子の声らしいとは分かつた。
どうやら、先程少しだけ見えたのが、その女の子の服だつたようだ。

ベティの声がそれに答える。

「本當ー？無理しなくていいよ。レオンはともかく、私のお父さんは普通に怖いと思つし」

レオンにとつて、嬉しいような悲しいような、何とも言えない評価だつた。

怖ず怖ずといつた女の子の声が返事をする。

「大丈夫です・・・たぶん」

「説得力ないなー。まあ、目の前にあんな大男がいたら、普通は怯えるのかな。私にとつてはお父さんだから、さすがに慣れてるけど」ベティは見えないから良いだろうけれど、本人が目の前に立つているレオンは内心戦々恐々である。

「いえ、そんな事ないと思ひます。ただ、私が、その・・・」

「じゃあ、レオンならいけるんじゃないー？なんていうか・・・そ

う、あんまり強そうじゃないから」

「えつと・・・」

困つたような女の子の声だつた。本人が近くにいると分かつてゐるわけだから、返事に困つてゐるのだろう。

それを気にする様子もなく、ベティの声がこちらに響いてくる。

「というわけだから・・・レオンー！ちょっとこちまで来てみてー。

お父さんはそこで待機」

状況が掴めない為、ガレットの方に視線を送つてみると、彼は黙つて頷いた。

歩き出でたとしたレオンだが、そこで隣にいたガイが片手をこちらの肩に乗せてくる。

「俺がついてる。心だけは強く持てよ」

相変わらず、意味不明な発言である。

その声が向こうにも届いたのか、ベティの声がまた響く。

「ガイさんも待機ねー」

視線を送つてみると、彼は肩から手を退けて、ゆうくじと首を横に振つた。珍しく、少し寂しそうな表情だつた。

何も分からぬものの、レオンはとりあえず歩みを進める。

開け放されたドアの前で足を止めて、そつと身を乗り出して室内の方を覗き見た。

やはり、見慣れない少女がそこにいた。ベティに寄り添われるようにして立つている。

田を引くという言葉が、まさに彼女を言い表していた。黒や茶色の髪が多いこの地域ではほとんど見かける事がない、真っ直ぐで流れるような金色のショートヘア。そして、宵闇に一瞬だけ現れるような、深みのある青色を宿した瞳。珍しいという意味でもそうだが、彼女の髪と瞳は、芸術品だとしておおかしくない程、纖細かつ深みのある色合いをしている。明るい髪や瞳が一般的な町の人々が見たとしても、きっと田を引かれるに違いない。そんな確信が出来る程だった。

だが、髪はともかく、瞳に関して言えば、レオンは見慣れていた。むしろ懐かしさを覚えたと言つてもいい。何故なら、レオンの母親も同じ瞳の色をしているからである。その色はさつぱり遺伝しなかつたが、縁がある色だと言えない事もない。

そのお陰なのか、レオンは彼女を見てもそれほど驚かなかつた。むしろ、隣にいるベティを見て驚いたくらいだつた。寄り添つているというか、彼女は少女の肩に手を回して、横から抱きついていると言つても過言ではない。だが、驚いたのはそこではなかつた。

部屋の中が、見るも無惨に荒らされた状態である。それも、ただ

散らかっているだけならともかく、所々に氷の固まりが落ちている。冬の嵐が去った後のような、そんな惨状だった。

それが気になつて仕方がなかつたが、とりあえずレオンは黙つていた。どうしてなのかは分からぬものの、ベティと少女がじつとこちらを見ているから、なんとなく喋り辛かつた。

しばらくして、何かの観察が済んだのか、ベティは少女の方を向く。

「・・・どう? 平氣?」

少女はこちらから目を離さないものの、やがて小さく頷く。
「は、はい。一応・・・」

ベティはほつとしたように微笑んだ。

「そつかー。よかつたよかつた。レオンでダメなら、ちょっとお手上げだつたなー。他はもう女の子を探すしかなかつただろうし」「どういう基準で自分が選ばれたのか、なんとなく分かつたような気がした。

文句を言いたいのは山々だが、とりあえずレオンは、最大の疑問点を聞く事にする。

「あの・・・何があつたんですか?」

「この部屋の中は、明らかに普通の状態ではない。吹雪いている時に窓を開け放しにしていたらこうなるかもしぬないが、今はもう春だから、それもあり得ない。

その質問をした時、明らかに少女が動搖した。見に覚えがあるのだろうか。しかし、怯えているようにも見えたので、なんとなく聞き辛い。

少女の身体から手を離して、ベティはこちらに向き直つた。表情はいつも通りだが、彼女も珍しく言い辛そうだつた。

「話せば長いんだけどねー・・・とりあえず入つて。あと、自己紹介してあげて」

そう言えば、まだちゃんと名乗つてもいなかつた。

レオンは室内に数歩踏み入れて、2人から微妙な距離を残したと

ここで止まつた。少女が怯えている気がしたから、近付き過ぎるのがも悪いと思つたのだ。

「初めまして、レオンと言ひます。一応、冒険者見習いとして、このお世話になつています」

そんなつもりはなかつたのだが、いつもより声が大きかつた気がした。場の雰囲気が暗いように感じて、無意識に気を遣つたのかもしない。

簡単にそれだけ言つと、少女もやや躊躇つてから口を開いた。

「ステラです。よ、よろしくお願ひします・・・」

尻すぼみに小さくなつていく声。

何か小動物を怯えさせているような、そんな罪悪感があつた。いたまれなくなつてきて、レオンはベティに視線を送つて助けを求める。

その視線を受けて彼女は一度大きく瞬くと、室外の人物を大声で呼んだ。

「お父さん！ どうするのー？」

娘から呼ばれたガレットは、姿を見せないまま答える。

「レオンとステラに聞けばいいだろ？ が！」

「アドバイスとかないわけー？」

「そう言われてもな。ステラはギルドの登録もまだだろ？ が。まだそんな段階でもねえ」

「それでも、ここでちよつと良い話を捻り出すのが、元冒険者つてものじゃないのー？」

呆れたようなガレットの声が返つてくる。

「どこの詩人だ？ それは・・・そんな事より、後はお前に任せいいか？」

父親には見えなかつただろうが、ベティの顔には笑みが浮かんでいた。

「私の自由にしていいって事ー？」

彼女の自由と言わると、どうしても穏やかに聞けない。だが、

ガレットはすぐに否定してくれた。

「言つただろうが！本人に聞け！」

「はいはい。あ、でも、ステラの部屋は自由にしていいでしょー？」

「どうする気だ？」

「私の部屋はー？」

「許す」

それだけ言い残すと、まるで丸太を突いているよつた足音が遠ざかっていく。どうやら、1階の酒場へと戻るようだ。そういえば、ガレットもベティもいないわけだから、店内には誰もいなにのだろうか。ガレットには奥さんがいるにはいるのだが、接客はらしく、ほとんど調理専門と言つてもいい。

もつとも、例え誰も店内にいなかつたとしても、盗みを働くとする人はいないだろう。そんな事をすれば後が怖いし、それに、客の何人かは店長と顔馴染みだから、見つければ代わりに成敗してくれる事は間違いない。

何はともあれ、父娘の間で何かしらの合意が成されたらしい。その詳細は不明だが、新たに判明した事もあつた。

「ステラさんも冒険者見習いなんですか？」

そう本人に聞いたが、隣にいる酒場娘が笑つて言つた。

「だいたい見て分かると思つけど、ステラはレオンと同い年だつてー」

彼女が何を言いたいのかはすぐに分かつたが、一応控えめに反論する。

「ついでつき初めて会つたばかりですから、知り合いとは言えないと思つんですけど・・・」

「血口紹介したでしょー？私くらいになると、会つて数分くらいでもう親友だと思うなー」

「・・・さすがですね」

いろんな意味で勝ち目がなさそうで、レオンは大人しく従う事にした。ステラの方を向いてから、少し苦笑する。

「えっと、すみません。いろいろ諸事情があつて、呼び捨てにする事がありますけど、嫌だつたらすぐに言つて下さい。その……ステラが言えれば、たぶんベティも許してくれると思うので」

彼女は青い瞳をパチクリさせたが、すぐに思い出したように頷いた。

「あ、はい……あ、いえ。嫌つて事はないと思います」

少し弱気過ぎるような気もするが、割と常識的な人のようだ。まだほとんど何も知らないとはいえ、とりあえずその部分が分かつただけでも、レオンは結構安心した。

それはそうと、質問の中身の方は完全に忘れ去られているようだつた。

「それで、ステラも冒険者見習いなんですか？」

答えたのはベティだつた。

「そうそう。今日つていうか、本当につにさつき来たんだよねー。もう夜だつたからギルドも開いてなくて、ガイさんがここまで案内してくれたんだよね」

「へえ……」

そういえば、コースアイまで見習いを乗せてきたと言つていた。こんな夜中に連れてきて、そのままほつたらかしといつのは、さすがに嫌だつたのだろう。

「それで、お父さんに会つて会格つて事になつて、そこまでは良かつたんだけど……」

「何があつたんです？」

この部屋の惨状と、何か関係があるのだろうか。

ベティはステラの方へと視線を向ける。それに気付いたステラは、少し躊躇したものの、小さく頷いた。

「ステラをこの部屋まで案内してたんだけど、その時に酔つぱらいが絡んできて、まあ、なんていうか、それが行き過ぎだつたんだよね。完全に悪酔いしてたし、下心見え見えだつたし。それに相手が多かつたから、これはとつとと成敗しておこうと……」

「・・・成敗したんですか？」

彼女流の成敗は、明らかに一般的な成敗ではない。想像を絶するような技が乱舞するのだ。

だが、ベティはあっさりとこう言つた。

「ステラがね」

「・・・はい？」

なんとか聞き返したレオンだったが、ベティは腕を組んで、視線をあさつてにやる。

「あれはなかなか凄かつたなー。私も見るのは初めてだつたから」レオンはゆっくりと首を動かして、ステラの方を見る。彼女はあからさまに視線を逸らした。

あのベティに凄いと言わせるような技を、この少女が繰り出したというのだろうか。どこからどう見ても普通の、それどころか、少し小柄で華奢な少女だと言つてもいい。そんな奥義が使えるとは、露ほども思えない。

だが、よく考えてみれば、ベティだつて普通の少女だ。特に大柄なわけでも、体格がいいわけでもない。そう考えると、ステラが想像を絶する武闘派だとしても、不思議ではないのかもしれない。人は見かけに寄らないという言葉だつてあるではないか。

そんな結論で納得しかけていたレオンの耳に、ステラの言葉が入つてきた。

「私もあんな技を見たのは初めてです。ベティの方がよっぽど凄いような・・・」

また分からなくなつてきたレオンだったが、ベティはその言葉に嬉しそうに返事をする。

「そつかなー？でも、ステラを絶対守らないといけないって思つたから、久しぶりに力が入つたなー。あの技を出したのはいつ以来だつけ・・・確かに前使つた時は、勢い余つて壁を壊しちやつたんだよね。だけど、今回は上手く決まつたから、その分の衝撃が本人につたはずだなー。そうそう。だから、あの客もしばらく歩けないは

すだから、ステラも安心してねー。まあ、もつ金輪際この店に近付かないと思うから大丈夫だと思うけど

満面の笑顔のベティだが、ステラは表情に困っているように見える。

その表情を見て、ますますレオンは分からなくなつた。どうしても、彼女がそんなに戦い慣れているようには思えない。

「あの、すみません・・・結局、具体的に何があつたんです?」

ベティとステラは同時にこちらを向き、そして、しばらくしてお互いに視線を交わした。

「だから、そいつらをやつつけたんだけど」

「それは分かりましたけど・・・そこをもう少し具体的に」

「私の使つた技の事?なんなら、教えてあげようか?」

彼女にとつて教えるとは、その身に叩き込むという事と同義である。

「い、いえ! それは遠慮します!」

「そう? 遠慮なんていらないのに」

ベティは悪魔的に微笑んでいるが、ステラはきよとんとしている。確かに傍目から見れば、よく分からぬ会話かもしねない。

「まあ、それは置いておくとして・・・その後よくよく聞いてみたら、どうも、ステラは男の人が苦手らしいんだよね。だから、大男達に囲まれて動搖したみたいなんだ。それで思わず、本気が出ちゃつたみたいなんだよ」

「え? あ、そうなんですか・・・」

少し理由が気になつたものの、あまり突つ込むべきではないと思はい留まる。何か辛い経験をしたのかもしねないではないか。そのくらいの苦手は、誰にだつてある。それに、ステラの表情はお世辞にも明るいとは言えない。

若干陰鬱になりかけた空気を、ベティの明るい声が吹き飛ばした。

「というわけで、よかつたね、レオン。最初の仲間が出来て」

その言葉にすぐに反応したのは、ステラの方だつた。

「いえ、あの・・・やつぱりいいです。私、迷惑をかけると思つし
答えるベティの声は、少し優しかつた。

「いいのいいの。レオンも仲間募集中だつたし。それに、女の冒険
者は少ないから、待つても望み薄だと思うよー。だつたら、今
うちからレオンで慣れておいた方がいいと思つ」

「でも、その・・・大丈夫ですか？」

何を聞いているのか、レオンには分からなかつたが、ベティはす
ぐに答えた。

「大丈夫大丈夫。ちゃんと私が頭押さえてるし、それに意外と丈夫
だから、ちょっと手が滑つたくらいなら問題ないし。そもそも、レ
オンくらい無害そつた見習いを探そつたら、なかなか大変だ
と思うなー」

「無害そう・・・」

自分が有害であるつもりはないが、気になつてしまつて、レオン
はつい呟いてしまつた。

ステラはちらりとこちらを見る。

「そ、そうですね・・・」

どうやら無害そつたのは納得されたらしい。喜んでいいのか分か
らなかつた。

ベティは満足そつに頷いてから、こちらを見た。

「レオンもいいでしょ？」

一応自問してみたものの、答えは決まつていた。

「はい。もちろん、ステラがよければですけど」

本人の方を見ると、彼女は怖ず怖ずと頷いた。

いつからかは分からないが、今のレオンの心はあまり仲間を求める
ていないうつだつた。仲間がいらないという意味ではなく、仲間探
しに焦つていないうつである。心に余裕があるという事な
かもしれない。

だけど、この町に来た最初の頃は、酒場の手伝いをするたびに、
無駄とは知りつつもダンジョンに連れて行つて貰えないか頼んだも

のだった。それくらい不安だったのだ。仲間がいないと先が見えない。仲間とは、それくらい比重が大きいものだったのである。

その頃の事を思い出すと、今のステラの気持ちが分かるような気がした。

「よろしく。ステラ」

笑顔で右手を差し出す。いつの間にか、その右手にも傷が増えている。

彼女はその手をじつと見つめた後、同じ右手でそつと触れるようにして握った。少し冷たい手だった。

何か小動物を餌付けているような、微笑ましい感覚。

ステラは顔を上げると、こちらを見て遠慮がちに微笑んだ。初めてちゃんとした笑顔を見たような気がする。なんというか、妙な達成感があった。

「よろしくお願ひします」

彼女の声に頷いたところで、ベティが口を出す。

「名前呼んでもあげたらー？」レオンは真っ赤になつて喜ぶから

いつかの診療所での事を思い出して、あの時の恥ずかしさで顔が熱くなつた。

「呼ぶ前から真っ赤だねー。いけ！ステラー！」ここでトドメだー！」

可笑しそうに笑いながら言つベティだが、ステラは話についていけないらしく、戸惑い顔である。正直、その方がありがたい。手を離してから、レオンは無理矢理話題を変えた。

「そういえば、酒場の方の様子が変だつたんですけど……」

そのせいで寿命が縮まつたに違ひないレオンとしては、聞いておきたい事だった。

ベティは両の拳を胸の前に持つてきてから、こちらを見てウインクした。レオンの背筋を冷たいものが駆け抜けていった。

「まあ、あれだよね。倒したのは私達でも、後始末するのはお父さんなんだよ。その始末が済んだ後、酒場の方を通つて放り出しに行つたんじゃないかな。勝手口は狭いから、その方がやりやすいと思

うし

「・・・それは分かりましたけど、それでどうしてあんな空気になるんです？」

「そんな空氣になるようなものになつてたんぢやないかなー。お父さんが処理したわけだから、人間だとは分かつても、人相は分からなくなつてたかもしれないねー」

「聞くんぢやなかつたと、一瞬で後悔した。

「まあ、元々素行が良くない連中だつたんだよね。ステラも全然氣にしなくていいよー。氷漬けにしてやつた程度なら、まだまだヌルいくらいだから」「うー

そのベティの言葉で、レオンはやつと氣付いた。

「氷漬けですか？あ、そうか・・・」

ステラの格好を見る。藍色のワンピースだと思つていたが、どうやら違つたらしい。

これがローブという物なのだ。

もう廃れてきた文化らしいが、ジーニアスでも優秀な人達は、その証としてローブを着用していたらしい。幼い頃に、母親がサイレントワールドの記憶を話してくれた時、そんな風習を聞いた覚えがあつた。

よく考えてみれば、この部屋にその痕跡も残つてゐるではないか。所々落ちてゐる氷の固まりは、自然の物ではなく、魔法の産物だつたのだ。

勝手に一人で納得してゐるレオンを見て、ベティとステラは顔を見合わせる。さすがに付き合いの長さが違うのか、最初に氣付いたのはベティの方だつた。

「あ、もしかして・・・ステラがジーニアスだつて氣付かなかつた？」

「え？あ、はい。何かおかしいとは思つてたんですけどベティは笑つた。

「普通氣付くと思つなー。だって、ステラはどう見てもアスリート

じゃないでしょ？ 私じゃないんだから」「

堂々と自分で言えるところは、さすがベティである。

彼女は瞳だけ真面目な表情になる。

「ジーニアスなんだから、アスリートのレオンが守つてあげないと
いけないんだよ。それに、レオンは先輩もあるんだから」

普段の言動や行動に惑わされるが、ベティも思いやりのある女の子なのだ。

レオンは頷く。

「はい。分かつてます」

元の笑顔に戻ったベティは、ステラの肩に手を置く。

「それと、いくらステラが可愛いからって変な真似をしたら、あの
世よりももっと遠いところに送つてあげるから」

「・・・はい」

ステラの方を向いたベティは、その頭を軽く叩く。妹の面倒をみて
いる姉のようだった。

「まあ、レオンだから心配いらないけどね。それでも、普段から手
懐けておくれのが安心かなー。後で、いろいろコツを教えておいてあげる」

「コツって・・・」

そんなものを見切られていたのだろうか。もしかしたら、いつの間にか手懐けられていたのかもしれない。

「何？ 教えてあげようか？」

ベティの微笑みに、レオンは力なく両手を振った。

「いえいえ・・・遠慮します」

「遠慮しなくてもいいよ？ そんな手間じゃないし」

「・・・僕のコツは、そんな簡単なものなんですね」

「そんな言い方されると、試して欲しいのかと思つちゃうよね」

「いえ！ そんな、滅相もないです！」

滅多に使わないような言葉を使つてしまつたが、内容自体はいつ

もの会話とほとんど同じだった。

しかし、このやりとりには意外な効果があった。

ステラが笑っていた。

なんというか、その笑い方が物凄く上品だった。手で口を隠しているのは当然だが、それだけではなくて、物腰というか、仕草が凄くお淑やかだつた。彼女の瞳や髪に相応しい気品が、確かにその仕草にはあつた。

それにはレオンだけではなく、ベティも目を丸くしていた。やがて、ステラはその視線に気付いて笑みを止めた。

「あ・・・すみません。つい笑つてしまつて」

前と同じ口調だが、気のせいか上品な口調に聞こえた。

「うーん・・・そつかなるほどね」

何かに納得したように頷くベティ。レオンは何も気付かなかつたが、彼女は何か分かつた様子だつた。

「なるほどつて何がです？」

ベティは、ある意味で完璧な笑顔になつてこちらを向く。

「聞きたい？」

「・・・いえ、いいです」

早めの撤退が賢いのだ。

「まあ、あれだよね」

不意に、彼女の笑顔が優しい色になる。

「私にとつてはもう親友だから。どんな所から来ても、どんな身分でも、この町ではステラはステラつて事なんだよ」

急な発言に驚いたものの、その言葉自体は、レオンにも異論はなかつた。

確かに、この町では自分は自分だ。田舎から来ていても、才能がなくとも、誰も差別したりはしなかつた。ありのままの自分を見てくれたのだ。

「・・・そうですね。そうだと思います」

きっと優しい表情になつていたと、自分でも思つ。

その表情のまま、ステラを見た。

彼女は困惑の中に不安が混じったような表情だった。何か事情があるのだろうという推測くらいしか出来ない。

だけど、それでいい。

「ようこそ、ステラ

「そうだねー。ようこそコースアイへ。これからよろしく

青い瞳の少女は戸惑いつつも、2人の表情が移ったように笑顔になつた。

「よろしくお願ひします」

その顔に浮かんだ笑顔こそ、何よつこの町を象徴するものだと、

レオンは確かにそう思った。

のどかな時間が嫌いなわけではない。

アレンは腕組みをして、遠くの空に浮かぶ雲を見つめながら、そんな事を考えていた。

晴れ晴れとした春空には、その雲しか浮かんでいない。掛け値なしの快晴の中、ただひとつだけ漂つている丸い雲。何もする事がない為、ついあんな物を眺めてしまう。何も考えずに、ただ見つめるだけ。その為だけにあの雲は存在していると言つても、もしかしたら過言ではないかも知れない。

ここは、町の西口と呼ばれる場所だつた。

大通りの石畳が途切れる境界。町の内と外を分けている場所。これから町の方を見れば、多くの建物と人々が、反対を向けば、平原と林、そしてその向こうの山々が見える。そんな場所である。

自分がここにいるのは、一応仕事である。その仕事の内容を一言で言うなら、それは警備という事になるが、実際には見張りと言つた方がいい。警備しなければならないような事態が、この町で起きた事がない。もっと言えば、見張りが必要だった事もない。本当に名ばかりの見張り番である。大きい町では衛兵と言つかもしないが、ここは自治都市である為、兵という言葉は使われない。戦力を持つていると見なされると、いろいろ面倒らしいのだ。

一応と言つたのは、本来なら、アレンがここで見張り番をする事はないからである。アレンの本業はもっぱら訓練所の教師であり、こちらは片手間の仕事と言つてもいい。今までほとんど見張りをする事はなかつたのだ。訓練所の仕事の方が忙しいのは周知の事実だし、ここを見張りなんて飾りだということも皆知つてはいる。ただ、何かあつた時の為に、名前だけでも腕の立つ人間がいた方がいいと

いう理由だけで、アレンは名目上警備員という事になつてゐる。

だが、最近になつて少し状況が変わつた。

ここから見て右手。コースアイから北西の方角には険しい山脈が広がつてゐるが、そこで最近新たにダンジョンが発見された。その山脈を越えた向こうの町では、モンスターが度々襲来してきて、結構な騒ぎになつてゐるらしい。

そうなると、反対側のこちらにもモンスターがやつてこないとは限らない。実際、自分が指導している冒険者見習いのレオンが、西の平原でモンスターと遭遇した事もあった。つまり、この西口を出た先である。

アレンがここに駆り出されているのは、町の人々が不安になつたからだつた。要するに、見張りがただの飾りでは、モンスターが来たらひとたまりもないという事である。その不安を和らげる為に、アレンが週に1日程、暇を作つてはここに立つ事になつた。自分がら申し出たというわけではないが、誰から頼まれたというわけでもない。なんとなく無言の圧力があつたというのが正しいかも知れない。

その事自体には、特に不満があるわけではなかつた。自分が剣の腕を磨いてゐるのは、言ってみれば町の人々の安心の為であり、今の状況はその目的を果たしていると言つてもいい。訓練所の方も忙しいのだが、同僚が手伝つてカバーしてくれている。指導しているレオンも、休みが少な過ぎるかもしれないと思つていたくらいなので、ある意味ちょうどよかつたとも言える。

それでも、困る事がひとつだけあつた。

暇過ぎるのだ。

汗水垂らして働いていたといふのとは少し違つが、アレンは子供の頃からずつと訓練に明け暮れていた。毎日身体を動かすのが普通だつたのである。晴れの日はもちろん、雨の日も雪の日も嵐の日でさえも、トレーニングは欠かさなかつた。時間があると思った次の瞬間には、剣を握るか筋トレか、とにかく身体を動かしていた。

だが、訓練所の教師になつてからは、それ以外にも事務的な仕事が増えた。それでもなるべく訓練を続けていたものの、いつしか身体を動かさなくても平気になつていた。その時は代わりに頭と手が働いているのだ。しかも、そういう仕事はこなしてもこなしても減る事がない。次から次へと新しい仕事が出てくる。仕事を始めてから、暇だと思つた事はほとんどなかつた。

そんな時に、この見張りの仕事である。

仕事とは名ばかりの、手持ち無沙汰の時間。仕事という名前がついているだけで、実際には何もしていないに等しい。しかも、ここで事務作業をするというわけにもいかない。机とイスがあればやれない事はないのかもしだれないが、見張りの仕事を完全に疎かにしているわけだから、町の人達が余計不安になるだろう。ここで筋トレを始めるのも同じ事だ。それならば、自分以外の人間が立つていた方が数倍ましに違ひない。

そんなわけで、人生でかつてない程、暇を持て余しているアレンである。

何もする事がない。こんな時間があるとは思わなかつたし、この時間がこんなに苦痛だとも思わなかつた。暇で仕方ないという言葉を聞く事はあつたものの、こんなに深刻な悩みだとは思わなかつた。自分は何をしているのだろう。

哲学的な意味ではなく、単純な意味である。もしかしたら、結局は同じ意味なのかもしれないが。

何だろう、この時間は。

そんな馬鹿みたいな疑問まで浮かんでくる。

そこで、不意に馬の駆けてくる音が近付いてきた。音がはつきり聞こえるという事は、肉眼で十分見える距離である。ぼんやりと空を見ていなければ、もっと早くに気付いただろう。見張り役としては完全に失態である。

それはそうとして、アレンは音が近付いてくる方角に視線を向ける。

西の平原を駆けてくる馬とその上に乗る男。顔がはっきり見えたわけではないが、その男が誰なのか、アレンには分かつた。

やがて、この場所までやつてきたその男は馬から降りて、こちらをじっと見つめてくる。相変わらずの、ワイルドを超越したような身だしなみだが、その右目の碧色だけは、いつ見ても不思議な力がある。

「・・・アレンか」

ホレスの声はあまり大きくないが、不思議と聞き取りやすい。

「そうだな」

「見張りか?」

「ああ」

「珍しいな」

「そうでもない」

「そうか」

それつきり会話は続かなかつた。

2人とも、基本的に無口な人間である。必要だと思つた事以外は話さない。つまらない会話をするくらいなら、黙つていた方がいいという人種なのである。

静かに風が吹いていた。それが草を揺らす音の方が、ここにいる男達よりも騒がしくらいである。

結局、20分程度は待つただろうか。やがて、町の方から、ホレスの待ち人達が歩いてやつてきた。アレンもそのスケジュールを知つていた為、わざわざ聞かなかつたのである。ホレスも確認しなかつたから、こちらが知つてゐる事を察してゐたのだろう。

だが、待ち人の人数は、予定の人数よりも1人多かつた。

「ごめんねー、ホレス。ちょっと別の用事に手間取っちゃつて」
ブラウンのポーテールの少女、ベティが明るく言つた。

その横に立つてゐるレオンは予定通りである。彼らが時折ホレスと弓の訓練をしてゐる事は、彼らを知つてゐる人間なら周知の事実だつた。

だが、もう1人少女がいた。この辺りでは滅多に見かける事がない、ブロンドのショートヘアと青い瞳。この町ではかなり目立つに違いないが、アレンも見覚えはない。

その少女は2人の少し後ろに控えるように立っている。気のせいか、こちらを警戒しているような気配を感じた。

「いや・・・その用事は済んだのか？」

ホレスが聞いた。物静かというか、事務的な声である。

対するベティの返事は、対照的に親しげで活力に満ちていた。

「まあねー。だけど、私はまだちょっと用事があるから、今日はレオンと2人で訓練してくれないかな」

「その子は？」

唐突な質問だが、ベティは慣れた様子で答える。実際、彼女はホレスと付き合いが長いから、彼の脈絡のない質問にも慣れているだろう。

「ステラだよー。昨日来た見習いなんだ。だから、いろいろ町を案内しておこうと思って」

彼女の声は明るかつたが、ステラと呼ばれた少女の方は、心なしに不安げだった。

「仲間か？」

またもや唐突なホレスの質問。これはレオンに向けられたものである。彼はまだ短い付き合いだが、戸惑つたのは少しだけだった。

「あ、はい」

「なら、今日はいい」

「え？」

ホレスは既に視線を遠くに外していた。

「昨日来たばかりなら、仲間を知る時間が必要だ。今までの戦術を見直す必要もある。それはなるべく早い方がいい」

「そうですか・・・そうですね、分かりました」

あっさりと引き下がるレオン。ここで変な気遣いをすると、ホレスは余計困る。それが分かるくらいには、2人の親睦も深まつたと

いう事らしい。

「ゴメンねー、ホレス。また今度お詫びするから」

「別にいい」

「相変わらずつれないなー」

「それより、時間はいいのか？」

ベティは肩をすくめたものの、やはりすぐに引き下がった。

「じゃあね、ホレス。今度また美味しい物を作つていくから

「ああ」

やけに素直だが、彼は以前に生死の境をさまよつた事がある。その時の原因がベティの手料理だつたらしい。その事があるから、彼は彼女の手料理を断つたりはしない。気を遣つていても言えるが、その逆ともとれる。

軽く手を振つてから、ベティは去つていった。レオンはこちらにも頭を下げるが、ステラの方はベティに背中を押されるようにして行つた為、挨拶らしき動作はなかつた。それどころか、結局彼女は一言も喋らなかつた。初対面だから緊張していたと言えない事もないだろうが、そもそも、自分達のような無口な男を相手にする人にとっては、結構喋りにくいものらしい。だから、一言も発せずに去つていく人というのは、実は珍しくない。

「よかつたのか？」

3人が去つてから、アレンはホレスに聞いた。

「何がだ？」

「せつかくここまで来たんじゃないのか？」

「さつき言つた通りだ」

「代わりにベティに付き合えばよかつた」

「俺がいても邪魔なだけだ」

「自分で言つのか？」

「誰が見てもそう言つ」

もしかしたらそうかもしない。そう思つた瞬間に、この会話が終わる事が決定している。

また静かになった。

このまま帰るだろうと思っていたが、何故かホレスはその場から動こうとはしなかった。

「……帰らないのか？」

気になつて聞くと、ホレスは少し間を空けてから聞いた。

「少し話をしないか？」

驚いた。

珍しいというか、予想だにしなかつた。年が近いとはいえ、幼なじみというわけではない。多少親しいとはいえ、傍から見ればただの知り合いにしか見えない。その程度の間柄なのだ。

「……そんなに意外か？」

表情から見抜かれたようだ。彼はその変わつた瞳そのままに、なかなか優れた洞察力を持っている。

アレンは質問に答えなかつた。訂正する必要のない事だつたからである。その代わり、こちらからも質問をする。

「何を話す？」

ホレスは即答した。

「いや。特に考えていない」

「……本気か？」

「たまにそういう気分にならないか？」

「ならないな。なるのか？」

「ああ」

「孤独過ぎるんじゃないか？」

「前よりは孤独じゃない」

会話が途切れた。

当然だが、何か話さなければならぬとは考へない。だが、不思議と今は、この生粋の狩人の事を考へなくなつた。

ホレスと初めて会つた時には、自分は既に教師だつた。しかし、自分とは逆に、彼は仕事なんつもに従事していない。ウイスキーの蒸留所の手伝いをしているが正式に雇われているわけではなく、

彼曰く、ベティの祖父に対する義理を果たしているだけらしい。自分から頼み込んで、手伝わせて貰つていいという感覚のようだ。だが実際には、あの蒸留所はこの男なしには運営出来ない。ほとんど全ての仕事を彼がこなしていると言つても過言ではないはずだ。それでも彼は給料を受け取らないので、ずっと貯まる一方だというのを、以前ベティから聞いた覚えがある。

この男が何を考えているのか、全く分からぬといつわけではないが、完全に把握しているとは言い難い。

最初に会つた頃と比べると、確かに彼の瞳は穏やかになつた気がする。以前は、見る物全てを疑うような視線をしていた。それに、身のこなしがもっと颯爽としていた。今は視線も丸くなつたし、以前程身体にキレがない。どうやらそれは、死にかけた時に変わったようだが、後遺症というわけではないらしい。実際、彼の戦闘能力は、以前よりも落ちるどころか、逆に増している程である。

そんな事をたっぷり考えていられるくらいの時間、2人は一言も喋らなかつた。

すると、再び町の中から、この西口を訪れる者がいた。

荷馬車の前に座つてゐる人物。ダークグレイの服を来た顎鬚の男は、名前をガイと言う。実を言つと、アレンと同い年である。

「よう、お2人さん。暇そудан」

ゆつくりと馬を歩かせながら、ガイは声をかけてくる。実際その通りだつたが、仮に違つたとしても、2人はいちいち訂正しなかつたかもしれない。相手の発言が正しい場合は、尚更相槌を打つたりはしない。

アレンの前で荷馬車を止めてから、ガイは少し苦笑したようだつた。

「一言くらい返事しろつて。俺が1人で喋つてゐみたいだろ?」

「そうだな」

答えたのはアレンだけだつた。ホレスはガイには興味なさげに、山の方を見ている。

「・・・いいよなあ、ホレスは。あんなのでも、ベティちゃんが構つてくれるんだから」「ホレスはこちらを見ないまま返事をする。

「構つて貰つてるわけじゃない」「構つて貰つてるわけじゃない

「・・・なんだろ。無性に腹立つな」「・・・なんだろ。無性に腹立つな

「どうしてガイが怒る?」「どうしてガイが怒る?

「お前には分からぬうな。俺の気持ちは」「お前には分からぬうな。俺の気持ちは

「孤独だな」「孤独だな

「やめろつて。今はちよつと悲しくなるから」「やめろつて。今はちよつと悲しくなるから

本当に悲しそうに見えたわけではないが、アレンは氣になつたので聞いた。

「どうした? 昨日来たばかりじゃなかつたか?」「どうした? 昨日来たばかりじゃなかつたか?

「そうなんだけどな。たまたま見かけた女の子がユースアイに行きたいつて言つから、乗せてきただけなんだよ」「そうなんだけどな。たまたま見かけた女の子がユースアイに行きたいつて言つから、乗せてきただけなんだよ

「ああ・・・ステラとかいう」「ああ・・・ステラとかいう

ガイは少し驚いたようだつた。

「あれ、何で知つてるんだ?」「あれ、何で知つてるんだ?

「さつきここまで来た」「さつきここまで来た

「「」? あ、そうか・・・ホレスに用があつたわけか。だつたら、何でホレスはまだここにいるんだ?」「「」? あ、そうか・・・ホレスに用があつたわけか。だつたら、

素つ気なく本人が答える。

「町の案内をすると言つていたから、今日は休みにした」にやりと笑つてから、ガイは答える。

「へえ・・・まあ、別にいいけどな」「へえ・・・まあ、別にいいけどな

「なら聞くな」「なら聞くな

一度笑つてから、ガイは答えた。

「それは残念だつたな。あの子にベティちゃんを取られたわけだ」いろいろ間違つてているのは明らかだが、ガイ流のジョークだろう。彼の場合、沈黙に耐えられないからなのか、必要以上にジョークを交えて話す事が常である。

それが分かつていいるホレスは、無表情で答える。

「俺のものじゃない」

「いや、いいんだつて、無理しなくても。といつか、あのステラつて子、ここに来たのか？」

彼がこちらを向いて聞くので、アレンが答える。

「そうだな」

「いや・・・何もなかつたか？」

質問の意味が分からなかつたが、とりあえず思つたまま答えた。

「なかつたな」

ガイは1人で何かを納得していいようだつた。

「どうした？」

「いや、ちょっとな。あのステラつて子なんだけど、ちょっと変わつてゐる子でさ。男が苦手とかで、昨日も、絡んできた男を氷漬けにしてたんだ」

「ジーニアスなんだな」

「そこか？感想は・・・まあ、それはともかく、そんな子に攻撃されなかつたつて事は、お前らは男として認められなかつたつて事になるな」

馬鹿馬鹿しいとアレンは思つたが、それよりも早く、ホレスが具体的な行動に出でいた。気付いた時には、既に彼は馬に跨がつている。

「・・・アレン。次に会つた時には、もう少しまたもな話が出来ると思つ」

「そうだな。今より下らない話はそつそつない」

さすがに、ガイも黙つてはいられなかつたらしい。

「お前らな・・・場を和ませようつていう俺の気遣いだろ？が

ホレスは申し訳程度にガイを見る。

「気遣いだとしても、それなりに会話の質が求められると思つが」

「・・・お前にだけは言われたくないな」

「だいたい、お前の話はおかしい。そんな危険人物だとしたら、今

頃町中が氷柱で溢れている

実際、アレンもそうだと思った。

「いや、まあ、そんなんだけどさ。でも、俺はちゃんと、男だから怖いって……ああ、思い出したらへこんできた

ガイはうなだれる。

どうやら、ステラから怖いと言われて傷ついたらしい。理解し難い心理だが、女性に一所懸命な彼にしてみれば、結構ショックだつたのかもしれない。

だが、そこで同情するような2人ではなかつた。

「どうせ強引な真似をしたんだろうな。そんな真似をされれば、女性なら誰だって怖がる」

アレンの言葉にホレスが続いた。

「あのステラという娘はまだ若く見えた。そんな娘に手を出そうとしたのは、自分の神経を疑つた方がいい」

「……それも、お前にだけは言われたくないな。ベティちゃんは18で、ステラは16。その事実があつて、何で俺だけ犯罪者みたいな言い方が出来るんだよ」

「俺は手を出してない」

「こつちは手を出したみたいに言つなつて！俺だつて出してないし！」

「説得力がない」

言い返そそうとしたガイだったが、やがて諦めたように大きく溜息を吐いた。

「……もういい。じゃあな。せいぜい幸せになつてくれ」
ゆっくりと動き出した荷馬車にアレンは声をかけた。

「そんなんに幸せになりたいなら、前言つっていたように、そろそろ身を固めたらどうだ？」

ガイは一瞬だけ振り向く。表情は思いの外明るかった。

「結婚なんてまだ無理だな。せめて、手に職がないとなあ

「この町で働いたらどうだ？」

その言葉に一笑して、ガイは片手を挙げて答えた。

「ここにいい奥さんがいたらな。結局、いい人が見つからないと、そんな気にもなれないって事だな。そんな人を見かけたら、今度会つた時に教えてくれ」

ホレスの横を通りの時も、彼は声をかけた。

「じゃあな。ベティちゃんと仲良くな」

「そうだな」

そのままゆづくりと、馬車はコースアイを後にした。アレンはその後ろ姿をなんとなく眺めていたが、ホレスは北の山を見つめたままだった。

高原の風が吹く。

結局、ガイの荷馬車が見えなくなるまで、2人は一切口を聞かなかつた。

「・・・まだ話をするのか？」

一応聞いたものの、ホレスは馬に跨がつたままだし、何か話題があるとも思えなかつた。

案の定、ホレスはこちらに背を向けた。

「いや、また今度でいい」

「今度があるのか？」

「酒は飲めるか？」

急な質問に、アレンも慣れている。

「ああ」

「今度持つてくる」

「見張り中だ」

「終わつた後でいい」

「ガレットさんの酒場へは行かないのか？」

「まだ行かない」

「そうか」

馬が走り出した。

ガイが消えたのと同じ方向。だが、あの速度ならすぐに追いつい

てしまふだろ？そこでもまた何か言葉を交わすのだろうか。

空を見上げると、丸い雲の位置は変わつていなかつた。

正直、得るもの少ない会話だつたと思う。だが、よく考えてみれば、あの2人は自分よりもずっと多くの時間を、たつた1人で過ごしている。何もする事がない時にどうするのか、聞いておけばよかつたと、今更ながら気付いた。

今度会つた時に聞けばいい。

だが、次がある保証はどこにもない。ホレスもガイも、モンスターがいるかもしれない方角へと向かつて行つたのだ。それはある意味で、冒険者と同じと言えない事もない。彼らがわざわざ危険なダンジョンに向かうのと、どこか似ている。危険を引き替えにしてでも、得たい何かがある。危険を省みずに、自分の生き方を貫いているのだ。

だから、ある日突然彼らが帰つてこなくなつても、全く不自然ではない。

自分が考えても仕方のない事だが。

こんな事を考えてしまつ程暇だ。

適度ならいいが、暇があり過ぎると、きっとと考え過ぎて疲れてしまうだろ？

本当に、今度会つたら聞いておかなければ。

お前達はいつたい何を考えているんだと。

そうかとアレンは気付く。

意外と意味のある質問なんだな。

聞いただけだと馬鹿な台詞に思えるが、その実は結構深い言葉なのかもしれない。

それにも暇だ。

結局、この日にアレンの暇が解消される事はなかつた。

その先に解消される事があつたのか、それも今は定かではない。

フレキシブル・ブルー

「冒険者にしておくのが惜しいなー」

両開きの酒場のドアを蹴破るようにして出てきたポニー・テールの娘は、レオンの姿を見つけるなり、そう言い放ってきた。

汚れた雑巾を、やたらへこみが目立つバケツの中に放り込んだところで、ようやくレオンは返す言葉をみつけた。

「・・・そんな開け方してたら、ドアが開かなくなりますよ
その前に、蹴破るという文字通り、蹴った箇所に穴が空くかもしない。

ベティは笑つた。本当に、彼女はいつも明るい。

「そうだねー。でも、ほら、今両手が塞がつてるから」

確かに彼女は両手で大きなバスケットを抱えていた。彼女が手料理を作つた時、よくそれを持ち運ぶのに使つてゐる、特大の代物である。

外からでは重さは分からぬが、とにかく大きいので大変そうだった。

「僕が持ちますよ。あ、すみません。その前に、これ片づけてきます」

バケツを持ち上げながら言うと、彼女はレオンが立つすぐ脇の壁を見る。先程までそこを掃除していたから、まだ少し濡れている。「掃除なんかしなくていいのにー。今までに、そんな事してた見習いの人いないよ？」

「そうですか？でも、じつとしてるのも落ち着かないの」「にやりと微笑むベティ。悪い前兆以外の何者でもない。レオンは一步たじろいだ。

「もしかして・・・レオンは何かアピール中？」

「アピール？」

「例えば、まずお父さんに気に入られておいて、外堀から攻めようとか、そういう事？」

「外堀？」

よく意味が分からなかつた。自分はどこに攻めると思われているのだろう。

こちらの顔をじつと見ていたベティは、やがて苦笑する。

「ダメだなー。意味分からないつて感じだよね」

「あ、はい・・・何を攻めるんです？」

「言つてもいいけど、レオンは卒倒するかも」

「・・・片づけてきますね」

早めに避難しておく事にする。

ベティの横を抜けて勝手口の方へ向かおうとしたが、そこでレオンは気付いた。

「そういえば、ステラはどうしたんです？」

一緒に出てくると思っていたが、出てきたのはベティだけだった。彼女は片目を瞑つてから答える。これも、全然いい前兆ではない。思わず一步距離をとつてしまつた。

「いろいろね、準備があるんだよ」

「・・・分かりました」

ここで聞き返したらまずい事になる。そう直感が警告していたので、レオンはそこで切り上げて勝手口に向かつた。

片づけをしてから、手を洗う。再び正面入り口の方へ戻つてくると、今度はステラが出てきていた。纖細な金のショートヘアに、吸い込まれるような深みのある青い瞳。最初に会つた時は怯えているような印象しかなかつたが、彼女が幾分慣れてきた為なのか、今はそうでもない。

レオンが抱く彼女の印象を一言で言つなら、どこかアンバランスな少女だろうか。やや小柄で華奢なのに加え、大きな瞳が目を引くから、実年齢よりも多少子供っぽく見えるのは確かなのだが、基本

的に物静かで落ち着きがあつて、不思議と大人っぽくも感じる。それらが合わさつて、どこか浮き世離れした幻想的な印象を感じるのだ。まだ会つて3日目だから分からぬ部分が多いとはいえ、今まで会つた事がないタイプの人間なのは間違いない。

改めて2人に挨拶してから、レオンはバスケットを受け取つた。中から小麦と肉のいい香りが漂つてくる。その匂いに食欲をそそられるが、かなり詰め込んだのか、結構重かつた。

3人はユースアイの暖かい大通りを歩き始める。

町も春本番といった様子で、道行く人も明るい色の服が多い。レオンはブラウンが中心の冴えない服だが、ベティは淡いピンクのワンピースを、ステラは茜色のローブを着ている。

昨日もこの3人で町の中を闊歩したのだが、正直注目の的だつたと言つてもいい。当然だが、ステラが目立つのである。金の髪も青い瞳も、この地域では一般的ではない。本人はその視線が気になつて仕方がなかつたようだが、ベティの方は気にかける様子もなく、行き交う町の人達と挨拶を交わしては、律儀にステラの事を紹介していた。どうやら、彼女の事を周知させるのが目的だつたらしい。顔見知りを増やしておけば、窮屈な思いをしなくて済むという事のようだ。それに1日使うというのも、彼女らしい豪快な手法だが、彼女らしいエスコートと言えるかもしれない。

その反動というのもなんだが、結局昨日はあまり冒険者らしい事が出来なかつた。ギルドでステラの登録は出来たのだが、それ以外はほとんど町を歩いただけだつた。レオンはホレスに弓を教えて貰う予定だつたのだが、気を遣われたらしく、あつさり中止になつた。だから、この2人に着いていったのだが、それはそれでなかなか大変だつた。

ホレスとアレンはあつさりしてゐたのだが、途中でリディアとティジーに会つた時が凄かつたのだ。とにかく話が長いのだ。

どれくらい長かつたかというと、4人の女子が話し始めてしばらくしてから、たまたまラッセルが通りかかり、する事もないでの彼

の仕事を手伝い、その一環としてニコルのガレージまで商品の配達に行き、そこで勉強していく分からなかつた事のアドバイスを貰い、思わぬ長話になつたから急いで帰ろうとしたらブレットと出くわし、そこで謎の因縁をつけられながらも無視するのも悪いと思って付き合い、彼の気が済んで解放されるのを待つてから4人の所まで戻つたものの、それでもまだ会話が続いていた程だつた。しかも、全く飽きる様子もなく。

このまま止めなかつたら本当に日が暮れる気がしたので、レオンがそれとなく進言すると、ようやくそこで会話が打ち切りになつた。ディジーは笑顔で、また今度続きを話しますようと言つていたが、これ以上話す事があるなんて信じられなかつた。

そんな時間の使い方をしていたわけだから、伝承者を訪ねるような余裕もなかつた。昨日行けたのは、ギルドと診療所くらいのものである。

ただ、ステラはジーニアスだから、鍛冶屋を訪ねる必要はない。武器を使う人はいるが、鎧を着た上で魔法を使うというのは、実質不可能な事らしいのだ。魔法が使えないレオンにはよく分からぬものの、魔法を制御する為には周囲の環境を肌で感じる必要があるらしい。鎧を着ているとそれが上手く感じ取れないのだ。ステラが着ているローブは、ジーニアスの身分証明みたいな物もあるが、元々はその感覚を阻害しないように考案された物らしい。

この話も、昨日ステラから直々に教えて貰つたばかりだつた。母親に才能が少しあつたとはい、レオンは魔法の事をほとんど知らない。これから一緒に戦うのだから、さすがにそれではまずいに違ひない。多少は知識を得ておくべきだと思い、今日もこいつして着いてきたのである。

今日の目的地は3カ所だつた。

まず、魔法用品を扱うというシャーロットの店。そして、ジーニアスの伝承者であるフィオナとハワード。シャーロットとフィオナは聞いた事のある名前だが、ハワードは初めてだつた。どんな人な

のか聞いてみると、意外にも、ブレットの父親だと言ひ。

昨日初めてその事実を聞いたレオンは、思わずベティに尋ねていた。

「という事は、ブレットさんって、実はジーニアスなんですか？」
見た目はどう見てもアスリートだった。だけど、よく考えてみれば、ジーニアスが身体を鍛えていたとしても、別に問題はない気がする。

ベティは笑つて首を振つた。

「全然。というか、ハワードさんもほとんど魔法が使えないんだよ」「え？ それって・・・」

そんな伝承者でいいのだろうかと思ったが、ベティはそれ以上は説明してくれなかつた。

「実際会つてみた方が早いと思うな。ブレットとは違つて立派な人だから」

最後の一言が気になつたものの、一応頷いたレオンである。

というわけで、3人は最初の訪問先であるシャーロットの店を目指して歩いていた。道案内をしているのは、当然ベティである。訪問の順番を決めたのも彼女だつた。

大通りを離れ、狭い路地に入つていぐ。それでも、うら寂しいといつわけではなく、むしろ活氣があつて賑やかである。この道は小さな商店が軒を連ねているようだ。木材が並んでいる店もあれば、パン屋や小物雑貨屋、寝具店やクリーニング店もある。レオンの村にはこういう店舗はほとんどなかつたから、看板から推測しただけなのだが。

「こんな場所があつたんですね」

周囲を見回しながらレオンが言つた。この辺りには初めて来るのだ。町をゆっくり歩くような事がなかつたし、そんな必要もなかつた。衣食住、ほとんどが宿屋で間に合つていたのだ。

誰の返事もなかつたが、ふと気付くと、ベティとステラは道を歩くお婆さんと親しげに話している。2人も笑顔だが、お婆さんの方

も目尻に笑い皺が寄つていて。こうこう光景を見ると、レオンもついつい顔が綻んでしまう。

お婆さんが挨拶をして去つていくと、ベティが聞いてきた。

「何か言つた？」

レオンは微笑む。

「大した事じやないです。それより、シャーロットさんのお店はどの辺りなんですか？」

ベティは腰に手を当てた。顔は笑つている。

「シャーロットさんじやないでしょ？ シャーロット」

「・・・まだ知り合いでもない人を、呼び捨てには出来ないです」

そこでベティは少し首を傾けて苦笑した。

「どうかねー・・・シャーロットをさん付けで呼ぶ方が、ちょっと無理があるんだよねー」

「はい？」

彼女は返事をしなかつた。ステラの肩を軽く叩くと、2人で先へと進んでしまう。

どういう意味だったのかは分からぬまま、レオンも特大バスケットを両手にその後を追う。

その後も、ベティとステラは時々立ち止まり、道行く人や店員と会話しながら少しづつ進んで行った。レオンは少し遅れてその後を着いていく。もちろん挨拶は交わすものの、基本的に話しているのは、前を行く少女2人だった。

昨日よりも慣れてきたのか、ステラも少しづつだが笑顔が目立つようになつてきた。ただ、最初に感じたように、どこか気品のある微笑み方なのだ。デイジーも上品な仕草をするが、それよりもつとである。否応なく、自分達と違う身分なんだと思い知るのだ。それを最初に見る人が面食らつた表情をする程である。

そして、それはステラにとつて嬉しくない事らしい。その表情を見る度に、彼女は笑みを引っ込みてしまうのだ。優しいこの町の人々は、気を遣つて微笑んでくれるのだが、彼女はぎこちない笑みを

返すのがやつとなのである。彼女の本来の笑みを隠すように。

それがステラのどういう心理によるものなのか、レオンには断定出来ない事だと思う。自分の生まれを知られたくないのか、或いは、町の人と壁が出来るのが嫌なのか。もしかしたら、他の全然違う理由かもしない。

仲間として、先輩として、彼女に直接聞いておくべきなのかもしない。だけど、レオンは聞かない事にしている。彼女が必死に隠そうとしている事を、会つて数日程度の間柄で聞き出そうとしても、その後いい関係が築ける気がしないからだつた。それに、自分だって人に見られたくない部分がある。それを直接口に出してはいないが、それでも、今はこの町の人を受け入れて貰えたと思えるのだ。

だから、彼女が秘密を言おうと言うまいと、そのままの彼女を受け入れればいいのだと思う。彼女の秘密も含めて、丸ごと受け入れればいい。この町の人達が自分にしてくれたように。

そんな事を考えているうちに、先を歩いていた2人の足が止まつた。

彼女達が正面に立つて見ているのは、普通ならただの民家にしか見えない家だつた。

木造2階建てというのはこの町では一般的だが、この家はまさにその典型と言つてもいい。だが、この辺りは周りが商店だらけなので、そういう意味で浮いていた。他の建物は看板があつたり、中には路上に商品を陳列している店もあるから、外見でだいたいどういう店かは分かる。だと言うのに、この店はそれらしき看板もないどころか、人気が全くない。この建物の前だけぽつかりと空白が出来ているような、そんな感じである。

「ここですか？」

「そうだねー」

レオンの質問に、ベティは軽く答える。

「あ、そうだ。ほら、向こうがラッセルの店だから」

彼女がそちらを見もせずに指さした場所はすぐ隣の建物である。

同じ様な2階建てだが、こことは違い、外からでも商店だと分かる。具体的には、商品が多過ぎるのか、雑多な物が木箱に入れられた状態で屋外に置かれているので、一目で雑貨屋だとは分かるのだ。ただ、ここも人気がない。ドアは開け放しだが、中に誰かいるとは思えなかつた。配達か何かに出来かけているのかも知れない。

少し覗いてみようかと思つたレオンだが、ベティにはそんなつもりはないらしい。ステラの手を握つて、目的の建物へと入つていく。ノックどころか、挨拶もしなかつた。

その後を追つて、レオンも中に入る。

入つてみて、とりあえずここが商店だつた事に安心した。あまり広くない部屋だが、確かにそれらしい品が陳列されていたからである。

「」の店主は几帳面な性格のようだ。正面に大きなカウンターがあり、部屋の左右の棚に商品が並んでいるのだが、凄く綺麗に整頓されている。左手には怪しげな植物や見慣れない鉱石が、右手には織物や書籍がというよつて、きちんと種類毎に分類されているようだ。

ただ、その店主らしき人間が見当たらなかつた。誰もいないのである。もしかしたら、出掛けているのだろうか。あるいは、奥に見えるドアの向こうで休憩中なのか。

「留守ですか？」

レオンの質問に答えず、ベティはステラの手を離してから、つかつかとカウンターまで歩いていく。そして、カウンターの陰を覗き込んだ。

「シャーロット。お客さんだよ」

どうやらそこに店主が隠れていたらしい。なんでそんな場所にいるのかは不明である。

ベティに見つかつたらしい店主だが、こちらに顔を見せようとはしなかつた。ただ、彼女の声だけが聞こえた。

「・・・今ちょっと忙しい。また後で来て」

冷たいというわけではないが、淡々とした口調だった。どこか上の空にも聞こえる。

だが、問題はそこではない。まさかの職場放棄である。レオンは唖然としたが、もつと驚いたのはステラだっただろう。当然と言つべきか、ベティが素直に帰るわけがない。ビビからかうような口調になる。

「いいのかなー？そんな事言つて」

「何を言おうが、私の勝手」

「お客さんだよ？普通はもつとサービスするでしょー？」

「うちは普通じゃないから」

結構難敵だった。ベティにここまでの口が聞ける人は珍しい。だが、どうやら彼女には切り札があったようだ。

「そつか。仕方ないなー。これからフィオナさんのところに行くんだけど、じゃあ、私達だけで行くね」

この時確かに、何かが変わった。そう思わせるのに十分過ぎるくらいの沈黙があつたのだ。

それを確かめたのか、しばらく間を空けてから、ベティは言葉を続ける。完全に余裕いっぱいの口調で、カウンターに両肘を突いて、片足をぶらぶらさせている。。

「私差し入れ持つてきただよなー。もしかしたら、フィオナさんと一緒にお昼かも」

その直後、積んでいた本が崩れるような音がして、カウンターの陰から店主が姿を見せた。

ただ、見えたのは顔だけだった。

この時レオンの脳裏には、いつか聞いたニコルの言葉が蘇つていった。ニコルに、シャーロットとはどんな人物か聞いた時の返答である。

僕に似てるよね。

見るまではどういう意味か分からなかつたが、見たら一目瞭然だつた。

本当にニコルそつくりだつたのだ。

大きい瞳が幼く見える顔立ち。今はカウンターに隠れていてその顔しか見えないのだが、顔だけならまさに瓜二つである。違ひと言えば、ニコルはショートヘアだが、今見ている少女は肩まで髪があるという事くらい。その髪も色は同じ黒なのだ。双子というか、本人の変装だと言われても疑いようがない。ニコルは変装の達人だというから、余計ややこしい。

ただ、変装というのは容姿が変わるから変装なのであって、仮にこれがニコルだつたとして、変装だと言い張るのは無理がある気がする。はつきり言って、開き直つているも同然だろう。ただ別人だと言い張つてているだけに等しい。

そんな事を考へてゐる間に、シャーロットと呼ばれた人物は、こちらとステラの顔を数秒ずつ見つめてから、カウンター奥のイスに腰掛けた。腰掛けたというか、よじ登つたという方が正しいかもしない。とにかく、そこでようやく本人の胸から上が見えた。

そこでまたひとつ、ニコルとの違いに気付いた。ニコルも小柄だが、彼女はもつと背が低いようだ。明らかに子供にしか見えない。10歳か下手するともつと幼いかも知れない。着ている服もフリルの多いブラウスで、完全に子供服に見える。胸の中心辺りにある、イエローの宝石が印象的だつた。

そうなると、ニコルが彼女に変装するのは無理がある。体格が大きい者が、小さい者になるのは難しいだろう。

だが、よく考へると、ニコルの姿の方が変装の場合だつてあるのだ。考へてみると頭が混乱してきたレオンである。今からニコルのガレージまで行つて、本人がいるかどうか確かめたくなつてくる。彼女は再びこちらの顔を見回す。

「・・・仕事はどうち？」

無感情な声。本当に子供みたいだ。こいつこいつは、ニコルとは全然似ていない。

「あ、私です」

そう答えてから、ステラはカウンターの前まで行く。そして、首の後ろに手を回す。どうやらネックレスを外しているようだ。外したそれを、シャーロットに手渡す。金色の鎖のネックレスだつた。シャーロットは首に下げていたモノクルを着けて、そのネックレスを観察する。その姿のせいで、子供が遊んでいるように見えてしまうが、本人の表情は真剣だ。ネックレスを見ているというよりも、飾り部分に付いている大きな宝石が重要らしい。ステラの瞳を映したような、青い宝石だつた。

いつたい何をしているのか聞きたかったが、どうやら仕事が始まつたようだから、邪魔をするのも悪い。だから、レオンは何をするでもなく、店内に陳列されている物をなんとなく眺めていた。しかし、不意にシャーロットから声がかかる。

「置いたら？」

声が大きかつたが、自分に対する発言だと認識するのに、レオンは数秒を要した。

「・・・あ、はい？」

シャーロットは観察中の目を一瞬だけこちらに向ける。

「重そうだから。カウンターに置いて」

どうやらレオンが抱えているバスケットの事らしい。

「え、いや・・・」

「置いて」

なかなか強情である。

「じゃあ、お言葉に甘えて・・・」

カウンターに歩み寄つて、その上にバスケットを置かせて貰う。

3人の少女は、一言も口を聞かずに青い宝石を見つめている。

その沈黙が数分程続いたところで、シャーロットが呟いた。視線は宝石に向けたままである。

「まだ生きてる」

何の事か分からなかつたが、仕事を依頼した本人は当然分かっているようだ。ステラはすぐに答える。

「調整出来ますか？」

「出来るけど、これ、貴女の物？」

「はい」

「全然貴女に馴染んでないけど」

「その・・・贈り物なんです。ですが、装飾品としてだったので
シャーロットの瞳が一瞬大きくなる。

「・・・本当？」

「はい。ただ、その・・・」

ローラもるステラだつたが、シャーロットさまるで氣にする様子も
なく、宝石を睨んだまま言つた。

「本当なら、それで問題ないけど」

逆にステラの方は、その言葉に驚いたらしい。表情だけでも分か
る程だつた。

「え？ あ、その・・・」

「盗品じゃないなら問題ない」

「でも・・・」

「名前は？」

前置きも何もなかつたので、すぐに反応出来なかつたステラだが、
躊躇つようにながら答える。

「ステラです」

「見習い？」

「はい」

「サイレントホールド？」

今度は相当驚いたらしい。ステラは絶句して固まつた程だつた。
しばらく待つても何も言ないので、シャーロットとステラをキ
ヨロキヨロと見比べていたベティだが、やがてシャーロットに質問
した。

「ステラの前世の話？」

今度はレオンが驚く番だつた。

「え？ 本当ですか？」

ベティがこちらに振り向く。

「そうじゃないの？ 今の話の流れから言つて」

今の話に流れなんてあつただろうか。だが、どうやらベティも、ステラの前世を知らないようだ。それはつまり、ステラが秘密にしていたという意味である。彼女がそんなポピュラーな話題を聞かなかつたわけがないのだから。

シャーロットはようやく宝石から目を離し、モノクルも外してこちらを見た。

「・・・誰？」

今更な質問だが、彼女は真顔そのものだった。あまり愛想がない店長のようだ。本当に子供にしか見えない。

それはそうと、そういうえば、まだ名乗つていなかつたレオンである。

「レオンです。初めてまして」

一応微笑んだレオンだが、相手の表情に変化はなかつた。

「もしかして、最近来たつていう、噂の？」

どんな噂なのか気になつたが、とりあえず頷く。

「一応・・・」

こちらの身体を上から下まで見て、シャーロットはただ一言だけ呟いた。

「・・・まあ頑張つて」

全然応援している口調ではなかつた。暗に、見込みがなさそうと言われている氣さえする。しかし、これがいい事なのかは分からないうが、レオンは既に慣れてしまつている。

それでもつい苦笑してしまつたが、控えめに答えた。

「はい。ありがとうござります」

すると、意外な事にシャーロットは頷いてくれた。無視されるかと思ったが、もしかしたら、さつきのは本当に激励の言葉だったのだろうか。

それはそうと、そこでようやくステラが復帰した。

「あの・・・どうして分かつたんですか？」

そちらを向いて、シャーロットは簡潔に答える。

「ルーンを見たから」

「それは・・・分からぬでもないんですけど。でも、見ただけで分かるものですか？」

「普通は分からぬと思う。でも、私は慣れてるから」

「慣れてる？」

「フィオナのルーンを調整してるから」

レオンには不十分な説明だが、ステラはそれで分かつたらしい。一度瞳を大きくしてから、やがてゆっくりと頷いた。

それでこの話題は終わつたようだ。シャーロットが別の質問をする。

「他のルーンは持つてない？」

その言葉でようやくレオンは、その青い宝石がルーンと呼ばれる物なのだと分かつた。ボスモンスターを倒すと得られる魔石を加工した魔法具である。

「あ、はい」

頷くステラを見てから、シャーロットはカウンターの下に両手を入れて、何かを探し始める。イスに座つたまま身を乗り出しているから、バランスを崩して倒れてしまいそうで、レオンはそれが心配だつた。

彼女がカウンターの下から取り出したのは、片手に軽々と乗る程度の大きさの、透明な水晶玉だつた。

それを黙つて、ステラに差し出す。

とりあえずといった様子でそれを両手で受け取つたステラだが、意味がよく分かつていないうだつた。

「あの・・・これをどうしたらいいですか？」

シャーロットは小さく頷いて、やはり端的に言つた。

「その中に魔法を使って」

水晶に目線を落としてから、ステラは聞く。

「・・・どんな魔法を使えばいいですか？」

「全力で」

その言葉に反応したのは、カウンターにもたれ掛かっていたベティだつた。

「えー、それはやめた方がいいんじゃない？」この部屋が氷漬けになつても知らないよ？」

シャーロットはそちらを向いた。

「水晶の中だから平気」

「万が一って事があるんぢやないの？」シャーロットは知らないだろうけど、ステラの本気は伊達じやないよ？酔っぱらい4人をあつという間に動けなくしたんだから」

ステラに向き直つて、シャーロットは少し考えてから言つた。

「・・・制御出来る範囲で」

少し怖じ氣付いたようだ。

水晶を持つたステラはカウンターから少し後退した。部屋の中心辺りに立つてから、こちらに告げる。

「あの、たぶん大丈夫だと思いますけど、凍り付きそうだったら言って下さい」

レオンとベティは顔を見合させた。特に何か確認出来たわけではないのだが、ベティはすぐにステラに向き直ると、こいつ言つた。

「平氣平氣。危なそうだつたらレオンを盾にするから」

当然みたいな口調だつた。だが、反論しても無駄なので、レオンは溜息を吐いてからステラに言つた。

「・・・危なそうだつたら盾が言いますから、気にせずどうぞ」

ステラは困つたように苦笑してから、正面に向き直る。そのまま少し俯いてから目を瞑つた。

しばらくすると、彼女の顔と水晶の中間辺りに青白い光文字が軌跡を描いていく。幼い頃に母親が一度だけ使って見せてくれた魔法と、同じ光の色だつた。

光は忙しく動き、文字はどんどん連なつていいく。ビギナーズ・

アイのボスが使った魔法と、文字の色は違うが、文字の数では負けていないよう思える。

もしかしたら、本当にとんでもない大魔法を使う気かもしれない。

そう思った瞬間、光の文字が青く輝いて消失した。

その後、部屋を冷たい空気が駆け抜けていく。春の風とは全く違う、冬の風。

一瞬身構えたレオンだが、結局それだけだった。しかし、ふと気付くと、水晶が真っ白になつていて、氷の塊のように見えなくもない。

しばらくして目を開いたステラは、カウンターまで歩いて行って、シャーロットにその白く変色した水晶を手渡した。

「これでいいですか？」

シャーロットは少し目を見開いていた。

「……いけると思う。でも、ここまで強いとは思わなかつた」

感心したように呟く彼女に、ステラは照れたような笑みを返した。やはりどこか、抑制されたような表情だった。

それは特に意に介した様子もなく、シャーロットは淡々と告げる。「調整自体は数日あれば終わるけど、でも、ステラはその格好でダンジョンに入るの？」

「え？」

ステラは自分の服を見た。ローブと言われる服だが、言つてしまえば、ロングスカートのワンピースである。

その言葉に、ベティが便乗する。

「そうそうーもつとお洒落しないと！」

ダンジョンとは全く関係ない言葉である。

そんなベティを一瞥してから、シャーロットはステラに言った。

「ルーンは単体でも意味があるけど、他の素材と組み合わせた方が効率が上がる。同じルーンでも、取り付ける服の生地やアクセサリの素材を选べば、魔法補助にも出来るし、防御用にも出来る。自分に合わせてカスタマイズするのが、ルーンの基本」

「そりなんですか？でも、どうしたら……」

シャーロットはこちらを見る。だが、それも一瞬だけで、すぐに

視線はステラに戻った。

「……レオンと一緒にに入るの？」

ステラもこちらを一瞥してから頷いた。

「もう入つてみた？」

「ダンジョンですか？いえ、まだ全然そんな……」

「じゃあ、当たり障りがないところで、魔法補助にしておく。効果が強くなるから、レオンを巻き込む時は注意」

自分は巻き込まれるのだろうか。そんな事態は避けたいが、案外ある事なのかもしれない。

「後で工夫したくなつたら、またここまで来て。それでいい？」

「あ、はい。じゃあ、それで……」

そのステラの返事を聞くなり、シャーロットはイスから飛び降りて、歩いてカウンターの奥から出てきた。白いブラウスの下は、意外にも、紺色の固そうなスカートだった。

彼女は無言のまま、さも当然と言わんばかりに、堂々と玄関から出て行こうとする。

だが、誰も着いてこないのが不思議だつたのか、ドアに手をかけたところで振り返つた。

「……行かないの？」

あまりに端的過ぎて訳が分からぬレオンとステラだつたが、ベティは分かつていたようだ。にこにことしながらシャーロットのところまで歩いていくと、彼女の手を引く。なんというか、母娘まではいかないが、近所の子供の面倒を見ているような光景だつた。

ベティは一度だけ振り返つた。

「レオン。バスケット忘れないでね。あと、鍵は気にしなくていいから」

それだけ言い残すと、彼女はシャーロットの手を引いて店の外へと出て行つた。

店内には、文字通り置いてきぼりの2人が残る。

「・・・出ましょうか」

ステラの呟きで、レオンは我に返る。

「あ、そうですね。本当に置き去りにされそうだし」

最後に言われたように、バスケットを忘れないようにしないといけない。カウンターに置かせて貰っていたそれを両手で抱えたところで、ステラが尋ねてくる。

「重くないですか？ よかつたら手伝いますよ」

レオンは微笑む。

「大丈夫ですよ。そんなに重くないの」

「凄い大きさですけど」

「大きさは確かに・・・でも、食べ物ですから、大した事はないです」

それでもステラは気を遣つていてる様子だったので、レオンは話題を変えた。

「それよりも、前世が伝説の冒険者なんて、ステラは凄いですね」
一点の曇りもない笑みで言つたレオンだったが、相手の表情が沈んだので、慌ててしまった。

「じ、実は、僕の母もそつなんですよーだから、なんていうか奇遇ですね！」

少し目を見開いて、ステラは聞く。

「え、お母さんですか？」

興味を持つてくれて、内心レオンは助かったと思った。理由は分からぬが、落ち込ませたままにしておくのは気分がよくない。

「そうなんですよ。小さい頃に、よくイブ様の話をして貰いました」

「イブ様？」

「えっと、サイレントゴーラードの本名というか・・・って、知らないんですか？」

「いえ。イブという名前は知っていますけど、どうして様を付けてるんですか？」

レオンは少し首を捻る。そう言わると、例えばソードマスター やスニークの本名を知っていたとして、様を付けて呼ばない気がする。

「そういえばそうですね。まあ、僕の村では、イブ様は守り神みたいなものなので、みんなそう呼んでたんですけど……」

そこから先は言葉が続かなかつた。

ステラが瞳を大きくしたまま、じっとこちらを見つめていたからである。驚きの度が越えてしまったのか、人形の様に微動だにしない。

何事だらうかと驚いていると、急にステラが顔を綻ばせてこちらの手を両手で握つてきた。その手でバスケットを支えていたので一瞬落ちそうになつたが、咄嗟に腕の内側を押し当てて難を逃れた。

「ど、どうしたんです？」

ステラの青い瞳は本当に輝いていた。

「・・・羨ましい」

彼女の口から絞り出すように出てきた言葉がそれだつた。

「は、はい？」

「イブさんの故郷で育つたつて事ですよね？いいなあ・・・凄く綺麗な所ですよね」

「え？・・・そうですか？」

汚い場所ではないが、凄く綺麗かと言わると自信を持つて頷けない。もちろんレオンは気に入っている故郷だが、例えばコースアイだつて綺麗な場所だと思う。そんなにズバ抜けて綺麗とは言えない気がした。

ステラはまだうつとりしている。

「冬になると、真っ白になるくらい雪が積もるんですよね・・・」

「えつと、まあ、そうですけど・・・」

それはそれで、なかなか大変なのである。

「私、本物の雪つて見た事がないんです。いつも夢で見るだけで・・・あの白い景色が、イブさんは大好きだつたんですね」

「あ、なるほど・・・」

つまり、ステラには雪景色を見ているイブの気持ちが伝わっているのだろう。自然を愛したと言われているサイレントコールドなのだ。彼女の目には、故郷で見る冬の景色が余程美しく映っていたに違いない。

その気持ちに共感しているステラを見ていると、レオンは少し嬉しいような気がした。嬉しいとは少し違うかもしれないが、自分が信じていたイブ様を肯定して貰えたような気がしたのだ。毎年見ている雪景色をここまで美しいと思えるような、そんな女性だったのである。彼女にその面影を見たような気がした。

自然と頬が緩む。

だが、そんな時間も長くは続かなかつた。

突然玄関のドアが開かれる。

そちらを見ると、当然というべきか、いたのはベティとシャーロットだつた。まだ手を繋いだままだ。いつまでも出てこない2人を中心配して戻ってきたのだろう。

2人ともこちらを見て固まつてている。それが何故なのか分からなかつたレオンだが、その後の彼女達の言葉で明らかになつた。

「そつかー・・・さすがの私も、そこまで関係が発展してるとは気付かなかつたなー。レオンも意外とやるんだね」

「・・・不純行為なら、宿に帰つてからにして」

シャーロットの言葉の方が強烈過ぎた。

だが、慌てたらバスケットが落ちてしまいそうだったので、慌てられなかつた。その反動なのか、目が回つた時のように頭がくらくらした。

「そういう事ならお邪魔しないから、ゆっくりしていってー。私達は先に買い物を済ませておくから」

ベティは笑顔でそう言い残してから、シャーロットの手を引いて出て行つた。弁解する暇もなかつた。

しばらくして、ようやくレオンの頭が立ち直る。とりあえず今の

状況をなんとかしなければならない。状況というか、包み込むように自分の手を握っているステラに、どうにか離れて貰うだけなのが。

だが、ステラの方を見たレオンは啞然となつた。

全然変わつていない。

感動を宿した瞳のまま、ステラはまだこちらを見つめている。と いうより、きっと何も見えていないのだろう。今の彼女が見ているのは、前世の記憶に出てくる雪景色なのだ。しかし、さつきの物音や会話に全く気付かないというのも、結構凄い話である。

凄いけれど、全然ありがたくはないのだが。

今の状況をどうしたらいいのだろうか。

声をかけるなりすればいいはずだったのだが、ここまで感慨に耽つて いる人の邪魔をしていいのだろうか。

それは何か、罪ではないだろうか。

どうしても、レオンには出来なかつた。

結局、ステラが自力で現世に帰つてくるまで、一步も動けなかつたレオンだった。

包丁で野菜を刻む規則正しい音が、隣のキッチンから聞こえてくる。他には、鍋の中で何かが煮えている音、時折薪が熱で弾ける音。そして、レオンは聞いた事のない、かなりアップテンポの鼻歌を口ずさんでいるベティの機嫌良さそうな声。

こちらのダイニングにも、湯気と一緒に、野菜の煮える美味しそうな香りが漂つてくる。何かスープを作つているらしいが、どんなスープなのは分からぬ。それと混ざり合つよう、ダイニングテーブルに置かれた4つのカップからも、何かのハーブらしきいい香りがする。

レオンはそれとなく室内を観察してみる。普通に見れば、少し寂しい感じはするものの、綺麗に整頓されているスッキリとした部屋だ。あまり細々とした物は置いていない。家具も少なく、目を引く物といえば、窓際にいくつもある植木鉢くらいだろうか。そこに植えられている花が、この部屋唯一の装飾品と言つてもいいかもしれない。

開放的な部屋と捉える事も出来る。しかし、この内装は、家主の嗜好をそのまま反映しているわけではない。

自分のすぐ隣に、ステラが座つている。そして、向かいにはシャーロットが。

ステラの正面、自分の斜向かいに座つているのが、ここのはじめの家主だった。

泰然と姿勢良く座つている、大人っぽい女性である。上品で落ち着いた物腰はどこかディジーに似ているが、レオンの印象としては、向かい合つているステラの方がよく似ているような気がする。大人っぽいとはい、自分達と年齢がそれほど離れていないはずなのだ。

それなのに、何事にも動じないと思わせるような超然とした雰囲気が彼女にはあった。自然な微笑みを浮かべている今の姿は、十分女性らしくて柔らかい印象だが、どこか芯が通った力強さも感じる。そういう相反する性質を共存させている女性。あと何年かしたら、ステラもこういう雰囲気の女性になるのだろうか。

だが、彼女とステラには決定的な違いがあった。

単に違いというだけなら、例えば髪も違う。だけど、彼女の髪は緩くウェーブした栗色のロングヘアだから、この町では一般的なものだ。そうではなくて、もっと特別な点が彼女にある。

それは彼女の瞳だった。とは言つても、瞳の色が問題なのではない。

彼女の瞼は、ずっと閉じられたままなのである。

ここに家主であり伝承者でもあるフイオナは、目が見えない。この家にお邪魔する前、ベティはその事実だけ教えてくれた。だが、気を遣つて欲しいとは言わなかつた。言わなかつたものの、普通は気を遣つてしまつだらう。そう思つていたレオンだったが、その考えも今は曖昧になりつつある。

レオンは改めてフイオナに視線を戻す。

フイオナは本当に堂々としているのだ。こうしていると、盲目の人だと分からぬ程である。ただ目を瞑つているだけにしか見えない。玄関で迎えてくれた時も、ここにお茶を運んでくれた時も、ずっと普通に微笑んで、普通に話していた。多少動きが不自然なところもあるが、盲目で不自由しているとは思えない程度でしかない。長年この家で生活しているから慣れているのだろうかと思つたが、ふと、レオンは気付いた。彼女は白と水色のワンピースを着ているが、その左胸の辺りに銀のブローチをしている。その中心にサファイアのような青い宝石がはめ込まれているのだ。

さすがに、ついさつき同じ様な物を見ていたので、レオンにもすぐ予想がついた。

「このルーンが気になりますか？」

突然、フィオナの声がする。彼女の声は今の時期の日差しのように、穏やかで暖かみのある声である。

だが、その言葉の内容にレオンは驚きを隠せなかつた。

どうして自分の視線がどこを向いているのか分かつたのだろうか。こちらが何か言つよりも早く、フィオナが申し訳なさそうに言つた。彼女は目を閉じたままだが、顔はこちらを向いている。

「あ、すみませんでした。驚かせるつもりはないんですよ。私の目が見えない事、もう聞いていたんですね？」

「えつと・・・はい」

こちらが驚いたのにも気付いていたらしい。レオンは声もあげなかつたというのに。

キッキンからベティの声が飛んでくる。

「ごめんねー。一応言つておいた方がいいかと思つて」

フィオナは笑顔で返事をした。声のした方角を正確に向いている。

「いいの。それより、本当に1人で大丈夫？」

「任せてー。こっちはいいから、とにかくステラをよろしく。ステラがここまで来たのは、フィオナさんに会う為だつたと言つても過言じやないから」

「え? そうなの?」

嬉しそうな顔になつて、フィオナはステラの方を向く。そんな話は初めて聞いたレオンだが、確かにステラは少し緊張しているようだつた。

「お名前は、ステラさん?」

「あ、はい・・・」

「遠い所からわざわざ着て貰つて・・・でも、こんな何の変哲もない伝承者でごめんなさいね。おまけに目が見えないなんて、残念だつたでしょ?」

言い方によつては深刻な雰囲気になりそつたが、フィオナはいとも簡単に、明るい口調で言つてしまつた。

ステラは両手を胸の前で小さく振る。相手には見えないはずだが、

ついやってしまつのが人の心理だつ。

「いえ！全然……」

「こんな普通の女ですけど、精一杯お手伝いさせていただきますね。普通の人間なりに、どんな悩みでも受け付けますから。ただのお姉さんだと思って、いつでも気軽に来て」

「口二口と微笑むフィオナにつられるように、ステラも顔を綻ばせる。

「はい……よろしくお願ひします」

次に、フィオナはこちらを向いた。

「ごめんなさい。お名前は何でした？」

玄関が開かれるなりベティとシャーロットが勝手に上がり込んでいつただけであつて、自己紹介する暇がなかつたのは、フィオナの責任ではない。

「レオンです。よろしくお願ひします」

「アスリートですよね？」

実際その通りだが、目が見えないのに何故分かるのだろう。仮に見えていたとしても、レオンはよくジー・アスだと勘違いされるというのに。

すぐに返事が返つてこなかつた為なのか、そこでフィオナは苦笑した。

「あ、またごめんなさい。つい感じた事をそのまま話してしまつんです」

「いえ……」

感じた事という言葉の意味が、レオンにはよく分からぬ。

フィオナは胸のブローチに触れながら説明する。

「このルーンは、目が見えない私用に、シャーロットが調整してくれた物なんです。一応、私にも魔法の才能がありますから、その魔法的な感覚というか……アスリートの方には分からぬかも知れませんけど、ジーニアスだけに感じ取れる感覚があるんです。その感覚を応用して少し視覚を補助するのが、このルーンの力なんです。

ですから、全く目が見えないというわけではないんですよ

「そ、なんですか・・・」

論理は分からぬでもないが、直感的には理解出来そうもない話だつた。

そこでシャーロットが補足する。

「フィオナの目が見えているわけじゃない。だけど、例えば、耳が凄くいい人とか、鼻が凄く利く人だったら、それを頼りに周囲の様子をある程度知る事が出来る。人間以外の動物では、割と一般的な性質」

「あ、なるほど・・・」

確かに、人間よりも耳や鼻が利く動物は多い。

「フィオナの場合、魔法の才能に優れているから、その分鋭敏な魔法的感覚を持つている。そのルーンは、その感覚を整理して、視覚として与える役割を果たしているだけ。言つてみれば、ただの錯覚」「錯覚ですか？」

思わず聞き返すと、シャーロットは頷いた。

「元々、フィオナの魔法的感覚は視覚を補つて余りある程強い。必要だつたから日常的に訓練していくとも言えるけど、先天的な才能も大きい。その結果、ルーンがなくても、フィオナは1人で生活が出来ていた。私には体感しようもないけど、目が見えないとは言つても、たぶん周囲の事がおおよそ分かっているはず」
目が見えなくても周囲の事が分かる。レオンが目を瞑つたとしたら、ほとんど何も分からぬに違ひない。平原のモンスターに目眩ましの魔法を使われた時の事を思い出してみても、視覚がどれほど重要なものののかはよく分かる。

それを補える程、フィオナの魔法的感覚というものは強いようだ。レオンにも体感しようがないが、その凄さだけは、なんとなく理解出来た。

レオンはステラの顔色を窺う。ジーニアスの彼女なら、フィオナの話も、ある程度身近な話として受け入れられるのだろうか。

見てみると、やはり彼女の青い瞳は少し見開かれているようだった。レオンには実感しようがなくとも、彼女には驚ける程度に実感がある話らしい。

しばらく間を空けてから、フィオナはじめからを向いたまま説明を続ける。

「難しい話をされても困りますよね。とりあえず私の事は、目が見えないよう見えて、実は見えてる人だと思つて貰えればいいですから」

なんというか、本人が言つてはいるとはいえ、その言い方はさすがにあんまりだろう。傍から聞くと嘘を吐いてるようしか聞こえない。まさか冗談なのだろうか。

「いや、それは・・・」

レオンが苦笑しながら言つと、フィオナも笑顔を返してくれる。本当に見えてると思えない反応の早さだった。

そこで話は終わりとばかりに、フィオナはステラの方を向く。

「ステラさん。私に会いに来たとベティが言つてましたけど、実際には、サイレントコールドの故郷に近いから、この町に来たんですね？」

頷いたステラだが、すぐに気付いたように返事をした。目が見えていない事は間違いないのだから、声にした方が分かり易い。

「はい」

フィオナは微笑んでから頷く。

「私も少しだけですけど、その気持ちが分かるような気がします。もし私がここから遠い町の出身で、そして冒険者になつてみたいと思つたら、きっとここまでやつてきたと思います。夢の中の彼女と同じ景色を見てみたい。同じ思いを共感してみたい。私はこんな身体ですから、冒険者になるのは無理な話ですけど、せめてステラさんのような人を応援したいと思ってこの仕事をしています。是非、ステラさんの夢に協力させて下さい」

本当にストレートな人だとレオンは思った。自分が盲目だという

事を、何の躊躇もなく自分で口にしてしまつのだ。何も包み隠さず話している。その印象がそのまま、彼女の言葉に誠意のよつたものを感じさせる。ある意味、盲田である事を利点にしていると言えるかもしだれない。

ステラの表情には笑みがこぼれていた。

「ありがとうございます。あの・・・よろしくお願ひします」微笑みを交わしあうステラとフィオナ。とりあえず、最初の信頼関係が築けたようなので、レオンにとつても嬉しい事だつた。だが、それはそれとして、気になる事があつた。

「あの・・・」

レオンが遠慮がちに口を開く。

「その、フィオナさんは、サイレントコールドの伝承者なんですか？」

誰もはつきり言わないものの、ビリやけり話の流れかひすると、そうかもしれないと思えてきたのだ。

質問に答えたのは、無表情そのもののシャーロットだった。

「・・・今更何を言つてるの？」

どうやら気付かなかつたレオンが鈍感だつたらしい。

馬鹿な質問をしたような気がして、いたたまれなくなつてきたレオンの心情を察してくれたのか、フィオナが何事もなかつたかのように話題を変えた。

「それで、ステラさん。シャーロットからおおよその事は聞きました。ルーンの事をあまり「存じない」ようですね？」

「あ、はい・・・」

控えめに答えるステラに対し、フィオナは優しく微笑む。

「では、私の最初の仕事として、簡単に説明しておきます。あ、そうそう・・・それと、後で服のサイズを測らせて下さこ」

「え？」

「私、こう見えて、服やアクセサリーのデザインもしているんですよ。ジーニアス用の魔導衣だって作れます。ちょうどルーンの調

整を頼んだそうですから、一緒に魔導衣も作っておきますね

魔導衣というのは聞いた事がない言葉だが、どうやらステラが着

ているような、ローブの事のようだ。

それはそれとして、目が見えないデザイナーというのも、相当珍しいのではないか。だが、目の前の女性ならそれもあり得ると思ってしまうのも確かだつた。フィオナの感覚がそれだけ鋭敏という事なのだろう。あるいは、余程デザインセンスに優れているのか。

だが、ステラが気になつたのはそういう事ではなかつたらしい。

「あの、そんな・・・そこまでして貰うのは悪いです」

やたら遠慮しているのを見ると、もしかしたら、魔導衣というのは高価な物なのだろうか。ただのワンピースにしか見えないのだが。そこでシャーロットが口を挟む。

「ギルドに請求するから問題ない。元々、高いのはルーンそのものだし。ステラはルーンがもうあるから、むしろ安上がり」

ステラは意外そうに聞く。

「そうなんですか？」

「こう言つたらなんだけど、あのルーンは結構高価な物だから、服よりもルーンを盗まれないよう気を付けて。服は代えが利くけど、あのルーンはそうはいかない」

「えつと・・・はい」

返事をしにくそうなステラだった。金銭的価値を別にすれば、服を盗まれる方が困るに違いない。

子供らしい真っ直ぐな視線をステラに向けながら、シャーロットが聞く。

「ベティのところに泊まつてゐるの？」

「あ、はい。ベティの部屋にお邪魔させて貰つてます」

この町に来た初日にいろいろあつた為、ステラはベティの部屋で寝泊まりしているのだ。

シャーロットは呟いた。

「最強」

ただ一言だけだつたが、言いたい事は十分過ぎる程伝わつた。隣にはガレットの部屋もあるのだ。これ以上安全な場所はなかなかない。

そこでフィオナが軽く両手を合わせる。

「ですから、魔導衣は任せて下さい。ただ、せつかくいいルーンがあつても、有効利用出来なければ意味がないですからね。説明しておきますから聞いておいて下さい。あと、レオンさんもそのうちルーンを使った武器や鎧を使う事になると思います。アスリートの方はジーニアス程気を遣う必要はないんですけど、それでも知つておいて損はないですから、一応聞いておいて下さい」

「分かりました」

フィオナは微笑む。どこか母親のよつた慈愛を感じる笑みだつた。「それでは、最初に要点を言つておきますね。まず、ルーンは身につけていないと効果がないという事。次に、ルーンは周囲に特殊な素材がある場合、その影響を受けるという事。そして最後ですけど、特にジーニアスの場合、ルーンは身体のどこに身につけるかによつても、効果を変える場合があるという事です」

レオンとステラはしばらく頭の中でその言葉を反芻してから、やがてゆっくりと頷いた。頷いたのだが、正直、ルーンに触れた事もないレオンには実感しよのない話である。

それを確認してから、フィオナは説明を再開する。

「これらは結局、全部ひとつ的事を言い表しているんです。つまり、ルーンは人の身体に作用して効果を発揮する物です。人の身体の中にある流れの影響を受けて、それを別の力に変換する。それがルーンの働きだと言えますね」

これも難しい話だつた。少なくとも、目に見えるものの話ではない。

「こちらの心を汲み取つてくれたのか、フィオナは優しく言つた。

「分からなくても仕方ないと思います。アスリートの方は、実際に感じ取れない話ですから」

「あ、はい・・・」

本当によく気が付く人だつた。目が見えていないとは思えない。魔法的感覚というより、洞察力が優れているように思える。

「ですから、アスリートの人がルーンを扱う場合、ほとんどの方は、職人の方に調整して貰つた物をただ使つてはいるだけなんです。例えば、鎧であれば身につけるだけですし、剣であれば握るだけです。ルーンが実際にどんな作用をしているのか、知つても知らないでも、結局効果は変わりませんからね。レオンさんも、分からぬからといって、特に心配する必要はないです」

そこでフィオナはステラの方を見る。

「ただ、ジーニアスは違います。私達も含めて、ほぼ全てのジーニアスは体内の力の流れを認識しています。そして、私やステラさんのように、多少なりとも力に優れた人であれば、身体の外の事も多かれ少なかれ感じ取つています。つまり、身体の内と外、その境界に位置するルーンがどういう働きをしているのか、肌で感じ取る事が出来るんです。この違いが即ち、ジーニアスにとつてルーンが特別である事の要因でもあります」

ジーニアスにとつて、ルーンが特別。それはレオンにも分からぬ話ではない。例えば、酒場に出入りする冒険者を見ていると、ルーンを多く身につけているのは大抵ジーニアスの方なのである。最初はそれがルーンだとは知らなかつた為、妙に宝石の好きな人が多いなど勘違いしていた程だ。

フィオナは話をこう締めくくつた。

「ですからステラさん。ルーンが身体の内と外にどういう作用をするのか、それを理解するようにして下さい。最初は感じ取つてみるだけでも結構です。なるべく意識する時間を多く作つて、ルーンに対する理解と順応を高めていくのが大切な事なんです。最初の頃はあまり違ひがないかもしませんけど、もつと先に多くのルーンを扱つようになつてくると、その理解があるとないとでは大きく違います。是非試してみて下さい」

ステラの方を見てみると、彼女の表情は真剣そのものだった。初めて伝承者に会つたわけだから、多くのものを学び取らうと必死なのだろう。

「はい。分かりました」

その返事を聞いて、フィオナは微笑む。人を安心させられる笑み。自分があと数年して、果たしてこんな微笑み方が出来るかと言われば、とてもではないが自信がない。

そこで、ベティが二コ二コしながらやつてきた。どうやら、出てくるタイミングを見計らつていたようだ。

「お昼出来たよー。そろそろ休憩にしよう」

フィオナが笑顔で手を合わせる。

「そうね。じゃあ、早く済ませましょ」

そう言つなり、イスから立ち上がりてドアから出て行こうとする。レオンには分からなかつたが、何故か示し合わせたように、シャーロットとステラも立ち上がりて着いていく。

理解出来ないながらも着いていこうとする、その正面にベティが立ち塞がつた。

彼女は笑いながら、両の拳を打ち合わせる。

「そうかそうか。レオンも男の子だねー。でも、どうしてもここの通りたければ、まず私を倒して貰わないと」

意味不明な要求だつたが、とりあえずレオンは2歩後退した。本能だと言つてもいい。

「えつと・・・皆さんどこに行つたんです?」

「だから、聞きたかつたら私を倒して貰わないと」

ベティは笑顔だが、レオンは困惑顔しか出来ない。

「いえ・・・じゃあ、何をしに行つたんです?」

「私の口から言わせたいの?」

「・・・そんな大変な事なんですか?」

「大変だよー。女の子にとつては」

全然話が見えない。

だが、これまでの会話を遡つてみると、なんとか解答に辿り着けた。

「あ・・・もしかして服のサイズを測りに行つたんですか？」

「当然だと言わんばかりに、ベティは重々しく頷く。

「当たり前でしょー？ そう言つてたんだし」

確かに後で測るとは言つていたが、こんなにすぐだとは思わなかつた。

「えつと・・・量食の後でいいんじゃないですか？」

その方が落ち着いて測れるに違いない。

せいぜいその程度の気軽な一言だったのだが、それが結構な地雷を踏んでしまつたらしい。急に満面の笑みになるベティだが、どう見てもいい笑顔ではなかつた。淵みが尋常ではない。

「・・・ちょっとねー。事情があるんだよ。前と後では大違ひなんだよね」

「そ、そつですか・・・」

微笑みが怖過ぎて、それどころではないレオンである。せりに一步後退したが、それを読んだように一步距離を詰めてくるベティを見て、内心レオンは戦慄していた。

彼女は本気だ。

「うん。まあ、ちょうどいいよね。ビギナーズ・アイもクリア出来たらしいし、ちょっと胸を貸して貰おうかな」

田の前の少女に胸を貸せるとしたら、恐らく彼女の父親くらいなものだろう。

「いえいえ。そんな、僕なんかが・・・」

遠慮するように言つたが、もちろん必死の停戦交渉である。

少女は笑顔でこう言い放つた。

「謙遜しなくていいってー。丈夫ならそれで十分だから」

それはきっと胸を貸すとは言わない。

だが、その言葉を発する暇もなかつた。

気付いた時には、ベティは一瞬で距離を詰めている。ビリビリ歩

き方をすればここまで素早く動けるのか、レオンには見当も付かない程流麗な動き。

きっとこれが達人の足捌きに違いないと気付いたが、もう遅過ぎた。

懐の少女の気配が、一瞬爆発的に膨らむ。

受けきれないという確信だけはあった。

そして、そんなものがあつても何の役にも立たないという、もう一つの確信も。

数秒後、その確信は現実として証明される事となつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6452y/>

夢色彩のカーバンクル

2011年12月31日21時51分発行